

我が名は豪鬼！　メイドを極めし者なり！

とんこつラーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

風呂場でパツと思いついたアイデアを考え無しに突発的に書きました。

多分、ギャグ要素が増し増しだと思います。

あんまり深く気にしないで読んでくれると嬉しいです。

目次

メイド豪鬼 転生する

メイド豪鬼 参上！

メイド豪鬼の日常

メイド豪鬼のお仕事

メイド豪鬼 介入します！

メイド豪鬼 連行される

メイド豪鬼 歓迎される

メイド豪鬼 汚部屋を掃除する

メイド豪鬼 少女達に教える

メイド豪鬼の日常 その2

メイド豪鬼 奉仕をする

メイド豪鬼 再会する

メイド豪鬼 兄と一緒に戦う

メイド豪鬼 墓参りに行く

メイド豪鬼の戦姫絶唱シンフォギア

メイド豪鬼 新たな日常を送る

メイド豪鬼 先輩になる

メイド豪鬼 大事な事を思い出す

メイド豪鬼 運命に遭遇する

メイド豪鬼 呆れる

メイド豪鬼 同行する

メイド豪鬼 今度は歓迎する

メイド豪鬼 励まされる

メイド豪鬼 トレーナーになる

189

181

172

165

155

146

136

129

120

112

104

96

89

77

68

59

50

39

27

16

7

1

メイド豪鬼の筋肉講座	197
メイド豪鬼 少しでも口出しする	207
メイド豪鬼 歳の差を感じる	216
メイド豪鬼 遂に出番がなくなる	225
メイド豪鬼 教えを請われる	233
メイド豪鬼 狙われる	242
メイド豪鬼 依頼をしに行く	250
メイド豪鬼 SHINOBIに会う	260
メイド豪鬼 お説教をする	269
メイド豪鬼 準備をする	281
メイド豪鬼 突っ走る	289
メイド豪鬼 戦闘を開始する	297
メイド豪鬼 フラグを立てる	307
メイド豪鬼 心配される	318
メイド豪鬼 リア充と化す	327
メイド豪鬼 胸キュンする	335
メイド豪鬼 療養する	343

メイド豪鬼 転生する メイド豪鬼 参上！

突然だが、私は転生者である。

恐らく、これを読んでいる人達は何度も、何十回も、何百回…は流石に無いか。

ともかく、飽きる程に転生者の物語を読んできたことがあるだろう。

今から語るのも、そんな数多くいる転生者の物語の一つだ。

まあ、暇潰しでも思ってた読んでくれると私も作者も嬉しい。

私、なんて一人称を使ってはいるが、前世は立派な男だった……と思う。

転生してからある程度の時間が経過しているせいか、どうにも昔の記憶が曖昧になっている。

テンプレのように車に轢かれ（厳密な原因は、仕事が忙しすぎて過労でフラフラになりながら歩道を歩いていたところに居眠り運転をしていた2トントラックが突っ込んできてミンチになった）、性別不明の神様に出会ってから、こっちが何かを言う前に有無を言わさず転生。

その際に私は性別を変えられたらしく、ものの見事な女性へと早変わり。しかもメイド。

黒髪ポニーテールに、両腕を寄せれば立派な谷間が出来上がるほどのボイン。

とどめに腕つぶしが強い。というか、リアルにチートだと思う。

誰もそんな踏み台転生者のような事は一言も頼んでないのだが、それでも頂いてしまった物は仕方がない。

この『能力』は、私が第二の人生を生きていくのに利用させて貰おうとしよう。

そう言えば、まだ私の名前を言ってなかった。

我が名は『豪鬼』。メイドを極めし者なり。

以後、お見知りおきを。ご主人様。

・
・
・
・
・
・
・

転生には大まかに二種類が存在していると私は定義している。

一つは母親の腹の中から生まれてきて、文字通り赤ん坊から人生をやり直すもの。

もう一つは、成長した姿で転生して、すぐに行動が出来るようになるタイプ。

私の場合は後者で、目を開けた時に視界に入ったのは石造りの壁。

それがコンクリートで作られたビルの壁だと知り、自分がいるのが街中の路地裏だと分かるのはすぐだった。

まずは現状把握が第一だと思い、自分でも驚くほどに冷静な頭で路地裏から出た。

その時はまだ自分が女になり、メイド服を着ている事にも気が付いてなかった。

奇異の視線に晒されながらも、近くにある店の窓ガラスを見て、自分の性別が変わって見目麗しい美人のメイドさんに姿が変わっている事を知った。

「……大きいですね」

一番最初に出る言葉がコレな時点で、男の業の深さが窺い知れる。

男から女に変わっているにも拘らず、それに対して微塵も驚きが無い。

それどころか、ガラスに映る自分が自分の胸を揉み解す始末。

傍から見ると変態以外の何者でもないが、それでも揉んでしまうの

は、まだ中身が男な証拠なのか。

次に、自分がどんな世界に転生したのかを知る必要がある。

転生者の殆どが、どこぞのファンタジー世界や、なんらかのアニメや漫画の世界等へと転生する。

私もきつと例外ではないだろうと思い、何かヒントになるような物は無いかと周囲を見渡していると、ソレは向こうの方からやって来てくれた。

「ん？」

現代っぽい街並みに似つかわしくない、まるで大戦中のような警報が鳴り響く。

人々は蟻の子を散らすように逃げていき、あつという間に私だけが街中にポツン。

本気で状況が分からない私は、呆然としながら立ち竦んでいると、いきなり地面から着ぐるみのような化け物たちが出現。

普通なら突然の事に戸惑うだろうが、私は違った。

私はこいつ等を知っている。

正確には、こいつ等が出ている作品を知っている。

「ノイズ……」

あらゆる生き物を触れただけで灰にする異形の化け物。

詳しい事は忘れたけど、なんかの杖で操られてるんじゃないかと思った？

そんでもって、政府から正式に災害扱いされてたような気が……。

それはともかく、これで自分がいる世界がどこなのかハッキリした。

どうやら私は『戦姫絶唱シンフォギア』の世界に転生してしまったようだ。

ノイズが私の存在に気が付いたのか、こちらに向かって突撃してくる。

それを見て、自分の中にある闘争本能のような物が疼き、無意識の内に体を構え、必殺技を放った。

「豪昇龍!!」

蒼い炎を纏った拳のジャンピングアッパーがノイズを粉々に打ち砕いた。

それにより、自分が何になったのかようやく理解した。

(あ……これ。ずっと昔に一部で有名になった『メイド豪鬼』だ……) スタイル抜群の美人メイドが必殺技を放つ姿は相当にシユールだろうな……。

メイドになっても戦闘能力が低下していないのは、流石は『拳を極めし者』と言ったところか。

取り敢えず、今は自衛をしながら自分の体の事を色々確かめていこう。

・
・
・
・
・
・
・

本人は全く自覚は無いが、彼女は完全に見られていた。

政府よりノイズ対策を任されている『特異災害対策機動部二課』の本部のモニターに、無手でノイズを縦横無尽に薙ぎ払っていくメイドの姿がバッチリと映し出されている。

「なんなんだ……あの少女は……！」

司令官である『風鳴弦十郎』は、目の前の光景が信じられなかった。

明らかに『彼女達』と同じ年ぐらいの少女が、全く恐れる様子もなくノイズを次々を倒していく姿を。

その身には何も纏ってはいない。強いてあげればメイド服を着ている。本当にそれだけだ。

その拳には蒼い炎を宿し、その脚には紫電を迸らせる。

誰がどう見ても常人の所業ではない。では彼女は何者なのか？

それは、本人から直接聞くほかない。

「装者二名、間もなく目標地点に到着します！」

「急げ！ 奏！ 翼！ ところで戦っている少女を急いで保護するんだ！！」

.....

.....

.....

.....

ノイズがあと数体ぐらいになった時、ふとある事に気が付いた。

(ここにノイズが出たって事は、もしかしてシンフォギア装者達が現場に駆けつけてくるんじゃないかね?)

もしかして、じゃなくて必ず来る。だって、それがシンフォギアのテンプレだから。

となると、そのままの流れで二課、もしくはS・O・N・Gに所属する流れになるのか？

別に、彼女達に協力するのはやぶさかではないが、なんでか今はまだ早いような気がする。

転生初日にいきなり原作キャラと邂逅するのはなんだかアレな気がするし、まずは先立つ物が欲しい。

そうと決まればやる事は一つ。三十六計逃げるに如かず。まずは、残ったノイズ共を一掃するとしようか。

体内に宿る殺意の波動を高め、一気に解き放つ！！

「滅殺!!」

極太ビームのように発射される超必殺技『滅殺豪波動』ハイパーコンボ

複数のノイズを纏めて燃やし尽くし、跡形も無く消滅させる。

「よし。お掃除完了！」

.....なに言ってるんだ私は。

でも、なんとも言えない爽快感というか……達成感がある。

もはや、体だけでなく心までもが女、つていうかメイドになっているのか？

うっ……！ そう思った瞬間、無性に掃除がしたくなってきた……

！

どこかに……どこかに汚れた物は無いのかっ!?

「むっ!? こっちから汚物の気配が!」

ここは豪鬼さんお馴染みの高速移動である『阿修羅閃空』を使おう。

待っているがいい! 私が全てを掃除しつくしてやる!!

後で知ったのだが、私が去った後に装者達もやって来たらしいが、人っ子一人いない現場に困惑してしまったとの事。

少し悪い事をしてしまったかもしれない。

メイド豪鬼の日常

私が転生してから早くも2ヶ月が経過した。

あれから色んな事があって、なんとか私の生活は安定し始めた。

え？ 詳細を事細かに説明しろ？ 無茶言わないでください。

もしもそんな事をすれば、それだけでこの話が終わってしまいます。

作者のやる気も削がれちゃうし、ここは私が語るダイジェストでお許しください。

その後、あそこにいたノイズを根こそぎ打ち砕いた私は、阿修羅閃空を駆使して適当な場所まで移動した。

そこで、私は己の内から溢れる殺意掃除欲求の波動を抑えきれず、そのままご近所の徹底的な清掃を開始。

ゴミ捨て場に掃除法として置いてあった箒などを駆使して、内なる衝動のままに掃除をしまくっていたら、そこを偶然にも町内会長さんに見つかり、物凄く感心された。

それで高評価を受けたのか、未だに寝床も見つかっていない私に詳しい事情も聞こうとせず、近くにあるアパートの空き部屋の一つを好きに使っていいと言ってくれた。

こんな身元も不明なメイドにここまでしてくれる人に、私は感謝しかなかった。

そして決めた。自分に出来る全てを駆使して、この町を綺麗にしよう。

これで少なくとも衣食住のうちの住は確保できた。

後は衣食だけだ。そう思っていた私だったが、少ししてから事はそう上手くいかない事を思い知る。

この『戦姫絶唱シンフォギア』の世界に私という『イレギュラー』が介入した事で、誰もが予想すらしていなかったバタフライエフェクトが発生してしまったのだ。

簡単に言うと、私以外にも原作には決して登場する筈の無い人物達が登場したのだ。

しかも、それらは転生者じゃない。この世界の立派な住人だ。

正直、それを知った時は本気で頭が痛くなった。

これに関しては、ここで話すよりはその光景を直接見て貰った方が早いと思う。

そんな訳で、現在の私の一日の光景をお送りしましょう。

・
・
・
・
・
・
・
・

朝8時30分。

私はもう完全に日課と化している道の清掃を行っていた。

自分で買った竹箒で落ち葉やゴミをはいてから一か所に集め、塵取りに纏めて捨てる。

実に普通の清掃風景だが、私はそれを時間までずっと繰り返す。

普通なら疲れて心が萎えそうだが、私に限ってそれは無い。

何故ならば、私はメイドだから。奉仕活動こそが生き甲斐であり使命。

私は私によくしてくれた人々の為に、この町に全力で奉仕をすると決めたのだ。

「ん？」

掃除途中で見かけたのは、近所のゴミ捨て場。

まだ回収をしていないのか、幾つかのゴミ袋が置いてある。

「うん……うん……よし。ちゃんと燃えるごみだけを置いてるようですね。感心感心」

他の街ではよく燃えるごみの日に態と燃えないごみを置くような愚か者が出没するようで、なんとも嘆かわしい事です。きちんとルー

ルを守らないと。

「あ！ 豪鬼さん！ おはようございます！」

「おはようございます。豪鬼さん」

ゴミ捨て場から移動して掃除を再開しようとした私の近くを通りかかったのは、近くに住んでいる女子中学生二人組。

まあ、察しのいい読者は気が付いていると思うが、この二人こそが原作における主人公の『立花響』と最重要キャラである『小日向未来』だ。

前回、まだ原作キャラと接触するのは早いと言っていないかつたかですって？

それは違いますよ。私は2課の連中と接触するのは時期尚早だと言ったのです。

この二人はまだどこにでもいるごく普通の女子中学生。故に問題無し！

「おはようございます。響さん。未来さん」

「今日も朝から精が出ますね」

「豪鬼さんがやって来てくれたから、街の景色が一気に綺麗になったしね」

「私は私がするべきだと思った事をしてるだけですよ」

「そんなセリフを当たり前のように言える時点で、相当に凄いつて思うんだけどなあ……」

そうなのだろうか？ 今の私にはイマイチよく分からない。

本当に、自分のやりたい事をしてるだけだし。

「美人でスタイルも良くて、その上、礼儀正しくて掃除上手……。本当に同じ女として羨ましいな」

「そう嘆いているだけでは何も始まりませんよ。まずは行動をしなくては」

「豪鬼さんの言う通りだよ響。まずは女の子として料理ぐらいは出来るようにならないと」

「うえっ!?!」

私の場合は、前世から一人暮らしをしていたから、転生特典とか関

係無しに普通に料理は出来る。

世の中、何がどう役に立つか分からないものだ。

「お話はいいですが、時間は大丈夫ですか?」

「あっ!?」

「言わんこつちやない。」

「ほらほら。早く行かないと遅刻をさせていただきますよ?」

「は〜い!」

「いってらっしゃい」

「いってきま〜す!」

元気なお返事。子供はああでなくつちや。

……後に過酷な運命の渦に巻き込まれると思うと、なんとも不憫ですけどね。

せめて、今だけは幸せな時間をお過ごしください。

二人が去った後、私は改めて掃除を再開した。

さて、まだ中学生の二人が登場した事でご理解頂けたと思うが、実はまだ原作第一期は始まっていない。

それどころか、例のコンサートすらもまだ開催されていないようだ。

でも、ちゃんとツヴァイウィングはデビューしているようで、街のCDショップにて彼女達の曲が発売されているのを目撃した。

つまり、今はまだ本当の意味で何も始まってすらいらないのだ。

いや、正確には外国では密かに物語は始まっていたりするけど。

それから道行く人に挨拶と挨拶を交わしながら掃除に勤しんでいると、さつき私が出た『イレギュラー』が遂にやって来てしまった。

「むわあ〜はっはっはっ!!」

この無駄に可愛らしい声で下品な笑い方をするのは、私の知っている内で一人しかいない。

「このベガ様がやって来てやったぞ! 泣いて喜ぶ豪鬼!」

「なんで私が泣かないといけないんですか。馬鹿は休み休み言ってください」

空中にいきなりワープしてきて私の目の前に降りてきた人物。

ストリートファイターシリーズにおいて、豪鬼と二分するほどの悪役であり、悪の秘密結社『シャドルー』の総帥『ベガ』その人である。といっても、今いるのはゴリマッチョでピチピチで真っ赤な軍服を着た白目なケツ顎オヤジではない。

顔つきはまだ幼く可愛らしく、黒のボブカットが眩しい。

目が大きく瞳の色は赤い。目鼻立ちはハッキリとされていて、肌は白くて綺麗。

そして、原点とは違って体がめっちゃ小さい。私の胸辺りぐらいまでしか身長ないし。

当然。胸の方もペタンコ…ではなくて、ほんの少しだけふっくらと盛り上がっている。

ここまで説明すれば分かると思うが、このベガは完全完璧な女性となっている。

しかも、何かの要因でこうなった訳じゃなくて、最初からこうだったみたい。

傍から見れば間違いなく美少女…じゃなくて美幼女なんだけど、これでも歳は25歳らしい。

元のベガの年齢知らないから、驚いていいのか分からないけど。

「今日も今日とて地べたに這いつくばって掃除か？」

「そーゆー貴女は何をしに来たんですか」

「豪鬼に会いに来た！」

「はいはい」

いつもはトレードマークとも言える真っ赤な軍服（とミニスカート）を着ているのだが、今日はプライベートで来ているのか、完全な私服になっている。

花柄のワンピースと鏢の広い帽子、とどめに白いサンダルとか、アంతはどこの日常系ヒロインですか。

「今日はたまたま早く目が覚めてしまっただけ。暇だから私と遊べ！」

「仕事はどうしたんですか」

「そんなの後だ後！　い〜い〜か〜ら〜！　わ〜た〜し〜と〜あ〜そ

くべ〜!」

「子供か」

いや、見た目だけは普通に子供だった。

はぁ……仕方がない。

「私はまだ掃除中ですので遊べません。その代わり、このペロペロキャンディーを差し上げますから、今はそれで勘弁してください」

「わ〜い! アメちゃんだ〜♡」

並行世界の人物的な存在とは言え、もう原型すらも残ってませんね……。

これはアレですかね。色んな作品群に多種多様な『織田信長』がいるような感覚になった方がいいのでしょうか。

こんな事になってますが、これでもちゃんとシヤドルの総帥はしてるんですよ。

総帥がこんなだから、全く悪事には染まってないみたいですが。なんかもう、完全に普通の大企業になってますし。

この町にも『シヤドルマート』なんてスーパーがあるぐらいですし。

でも、本人は真剣に世界征服を企んでるみたいなんですよね。

「そうだ! 実は今度な、シヤドルがアパレルメーカーを立ち上げるんだ! 凄いだろ〜!」

「ほんと……なんでも手広くやりますよね……」

軍需産業のみならず、政治経済や通信インフラとかにも手を出していると聞きますし。

この間なんて、外国の難民の人達にポケットマネーで援助とかしてませんでした?

もうマジで『秘密結社』じゃなくなってきたでしょ。

「フツ……相変わらず金に物を言わせているのだな。ベガよ」

「むむ! 貴様は!!」

「はぁ……」

なんで彼女もやって来るんですか……。

金髪をオールバックにした白人の美女。着ているのは白いワイ

シャツとジーパンだが、出る所が出て引つ込むところが引つ込んでいる抜群のスタイルをしているので、多少のボーイッシュな格好ではビクともしない美女オーラ。

そんな彼女は、ある意味でベガとは対になる存在の、サウスタウンの支配者である『ギース・ハワード』その人である。

「いつ見てもお前は子供っぽいな」

「にやんだと〜！ 表出る〜！」

「ここはもう外だが？」

「むき〜!!」

まくたこの人はベガで遊んで……。

互いにライバル的な存在なのに、実はベガの事が好きだったりするんですよね。

裏社会の超大物なのに、どこか庶民的なところもあるし。

「はははははははははは〜！」

「この手をどかせ〜！」

ベガが手をグルグルさせて突撃しようとするが、それをギースが彼女の頭を押さえて食い止める。

完全にベガは涙目になってるし。

「うわあ〜ん！ 後でサガットに言いつけてやる〜！」

「好きにしろ。こっちはビリーに言いつけてやる」

いやいや、なんでそこで張り合う？

こう見えても、この女版ギース様、実は子持ちの未亡人だったりする。

一体誰が、こんな女傑と結婚なんてしたんだろうか？ 本気で気になる。

「ギース様！ こんな所にいた〜！」

「やつと見つけた……」

「「あ」」

「またもや誰か来た……と思ったたら、今度はちゃんとした常識人枠だった。」

名目上はシャドルー四天王の一角を務めているサガットと、ギース

の右腕であるビリー・カーン。

ビリーは黒いジャケットを着て、サガットはパンツ一枚の恰好じやなくて、ちゃんとトレーニングウェアみたいな物を着てる。あれ……どこで売ってるんだろ。

「全く……どこに行ったかと思ったら、やつぱりここにいた……」

「私はちゃんと『豪鬼に会いに行く』と伝えた筈だが？」

「いや、全然聞いてないし」

何気に彼も苦労人だな……。

「ベガ、もうすぐ朝一の会議が始まる。早く行くぞ」

「サガット！ ギースの奴が私にイジワルするく！ やつつけろく！」

「分かった分かった。また今度な」

「うにやく！」

結局、ベガはサガットに首根っこを掴まれて連れていかれた。

その気になれば幾らでも抵抗出来るのに、それをしない時点で地味に真面目な部分が滲み出てるんですね。

「迷惑を掛けたな。この詫びはいつかちゃんとうしよう」

「お気遣いなく。もう慣れましたので」

「そうか。出来ればまたいつか、手合わせをしてくれると嬉しい」

「私でよければいつでも」

「有難い。ではな」

それだけを言ってサガットは静かに去っていった。

「ほら。向こうも行ききましたし、こつちももう行きましようぜギース様」

「そう何度も言わずとも分かっている。ところで、ちゃんとロックは幼稚園に送り届けたのか？」

「そりや勿論。坊ちゃん、ギース様に会いたがってましたよ」

「そうか……いつか、ちゃんと休みでも取るか」

それがいいですよ。きちんと家族の時間は作らないと。

後で後悔するのは自分ですからね。

「ところでビリーさん」

「な…なんだよ」

「ちゃんと禁煙はしてますか?」

「……今週はまだ二箱しか吸ってない」

「はあ……。妹さんを悲しませるような真似だけはよしてくださいね」

「分かってるっつーの……」

どうも、彼は私の事を真っ直ぐと見てくれませんね。

いつも顔を赤くして目を逸らして。そんなに私は嫌われてるんでしょうか?!

「と…ともかく、早く行きますよギース様! まずは例の企業の社長と……」

「はいはい。全く……お前は私の姑か」

「口煩くもなりますよ。あっちは幹部四人の大組織! こっちもそれなりの規模はあるけど、基本的には少数精鋭でやってるんですから。組織のデカさが違いすぎるのに、どうして毎回毎回……」

ビリーの愚痴を聞き流しながら、ギースはうんざりした様子で去っていった。

いやマジで、あの人だけは何をしにここに来たんだ?

「おつといけない。急いで掃除を終わらせなくては。バイトの時間に遅れてしまう」

こんな事なら、あの二人に無理矢理にでも手伝わせばよかったかもしれない。

なんて、今考えても後の祭りか。

この後、私は迅速かつ丁寧な道路の掃除と公園の清掃とトイレ掃除を済ませてから、一旦自分の部屋に戻ってからバイトの準備をしたのだった。

メイド豪鬼のお仕事

どんなに強い人間だろうと、どんな聖人君子であろうと、今の世の中では金が無いと生きてはいけない。

どれだけ綺麗ごとを並べても、結局は世の中、金が全てなのだ。当然、メイドとして生きることを決めた私にも金は必要になるわけで、となればどうにかして仕事をしなければいけない。

実は、転生した時に前世にて所持していた財布と通帳を持ってきていて、それなりに金はあった。

嘗ては仕事しかしてない仕事バカだったので、金を使いたくても使えない日々だった。

だからだろうか、私の預金通帳にはかなりの額が記載されてたりする。

少なくとも、この世界でも何も仕事をしなくても軽く半年ぐらいは余裕で生きていけるだけの金額があるが、だからと言ってそれに甘んじるのは論外だ。

どんなに節約していても、いつの日か必ず金は尽きる。

故に、仕事を探す事は私にとって町への奉仕と同じぐらいに優先すべき事だった。

そんな悩みも割と早く解決することになるのだが。

というのも、これまた近所の人の知り合いの経営している店が人員募集をしているらしく、特に私のような人材を欲しがっていると聞いた。

私は碌に話も聞かずに即座に『行きます！』と言って、その仕事を紹介して貰った。

本当に、この人達には足を向けて寝られませんね。

私が紹介して貰った仕事場。それは……………

・
・
・
・
・

・
・
・

「「おかえりなさいませ、ご主人様♡」」

メイド喫茶である。

因みに店名は『メイドカフェ 地獄歌』。意味不明だ。

最初に見た時は本気で驚いたが、よくよく考えれば私にとっては天職ではないのだろうか？

今の私は謂わば、生まれながらのメイド。メイドをする為に生まれてきたような存在。

私にこれ以上勤まる仕事があるだろうか？ いやない。

「ウキちゃん！ ご指名です！」

「承りました」

『ウキちゃん』とは店での私の渾名的なものだ。

流石に『豪鬼』なんて漢らしき全開の名前では流石に店的にもどうかと思っただけ、適当に『ごうき』から『ご』を取って『ウキ』となった。

私としては生活資金を稼ぎつつ、自身のメイドスキルを磨く事が出来る一石二鳥な環境は願っても無いので、この程度の事では微塵も文句は言わない。

「お呼びでございませうか？ お客様」

「うおお……！ これは最近になって噂になっている眼鏡系お姉さんメイドの『ウキちゃん』……！」

このお客様が言った通り、何故か店では私は伊達メガネを搔けるように言われている。

別に絶対というわけではないのだが、眼鏡を付けているだけで時給が50円アップするらしい。理由は不明。

唯でさえ、目つきがお世辞にもよくないのに、眼鏡を装着したおかげでまるでメイド長のような風貌に。

「何になさいますか？」

「……………」

「ご主人様？」

「あつ!? え…えつと、それじゃあ……このオムライスをお願いします……」

「畏まりました。少々お待ちくださいね」

「……………」

去り際にはちゃんと笑顔を忘れてはいけない。

店での私の設定は『数あるメイド達の少し年上なお姉さんの存在』らしいので、少し余裕のある感じの微笑を浮かべる。

(……女神がいた……)

なにやら背後から変な気配を感じたが、気のせいだろう。うん。

「いつ見ても見事ですわね。豪鬼さん」

「チーフ。お疲れ様です」

厨房に向かって注文を言っただけで小休止をしていると、近くにこの店のチーフがやって来た。

金髪縦ロールの、一昔前の少女漫画に登場する、主人公の良きライバルになりそうなお金持ちのお嬢様のような姿の女性だ。

「まるで本職のメイドのように優雅で可憐で華麗で、この店のポリシーである『癒しのエルドラドを脊髄で堪能して貰う』を体現しているかのような女性……。フフ……私のチーフの座も危ういですわね」

「いや、別にチーフの座とか狙ってないんですけど」

「分かっていますわ。貴女は損得勘定でメイドをしていない。本当に全身全霊を掛けてメイドをやっている。貴女こそが真のメイドと呼ばれるに相応しいですわ」

「分不相応な褒め言葉。ありがとうございます」

おっと。話をしている間に注文の品が出来上がったようだ。

冷めないうちにご主人様の元へと運ばないと。

「では、私はこれで」

「ええ。今日も期待してますわよ」

出来立て熱々のオムライスの器を持って先程のご主人様の元まで行き、静かにテーブルに置く。

「お待たせいたしました。オムライスでございます」
「ど…どうも」

ここで謎の沈黙。

恐らくではあるが、このご主人様は向こうのテーブルで行われている『アレ』を期待しているのだろう。

「美味しくなくれ♡ 美味しくなくれ♡」

私にあれをやれと？ 無理に決まってるだろ。

幾らなんでもあれは痛すぎる。

「もしや、私にも『アレ』をしてほしいのですか？」

「あ…いや…その…」

「流石にあれは難しいですが、別の事ならばしてあげますよ？」

「え？」

まずはケチャップにてオムライスに文字を書く。

私の場合は主に数種類あるうちのどれかを書くのだが、今日はこれにする事に。

滅殺 ♡

「め…めっさつ？」

「文字に関してはお気になさらず。それよりも…フ…フ…フ…は
い。あゝん」

「ええっ!？」

スプーンで一口掬ってから、私の息で冷ましてからご主人様の口へと持っていく。

彼はいきなりの事で驚いているが、気にしないでそのまま待機。

「あゝん」

「あ…あゝん…んぐ…」

このままでも罅が明かないかと思ったのか、恥を忍んで私が差し出したスプーンをパクリ。

最初こそ恥ずかしそうにしていたが、徐々に慣れてきたのか、すぐに普通の顔に戻っていった。

「よく食べられましたね。偉い偉い」

「お……お姉ちゃん……」

また言われた。

私を指定した客の殆どが、最後には私の事を『お姉ちゃん』と呼んでくる。

これは、私のロールプレイが上手くいったという証拠らしい。

前にチーフがそんな事を言ってた気がする。

（今、分かった。この人は俺達に『年上のお姉さんメイドにお世話されるシヨタっ子』の気持ちを経験させてくれているんだ……。普段は少し厳しいけど、本当は優しいお姉さん系メイドのウキちゃん……。ご飯を食べさせてくれるだけじゃなくて、時には一緒にお風呂に入つて、時には俺の事を寝かしつける為に一緒にベッドに入って本を読んでもくれたり……。そうしていく内に年上の女性を異性として意識し始め、そして……）

あ。ご主人様が完全に妄想モードに入った。

だって、目が完全に虚空を見つめてるし。

その後も、ご主人様を精一杯におもてなしして、あつという間に彼が帰る時間になった。

そそくさと会計を済ませ、店を出ようとするご主人様。

ここですかさず、いつもの一言……と思うだろうが、私の場合は少し違う。

彼が扉を開いて外に出た直後、私も一緒に外に出る。

「少しお待ちください、ご主人様」

「へ？」

ポケットからはこり取りを取り出してから、それを使ってサササつと彼の服を綺麗にしていく。

外でするのは、店内だと埃が立つ可能性があるから。

一応、ここも飲食店である以上は店の中で埃を出すわけにはいかな

い。

「お……俺の服が……」

「これでよし。では、改めて……」

スカートの両端を持ち上げてから、優美にご挨拶。

「行つてらっしゃいませ、ご主人様」

・
・
・
・
・
・
・

午後の四時頃になり今日のバイトが終了する。

今日も立派に労働をしましたね。掃除をした時とはまた違う充実感がたまりません。

帰り際に特にする事も寄る場所も無いので、今日は真つ直ぐと帰宅をする事に。

と言つても、一休みしたらまた街を見回つてゴミとか落ちてないかチェックしに行くんですけど。

街中を歩いていると、ここでまたもや彼女達を遭遇。

「あ、豪鬼さん！ また会いましたね！」

「響さんに未来さん。今、帰りですか？」

「はいー！」

「豪鬼さんはバイトの帰りですか？」

「そうです。今さつき終わりました」

この子達も、私がメイド喫茶でバイトをしている事を知っている。なんでか普通に受け入れられたけど。

「メイド喫茶かく。どんな仕事をしてるのか、私には想像もつかないな」

「私達には縁が無い場所だもんね。仕方ないよ」

この二人もメイド服が良く似合いそうな気がする。

素材は抜群なのだから、問題は無いだろう。

「そう言えば、未来さんは陸上部に所属しているのでは？ 今日はい

いのですか?」

「はい。今日は顧問の先生が急な用事で来られなくなって、部活は休みになったんです」

「そうでしたか」

この小日向未来という少女。大人しそうな顔とは裏腹に、実はかなり運動神経がいい。

人は見かけによらないとよく言うが、この子はその典型だと思う。

「あまり寄り道をしないで、早く帰るんですよ。最近は本当に物騒ですからね」

「は〜い」

なんて言っていると、まるでフラグが立ったと言わんばかりにノイズ発生のサイレンが街中に鳴る。

わ…私は別に悪くないですよね? ね?

「このサイレンは……!」

「ノイズが出るの……?」

拙いな。今の二人はまだシンフォギアとはなんの関わりも無い一般人。

ここで巻き込むわけにはいかない。

「2人共、急いで近くの避難用シエルターに」

「豪鬼さんは? 一緒に来てくれるんですよ?」

「勿論、ちゃんと後で行きます。でも、その前に人々の避難誘導をしないといけません」

「そんな……!」

「大丈夫」

不安そうになる二人の頭をそつと撫でてから落ち着かせる。

さつきと同じように、余裕のある笑顔を見せておこう。

「誰かを守りたいと思った時、救いたいと思った時、メイドは無敵になれるんです」

「豪鬼さん……!」

「さあ早く! シエルターに走って!」

「は…はい! 響、行くよ!」

「う…うん！ 豪鬼さん！ また後で！」

ちやんと頷いてから、走り去っていく彼女達を見送った。

これで、後顧の憂いは無くなった訳だ。

「さて……と」

まだ奇跡的に犠牲者は出ていないようだが、このままでは時間の問題だ。

私が二人を送り出している内に多くのノイズが出現しており、私の目の前で腕を伸ばして一人のサラリーマンを殺そうとしている。

走っている間は間に合わないかと判断したので、殺意の波動を込めた全力の飛び蹴りでノイズを粉碎。

「ひいつ!？」

「お怪我はありませんか？」

「あ…ああ…：俺は何ともないけど…：アンタは一体…：」

「怪しい者ではありません。通りすがりのただのメイドです」

「今時のメイドはノイズとも戦えるのかよ…：」

「当然です。メイドに不可能はありません」

「すげ〜…：」

「それよりも、一刻も早く避難を。急がないとシエルターに入れなくなりですよ」

「確かに！」

サラリーマンはすぐに立ち上がってから、ノイズがない道を行っていった。

「ありがとう！ 美人のメイドさん！ 死ぬなよ!!」

「そちらこそ」

こんな時になんですが、矢張り感謝の言葉は嬉しいですね。

その気持ちに応える為にも、誰一人として犠牲者は出させない!

「むんつ!!」

襲うべき一般人がいなくなったので私に目標を変えたノイズがこちらへと向かってくる。

それに対して、私は竜巻斬空脚で複数体を同時にぶっ飛ばす。

「おや?」

豪波動拳でノイズを一体倒すと、どこからか覚えのある気配を感じた。

この感じは……サイコパワー？

「サイコクラッシュャー!! ははははは!!」

……完全にベガですね。なんか遠くの方から眩しい光と一緒に何か小さいのが飛んでるのが見えますし。

どんなに小さく可愛くなっても、格闘家としての実力は健在ってわけですか。

恐るべしサイコパワー……次々とノイズを灰にしていますよ。律儀にちゃんと例の赤い軍服も着てるし。

「私の愛する日本を汚す事は、この私が絶対に許さん!!」

この声は……まさか彼女もここに？

「レイジング……ストーム!!」

複数からなる青白い気の奔流が大空へと屹立する。

相変わらず、アホらしくなるような超威力ですよね……一瞬で近くにいたノイズを十体以上倒してますよ。

こっちはこっちで谷間丸出しの例の道着を着てますね。お蔭で揺れまくりですよ。

「これは……私も負けてられませんね」

私も一気にノイズ共を一掃しましょうか。メイドらしくスツキリと。

一気に大きくジャンプをして、周囲を見渡せるほどの高度にまで至ったら、そこで両手に気を込めて何度も何度も豪波動拳を乱射する!

「天魔!・豪斬空!!」

自分達の頭上から豪波動拳の雨が降ってきて、逃げる暇も無くノイズ達が駆逐されていく。

技の威力の反動で落下がスローになっている為、時間が許す限りずっと撃ち続けた。

私が地面に降り立ったときには、もう殆どのノイズが消滅していた。

「これで最後だ！ ダブル烈風拳!!」

ギースが放った技が命中し、残った一体も灰になった。

これで今回、出現したノイズは全て片付けた筈だ。

「ふっ……豪鬼よ。いつ見ても惚れ惚れするような技の冴えだな」

「やっぱりベガ様こそがさいきよーなんだな！」

「はいはい」

私達が集まって話をしていると、そこに遅れてやって来た2課の装者二人がやって来た。

来る前にシンフォギアを展開していたようで、彼女達の体には普通に考えて恥ずかしい赤と青のピッチリスーツが装着されていた。

「また…アンタなのか……」

「随分と遅い御到着だな。シンフォギア装者とやら」

「なっ!? 貴様……私達の事を知って……!」

「このギースに知らぬことは無い」

流石は裏社会のドン。情報収集能力も侮れないようです。

「私知ってるぞ！ あーゆーのを『痴女』って言うんだろ？」

「誰が痴女だ！ このガキ!!」

「ガキじゃないもん！ 25歳だもん!!」

「嘘つけ！」

ベガと天羽奏が口喧嘩してる……凄いい光景だ……。

「か…奏。子供相手にムキになるのはちよつと大人げない気が……」

「子供じゃないもん!! 大人だもん!!」

「いや……そう言われても……」

その気持ち、よくわかりますよ。風鳴翼さん。

このベガと会った人は、誰もが最初は似たような反応をしますから。

「おっと。楽しいお話はこれまでのようだ」

「なにつ!?」

私達の間に、いきなり黒塗りのベンツが見事なドリフトで滑り込んできた。

助手席の窓が開いて顔を覗かせたのはビリーさん。

「ギース様！ ベガ総帥！ それから豪鬼の嬢ちゃん！ 早く乗れ！！」

「流石は私の最も信頼する右腕。ナイスタイミングだ」

「わーい！ ベンツだ〜！」

「では、お言葉に甘えまして。失礼致します、ツヴァイウィングのお二方」

「じゃ〜ねえ〜」

彼女達が呆けている間に車に乗ると、頬に傷跡がある運転手がアクセル全開で発進させた。

「ちよ……こら！ 待ちやがれ!!」

「またもや逃がしたか……！」

悔しそうにする二人を後ろに、私達は優雅なドライブに出かけましたとさ。

この後、ちゃんと家まで送り届けてくれたのは普通に嬉しかったです。

きちんとアフターフォローを忘れないのは素晴らしいですね。

メイド豪鬼 介入します！

街中でのノイズの襲来から暫くが経った。

あの後、響さんと未来さんともちゃんとう事は出来たのですが、いつまで経つても私がシエルターに来ないものだから、凄く心配を掛けてしまっていたようだ。

まさか、殺意の波動でノイズを蹴散らしてました、なんて言える筈も無いので、適当に『避難誘導が終わった直後に知り合いが車に乗ってやって来てくれて、そのまま別の場所に避難する事になった』と言っておいた。

一応、嘘はついていない……と思う。

で、今日の私は早朝の掃除を終えた後に食料や生活用品を買う為の買い物に出かけている。

バイトはお休みで、なんでもマネージャーが一日だけ出張に行かないといけなくなったらしく、それに合わせて店の方も休みにするとの事。

別に、それはそれで別に構いやしない。

暇な時間が出来たのであれば、いつも以上に奉仕活動に専念するだけだ。

その活動を始める前に、まずは買い物を先に済ませておこうと思ったのです。

エコバッグを持って街中を歩いていると、何やら見た事のあるような後ろ姿が。

一人は金髪のおさげ、一人は黒髪のリョートヘア、もう一人は濃いめの金髪のボブカット。

はい。例の三人娘ですね。いつものハイレグな戦闘服じゃなくて完全な私服ですけど分かります。

「ん？」

あ。こっちに気が付いた。

「やっぱりそうか。なんだか知っている気配がしたと思ったら」

「こんにちわ。キャミイさん。ユーリさん。ユニーさん」

「こんにちは」

この三人もシャドルーに所属している構成員の少女達。

見た目は幼く見えますが、並の連中なんて相手にすらならない程に強い子達です。

しかも、原作みたいに何か改造されたとか、そんなんじゃないで、普通に訓練と戦闘を繰り返した結果、秘められた才能が開花した：らしいです。サガットが言うには。

「バイトはどうしたんだ？ 私の記憶が正しければ、今日もシフトが入っていた筈では？」

「なんで私のシフトを知っているのか、なんてツツコみは後にするとして。実は……」

かくかくしかじか。かくかくうまうま。

「成る程な。それでは仕方あるまい」

「それで、お買い物に？」

「その通りです。お三方はまたどうして街に？ 有給でも取ったのですか？」

「いや、そうではない。目的自体は豪鬼と同じさ」

「と言いますと？」

「ベガ様のお菓子が底をつきそうになっっているのな。散歩も兼ねて、こうして買い物に来たって訳さ」

「そうでしたか」

シャドルーには女性だけで構成された『ベガ親衛隊』なるものが存在しているのですが、その実態は幼女ベガちやまの可愛さにノックアウトされて、勝手に自分達で作り上げたものだったりする。

ですから、実際には『ベガ親衛隊』ファンクラブと言った方が正しい。

ベガ本人も認めてない非公式な部隊ですし。

「今頃はお菓子が無くて泣いているやもしれん。それもまたとても可愛らしいが、それ以上に笑顔でお菓子を頬張っている姿の方が何倍も萌える!!」

「まずは何を買いますか？」

「ペロペロキャンデーは必須。ベガ様はあれが大好き」

「そうだな。その後はミスドに寄って……」

いつの間にか私を無視して幼女ベガちやま談義に花を咲かせるし。それじゃあ、私はここで失礼しましうかね……ん？

「あれは……？」

私達の近くにあつたCDショップの窓に、ツヴァイウイングのポスターが貼つてあつた。

どうやら、コンサートが開催される予定のようだ。

「ツヴァイウイングのコンサート……？ ん〜？」

なんだろう……？ 何かが引つかかる。

まるで、喉の奥に小骨が刺さつたかのような気分になる。

「……ああっ!!」

「うわあっ!!? いきなりどうしたっ!?!」

お……思い出した!! ツヴァイウイングのコンサートと言えば、原作第一期の第一話の冒頭のイベント!!

よくは思い出せないけど、なんかの聖遺物の発動実験をする為にコンサートをして、その時に大量のノイズが発生、そして、それをなんとかする為に天羽奏が命懸けの絶唱をして命を落とすと同時に、その際に響さんの胸にガングニールの破片が突き刺さって……。

「なんという事でしよう……私としたことが……!」

メイド活動に勤しむあまり、原作のイベントをすっかり忘れていた!

別に私が行かなくても問題は無いし、下手に改変しても後々が大変なのもまた事実。

でも、だからと言つて! 目の前で救えるかもしれない命があるのに、それを見捨てるなどと……メイドとしての私の矜持が許さない!! バタフライエフェクト? 上等だ! もう既に有り得ない程におかしくなつてるんだ! 今更、死ぬ筈だった人間を生かすぐらい、どうって事ないだろ!

「コンサートはいつなんですか……! このポスターに日程ぐらいは……」

「アイツはさつきから何をしてるんだ?」

「さあ？」

「ツヴァイウイングのファンなのかも」

外野の言葉は無視無視。

えくつと……コンサートの日時は……。

「げ」

今日じゃないですか！ しかも、もう始まつてるし！

そうか……今日は土曜日。休みの人も多いから、午前中から大々的に行っているのか……。

「こうしてはいられません！ 急がなくては！」

阿修羅閃空でダ—— ツシユ!! 間に合えくくくく!!

「お……おい？ 豪鬼っ!？」

「行ってしまった……」

「いつもながら、凄い速さ……」

・
・
・
・
・
・
・

会場に到着すると、コンサートはかなりの盛り上がりを見せている事が分かった。

だって、外にまで歓声が聞こえてくるんだもん。

「この感じだと、まだノイズは発生してないようですね」

それならそれで一安心。

ここで突入のタイミングを計る事が出来るから。

「確か、今日のコンサートは本来は響さんと未来さんの二人で来る予定だったんですね……」

だけど、未来さんの方が家の用事で来られなくなり、それで仕方が

なく響さんだけで行く事にした。

けど、その事が後々の悲劇に繋がる事になるうとは、誰が予想するだろうか。

(私は基本的にバットエンドも鬱展開も嫌いだ。多少のシリアスは許容出来るけど、それ以上は見ていられるだけでも辛い。どんな事があつても、やっぱり皆で笑いあえる事が一番だろ)

その気になればいつでも会場に突撃は出来るから、それまでは取り敢えず待機って事で。

少し喉が渴いたから、近くにある自販機で何か買いましたよね。

.....
.....
.....

「はっ!？」

ハンバーガー片手にコーラを飲んでいると、突如としてコンサートホールから爆発音が。まさか……来たのかっ!？」

「あむあむあむあむ……ごっくん。よし! ふんっ!!」

急いで残ったハンバーガーを口の中に放り込み、それをコーラで流し込む。

それをゴミ箱にシュートしてから、会場に向かったのダツシユからのスーパージャンプ!

「これは……」

ホールは天井をオープンしているらしく、上からもよく中の状況が見て取れる。

案の定、ノイズが大量発生していて、観客の人達が逃げ惑っていた。

あの二人も既にシンフォギアを纏って迎撃しているようだが、いかにせん敵の数が多すぎた。

まだ犠牲者は出ていないようだが、このパニックでは時間の問題だ。

「この数を一気に葬るには……アレしかない！」

私の知っている豪鬼の技でも、最もチートな奥義！

あれを放つて一網打尽にするしか方法は無さそうだ。

「はああああああ……!!」

全身に殺意の波動を巡らせてから一気に燃やす!!

技を放つ瞬間のみ、私はメイドではなく『格闘家 豪鬼』になろう

!!

さあ……ゆくぞ!!

・
・
・
・
・
・
・

それは、本当に一瞬の出来事だった。

「覚悟はよいか……！ 愚か者共め!!!」

究極奥義『禊』
!!!!!!

究極的な力の一撃が会場全体に広がり、落下個所にいたノイズは当然のように消滅。

離れた場所にいたノイズ達も、その余波だけで次々と倒されていき、大小の関係無く、その場にいたノイズだけが全て一撃で葬られた。

少しだけ目を動かして様子を確認。

よし。無事にノイズは全滅しましたね。

しかも、ちゃんと人々には一切の被害が無し。

これでいじめられっ子ルートを回避完了です。

「お掃除完了!!」

「いやいや待て——!!」

折角、人がいい気分浸ってるのに、いきなり何なんですか？

全く……少しは空気を讀んだ方がいいですよ？ ツヴァイウィン
グのお二方。

「なんなんだよ!? さっきの超絶的な一撃はっ!?」

「あれだけの数のノイズを一瞬で倒すなんて有り得ない!!」

「さっきのは私の最大の奥義である『禊』です。それと、有り得ないな
んて事こそが有り得ないんですよ。何故なら、私はメイドであり、メ
イドに不可能は無いからです」

「そんな訳有るか!!」

なんなんですかもう……。

誰も犠牲が出なかつたんですから、それでいいじゃないですか。

ほら、逃げる途中だった観客の皆さんも今の状況がよく分からなく
て呆然としてますし。

「あ……あの……豪鬼さん……」

「響さん。御無事でしたか」

どうして響さんがこの二人の近くにいるかは分かりませんが、見た
感じ怪我は無さそうでしたよ。

少なくとも、これで彼女の御家族や未来さんを悲しませるような事
はありませんね。

「なんでいきなり空から降ってきてノイズをやっつけたのとか、色々
とツッコみたい事は山ほどあるんですけど……」

「どうしました?」

本当にどうしたのだろうか？ なんだか彼女の様子がおかしい。

「さっき……豪鬼さんが落ちてきた時……なんだか『鋭くて硬い物』が

飛んできて、それを思わず飲み込んだんじゃないんですけど……」

「「ええっ!?!」」

す…鋭くて硬い物……? それってまさか……。

「か…奏……ガングニールの一部がほんの少しだけ欠けてる……」

「さっきの技の余波だけで壊れちゃったのか……? って! まさかっ!?!」

「響さんが飲み込んだのって……」

ガングニールの欠片っ!?

原作なら胸に痛々しく突き刺さる所を、あろうことか飲み込んでしまったんですかっ!?!

「こ……これって……どうなるんだ?」

「いや…私に聞かれても。シンフォギアを飲み込んだ事例なんて聞いた事ないし……」

でしょうね。少なくとも、原作じゃ誰もシンフォギアを口から摂取なんてしてませんよ。

「あ…あのく……」

「どうした?」

「会場のこの空気……どうするんですか?」

「「あ」」

この場にいる全員の視線が私達に集まってる……。

私の事は別に見られても問題無いけど、彼女達シンフォギア装者たちはヤバいんじゃない?

これ……どう言い訳すればいいんだろうか……?

あ、いい事思い付いたかも。

「と言う訳で、サプライズ&ハプニングな演出はいかがでしたでしょうかっ!?!」

こうなったら、さっきのノイズもシンフォギアも私の技も、全部コンサートの演出だったことにしてしまえ!

ほら! その二人もボクツとしてないで何か言って!!

「え……あ……そ……そうなんだ!! 楽しんで貰えたかなっ!?!」

「驚かせしてすみませんでした!」

その調子、その調子。

そつちが一番に合わせてくれないと、すぐに嘘だつてバレちゃうじゃない。

どうやら、観客たちの方は信じてくれたみたいだし。

「えっと……ありがとな？　正直、今回ばかりは本気でヤバかった。あたし達だけじゃ沢山の犠牲者が出ていたに違いない」

「私からもお礼を。ありがとうございます。どうして素手でノイズを倒せるかは疑問ですが、それでも、その拳に私達も人々も助けられました」

「どういたしまして。私はメイドとして当然の事をしたままでですから」

なんか、初めてこの二人からお礼を言われたかも。

それだけ危なかったって証拠かもしれませんね。

「響さん。念の為、帰りに病院に行った方がいいですよ。私も一緒に行きますから」

「わ……分かりました」

彼女を連れてその場を後にしようとする、いつものようにツヴァイウイングの二人が私の事を呼び止めた。

「ま……待ってくれ！」

「お願いがあります。後でいいので、私達と一緒に来てくれませんか？」

「はあ……」

今までは積極的に関わらないように心掛けていましたが、今回はやはりはそうもいかないようです。

私自身、そろそろ潮時かもと思い始めていたですしね。

「いいでしょう。緊急事態だったとは言え、今回は流石に派手にやり過ぎましたから。でも、その前にまずは彼女を病院に連れていかなければいけません。その後でよろしいですか？」

「構わないよ。そつちの方が重要だしな」

「ご理解頂けて何よりです。では響さん。行きましようか」

「は……はい。あ、その前に……」

響さんが天羽奏と風鳴翼の方を向いて頭を下げてお礼を言った。

「奏さん！ 翼さん！ 助けてくれて、ありがとうございます！」

「いいってことよ。当たり前前的事了ただけだしな」

「防人として当然だ」

二人共、立場上仕方がないとは言え、普段からお礼を言われ慣れて
ませんか？

さつきから照れくさそうにしてるし。

私達が去った後もなんとかコンサートは再開して、コンサートとしては大成功だったらしい。

シンフォギアに関しては、今まで秘密にしていた新曲用の衣装って事で落ち着いたみたい。

いや〜……意外となんとかなるもんですね。言った私が一番驚いてますよ。

因みに、突然乱入した私の事をそれなりに話題になっているようで、色んな噂がネット上に飛び交っている。

中には、私が『近日参入予定の三人目のツヴァイウィングじゃないか』なんて言う輩もいる始末。

いやいや、三人じゃ『ツヴァイウィング』にはならないでしょうに。

響さんを病院に連れていき、彼女を家に帰らせた直後、二課の人間達と思わしき黒服の男達が私の事を待っていた。

私は一切の抵抗をせずに、彼等についていく事にした。

メイド豪鬼 連行される

病院で診察を終えた響さんを帰らせた直後、病院の玄関に待つてましたと言わんばかりに2課の人間と思わしき黒服連中が待つていた。その中でも一人、明らかに常人とは違う雰囲気を出している男がいた。

「申し訳ありませんが、僕達に御同行願えますか？」

外見だけはどこにでもいそうな優男だが、私の中にあるメイドとしての勘が言っている。

この男は只者ではないと。見た目で判断してはいけないと。

(倒そうと思えば出来なくはないけど、彼女達に約束をした以上、ここで抵抗する事はしたくないな……)

という訳で、私は大人しく彼等に連れていかれる事にした。

「分かりました。ツヴァイウィングのお二人ともお約束しましたからね」

「ありがとうございます」

「お礼を言われる事ではありません。メイドは決して約束を破らないのです」

「そ…そうですか」

簡単に話をした後、なにやら書類っぽいのを渡された。

なんでも、今回の事や今までの事に関して口外しないように約束させる為の紙のようだ。

「ご丁寧にそんな事をさせなくても、私は誰にも言わないんだけど。だって、知り合いにシャドルー総帥とハワード・コネクション総帥がいるんだよ？」

その時点で相当に世界の裏事情に足どころか全身浸かってるんですけど。

「書きましたよ……あ」

「どうしました？」

「しまった……ノイズの事で頭が一杯になって忘却していましたが、今日私が出かけた本来の目的は買い物なので……」

「とても心苦しいのですが、それはまた後日と言う事に……」

「しかし、明日はまたバイトがありますし、食料品や消耗品が少なくなってきたるんですよね……」

「う……い。 わ…分かりました。では、こちらの用事が終了し次第、貴女を近くのスーパーまでお送りします。これでいいですか？」

「感謝します」

何時になるかは分からないが、少なくとも閉店時間まで拘束するって事は無いだろう……と信じたい。じゃないと、明日から今度の休みまでカップラーメンで生活をしなければいけない。

健康管理はメイドとしても格闘家としても最重要項目の一つ。

可能な限り、それを怠りたくはないのです。

「おや？」

いつの間にか私の手首に手錠が掛かっている。

手錠なんて現物は初めて見たかもしれない。

「これは？」

「一応、念の為に向こうに到着するまでの間、貴女の事を拘束させていただきます。ノイズと素手で戦える貴女相手に効果があるかどうかは疑問ですが……」

「はあ……」

疑り深いというか、用心深いというか。

これも彼等の仕事なのだから、仕方がないのか。

「では、参りましょう」

こうして、私は彼等が用意した真っ黒な車に乗せられ一路、特異災害対策機動部二課の本部に連れていかれるのであった。

・
・
・
・
・
・
・

「あら」

なんて驚く振りだけはしておく。

だって、車が向かっているのは、もう少ししたら響さんや未来さんが通う事となる【私立リディアン音楽院】だったのだから。

「到着しました。こちらです」

「ここは学校ではないのですか？ 私のような完全な部外者が入っても大丈夫なので？」

「ご心配なく。今日のこの時間帯には誰もいませんし。それに、万一誰かがいたとしても見つからなければいいだけの話ですから」

「そうですか」

この男……真面目そうに見えて、中々に強かな性格をしている。成る程、これが本当の『昼行灯』ってやつか。

伊達に現代で忍をやってる訳じゃないな。ええ？ 緒川慎二さんよ。

「ごつちです。僕についてきてください」

「はい」

彼の後についていくと、隠し扉的な物があり、そこには何やら重々しい鉄の扉が。

そこはエレベーターとなっていて、明らかに今から行く場所が地下だと告げていた。

「その手すりに掴まっついてください。僕が言うのもアレですけど、このエレベーター……かなりの速度がありますので」

「ご心配なく」

エレベーターが動き出すと、彼が言った通りの普通では考えられないような速度で降りていく。

といっても、メイドである私にはこの程度なんてことないんですけど。

「あ……あの、大丈夫ですか？」

「メイドなので平気です」

「はあ……（意味が分からない……）」

私の言っている事が分からないって顔をしていますね。

今はそれでいいんです。いずれ必ず分かる日が来ますから。

エレベーターが止まってから中から出ると、そこはまるで秘密基地のような未来感溢れる廊下があった。

これがあの二課の本部の中か……。

「こちらです」

「私はどこに連れていかれるのですか？」

「取調室です。貴女の事を信用していませんが、これまでの事があるので、まずは色々とお話を伺いたいと思ひまして」

「成る程。道理ですね」

まさか、私のような普通のメイドが、何の特殊な装備も無しに素手でノイズを撃破しているのですから、そりゃ事情を聴きたくもなりませんか。

「ここです。中に入って少しだけお待ちください」

「分かりました」

暫く歩くと、そこにはこれまた機械的な扉があった。

彼に言われるがままに中に入ると、室内は鉄の机と椅子が二脚あるだけ。

これじゃあまるで警察の取り調べ室みたいだ。

「ん？」

この床……汚れている！ いや、床だけじゃない！ よく見たら部屋の角には埃が溜まっているじゃないか！ まさか……この部屋、掃除してないのかっ!?

おのれ……これはメイドである私に喧嘩を売っていると判断する

！

「いいでしょう……！ メイドの真の力……思い知るがよい!! ふん!!」

裂帛の気合を込めて、内側から手錠を木っ端微塵にしてから手を自由にする。

それから、私はスカートの中から霧吹きタイプの洗剤と布巾、それ

からゴム手袋を取り出して装着する。

え？　なんでそんな場所にそんな物があるんだですって？

何を言ってるんですか。メイドたる者、いつ何時でも掃除道具を常備するのは当たり前でしょうに。

「さて、やりますか」

まずは、壁の上の方から洗剤を掛けてからゴシゴシとな。

部屋を掃除する時は、このように上からしていくのがコツです。

埃を初めとする汚れが下に行き、後で纏めて片付けられますから。

「すまない、遅くなった。俺は……って、何をしてるんだ？」

「掃除です。見て分からないんですか？　その立派な目は節穴なんですか？」

「……手錠は？」

「そこに転がってます。それも後で不燃ゴミとして出しておかないと……」

「……話をしてもいいか？」

「ご勝手に」

あ！　ここになんだかしつこい汚れが！

気のせいでしょうか？　この汚れ……人の顔に見えるような気がします。

・
・
・
・
・
・
・

掃除をしている私の背中を見ながら、赤い髪の大柄な男は椅子に座り、ゆっくりと話し始めた。

「あ……俺は『風鳴弦十郎』。特異災害対策機動部二課の司令官を務めている。君の名前を聞いてもいいか？」

「私は豪鬼です。以後、お見知りおきを。むむ……このような隅に溜まった埃を取るには、この割り箸にティッシュを輪ゴムで固定した棒を使って……」

よしよし。綺麗に落ちてる落ちてる。いや……掃除って気持ちいいな〜！

この勢いでこっちもゴシゴシっと。

「えっとだな……特異災害と言うのは、先程も出現していた……」

「知ってます。ノイズの事を指しているのでしょうか？」

「そ……その通りだ。本来ならば『特殊な装備』に適合した者にしか倒せないノイズを、あろうことか君は素手で倒した。流石の俺達も、これには本気で驚いたよ」

「実際には私だけじゃありませんけどね……つと」

その『特殊な装備』って、間違いなくシンフォギアの事でしょ。

この場で説明する気は無いようだけど、私は気にしない。だってもう既に知っているから。

ベガもサイコパワーで倒してましたし、ギースも気を駆使して普通に戦ってましたしね。

そりゃ気にもなりますか。

「本来ならばそっちの方も聞きたいのだが、相手はあのシャドルー総帥とハワード・コネクションの総帥だ。俺達でもそう簡単に手が出せない程の大物だからな。だから……」

「最も接触が容易そうな私に目を付けたと」

「そうなる。善意の協力者とも言うべき君にこのような目に遭わせてしまい、申し訳ないとは思っている……」

「気にしないでください。こうなる事は予想してましたし」

「そうか。そう言ってくれると、こっちとしても少しは気が軽くなる」場の空気が軽くなった所で、私は何を話せばいいのだろうか？

取り敢えず、プロフィール関係の事になったら原作豪鬼の設定でも話しておくか。

「……座って話せないか？ 掃除をしてくれることは純粹に有難いが、君だけが立って俺が座っているのは、なんだか心苦しいんだが

……」

「そう思うのなら、ちゃんとここを掃除しておくべきですね」

「ちゃんと専門の業者に頼んではいるのだがな……」

「確かにプロならば問題無いでしょう。しかし、業者の方々が毎日毎日掃除をしてくれるわけではありません。彼等にだって別の現場があるのですから」

「う……うむ……」

「ならば、自分達でこまめに掃除するしかないでしょう？ 別に隅から隅まで徹底的にやれとまではいいません。ですが、暇な時間が出た時や、ふと目に付いた時などに軽く掃除するだけでもかなり違ってくるものなんですよ？」

「そ……そうだな。君のいう通りだ」

「ご理解頂けたのなら、今度から二課で年に一回、大掃除の日でも設ける事をお勧めします。貴方達だって、綺麗な職場で仕事をしたいでしょう？」

「……善処しよう」

本当に分かってくれたのだろうか？

いや、この風鳴弦十郎という人物、原作でも相当に真っ直ぐな人物だったから、割とマジで検討してくれるかもしれない。

「それでだな……どうして君が素手でノイズを打倒出来たのか教えて貰えないだろうか？」

「メイドだからです」

「は？」

「メイドだから出来た事です……と、冗談はさておき、少しは真面目にお答えしましょうか」

まだやり残しはあるが、これは真面目に答えないといけないだろうと思い、私も彼に向かい合うような形で椅子に座った。

「私も自分で確証を得ているわけではないのですが、恐らくは私の身に宿る『殺意の波動』の恩恵かと思えます」

「殺意の波動？」

「はい。分かりやすく説明すると、通常の格闘家達が持つ『闘気』より

も暗く、殺意等の禁忌的な感情が物理的に発露した、典型的な『闇の力』ですね」

「闇の力……。そんな物を宿して、君はなんともないのか？」

「嘗ては、殺意の波動の暴走により命を落とした者もいると聞いた事があります。ですが、私は違います。修行の末に殺意の波動を完全に克服し、自身の支配下に置いていきますから」

自分で言っておいてなんだけど、改めて豪鬼という人物の出鱈目さが浮き彫りになるよね。

己の中にある『闇』をコントロールして使役出来てるんだから。

どれだけチートなんだよって話。

「以前、私の師が言っていました。『殺意の波動とは一人の世を乱す力』を持つ者を倒す為に『人の世』が生み出した、人のみに許された『力』なのだ」と

「人の世を乱す力……。間違いなくノイズの事だな」

「でしょうね。厳密にはノイズだけが対象ではないでしょうが」

「だろうな。だが、納得はいった。なんてことはない。君は自らの闇に堕ちることなく、その【闇の力】を人の世を守るために使っている。それが分かっただけで十分だ」

「随分と簡単に納得するんですね。これまでには科学の力によって殺意の波動を再現しようとする輩や、私を初めとする殺意の波動を潜在的に宿している人間達から殺意の波動を奪って自分の物にしようとする連中もいたというのに」

「生憎と、俺はそんな事は考えないし、考えようとも思わない。そんな人道に背くような事は死んでも御免だ」

本当に真っ直ぐな信念を持つ人物ですこと。

だからこそ、こんな曲者揃いの組織の司令官なんてやってられるんだらうけど。

「ところで、先程の話で気になった事があるのだが」

「なんででしょうか？」

「君はその……嘗ては格闘家をやっていたのか？」

あ〜…やつぱそれ聞いちゃいますか〜。

うん。分かったよ？ 確実にそれにはツッコまれるな〜って。
こうなったら、豪鬼の過去設定を適当にもじって説明するか。

「そうですね。昔は山に籠って兄と一緒に師と共に修行に暮れる毎日でした。殺意の波動を克服した後は、私は山を下りて世界へと飛び出して様々な強者と拳を交え続け、兄は二人の弟子をとって後継を育てていたようです」

「そうか……ならば、どうして今はメイドに？」

「……言葉で語るのは難しいですね」

「言えるわけないだろ！ 神様転生してチートな美少女メイドさんになりました〜なんて！」

ちよつとシリアス風味に誤魔化してみたけど……大丈夫かな？

「……いや。誰にも言えない事情、言いたくない事はある。無粋な事を聞いて済まなかった」

「いえ。ちゃんと分かってくれるのならば、それでいいです」

あぶね〜！ なんとかなった〜！

豪鬼の設定以上の事をここで即興で語られて言われても無理ですから！

「他にも色々聞きたい事はあるが、それは追々聞いていくことにして……」

それって間違いなくベガやギースの事ですよ。分かります。

「最後に一つ、君に頼みたい事がある」

「なんででしょうか？」

何を言うかは大体、想像がついてるんだけど。

まずは聞いてみようじゃないですか。

「よかったら……なのだが、二課に所属してくれないだろうか？ 勿論、無理強いはいしない。君が嫌だというのであれば、こちらは素直に諦める事にする」

「そうですね……」

自分の顎に手を当てて考える振りをするが、本当はもう答えは決まっていた。

「流石に所属をするというのは無理ですね。こちらにもこちらの生活

や仕事がありますから、それを崩すわけにはいきません」

「それもそうだな……」

「ですが、民間協力者としてなら手伝ってもよいかと思っっています」
「い……いいのか？」

「はい。これまでも自分の意思でノイズを倒してきましたし、やる事はさほど変わらないでしょう？ 変わることを言えば、これからは『あの二人』と一緒に戦うという事ぐらいですか」

「すまない……ありがとう」

「どういたしまして」

これで私も本格的に原作介入かく。

最初の段階から相当な原作改変しちゃったし、これからどうなるのか本当に見当もつかないや。

「俺個人として質問をしてもいいか？」

「さっきのが最後じゃなかったんですか？」

「司令としてはな。今言ったように、これは俺個人が聞きたい事だ」
「屁理屈ですね……なんですか？」

「どうして君はノイズに立ち向かうんだ？ 誰かに言われたわけでもない。どこかに属しているわけでもない君が……」

「そんなの、決まってるじゃないですか」

こんな時、私が答えは常に一つ。

胸を張ってハッキリと口にできる。

「私がメイドだからです」

メイド豪鬼 歓迎される

「もう用事は終わったのではないですか？」

「そうなのだが、もう少しだけ付き合ってくれないか？」

「と、仰いますと？」

「民間協力者となった君の事を、他のメンバーにも紹介しようと思っ
てな」

「名前と顔だけでも知っておくだけでも有難いですから。あ、僕の名前は『緒川慎二』と申します。改めて、これからよろしくお願いします。豪鬼さん」

「こちらこそ。よろしくお願いします」

事情聴取と取調室の掃除が終わり、これでやっと買い物に行ける……と思っていたのだが、そうは問屋が卸してくれないようで、あれからまた私は彼等に連れられて廊下を歩いていた。

いつの間にかスーツ姿の忍者君も戻って来てたし。

「しかし驚きました。何らかの武術を修めているとは思っていましたが、まさか世界を股にかける程の格闘家だったとは」

「今時、嘗ての私のようにまだ見ぬ強敵を求めて世界中を旅している人間は割と多いですよ？ しかも、そういった連中に限って、世界の危機が訪れた時には国境を越えて一致団結して戦ったりするんですから。それと、今の私はメイドです」

「凄いですね……」

「拳と拳を交える事で繋がる絆……か。格闘技に国境は無いからな。俺も、ノイズなんていなかったら、そうして世界中を旅して多くの強敵達と戦ってみたいもんだ」

「弦十郎さんならば、きっと『彼等』ともいい試合をする事でしょう」

原作でも相当なチートっぽいな、この人。

普通に格ゲーのキャラとしていても違和感無いわ。

「よし。着いたぞ」

連れてこられたのは、これまた重厚な鋼鉄製の扉。

これは間違いなく司令室的な場所じゃないんですかね？

「ここは？」

「この本部の中核とも言うべき司令室だ。基本的には俺達はここで仕事をしている」

「そうですか」

ここで私は少くしだけ前世原作知識の記憶を思い出す。

（新しいメンバー……司令室……あ。なんか猛烈にイヤな予感がする）

多分だけど、これはアレだ。間違いない。私の中のメイドとしての勘がそう告げている。……前にも同じような事を言いませんでしたっけ？

私が心の中で気を引き締めていると、弦十郎さんが扉を開く。

その中であつた物とは……。

【ようこそ二課へ！ 熱烈歓迎豪鬼さん!!】

……最早……何も言うまい……。

入った途端にクラッカーが鳴り、宙に飛び交う紙の紐。

中にいた人間達の殆どがスーツを着てはいるが、それとは対照的に頭にはパーティー用の三角帽子が乗っかっている。

そして、沢山並んでいるテーブルには皿に乗せられた多くの料理が。

「私の名を話したのはさつきじや……？」

「あの部屋での会話はこつちにも流れていてな。黙っていて悪かった」

「いえ。それは別に構わないのですが……」

まさか、私が来てからの短い間にこれの用意をしたのか？

いや、流石にそれは有り得ないか。じゃあ、最初から私が二課に協力すると読んでいた？ もしかしたら断られる可能性もあつたのにな？

（いや……深く考えるのは止めよう。考えたら負けな気がしてきた）

取り敢えず、私と一緒にいる二人に状況説明をして貰おうか。

「お二人共、これは一体？」

「なあに。豪鬼くんが我々に協力してくれると言ってくれた以上、ま

ずは二課のメンバー全員で歓迎をしようと思ってな」

「それで、この騒ぎですか……」

「その通りです」

よく見たら、料理とか出来立てじゃないのか？

あの北京ダックとか湯気が立ってるし。

「ちよつとお待ちを」

ポケットからスマホを出して時間を確認する。

ふむふむ……この時間ならまだ大丈夫かな？

「どうした？ 何か急ぎの用事でもあったのか？」

「いえ、そうじやありません。ただ、もう少ししたらスーパーのタイムセールが始まるな」と思いました」

「そう言えば、君は本来、買い物物の為に外出をしたと言っていたな」

「そうです。でも、まだ大丈夫です。最悪、買い物さえできれば問題無いです」

「最近では24時間営業のスーパーも増えてきましたからね」

「はい。お蔭で助かっています」

一昔前までは24時間営業なんてコンビニだけだったのに、各企業も本気で私達のような消費者の声に耳を傾け始めたって事だな。

「へえ……この子が例のメイドちゃんね」

興味深そうに目を光らせて私に近づいてきた一人の女性。

白衣を着て眼鏡を掛けている彼女は、見るからに科学者ですと言った風貌だ。

ま、その正体を私は知っているんだけど、ここでは敢えて言うのは止めておこう。

「貴女は？」

「おっと。まだ名乗ってなかったわね。私は櫻井了子。この二課における技術顧問的な立ち位置にいる人間……つて言えば分かるかしら？」

「大体は」

「私は主にこの本部の防衛システムの構築とか、聖遺物の管理、他には彼女達……シンフォギア装者の子達のメデイカルチェックなんかも

やってるの」

「随分と沢山の事をお一人でやっているのですね」

「出来る女ってのは、やれると思っただ事は自分で全部するものなのよ。貴女だってそうじゃないの？ 豪鬼ちゃん」

「ちゃんって……。私は別に、やれると思っただからやっているわけではありません。自分がしなければいけないと思っただ事をしているだけですよ」

「似ているようで違うわね。まあ、深くは追及しないけど。それよりも！」

ここでグイっとくるな。ちよつと仰け反ってしまった。

「凄いわね、『殺意の波動』…だったっけ？ まさか、体内に宿る気力でノイズと戦えるなんて、誰も考えもしなかったわよ!？」

「それは私も同じです。でも出来てしまった以上は仕方がないので？」

「確かにそうだけど……。科学者としては猛烈に気になるのよね」

「あの部屋での会話を聞いていたのならば知っているでしょうが、これまでにも似たような事を言った科学者は星の数ほどいます。ですが、そのいずれもが殺意の波動の事を科学では解明できず、結局はその『力』のみに注目して軍事利用を企んだりしてましたよ」

「私はそんな事はしないわよ。ただ、純粋な好奇心で知りたいだけだし」

「好奇心は猫を殺しますよ？」

「心配しなくても、私は猫じゃなくて天才だから大丈夫よ」

「別に心配をして言ったわけじゃないんですか……」

「そんな事言っ……ホントは照れてるんでしょ？ あんもう！ 可愛いわね♡」

「貴女は酒に酔ったOLですか。私に絡まないでください」

「いいじゃないのくちよつとぐらいく。この胸……何センチぐらいあるの??」

「知りません」

なんだ、このセクハラ女は……。

こんなんで本当に本編における最重要人物の一人なのか？

全く腹の底が見えない以上、警戒をして然るべきなのは確かだ
だけだ。

「そうだ！ 折角こうして協力してくれることになったんだし、私
から直々にシンフォギアシステムの事を教えてあげるわ！」

「ご丁寧にも。でも、私に理解出来る事なんてたかが知れている
ので、出来れば素人にも分かるようにお願いします」

「分かっているって」

そこからは、櫻井了子監修によるシンフォギアシステム講座（簡易
版）が開かれた。

大体は私もよく知っている知識ばかりだったので、ここでは省略す
るが。

「……と、言う訳なの。分かった？」

「大体は。要は、聖遺物から作られた対ノイズ用の特殊兵装……と言っ
た感じですか？」

「大凡はそれで間違っていないわ。本来ならば、シンフォギアこそがノ
イズに対抗する唯一無二の存在だったのに、豪鬼ちゃん達が見事を見
事に覆しちゃったのよね。もしかして、意外とそんな人間って多い
のかしら？」

「一応、該当しそうな人間は他にも何人も知ってはいますが……」

どこぞの中国人な麻薬捜査官のお姉さんや、アメリカの空軍少佐ど
のとか、ロシアの赤いサイクロンとか。

後はもう、普通に白い道着と赤い道着のあいつ等でしょ。

私の『身内』に限定しなきゃ、もつと沢山いるけどね。

「了子さん！ もうそろそろ私達とも話させてくれよ〜！」

「おっと。そうだったわね。これからは一緒に活動する事が最も多く
なりそうになる二人なんだし、コミュニケーションは大事よね」

「ああく……その発言でもう、今後の展開が予想出来てしまいました
……」

了子さんは、場の空気を読んだのか、私達に手を振りながらこの場
を去り、弦十郎さん達を話しを始めた。

それと入れ替わるように、装者の二人がやってきた。

「よっ！ さつき振りだな！ こうして話すのは初めてだよな」

「そうなりますね」

「改めて礼を言わせてください。先程は本当にありがとうございます。ごさいますた」

翼さんが丁寧な言葉を下げてお礼を言ってきた。

礼儀正しい人間はとても好感が持てる。

「頭を上げてください。私はメイドとして当たり前前事をしただけに過ぎません」

「あれ程の武勲をそのように言えるとは……」

「やっぱ凄いな、アンタは」

「メイドですから」

何をどう言われても、最後にはそれに帰結するんですよ。

「もう知ってるとは思うけど、一応の自己紹介はさせてくれ。アタシは天羽奏。『ガングニール』の装者をやってる」

「私は風鳴翼。『天羽々斬』の装者を務めています」

「ガングニール……古代ノルド語で『剣撃音』の意味を持つ、北欧神話の主神オーディンの武器。俗に言う『グングニル』の事ですね」

「よ……よく知ってるな」

「メイドですので。そして、天羽々斬は日本神話に登場する荒人神『素戔鳴尊』が八岐大蛇を討伐する際に振るったとされる聖剣。その名の由来は『大蛇を切り裂いた聖剣』の意……ですよ？」

「お……仰る通りです。なんだか私以上に詳しく……」

「メイドとして、当然の嗜みですので」

「アンタ、それさえ言ってくれば大丈夫って思っただけか？」

「滅相も無い。私は事実を申しているだけです」

「ホントかよ？」

いつかは誰かにツッコまれるとは思ってたけどね。

でももう、このセリフは私の決め台詞みたいになってるし。止められないんだよね。

「そーいや、あのガングニールの欠片を飲み込んだ子。大丈夫

だったのか?」

「病院に行つて、念の為にレントゲン等をやつて貰いましたが、何の異常も見られなかったようです」

「そっか……それならいいんだ。よかつたよ」

一安心している所で悪いが、実は一つだけ気掛かりな点がある。

実は、レントゲンで調べて貰つた時、彼女の体内の何処にもガングニールの欠片が見当たらなかつたのだ。

原作のように突き刺さつて体と一体化してしまつたのなら一応の納得も出来るが、今回は完全に口から飲み込んだ形となる。

それなら、絶対に胃の中に欠片がある筈にも関わらず、それが何処にも存在しなかつた。

幾らなんでもこれはおかしすぎる。これから先、何も起こらなければいいのだけれど……。

「にしても、格闘技でノイズを圧倒出来ちまうとはなく。なんか、アタシ等の立場が無くなつちまうな」

「そんな事は無いでしょう。貴女達には貴女達にしか出来ない事が必ずある。今もこれからも、それをしていけばいいだけの話では?」

「豪鬼さんの言う通りよ、奏。幾ら豪鬼さん達が凄いからって、私達のやるべき事が無くなつた訳じゃない」

「そう……だな。うん。ちよつち卑屈になつてたわ。ゴメン」

「お気になさらず。若い内には誰もが一度は経験する事ですから」

「若い内つて……そういうや、豪鬼つて何歳なんだ?」

「私の年齢……ですか……考えた事ありませんね」

「ええっ!?!」

公式では明らかになつてはないけど、見た目的に40代ぐらいつて噂されてた事があつたつけ。

でも、今の私はメイド豪鬼だからなあ。それには該当しないような気がする。

だとすれば、マジで私つて何歳なんだ?

バイトの面接の時は適当に書いて誤魔化したけど。

「昔は本当に修行、修行の毎日でしたから。自分の歳の事なんて考え

る暇もありませんでした」

「そうですか……豪鬼さんも私と同じで……」

おや？ なにやら翼さんが暗い雰囲気には？ 私、なんか地雷踏みま
した？

「ま、別に豪鬼が何歳でも関係無いか。重要なのは、これから一緒に戦
う仲間って事だろ」

「そう……だな。うん。奏の言う通りだ。歳なんて関係無い。豪鬼さん
が心強い仲間である事実は揺らがないのだから」

彼女……少し危ういですね。場に流される事に何の疑問も感じて
ない。

これは、どこかでどうにかする必要がありそうです。

「どうせなら、豪鬼に鍛えて貰うか？ なんせ、元は世界中を駆け巡っ
ていた格闘家なんだろ？」

「か……奏。幾らなんでも、それは少し凶々しい気がするんだけど……」

「別によろしいですよ？」

「え？」

「普段はバイトもありますから、今日のように暇な時限定となります
が。それでもよろしければ」

「ほ……本当にいいのですか!？」

「メイドに二言はありません」

「おおく！ 正直、ダメ元で言ってみただけど、意外となんとかなる
もんだな……」

「豪鬼さん程の格闘家から直々にご指導して頂けるとは……防人とし
ての血が騒ぐ！」

「それは関係ありますか？」

なんかとんでもない事になってしまったけど、これはこれで彼女達
と仲良くなる機会を得たと思えばいいか？

私にどこまで出来るかは疑問だけど。

「どうせなら、メイドとして翼の部屋も掃除して貰えば？」

「ちよ……奏っ!？」

「それはどういふ……?？」

「聞いてくれよ。翼つてさ、一人暮らししてる癖に生活能力が壊滅的なんだ。部屋なんかいつつも散らかりまくりで、緒川さんに掃除して貰ってるんだよ」

「ほう……？ それはそれは……見逃せませんね……」

「……豪鬼さん？ なんだか目が怖いですよ……？」

私も原作知識として、彼女の部屋が相当に汚いことは知ってはいたが、今の自分の耳でそんな事を直に言われてしまったら黙ってはられない。

私の中にあるメイド魂がメラメラと燃えがって業火となつていますよ……！

「翼さん……」

「は……はい……」

「明日……貴女の部屋へとお伺いします……いいですね？」

「いや……しかし……」

「い・い・で・す・ね？」

「はい……」

これでよし。

全く……共闘以前にメイドとしてやるべき事があつたようですね。

自身の部屋の環境を整える事と健康管理はイコールであると、ちゃんと認識しているんですか？

掃除と一緒にお説教もしなくてはいけませんかね？

「奏さんも御同行願いますか？ 私は彼女の部屋の場所を知らませんし、人数は一人でも多い方がいいので」

「わ……分かったよ……（こ……怖えく！ 気のせいかな、背中に『天』って文字が見えたような気がするし……）」

因みに、一時間後に歓迎会はお開きとなり、私は緒川さんが運転する車にて家の近くのスーパーまで送って貰った。

ナイスなタイミングでタイムセールが行われていたので、上手い具合に安く買う事が出来た。

メイド豪鬼 汚部屋を掃除する

私が二課に協力する事が確定した次の日。

チーフに頼んで少しでも早くバイトを上げらせて貰った私は、約束通りに奏さんに案内して貰って、翼さんが寝泊まりしている部屋へと案内して貰った。

「到着。ここだよ」

「ほうほう」

「あの……豪鬼さん」

「どうしました？」

完全に青ざめた顔でこつちを見てくる翼さん。

一体何をそんなに怖がっているのでしょうか？

「ほ……本当にするのですか？」

「当然です。メイドとして、これから共に戦う同志として、部屋が汚くなっている状況は決して見過ごせません」

「うぐ……！ そんな風に言われると、ぐうの音も出ない……」

「あははは！ 翼、ここは潔く諦めなつて。あたしも手伝ってやるからさ」

「奏……他人事だからって楽しんでない？」

「まさか。そんな事ないって」

いつ見ても、この二人は仲がいいのですね。

まるで、『あの二人』を見ているようです。

「ならよお……一番の部外者であるあたしはソツコーで帰ってもいいよなあ……？」

「ダメです」

「んだとゴラアツ!!」

紫な服を着たおかつぱへアーな女性が私の隣で喚き散らす。

今更、この程度ではビクともしないんですけど。

「んで、この人は誰？」

「私もずっと気になってた。豪鬼さんが連れてこられたのですか？」

「はい。彼女は『ハン・ジュリ』さんと言って、少し素行は悪いですが、

これでも立派なテコンドーの選手なのです。因みに韓国出身です」

「チツ……！　なんであたしがこんな目に……」

「運命だと思って諦めてください」

「ふざけんな!!」

本当に、何をそんなに怒っているのでしょうか？

全く訳が分かりません。

「テコンドー……」

「聞いた事あるような無いような……」

「まあ……日本ではあまり聞いた事ないだろうな」

「その……ジュリさんはどうしてここに？」

「ああ……それな。この野郎……あたしが次の試合に向けてトレーニングをしていた時にいきなりやって来てよ……」

・

・

・

・

・

「失礼します」

「んあ？　なんだあ？」

とか言いながらジムの入り口から入ってきたと思っただ瞬間……。

「一瞬千撃!!!」

「ぬあああああああああああああつ!!!」

天

「よいしょつと。では、私はこれにて」

「そうですか……仕方がありませんね。これだけは使いたくなかったのですが……」

前にスマホで撮ったいい写真が……あった。これだ。

「もしも掃除を手伝ってくれたら、この間ゲームセンターで撮影した『UFOキヤッチャーでベガちやまぬいぐるみをゲットして、それをギュツと抱きしめながら可愛らしく笑っているジュリさんの写真』の一般公開を阻止できるのですが……」

「あああああああああああああああ!!!」 なんつーもんを撮ってやる!!!」
「今すぐ消せえええええええええ!!!」

おやおや。面白いぐらいに顔を真っ赤にして取り乱すとは。

これまたレアな光景を見れましたね。

「そうですね。もしも、どこかの誰かさんが掃除を手伝ってくれたら、この写真も消えるかもしれないね」

「うぐぐ……わくったよ! 手伝えばいいんだろ! 手伝えば!!」

「おおう。手伝ってくれるのですね。流星はジュリさんです」

「この女……! いつか絶対に痛い目に遭わせてやる……!」

その日を楽しみに待っていますよ。ジュリさん。

「えぐい……」

「豪鬼さんとは、このような人物だったのか……」

「メイドは目的の為ならば手段を選ばないのです」

「お前は一度でいいから辞書でメイドって単語を調べてこい。そして、世界中のメイドに土下座して謝れ」

あらら。どこかで可愛いテコンドー使いの女の子が何か言ってますね。

「さて、これで全ての準備は整いました。後はもう乗り込むだけです」

「なんか、今から魔王の城に挑むみたいな言い方だな……」

「ある意味、翼の部屋は魔王の城に匹敵するかもな」

「今の私に味方はいないのか……」

翼さんがポケットから鍵を取り出して、部屋の鍵を開けてから扉を開ける。

ゆつくりと開かれた扉の先にあった光景とは……!

「……これはっ!?!」

私達の眼前に広がっていたのは、文字通りの汚い部屋と書いて『汚部屋』でした。

余りにも酷い光景なので、取り敢えずはここに書き出せるものだけをチヨイスしてからお伝えしようと思います。

「おいおい……どんだけゴミ袋を溜めてんだよ……」

「うわっ! この座布団から謎の液体が染み出したぞ!」

「痛っ!?! なんか踏んだ……って、なんでんな場所に電池が転がってんだ?」

「ほ……埃が山になってる……」

「お……おいっ!?! ここに蜘蛛の巣があるんだけどっ!?!」

「蚊取り線香が何個も置いてある……。これ、もしかして連鎖するように設置してあるのか?」

「洗濯物で山脈が出来てるぞ……」

まだまだ沢山ありますが、今の所はこんなもんでしょか。

しかし、これはまた酷過ぎますね……!」

「……豪鬼さん……?」

「はあ……。もう説教するのも馬鹿馬鹿しいです。兎にも角にも、まずはこの部屋を片付けましょう。全てはそれからです」

「おし! んじややるか! ……強敵だけど」

「これは……同じ女として普通にドン引きだぜ……」

「ぐはあっ!?!」

なにやら翼さんが血反吐を吐いてダメージを受けてますが、無視して掃除を始めましょう。

掃除の様子を詳細に書いていったらキリが無いので、ここは私達のセリフによるダイジェストでお送りします。

皆さんだつて、汚い物を見たくはないでしょう?

「あ。その前に1カメラさんにモザイク処理です。奏さん」

「はいよ。ペタペタつてな」

「私の部屋つてそんなに酷いのっ!?!」

「自覚無いのかよ……」

・
・
・
・
・
・

「まずは、こつちに燃えるごみを入れて、こつちの袋には燃えないごみをお願いします」

「了解だ！」

「はいよ」

「しよ…承知しました！」

「にしても、いつもこれだけの惨劇を緒川さんは一人でなんとかしてるのかよ…なんか普通にスゲーな。マジで尊敬するわ」

「なんだ、このアンティークなランプ…って、これキノコじゃねえかっ！　なんでラーメンのドンブリに発生してんだっ！？」

「あ…それはいつか何かに使えるかもと思って取っておいて…」

「没収!!」

「う…」

「こいつ…俗に言う『片付けられない女』って奴か。ズボラって言葉すら生温いな」

「キッチンも酷い有様だな…」

「おい、お前って料理は出来んのか？」

「い…一応…人並みには…」

「けど、翼の場合はそれでストップしてるんだよな。料理をした後がダメダメっていうか…」

「論外です!! いいですかっ!?　料理も遠足も同じように、下拵えから始まり、調理してからキッチンと片付けるまでが『料理』なのです!!

その一番肝心な部分を怠るとは言語道断!!　飯にも防人を名乗るのであれば、最後の最後までちゃんとしなさい!!」

「は…はい！ 申し訳ありませんでした!!」

「謝罪は後です！ まずはこのキッチンを綺麗に掃除しなさい！」
「承知!!」

「完全にマジモードになってやがる……」

「まだ短い付き合いのあたしにも分かる……。今のあの人には絶対に逆らっちゃいけないって……」

「同感。つーか、地味に用意いいよなアイツも。ちゃんと人数分のゴミ手袋とマスクを用意してたし」

「スカートの中から出したのには驚いたけど」

「……少しだけ見えてたしな」

「そこ！ 口ではなくて手を動かす!!」

「は…はいー!」

「いいですか？ 散らかった服は全てこの籠に入れてから洗濯機の近くに置いておいてください。後で私が洗いますから」

「分かったよ」

「ある意味、嫁としては完璧かもしれないな……」

「テレビは、この専用のウエットティッシュを使ってください。パソコンのディスプレイも同様です」

「こんなもんがあるんだな。知らなかった」

「この座布団はどうする？ さつきから謎の液体がポタポタと落ちてるけど」

「それもちゃんと洗いますから、服と一緒に置いておいてください」

「ほーい」

「きやあああつ!! ジ……Gが出たああつ!!」

「ど…どこだっ!? と…飛んでるううっ!?」

「ゴ…ゴキジェットはどこだっ!?!」

「そんな物は必要ありません」

「はっ!」

「滅殺!! ほらね?」

「す…すげ〜……!」

「ゴ…豪鬼さん！ お皿を洗ったのはいいのですが、なんでか棚に入

りません！」

「入れ方が悪いんです。ほら、こうして重ねれば……」

「おおお……！　このようなやり方があるとは……！」

「これ……マジで夜までに終わるのかよ……」

「わかんね……」

・
・
・
・
・
・
・

チーン……

そんな効果音が聞こえてきそうな程に、奏さんと翼さんとジユリさんは疲れ切っていました。

かなりの強行軍で頑張った結果、辛うじて今日中に掃除を終わらせることが出来ました。

「これが……本当に私の部屋なのか……？　この目で見ても信じられん……」

「頑張ったよなく……あたし達……」

「うん……間違いなく、今年で一番頑張った……」

ちよ……ちよつと？　奏さんとジユリさんの口から魂が抜けかけてるんですけど？

この二人、本当に大丈夫ですか？

「あはは……あたしも今度からは、もう少し本気で掃除しようかね……」

「アタシもだ……。じゃないと、世界一おっかないメイドがやって来るかもしれないしな……」

何か言いました？　私の悪口が聞こえたような気がしますが……空耳ですかね？

「本当にありがとうございます！ この風鳴翼、もう二度とあのよう
な失態を犯さず、この状態を維持出来るように誠心誠意、努めていき
たいと思います！」

「その意気です。私が教えた事を忘れてはいけませんよ？」

「はい！」

なんと言う事でしょう。

あの踏み場は愚か、映す光景すら無かった部屋が生まれ変わったか
のように綺麗になっているじゃありませんか。

木製のフローリングはピカピカに磨かれ、鏡のように顔が映りま
す。

キッチンもお風呂場もまるで新品のような美しさを取り戻し、埃で
外が見えなかつた窓ガラスもほら、今では綺麗な夜景を見せてくれて
います。

洗濯物は全て洗って、今は順番に乾燥機にかけて、乾いた物から畳
んでクローゼットに。

「久々にいい仕事をしました……感無量です……♡」

「すっげーいい笑顔……」

「あんなだけの激闘掃除の後にあんな笑顔を出せる女なんて、アイツぐらい
だろうな……」

「全くもってそう思うよ……」

こうして、前代未聞の大掃除を終えた私達は、深夜一歩手前ぐらい
の時刻にようやく解散出来たのでしたとき。

次の日、奏さんとジュリさんはお昼近くまで泥のように眠ってい
て、逆に翼さんは部屋が綺麗になったお蔭で元氣一杯だったとかなん
とか。

私？ 私は普通に朝の掃除とバイトに行きましたけど？

メイドたる者、この程度でダウンなんてしてられませんから。

メイド豪鬼 少女達に教える

二課の本部にある装者達が多用する専用のトレーニングルーム。今回は前にも約束していた、奏さんと翼さんに特訓を課そうと思えます。

そんな訳で、本日の私は珍しく、動きやすさ重視のジャージ姿となっております。

前に世界的にも有名な某衣服店にて購入してきた代物で、真っ黒で実に動きやすいです。

因みに、奏さんは赤いジャージを、翼さんは青いジャージを着用している。

二人共、自分のイメージカラーを意識して購入したんでしょうかね？

「流石は政府直轄の組織ですね。トレーニングルーム一つとっても素晴らしい設備です」

「で、豪鬼があたし達を鍛えてくれるのはいいけど、これから一体何をするんだ？」

「そうですね……」

実は事前に、弦十郎さんに頼み込んで彼女達の戦闘映像を見させて貰っている。

それにより、あくまで私の私見ではあるが、二人の問題点のような物が見えてきた。

その事を教えてから特訓するのもいいけど、その前にやるべき事がある。

何事にも順序という物が存在するのだ。

「まずはお二人の身体能力を計りましょうか」

「身体能力……ですか？」

「そうです。ギアを纏わない状態での基礎能力。それを知りたいのです。と言う訳で……」

二人から少し離れた場所で仁王立ちになる。

腕は後ろに回したままで、普通に見ればなんだこりやって感じだ

が、今はこれでいい。

「お二人共、私に掛かってきてください。勿論、ギアを纏わずに……ね。私を倒す……じゃ少しハードですから……そうです。私に触れられたら合格としましょう」

「触れるだけ？ それはちよつとあたし達を舐めてないかい？」

「いいえ。今はこれぐらいで丁度いいかと」

「言ってくれる……！」

「そこまで言うんなら……」

奏さんが腰を低くして、いつでも走れるような体勢になる。

翼さんも両手を広げて構えて、彼女の後に続く気が見え見えだ。

「遠慮無く行くぜ!!」

私に目掛けて突進してきた奏さん。

ふむ。中々に脚力はあるようですね。でも……。

「甘いですよ」

「んなっ!？」

ひよいつと横に避けてから、バランスを崩した奏さんの足に自分の足をひっかける。

それによって足が絡まった彼女は、派手に前からこけた。

「奏!!」

「くっそく……なんか普通に避けられちゃった……」

「思い切りの良さは及第点ですが、それだけでは駄目駄目ですよ」

「くっ……! 次は私が! 風鳴翼……いざ参る!!」

奏さんとは違って、翼さんは私の後ろに回り込むように走って来た。

さっきのやり取りで、正面から挑んでも敵わないとすぐに悟って違う手で来ようとするのは見事ですが、問題はどのように仕掛けるか……ですね。

「はっ!」

「おや」

私の背後に回り込んだと思いきや、壁を蹴って三角飛びをして再び正面に。

成る程。相手の視線を多方向に向かせて混乱させる作戦ですか。

そのアイデアはいいですが、それが通用するのは三流のストリートファイター程度ですね。

少なくとも、私には通用しない。

「取った!!」

「……と、いつから錯覚してました?」

「なにつ!?!」

私がやったのは実に簡単。

彼女の手が私に伸びた瞬間、翼さんの頭の上をバク宙しただけ。

まさか、自分の上を行かれるとは予想していなかったようで、面白いように驚いてから背後に回った私の方に振り向こうとするが、時既に遅し。

彼女がこつちを向いた時にはもう、私は彼女のおでこに目掛けてデコピンを放つ体勢になっていました。

「残念でした」

「あう!」

あちら。軽くしたつもりだったのに、翼さんが尻餅をついてしまった。

そんなに強かったかな?

「まさか……あそこまで身軽な動きをするとは……」

「まるで女版の緒川さんじゃねえか……」

「私は忍ではなくてメイドですけどね」

「今時のメイドはああも身軽なのかよ?」

「当たり前です。メイドに不可能はありませんから」

「それ、前にも聞いた気がします」

「そうですかね?」

「ある意味で予想通りでしたが、お二人共、私が考えた通りの動きしてましたね」

「そうなのか?」

「はい。まずは奏さん」

「おう」

何を思ったのか、急にその場で正座をした二人。

これじゃあ、まるで私が説教をしてるみたいじゃない。

「奏さんのギアは GANG ニールということ、その主武装は槍ですよね？」

「そうだな」

「厳密には、奏さんの使用する槍は普通の槍ではなくて『ランス』と呼ばれる部類に属しますが」

「へ？ それって何か違いでもあるのか？」

「大きく違います。通常、槍とは近接武器であるにも関わらず、その驚異的なまでの長射程により、近づいてきた相手を一方的に攻撃するのが主体となっているのです。それ故に、槍には先端にだけ刃が取り付けられている」

「よく漫画とかアニメ、時代劇とかに登場する槍がそうだよな。言われてみれば、確かにアタシが使ってる槍とは全く違うな」

「お分かり頂いて何よりです。奏さんが使う『ランス』は元来、馬上：すなわち、馬の上に乗って戦う騎兵たちが使用していた武器なんです」

「マジか。でもあたし、馬とか乗れないぞ？」

「その点のご心配なく。普通に歩兵も使っていた記録が残ってますから」

「そーなんだ。少しだけ安心」

前世にて無駄に溜め込んだ知識が、こんな形で役に立つ日が来るとは。

世の中、どこで何が必要になるか分からないもんだな。

「ランスとは他の槍とは違い、基本的な攻撃範囲は前方のみに限定され、その攻撃方法も『突き』が主になっています」

「そこら辺はあたしも理解出来るかな。なんかもう自然と突き攻撃ばっかりしてるし」

「ならば、ランス最大の攻撃とは何か分かりますか？」

「うーん………突き？」

「い……いや奏。幾らなんでもそれは……」

「正解です」

「やった！」

「うそ……」

「正確には、ランスを脇に抱えるように構え、そのまま騎乗している馬の脚力を最大限に利用した突撃戦法、俗に言う『ランスチャージ』と呼ばれる技です」

「馬ごと突撃かく。想像しただけでかなり強そうだな。んな事が出来れば、ノイズ共なんて一網打尽だ」

「弱点が無いわけじゃないですけどね。ランスチャージは非常に高い攻撃力を秘めていましたが、突撃と言う特性上、どうしても前方以外からの攻撃には弱いんです」

「左右や背後からは無防備な状態になってしまふ訳か……」

「その通り。だからこそ、ランス使いは必ず弱点をカバーしてくれる仲間と共に行動することが大前提となっているんです」

「それが私……」

「そうです」

武門の出なだけあって、この手に関する知識の吸収力は素晴らしい。

これなら、意外とスムーズに特訓は進むかもしれない。

「よって、奏さんの当面の課題は突進力と瞬発力の強化。それと、観察眼を鍛える事も大事ですね」

「観察眼？」

「ランス使いとは、無暗矢鱈と攻撃はせず、じつと攻撃に耐えながら相手の動きを見極め、一瞬の隙を狙って最大の一撃をお見舞いするのが本来の戦法なのです」

「一撃離脱ってやつか」

「力を溜めに溜めた渾身の一撃は、相手の防御なんて紙のように貫く程の威力を見せてくれるでしょう」

「一撃必殺か……！　そう言われると、なんだかやる気が沸いてくるな!!」

「その意気です。ランスを支える腕もそうですが、足腰を徹底的に鍛

えるだけでも、かなり違ってくると思いますよ」

「うっし！ 自分のやるべき事が分かれればこっちのもんだ！」

なんだかメラメラとやる気に満ちてますね。

これが若さでしょうか……。

「翼さんは奏さんとは逆に、主武装が刀剣という特徴を最大限に生かしたヒット&アウェイ戦法を身に着けられるようになればよろしいかと」

「ヒット&アウェイ……。つまり、一瞬でもその場には留まる事をせず、常に動き続けて敵を翻弄しつつ力を溜めている奏の露払いに徹しろと……?」

「それが最も理想ではありませんね。本当ならばここに恒常的に飛び道具を使える人がいれば盤石なのですが。無い物ねだりをしてても意味無いですし、今出来る事を頑張りましょう」

どうせ、後で嫌でも『遠距離主体の仲間』は加わるんだし。

「そんな訳で、翼さんの課題は基礎体力の大幅な向上と、奏さんと同じように脚力を鍛える事ですね」

「了解しました。豪鬼さん」

少し堅物っぽく感じてはいるが、それでも素直な所は非常に好感が持てる。

これはなんとも教え甲斐がありそうだ。

「どうも、お二人はギアの性能に頼りつきりになっている節が見受けられます。その場合、万が一にでも戦場にてギアが強制解除された時に何も出来なくなってしまうです」

「了子さんのギアに限ってそんな事は無いって思うけどな」

「それでも……です。念には念を入れておいて損は無いですし、何事にも絶対はありません」

「うむ……。豪鬼さんのお言葉は不思議と説得力があるな……」

一応、体は超一級の格闘家だしね。

「それに、生身の状態でギアを纏った時のような動きが可能になれば、実際にギアを装備した時はどうなるか。それは推して知るべし……です」

「ゴ…ゴクリ…」

「今はまだ想像出来ないかもしれませんが、それでもやる価値は大いにあります」

「おうー」

「はいー」

「いい返事です。では、今日はもう少しだけ基礎トレをしてから終わりますようか」

「え？ それだけか？」

「無理をしては意味がありません。適度な運動に適度な食事、適度な睡眠こそが最も大切なのです」

「豪鬼さんの仰る通りよ奏。特訓で体を壊しても意味無いでしょう？」

「それもそつか。んじゃ、とつとと始めようぜ」

どうも奏さんは焦っているようにも見受けられる。

彼女がノイズと戦う理由は知っているけど、それだけに捕らわれるような事だけにはならないで欲しいと願う。

こればかりは彼女の心の問題だから、私からは何にも言えないけど。

・
・
・
・
・
・

風鳴本邸

その庭先にて、嘗ての二課の司令官であり、弦十郎の父であると同時に翼の祖父でもある男、風鳴訃堂が静かに佇んでいた。

「…いつまでそこにいるつもりだ。いい加減に出て来ぬか」

「けでもあるまい？」

「……どうやら、儂の不肖の妹がお前の息子の所で世話になっておるようだな。兄として貴様に挨拶でもしておこうと思ってるな」

「報告ならば聞いている。確か、豪鬼……と言ったか。あの『殺意の波動』を完全に克服してみせた唯一無二の人間らしいな」

「格闘家としては紛れもない天才よ。少々、性格に難はあるがの」

「ふっ……兄にでも似たのであろうよ」

「抜かせ。あそこには貴様の孫もおるそうではないか」

「不肖の孫ではあるがな」

「……ここでまた場が静かになる。」

別に話が詰まった訳ではない。かといって一色触発な感じになつた訳でもない。

「因果よな……。儂の妹と貴様の子供が同じ場所に立つとは……」

「運命……の一言では片付けられぬ事柄ではあるな」

「何かの前兆か、あるいは……」

そう呟いてから、剛拳は背を向けて歩き出す。

「もう行くのか？」

「おう。いつまでもここに居る訳にもゆくまい」

軽々と屋敷の屋根に飛び乗ると、最後にこう言い残してから姿を消した。

「儂も……隠居をしている場合ではないかもな……」

剛拳と訃堂の邂逅。

これが何を意味するのか。それはまだ誰にも分からない。

災いの前触れなのか。希望の先触れなのか。

メイド豪鬼の日常 その2

私が毎日の日課である朝の道路掃除を行っていると、これまたすっかり見慣れた顔である二人組が。

「おはようございます、豪鬼さん」

「おはようございます！」

「おはようございます、響さん。未来さん。響さんは今日も朝からお元気ですね」

「えへへ……それだけが取り柄ですから」

まあ、変に暗い顔を見せられるよりはずっとマシか。

「そうだ。お二人にお聞きしたい事があったんです」

「なんですか？」

「あの例のコンサートの後から、お二人の周りで何か慌ただしい事などはありませんでしたか？」

「慌ただしいって……」

「例えばどんな事ですか？」

「それはですね……」

うーん……ここは素直に直球で言うべきか？

どうしても、原作の前日譚のように、響さんがイジメに遭っていないか知りたかったのですが……。

「あまり、このような言い方は好きではないのですが……イジメとかです」

「イジメ……そんなの無いよね？」

「うん。少なくとも、私達が通っている学校では、そんな話は全く聞いた事は無いですし、万が一にでもそんな事があれば、間違いなく噂になっってますから」

「そうですか……」

あのコンサートにて犠牲者を一人も出さなかった事が功を奏したのだろうか？

明らかな原作改変ではあるが、誰一人として傷つかない結末ならば問題は無いだろう。

「でも、なんでいきなりそんな事を聞くんですか？」

「いえ。なんとなくです。気にしないでください」

「は〜い」

うん。素直でよろしい。

勘の鋭い未来さんはともかく、響さんは誰かを疑う事を知らないからなあ。

適当な誤魔化しだったけど大丈夫……だよな？

「そうだ。実は私からも豪鬼さんに少し聞きたい事があつたんですよ」

「なんですか？」

「豪鬼さん、ここ最近になってなんだか前以上に忙しそうにしてませんか？」

なんと……いつも通りを装っていたつもりなのに、未来さんにはバレていたとは。

やっぱり彼女は侮れませんね。

「未来さんには敵いませんね」

「それじゃあ……」

「はい。最近になって知り合った人たちから、少し自分達の仕事を手伝ってくれないかと頼まれたもので、手を貸す事にしたんです」

「そうだったんですか……」

「本当は自分達の職場に就職してくれるとありがたいと言われたんですが、流石にそれはお断りしました。今のバイト先にも愛着はありませんし、あそこを離れるような事は可能な限りしたくは無かつたんです」

「豪鬼さんらしいです」

「恐縮です」

あ。思わず未来さんとの話に盛り上がり過ぎて、響さんを空気にしてしまった。

「あの……もしかして、その仕事の手伝いって……ツヴァイウイング関係ですか!？」

うぐ……鋭い……。

響さんは天然だけど、時々こうして直観的な物を働かせて正解をい
い当ててるから怖い。

「……なんでそう思ったんですか？」

「これです！」

目を輝かせながら私に自分のスマホの画面を見せてくる。

そこには、この前のコンサートにて私が乱入した直後の写真と、そ
れに対するコメントが記載されていた。

「ツヴァイウイングのコンサートに謎の超美人なメイドさんが乱入
!？」

「いや、全く謎じゃねえし。知らないのか？」

「あの人、最近になって何かと話題になってるメイド喫茶『地獄歌』の
看板メイドの『ウキちゃん』だぞ」

「マジでっ!？」

「ぶりっ子が多くなったメイド喫茶業界にて、大人な年上お姉さん系
メイドとして一世を風靡している有名人だ」

「あの方は、俺達を本当の意味で夢の世界へといざなってくれる……
世の男達全員の『お姉さん』だ！」

「実は俺も大ファンだったり」

「でも、なんでそんな有名な人がツヴァイウイングのコンサートにサブ
ライズとして出てくるんだよ？」

「さあ？ もしかして、噂で聞いた通り、『ツヴァイウイングの三人目』
として電撃デビューとか？」

「いやいや。それは無いだろ。確かにウキちゃんの魅力は俺も認める
けど、いきなり過ぎるだろ」

「もしや、地獄歌とツヴァイウイングのコラボが近い内に関催される
とか？」

「可能性としては、それが一番現実的だな」

「ツヴァイウイングの二人が地獄歌で一日限定でメイドさんをするとか？」

「もしもそうになったら、俺は何時間掛かろうとも行列に並んで店に行
くねー」

【俺も。即行で予約券を買いに行くわ】

【俺……ツヴァイウイングとウキちゃんの三人にご奉仕されたら、実家に帰って店を継ぐんだ……】

【死亡フラグ乙】

……なんじゃこりや。

しかも、コメントはこれだけに収まらず、まだ下の方に延々と続いていく。

ド派手にし過ぎたとは思ってたけど、よもやここまで凄い事になっていたとは……。

「豪鬼さんの事だから……翼さんと奏さんの身のお世話とか？」

「想像出来るような……出来ないような？」

ある意味で大正解ですよ！ 響さくん！

もうホントこの子、どこまでが天然で、どこまでがマジなのか分からない！

「でも、これってどういう事なんですか？ なんでコンサートに豪鬼さんが？」

「それは……」

ヤバい……全くいい言い訳が思いつかない！

まさか、こんな形でピンチを迎えるとは！

「あ〜！ 未来！ 時間時間！」

「やば……遅刻しちゃう！ それじゃあ豪鬼さん、いつてきます！」

「いつてきます〜！」

「いつてらっしやいませ」

た……助かったあ……。

なんとかポーカーフェイスは貫けたけど、今後はそうはいかないな……。

後でちゃんとした言い訳を考えておかないと。

今後も似たような事が起きないとは限らないし。

全く……家事全般と戦闘以外に関してはへボへボ星人ですな……トホホ。

・
・
・
・
・
・

バイト終了後に二課の本部まで行き、私の新たな日常と化した奏さんと翼さんのトレーニングのコーチ。

今日も今日とて、二人は汗水流して頑張っています。

「奏さん！ もっと鋭く真っ直ぐに！ 己自身を槍としますので！」
「おう！」

奏さんのトレーニングは前と変わらず、私との追いかけっこ。といつても、実際にやってる事は相当にハード。

私は全力で回避に徹しているから、生半可な事じゃ触れない。

いずれは私に阿修羅閃空ぐらいは使わせるようになってほしいと願う。

「翼さん！ スピードが落ちてますよ！ 線を超えるのではなく、踏む事を意識するように！」

「は…はい！」

一方の翼さんは、反復横跳びをしている。

足腰を鍛えつつも敏捷性を鍛えるには、これが一番だと判断したからだ。

勿論、ずっとこれだけをさせ続けるつもりはない。

もう少ししたら別のトレーニングに移行するつもりだ。

装者になる為に様々な訓練を受けてきたのは分かるが、それでもまだ足りないものが多いのがすぐに判明した。

自分の武器の特性を知る事。戦場における己に最も適した役目と戦闘方法。

もつと細かい事を言っていけばキリがないが、一先ずはそれは置いておく。

最強の殻を被っただけの私にも分かったのだから、弦十郎さんや緒川さんとかにもとつくにばれていたに違いない。

それを言えなかったのは、彼等自身の立場があるが故か。

彼女達にとって、私のような『生身でノイズを打倒できる圧倒的な力を持つ女性』という存在は別の意味で貴重なのかもしれない。

そうして、小休止を挟みつつ二時間ぐらいトレーニングを続けた。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

「ハア……ハア……ハア……」

「お疲れ様でした。ドリンクです」

「あ……ありがとうございます……」

「さんきゅー……」

息も絶え絶えになりながら、二人は壁に寄りかかりながら座って体を休めている。

はしたなく足を広げてはいるが、今だけは許してあげよう。

「反復横跳びなんて学校のスポーツテストでするぐらいだったけど……本格的に行うとここまで疲れるとは思わなかった……」

「こっちもだよ……。普通の追いかけっこだと思って舐めてたら駄目だわこりや……。翼にアドバイスを言いながらも、アタシの方にも意識を向けて回避しまくるって……。凄すぎだろ……」

「世にいる『格闘家』の人達は、皆が豪鬼さんと同じレベルの領域にいるのよね……」

「そう考えるとさ……今までずっとシンフォギアに頼りつきりだった

自分が恥ずかしくなってくるよな……」

「うん……。本当に世の中は広い……。豪鬼さんが世界に旅立ちたくなる気持ちも分かるかも……」

「全くだよ……」

「どうやら、トレーニングを通じて凶らずも彼女達の意識改革も出てるみたい。」

「これはいい意味で予想外の効果が出たかも。」

「はあくい♡ トレーニング頑張ってる〜?」

「あ……。櫻井女史……」

「おうっす……」

「あらら。これは相当に絞られてるみたいね、豪鬼ちゃん?」

「まだまだ、これからですけどね」

「私達が休憩をしていると、了子さんがいつものテンションでやって来た。」

「が、流石にクタクタになっている二人を見て空気を読んだのか、少しだけ大人しくなった。あくまで少しだけ。」

「ところで、何か御用ですか?」

「ちよつとね。そろそろ月一のメデイカルチェックでもやろうかと思ってるんだけど……。大丈夫?」

「なんとか……」

「少しでも疲れが取れれば大丈夫です」

「うくん……。出来れば万全の状態の時にいいんだけど、単純に疲れているだけなら問題無いかしらね? こっちも色々準備が必要だし。」

「そうだ、豪鬼ちゃん。この後も時間って大丈夫?」

「私ですか? もうバイトは終わってますから、時間的には余裕がありますか……」

「そう! それなら、ついでに豪鬼ちゃんもメデイカルチェックを受けていけない?」

「私が……。ですか? でも、私は装者ではありませんが……?」

「あく……。メデイカルチェックと言っても、そこまで仰々しいものじゃないのよ。文字通りの単純な健康診断で、そのついでに装者の子

達だけのチェックしなくちゃいけない項目があるってだけで。実際、他のメンバーも定期的に診断は受けてるし」

これが本当に単純な善意から出ているのならば、私は二つ返事でOKをしていただろう。

だが、私の目の前にいるのは、あの『櫻井了子』なのだ。

警戒に警戒を重ねても損は無いと思うが、だからと言ってここで変に断れば、それはそれで怪しまれそうな気がする。

何をするのかは分からないが、二課の本部の中ならば、彼女もそう簡単に変な事は出来ないか……？

「では、お言葉に甘えさせて頂きます」

「そうこなくっちゃ！ んじゃ、一時間後にメディカルルームに来て頂戴」

言う事だけを言っただけから、彼女はそそくさとトレーニングルームを出ていった。

「メディカルチェックか……もうそんな時期か」

「別に気にするような事は無いけど、それでもなんでか緊張してしまふのよね」

「健康診断なんて、往々にしてそんなものです。規則正しい生活とバランスの良い食生活をしていけば、何も恐れる必要はありません」

「言いたい事は分かるんだけどな……」

「それが実際に実行出来れば苦労はしません……」

そんなに難しい事なのでしょうか？

私なんて普通に毎日やってるんですけど。

(つーか……)

(私達以上に動いているにも関わらず……)

(息一つ乱れてない、この人が普通に凄すぎる……)

あら。よく見たらトレーニングルームの床が二人の落とした汗だらけに。

これは後でちゃんと拭いていかないといけませんね。

・
・
・
・
・
・
・

転生してから初めての健康診断。

それがまさか、二課の本部のメディカルルームになろうとは、誰が想像しただろうか。

少なくとも、私は想像もしていなかった。

まずは私の前に奏さんが行い、その後に翼さん。最後に私って流れになっっている

どんな事をするのかと内心ドキドキしていると、本当に私が知っている通りの健康診断そのものだった。

最新の機器を使っはいるが、特に怪しい所は見受けられない。

「うん。健康状態は問題無し。後は適合係数だけね」

「適合係数？」

「そ。簡単に言っちゃえば、シンフォギアと装者との相性の良さを表す数値の事よ。これが高ければ高い程、ギアのポテンシャルを高く発揮出来るの」

「成る程」

「ちよつとした裏技で、低い係数を底上げする薬なんかもあつたりするんだけどね」

「了子さん」

「あらら。ごめんなさいね。すぐに始めるわ」

あまり知られたくない事なのか、珍しく奏さんが真顔になつて急かした。

その理由は知ってるんだけど、ここでは知らない振りを通そう。

人間ドッグみたいな装置に体ごと入って検査をしていく奏さん。

何が仰々しいものじゃないだ。立派に仰々しいじゃないか。

検査自体はすぐに終了したが、その結果を見て了子さんが珍しく目を丸くして驚いていた。

「……あれ？」

「どうしたんだ了子さん？」

「いやね……その……奏ちゃんの適合係数が僅かではあるけど、確実に上がってるのよね……」

「なんだってっ!？」

お……おう？ いきなり大声を出してどうした？

そこまで驚くような事なのか？

「これが前回の結果。んで、こっちが今回の結果」

「本当だ……少しだけだけど、確かに数値が上がってる……」

「奏の数値が上がってる……そんな事が……」

「あの……適合数値が上がる事は、それ程までに珍しいのですか？」

純粋な疑問として聞いてみたが、翼さんと奏さんは凄い勢いで頭を縦に振り、了子さんも半ば信じられない様子で頷いた。

「一応ね、理論上は自然と上がる事もあるのよ。適合係数なんていつでも、所詮は人間のステータスの一部なんだし。でも、だからと言ってこれは余りにもいきなり過ぎるのよね。なんでかしら？ 奏ちゃん、何か心当たりとかある？」

「心当たりって言われてもなく……あ」

「あるの？」

「いや……でも、これって心当たりって言うっていいのかな？」

「なんでもいいから、兎に角言ってみて」

「分かったよ。豪鬼とトレーニングをするようになってからさ、昔とは違って凄く良い感じなんだよ」

「良い感じ？」

「そう。朝もスッキリと起きられるし、食欲は前にも増して増えだし、でも全く体重とかは増えないんだよな。気のせいか、肌艶も良くなっただよな感じもするし」

「要は……規則正しい生活を始めて前以上の健康体になったって事？」

「かもしれない」

ちやんと私の言った事をきちんと守って生活をしていたのですね。道理で、最初に会った時以上に元気が有り余っているように見えた筈だ。

「もしかして……翼ちゃんも似たような感じだったり？」

「そうですね。豪鬼さんのトレーニングを受けてから、夜はぐっすりと熟睡が出来るようになり、どれだけ疲れていても次の日には確実に疲労が取れています。体もなんだか軽くなったような気がしますし」「つ……翼ちゃんも計って見ましょー！」

なんだか慌てた様子で翼さんの検査も行った了子さん。

その結果は……。

「翼ちゃんも数値が上がってる……」

「やったじゃんか翼！」

「うんー！」

矢張り、健康こそが何にも勝る特效薬だったのでですね。

『貧乏よりも健康。生きてさえいれば明日は来る』とはよく言ったもんです。

「信じられない……規則正しい生活を送るだけで適合係数上がるなんて……でも待てよ？ お世辞にも装者となった以上はノイズとの戦いが強いられるから不規則な生活になるのは必然。だからこそ、そこで敢えて健康的な生活を送る事で体の本来のポテンシャルが発揮されて……」

なにやらブツブツと独り言が始まって、了さんが科学者モードに入ってしまった。

こうなるともう、私達の話なんて耳にも入らない。

「どうしましょうか？」

「ほっとけばいいんじゃないか？ すぐに元に戻るさ」

「そうですね。櫻井女史がこうなる事は今に始まった事じゃないですし」

「そうなんですか……」

科学者って皆がこうなんだろうか？

こればかりは私には全く分からない感覚だ。

余談だが、彼女が我に返った後で行われた私のメデイカルチェックも全く問題無く、私が何処に出しても恥ずかしくない健康優良児であることが判明した。

流石に二人の目の前で『殺意の波動』について調べようとは思わなかったのか、その事については全く触れられなかった。

それはそれでいいのだけれど、だからこそ先の事に少しだけ不安を感じてしまった。

メイド豪鬼 奉仕をする

本日の特訓はお休みして、バイト後に二課の本部に赴いてからのトイレ掃除を行った。

私に手に掛かれれば、どんなに汚くなったトイレでも新品同様にピツカピカになって、まるで鏡のようになる。

実際、掃除が終わった後の便器には私の顔が綺麗に反射していた。

え？ 女子トイレだけを掃除したのかですって？

何を仰る読者さん。ちゃんと男子トイレも掃除しましたよ。

掃除をするのに性別なんて関係ありませんから。

「我ながら見事な仕事をしました」

掃除道具を戻してから手を洗い、袖で自分の汗を拭ってから廊下に出る。

そこでふと、ある事を思い付いた。

(司令室に行く前に、給湯室で弦十郎さんにコーヒーでも淹れてあげましょうか)

ここにはコーヒーを淹れてくるような甲斐甲斐しい女性はいないようですし。

私は一肌脱ぐのも偶にはいいでしょう。

因みに、翼さんと奏さんは今日はツヴァイウイングのお仕事で不在。

だから、今日の特訓は中止になったのだ。

確かに体を鍛え、技術を磨くのは大切だけど、それは決して仕事を蔑にしている理由にはなり得ない。

彼女達には仕事を優先的に行って貰うように最初から言い聞かせてある。

「……そう言えば、ここの給湯室にコーヒーなんてありましたっけ？」
いつも、何かにつけて了子さんがコーヒーをよく飲んでいる姿を目撃しているから、多分あると思うけど……。

もしもなかったら、代わりに他のお茶でも淹れてあげようか。

・
・
・
・
・
・
・

「失礼します」

コーヒを淹れた私は、それを持って司令室へと向かった。

辛うじて給湯室にコーヒはありはしたが、とても少なくなっていて、なんとか一杯淹れるのがやっとだった。

本当はオペレーターの人達にも淹れてあげようと思ったが、無いのであれば仕方がない。

「まだ見つからないか……」

司令室に入ると、弦十郎さんがいつも以上に渋い顔をしながらモニターと睨めっこしていた。

なんな顔をしていたら、小学生の子供とかは泣いて逃げ出しそうだ。

「何が『まだ見つからない』のですか？」

「おっと……豪鬼くんか。掃除はもう終わったのか？」

「はい。私の持てるメイド技術を総動員して、この本部のトイレを新品同様……いえ、それ以上に磨き上げました」

「そ……そうか……いつも済まないな」

「いつも言いますが、気にしないでください。私が好きでやっている事なので」

「そうかもしれないが、それでも俺達は非常に助かっている。だから、俺も好きに礼を言わせて貰うのさ」

「そうですか。給湯室でコーヒを淹れてきました。よかったらどうぞ」

「おお……こいつは有難い」

全く……こんな図体をしてると言っても、一人で色々を抱え込んでいい理由にはならないでしょうに。

「あの二人……なんだか夫婦みたいな会話してるよな……」

「案外、付き合ってみたらナイスなカップルになったりして」

「そのオペレーター二人。ちゃんと聞こえてますからね。」

「で、何を探していたんですか？」

「そうだな……豪鬼くんにも知る権利ぐらいはあるか……」

大方の予想は出来るが、ここは黙って話を聞く事にしよう。

それが出来るメイドというものだ。

「君が介入して事なきを得たライブには、実は別の目的があったんだ」

「それは？」

「完全聖遺物『ネフシユタンの鎧』の起動実験よ♡」

「了子さん」

ここでタイミングを見計らったかのように了子さんのご登場。

にっこりと笑顔を浮かべてはいるが、どうもこの笑顔は信用に欠ける。

だから、彼女の前では常に油断をしないように心掛けている。

「完全聖遺物とは、確か通常の聖遺物とは違い、文字通り『完全な状態』で発見された聖遺物の事ですよね？」

「その通り。完全聖遺物はガングニールや天羽々斬のようにシンフォギアへと再構成しなくても、素の状態で十全の力を発揮出来る代物。でも、その起動には莫大なフォニックゲインが必要とされていたのだから……」

「ライブという形式で、コンサートホールに集まった観客の歓声とツヴァイウィングの歌を共鳴、相乗効果でフォニックゲインを集め、それを利用してネフシユタンを起動させようとした……」

「だが、結果は君も知つての通りだ……」

「突如として出現したノイズによりライブは一時的に中断された。まさか、探している物と言うのは……」

「ノイズ出現の最中、混乱に乗じて保管庫に賊が侵入したらしくてな、我々は殆ど何も出来ないまま、ネフシユタンを奪われてしまった」

弦十朗さんはとても悲痛な顔をして歯を食いしばっていた。

被害者が出なかったとはいえ、絶対に盗まれてはいけない物が盗まれてしまったのだから、彼の苦悩は想像に難くない。

「だから『まだ見つからない』ですか」

「実行犯が誰なのか。どうやって盗んだのか。何一つとして分からないのが実状なのさ。我ながら情けない限りだ……」

「あまりぐ自分を責めるのは精神衛生上、よくありませんよ。お気持ちちは理解出来る……なんて安易な事は言いませんが、だからと言って自分を追い詰めては意味がありません」

「そう……だな。根を詰め過ぎてもいい結果は期待出来ない……か」

「そうです。時にはリラックスして心と体を落ち着けるのも大切です」

「全くだ。ちゃんと心得ていたつもりだったんだがな……」

「過ちを気に病む必要はありません。ただ認めて、次の糧にすればいいのです。それが私達『大人』の特権なのですから」

「ははは……掃除の事といい、君には本当に敵わないな」

あ、笑った。少しだけ肩の力が抜けたのかな？

「……………」

「どうしました？ 了子さん」

「もしかして……弦十朗さんと豪鬼ちゃんって付き合ってる？」

「なんでそうなる（んですか）？」

「いやだって……二人の会話、まるで長年連れ添った夫婦みたいだったんだもん」

夫婦って……彼にも相手を選ぶ権利ぐらいあるだろうに。

私のように格闘技とメイドしか取り柄が無い転生者な人物を娶るとか、普通に有り得ないでしょうに。

私自身、自分が誰かと付き合って結婚するなんて想像も出来ないし。するつもりもないし。

「それでしょうか？」

「俺に聞かれてもよく分からん」

でしようね。

「だが、豪鬼くんのような嫁を貰った男は幸せ者だろうな。家事全般をそつなくこなすばかりか、厳しくも優しい面を持つている。奏や翼ともすぐに仲良くなってみせたしな。妻としては理想的だろう」

「それを仰るなら、弦十朗さんのような方と結婚できた女性こそ幸せでしょう。自分の仕事に責任感を持ち、腕っぷしも申し分なし。他者を思いやる優しさもある。貴方こそが夫として理想的ではないかと思えます」

「いやいや。豪鬼くんこそ」

「何を仰います。弦十朗さんこそ」

むう……中々に引かないな。

実はこの人、頑固な一面があると見た。

ん？ さつきから周囲の視線がこつちに注目してるような気が……。

((もうこいつら、マジで結婚しろよ!!!))

いつもは飄々としていた了子さんでさえ、なんか凄い目をしてるし。

私達……なんかした？ マジで身に覚えが無いんですけど。

「豪鬼ちゃん。弦十朗くん。仲人は私に任せて！」

「何の話をしてる(んですか)？」

「そうだ。式では翼ちゃんと奏ちゃんに祝いの歌でも歌って貰いましょうか」

「なんか変な方向に話が行ってるんですけど」

「俺達は何の話をしていたんだっけな……」

完全に話が横道にずれてるし。

集団で話をしていたら、こんな事は往々にしてよくある事だけど、ここまでずれる事ってあるか？

なんでいつの間、完全聖遺物の話から結婚の話になるんだよ。

「こ……これはっ！」

「どうした？」

「ノイズが出現しました!!」

どうやら、お気楽な話はここまでみたいですね。

最近は大人しかっただけに、どうにも不可解な感じですが、今はそれを議論している暇はない。

「出現地帯は既に特定済み！　どうやら、周囲に目立った建築物などが無い場所のようです！」

「不幸中の幸いか……！　人的被害が出ないに越したことはないからな」

「装者二名にも連絡済みです！　しかし、現在位置から少し離れたた為、緒川さんが車にて付近まで運んでいるようです！」

「アイツの運転なら、多少の無茶は出来るだろうが……最悪、明日には廃車が確定だな」

現代の忍は一体どんな運転をするんですか。

「弦十朗さん。私も行きます」

「……頼めるか？」

「勿論です。こんな時の為に私がいるんですから」

「……すまない」

「言いつこなしですよ。では、行ってまいります」

軽くお辞儀をしてから司令室から出ようとする、そこで了子さんに止められた。

「ちよい待ち。ここから現場まではかなり距離が離れてるわよ。どうやって行くつもり？」

「ご心配なく。こんな事もあるかと、ここにはバイクで通ってますから」

「バイクだとおっ!？」

ポケットから免許証を出して証拠を見せる。

「いつの間……」

「ここに来る前からです。因みに、バイクは前にベガからシャドルー製の物を無償で譲って貰いました。電気で動くエコなバイクです」

「あそこの車両……無駄に性能がいいって聞くわよね……」

「ですので、移動手段に関してはご心配なく」

「そ……そうか」

「では、改めて行ってまいります」

さてと、緊急事態なので少しぐらいは飛ばしても大丈夫でしょう。後でちゃんと充電しないといけないのがネックですが、四の五の言っても仕方がありません。

今は兎に角、メイドとして走るのみ!!

「メイドって……」

「本当になんでもありなのね……」

オペレーターのお二人さん。

去り際に呟いた言葉はちゃんと聞こえていますからね。

メイドの耳は三千里なのです。

メイド豪鬼 再会する

二課本部の司令室の大型モニターには、バイクに跨った豪鬼が高速道路をとてつもない速度で疾走する姿が映し出されていた。

「本当にバイクを持ってたんだ……」

「あのバイク……通常では有り得ないような速度で爆走してるんですけど……」

「どう考えても、あれって軽く200キロは出てるわよね……」

ノイズ出現による警報が出ているため、道路自体は車が全て止まっ
ていて閑散としている。だからだろうか、道路交通法なんて知った事
かと言わんばかりのスピードを出している。

恐らく、暴走族でもここまでの速度を出したりはしないだろう。

「シャドルー製の車などはいいい性能を誇ると聞いた事はあるが……」

「バイクも例外じゃなかったって事ね」

「というか、あの人、よくあんなバイクを簡単そうに運転出来ますよ
ね」

「メイドだからな（ね）」

「二人共、豪鬼さんに影響受けてませんか？」

ジト目で弦十郎と了子を見ながらも、しっかりとオペレーターとし
ての仕事はきつちとこなす二人。

なんだかんだと言っても、この二人も立派な二課の一員なのだ。

「あっ!? し…司令! 大変です!!」

「どうした!」

「先程ノイズが出現した場所とは別の場所にもノイズの反応が!!」

「なんだとおっ!?!」

まさかの二か所同時出現。

流石の弦十郎も、この状況は想定していなかったのか、大きな声を
上げた。

「どうするの?」

「今向かっている豪鬼くんは、今しがた出現した方へと向かって貰う
のが妥当だろうが……それだと彼女に負担が掛かってしまう……」

幾ら豪鬼が強いとはいえ、一人ではどうしても限界が来る。

その事を考えると、どうしても彼女を一人で向かわせることを躊躇ってしまふ。

だが、そんな彼の迷いを払拭するかのように、走行中の豪鬼から通信が来た。

『弦十郎さん。聞こえますか?』

「豪鬼くんか!？」

『はい。話はお聞きしました。私がさつき出た方に向かいますので、奏さんと翼さんを最初の方に向かわせてください』

「しかし……それでは君が……!」

『ご心配なく。この程度でどうにかなるような、軟な鍛え方はしていません。それに、貴方も知っているでしょう? メイドに不可能は無いですよ』

「君という奴は……どこまで……」

『それに、人員については問題無いと思います』

「なに?」

『毎度のように『彼女達』も来るでしょうし』

「シヤドルー総帥『ベガ』と、ハワード・コネクション総帥『ギース・ハワード』か」

『そうです。こつちから何か言わなくても絶対に来ると思いますよ』

「……分かった。では、君は第二波の方へと向かってくれ!」

『了解です。藤堯さん、オペレーターをお願いできますか?』

「藤堯!!」

「分かりました! 任せてください!!」

通信が切れ、司令室に再び緊迫した空気が流れる中、一人だけ鋭い目をしている人物が。

(なにやら予想外の事が起きてしまったが、いい機会だ。正体不明の力である『殺意の波動』とやらの戦いを存分に見させて貰おうか)

.....

・
・
・

通信越しに藤堯さんの声を聞きながら、私はある予感を感じていた。

(なんだろう……さつきからずっと不思議な感覚がしている。なんて言っているか分からないけど、まるで久方振りに家族に会ったかのような、懐かしくも暖かい感じ……)

そこまで考えて、私はある考えに至った。

(まさか……『あの人』がこの街に来ているの……!?)

確証はない。断言も出来ない。それでも、もしもそうだとしたら……。

『豪鬼さん！ 次で高速を降りて、そこから右に曲がってください！』
「分かりました。……藤堯さん、奏さんと翼さんに伝言をお願いしますか？」

『なんですか？』

『頑張ってください』……と

『それだけですか？』

「はい。それだけで十分です」

『了解です。確かに伝えます』

「ありがとうございます」

そんな話をしている間に、私は高速道路を降りてから、言われた通りの方向へと向かった。

翼さん……奏さん。私の教えを決して忘れなければ、貴女達は絶対に負けません。

だから……お二人の健闘を祈ります。

・
・
・

・
・
・
・
・

一方その頃。

緒川の車にて現場へと急行している途中の翼と奏に、豪鬼へのオペレートが終了した藤堯から通信が来た。

『……とのことです。確かに伝えましたからね』

「頑張れ……か」

「はは……なんとも豪鬼らしいや……」

本当にシンプルな一言ではあったが、その中に秘められた意味を正しく理解したのか、なんだか急に照れくさくなる二人。

「にしても、まさか別の場所にもノイズが出現するとは……」

「未だにノイズの出現パターンは完全に解明されてませんからね。このような事も十分に有り得るでしょう」

「だな。少し前までのあたし達なら、この段階で狼狽えまくりだっただろうけど……」

「今は豪鬼さんという頼りになる仲間がいる」

「ああ！ ワールドクラスの格闘家に期待されたんだ！ ここで体張らなきゃ女が廃るってもんだ！」

「そうね！」

「到着です!!」

緒川が街外れの森林地帯に車をドリフトをさせながら停車させ、すぐに装者の二人が飛び出す。

「緒川さんはここで待機を！ 奏!!」

「おう！ 今日是最初から飛ばしていくぜ!!」

二人は、首から下げたペンダントを握りしめて静かに聖詠する。

「Imyuteus amenohabakiritron」

「Croizalronzell Gungnir zizzl」

二人の体が光に包まれ、次の瞬間には青と赤を基調とした戦闘用スーツ『シンフォギア』を身に纏っていた。

「見えた!!」

「数は……そこそこって感じか。特訓の成果を試すには絶好の相手だ！」

「奏」

「皆まで言わなくても分かっているって。でも、ここらでアタシ等の新フォーメーションを試してみてもいいんじゃないか？」

「それはそうだけど……むっ！」

先程まで微動だにしていなかったノイズ達が、二人の姿を確認した途端に一斉に動き出す。

「前にも見たデカブツはいないようだけど、中くらいの奴なら数体いるな」

「ならば、奏はそいつらを中心に倒して！ 私は他の小型の雑魚を！」

「よしきた!!」

やる事を再確認した翼は走る速度を上げてから、先にノイズの群れへと突っ込んでいった。

「はあああああああつ!!」

一閃。

翼の斬撃が眼前にいたノイズを一瞬で消滅させる。

そこで決して止まることなく、滑らかな動きでノイズ達を翻弄しながら、確実に一体ずつ倒していった。

「やるな翼……！ なら、あたしだって!!」

軽快なフットワークでノイズの攻撃を全て回避しながら、奏の眼はジツと相手の動きを観察しつつ確実な隙を狙っていた。

「隙有り!! そこだあつ!!」

攻撃終わりの明らかな隙を見逃さなかった奏は、ノイズの胴体部の中心を狙って全力の突きを放つ。

その一撃により、ノイズは成す術も無く倒された。

「翼！ 分かるか!？」

「ええ……今までとは比較にならない程に体が軽い！」

「だよな！　まるで重りの着いたりストバンドを外したみたいだ！」
翼が小型を、奏が中型を。

己の役割を果たし続ける二人の動きは、まるでライブの時のように息がぴったりだった。

「複数で掛かってくるか……！　ならばこれだ!!」

いきなりその場で逆立ちをしたかと思ったら、翼は両脚部にブレードを展開して、バーニアにて勢いを増してから縦回転をして無数の敵を斬り裂いていく。

逆 羅 刹

技を放ちながら、翼は豪鬼の言葉を思い出していた。

(いいですか翼さん。貴女が主武装としている『刀』の真骨頂は『流れるような動きから放たれる怒涛の連続攻撃』です。『流水』の動きをしつつ『疾風』の如き斬撃を放つ。基本的にこの動きさえ忘れなければ、それだけで翼さんは数段パワーアップする筈です。『流水』のように舞い『疾風』のように斬る。この事を決して忘れないでください)

幾多のノイズの群れの中を青い軌跡を描きながら舞い、鋭い斬撃にて葬る。

その姿はまさしく、豪鬼が翼に言っていたような動きだった。

「もう一丁!!」

奏の方も、撃破数は少ないが、下手をすれば脅威となり得るような中型のノイズを一体一体確実に倒していった。

いつもなら息切れしていそうならに動いているにも拘らず、未だに全く息が切れる様子は無い。

「ついでだ……こいつも持つてきな!!」

自身の槍をノイズの胴体に突き刺したと思いきや、その穂先を高速回転させて竜巻を発生させ、その威力にて周囲にいたノイズも纏めて消し飛ばした。

LAST∞METEOR

この時、奏もまた豪鬼の言葉を脳裏で思い出していた。

(奏さんは翼さんよりも俊敏性に劣る代わりに単純なパワーが上です。それと貴女の武器であるランスを最大限に生かすには、相手の隙

を狙った一撃必殺の攻撃で反撃の暇すら与えないままに倒す事です。その為には足腰を徹底的に鍛えて突破力を向上させる必要がありますが、奏さんなら出来ますよね？)

奏は同じ敵に二度も攻撃しない。

何故なら、全ての相手が一撃で葬られていくから。

豪鬼が彼女達に施したのは、弱点の克服ではなく長所の向上だった。

中途半端に弱点を補おうとするよりは、既に高いレベルにある長所を更なる高みへと導くことで結果的に総合的な強化をする。

弱点があるのならば、それは仲間が補えばいい。

これは、彼女達がコンビだからこそ出来た特訓であった。

「いける……いけるぞ!! 流れは完全にこっちに傾いてる!」

「だけど、最後まで油断はしない!」

「当たり前だ! ラストの一体まで気を引き締めて戦うぞ!!」

それから十数分の後、この場に出現したノイズは全て二人によって駆逐され、人的被害も物的被害も殆ど無かった。

・
・
・
・
・
・
・

奏と翼がノイズと戦闘を開始し始めた頃、豪鬼もまたもう一つの現場へと到着していた。

「邪魔です!! おどきなさい!!」

あろうことか、バイクごと殺意の波動を身に纏い、そのままノイズを轢き倒した。

こんな事が出来るのも、彼女がメイドだからだろう。

「あのお姿は……矢張り!!」

慌ててヘルメットを外し、目の前の光景に注目する。

そこには、彼女がよく知っている筋骨隆々な老人がギース夫人と共にノイズと戦っていた。

「こ奴等が風の噂に聞いた『ノイズ』とやらか！ この異形なる姿……確かに、人の世に仇なす敵のようだわい!!」

「だがしかし、このような雑魚如き、我等の敵ではない!!」

剛波 動拳

疾風 拳

二人の攻撃により、複数のノイズが一撃にて倒される。

その威力は、装者達の比ではなかった。

「フツ……流石は私が認めた豪鬼の実兄。見事な腕だ」

「それはこちらの台詞よ。その実力、主婦にしておくには実に惜しいわい」

ギースと共闘している人物を見て、豪鬼は珍しく大きく目を見開いて驚いた表情を見せる。

「やっぱり……貴方だったんですね……剛拳兄上」

正真正銘、最強の格闘家である兄がそこにいた。

これで増々、装者達の立場が危うくなってしまおうのだが、本人達は全く自覚は無いだろう。

メイド豪鬼 兄と一緒に戦う

私がこの姿で転生して、すぐに会ったのが彼だった。

彼と過ごした覚えなんて本当は無い筈なのに、不思議と頭の中には幼い頃からあの人や師匠と過ごしてきた記憶があった。

これはきつと『体』に刻まれた記憶だろうと判断した私は、その記憶に素直に従う事にした。

少しでも兄妹らしい話をしてから、兄とはそれつきりだった。

自分でもおかしいと思うけど、彼の事はなんでか違和感無く『兄』として受けいられた。

だからだろうか。こうして再び会えた事は素直に嬉しかった。

「豪波動!! ……油断大敵ですよ、兄上」

「ふん! 来るならもつと早く来んか。馬鹿者が」

兄の背後から触手を伸ばしてきたノイズを豪波動拳で撃破すると、にやりと笑いながらこつちを振り向き、有難い一言を貰った。

「これでも、そこにあるバイクで高速道路をかつ飛ばしてきたんですけどね」

「言い訳無用。今ある現実こそが真実じゃ」

「御尤も」

流石は我が兄。この程度では許してはくれないか。

「ハッハッハッ! こうして並ぶと、兄妹というよりは、まるで親子のようだな!」

「自覚はあります。でも、れつきとした兄妹ですから」

「今更じゃな」

こんな危機的状況下でも普通に会話出来るのは、世界広しといえども我々だけかもしれない。

それだけ度胸が据わっているって証拠かもしれないが。

「にしても、お前はまだそんな動きにくそうな格好しておるのか?」

「これがメイドとしての正装ですから」

「本当にぶれない奴じゃな……む?」

おっと。久々の兄妹のお話タイムを邪魔しようとする無粋な輩達

が飛びかかってきましたね。

全く……これだからノイズは好きになれない。

「フンツ!!」

纏めて掛かってきたノイズは、殺意の波動を込めた私の拳と、無の波動を込めた兄の拳、膨大なまでの気を込めたギースの拳によって跡形も無く粉碎された。

「無の波動……まだまだ衰えてはいないようですね」

「抜かせ。貴様の殺意の波動も、前にも増して制御と磨きが掛かっておるではないか」

「フツ……このノイズ共も不幸なものだな。よりにもよって、闇の『殺意の波動』と光の『無の波動』を極限まで極めた戦士達が相手だとは」

おや、ギースからのべた褒め。

やっぱり子持ちなだけあって、誰かを褒める事は得意なんでしょうかね？

「あまり長引かせては街への被害が拡大してしまいます」

「豪鬼の言う通りじゃな。では、どうする？」

「そんな事、最初から決まっていよう」

私と兄は波動拳の構えを、ギースは両腕を上げてからアレの構えをする。

「最強の一撃にて、一気に蹴散らすのみよ!!」

「応!!」

私達がしようとしている事を野生の本能的な物で理解したのか、全てのノイズ達が三方から一斉に襲い掛かってきた。

でも、それは私達にとって最も好都合。

「はあああああああああああああああああああつ!!!」

自分達の『力』を究極まで高め、目前まで迫るノイズに対し、一気に解き放つ!!

滅殺豪波動

電刃波動拳

レイジング・ストーム

蒼く巨大なレーザーのような気の奔流と、雷を纏った強大な気の塊、まるで地の底から噴出するかのような幾つもの気の帯が一斉に放たれ、飛びかかってくるノイズを一体も残さず全て跡形も無く消滅させた。

「ざっとこんなもんじゃわい」

「滅殺……です」

「他愛の無い」

「どうやら、あれで全部だったようですね。」

「周囲からもノイズの気配は感じられませんし。」

「そう言えば聞きそびれていたんですが、ちゃんと住人の方々の避難は完了しているんですか？」

「それならば問題無いわい。ちゃんと、我々が到着した頃には自衛隊の連中が避難誘導を完了させておった」

「脆弱なれど、己の役目をきちんとなす所は見事と言っておこう」

「本当に、このギース夫人は私の知っている『ギース』とは違って、かなり甘々になってますね。」

「自分の身で子供を産んだからでしょうか？」

「そうじゃ。聞いたぞ豪鬼よ。お主、弟子を取ったらしいな？」

「弟子？ 何の事ですか？」

「とぼけんでもいい。あの豪鬼が誰かに教授するようになるとはな……」

「いや。本気で意味が分からないんですが。勝手に感動しないでください」

「弟子なんて取った覚えは本気で無いんですけどね。」

「この人は本当に何を言っているのやら。」

「おや？」

「ポケットの中に入れていた通信機に着信が。」

「もしもし？」

『豪鬼くん。そっちは大丈夫……みたいだな』

「はい。モニターしていたんでしよう？ ご覧のとおりです」

『まあ……君に関しては、そこまで心配はしていなかったんだがな』

「メイドとして喜ぶべきか。女として悲しむべきか」

『う……すまん』

あらら。ちよつと意地悪をしちやいましたかね。

「ところで、翼さんと奏さん達は大丈夫でしたか？」

『アイツ等なら大丈夫だ。ついさつきノイズを全て撃破したと緒川から連絡が来たところだ』

「それはよかったです」

『お前の事が心配らしく、今そっちに向かっている最中らしい』

「あら」

終わったのなら素直に本部に帰ってもいいのに。

何気に律儀な所がありますね。

「おや。噂をすればなんとやら。来たみたいですよ」

私達の目の前に、緒川さんが運転する車が停車し、後部座席から私服に戻っている奏さんと翼さんが出て来たが……。

「ほら。もう泣き止めつて。アタシが悪かったからさ」

「うん……」

「なんでベガも一緒なんですか？ しかも、奏さんと手なんか繋いで」

一体何があったのか、ベガが泣きながら車から出てきて、奏さんに慰められている。

これは流石に何がどうなっているのか全く理解出来ない。

「豪鬼さん。御無事でなによりです」

「そちらこそ。私との特訓は生かされましたか？」

「はい！ 今まで等よりもずっと軽やかに体を動かせたばかりか、とても効率よく戦えましたー！」

「そうですか。でも、それで慢心してはいけませんよ」

「分かっています。人生これ日々精進也、ですね」

「その通りです。……で、ベガと一緒にいる理由を教えて欲しいのですが……」

「あく……それはですね……」

・
・
・
・
・
・
・

私達がノイズの殲滅を完了し、帰還しようとした時でした。
いきなり何も無い所から彼女が現れてたんです。

「はあくはっはっはっ！ ベガ様さんじょ〜！」

「あ……」

「ノイズはどこだ!? 私のサイコパワーの錆びにしてくれ……あれ
?」

完全に帰る空気になっていた所に来たもんで、なんとも言えない空
気になってしまったんです。

そこで奏が余計な一言を言ってしまった……。

「残念でした！ ノイズならお前が来る前にあたしと翼が全部やつ
けちゃいました〜！」

「にやにいつ!」

「ま。お前なんかいなくても楽勝だったっていうか？ 遅れてやって
来て偉そうにするってどうかって思うよな〜」

「うっ……」

「悔しかったら、今度からはちゃんと早くにやって来て……って、あれ
?」

「奏……ちよつと言い過ぎな気が……」

徐々に彼女が涙ぐんでしまい、やがて……。

「うわあああああああああああああああああああああん!!!!」
「うわあっ!?!」

完全に涙腺崩壊してしまっただです。

見た目は完全な合法ロリですけど。

「疲れた……だっこ」

「はいはい。ほらよ」

奏さんとベガ。もう完全に歳の離れた姉妹みたいになってるじゃないですか。

いや、それに関しては私もあまり人の事は言えないんですけど。

「大丈夫ですよ。彼女なら、後で甘いお菓子でも買ってあげれば、すぐに泣き止みます」

「そうなんですか？」

「ええ。ベガは甘いものには目がありませんから。シャドルーが真つ先に事業展開したのがお菓子メーカーだったぐらいですし」

「それは……徹底してますね」

「はい。ですから、もう少しして街が元に戻ったら、どこかでお菓子でも買ってあげてください」

「分かりました」

ふう……これで本当に一件落着……ですかね？

「ところで、一つお聞きしてもよろしいですか？」

「どうしました？」

「後ろにいる、ギース・ハワードと一緒にいるご老人は何方なのですか？」

「あ」

いつもなら、すぐに居なくなるあの人がまだいる。

どうやら、ギースと格闘技談義に華を咲かせてるみたい。

つーか、まだ紹介とかしてませんでしたね。

「そうですね。いい機会ですから紹介しておきましょうか」

「え？」

兄に目配せをして、手招きをしてこっちに来させる。

自分を指差して『儂？』的な顔をしていたが、それに対して強く頷く。

「なんじゃ。折角、話が盛り上がって来ておったのに……」

「未亡人相手になに仲良さげに会話してんですか……」

しれっと、世間的にとんでもない事をしてるって自覚ありますか？
いや、絶対に無いでしょうね。

「ご紹介します。この方の名は『剛拳』。正真正銘、私と血の繋がった
実の兄です」

「ニブ

!!!」

『『『『ブ

!!!』』』

二課のメンバーが全員吹いた。それはもう派手に。

車の運転席にいる緒川さんも、本部にいる皆も通信越しに吹いてい
た。

「こ……この人が……?」

『豪鬼くんの兄……だと……?』

「んなアホな……」

『し……信じられないわ……』

「でしょうね。無理もありません。でも、事実ですので」

皆が皆、鳩が豆鉄砲を喰らったかのような顔になって口をパクパク
させていた。

気持ちとは分かりますけど、ちよつと驚きすぎじゃありません?

「どうやら、儂の不肖の妹が世話になっておるようじゃの。もしかし
たら、これからは儂もちよくちよくとこつちの方に来るやもしれん。
その時はよろしく頼むぞー!」

「ニは……はあ……」

『『『『ちちらこそ……』』』』

結局、その日はなんとも言えない空気になって解散した。

因みに、ギースとベガは既に兄の事は知っていて、私との関係もご
存じですのであしからず。

メイド豪鬼 墓参りに行く

メイド喫茶『地獄歌』

毎度のように『ご主人様』で賑わっているこの店だが、今日は少しだけ様子が違った。

というのも、本来ならば絶対に休んだりしない筈の豪鬼が今日は不在だったから。

「あれ？ チーフ、今日はウキちゃんは来てないんですか？」

「ああ……彼女なら、今日はお休みですわよ。ちゃんと事前に休暇届を出していききましたから」

「珍しいですね。あの人の事だから、例え台風の日でも普通に来そうな感じなのに」

「なんでも、今日はとても大切な用事があると言っていましたわ」

「大切な用事？」

「ええ……。今日は、彼女にとって最も大切な人の命日らしいですわ……」

「命日……」

・

・

・

・

・

私は、自分の中にある記憶を頼りに、ある場所へと足を運んでいた。そこは嘗て、私と兄が師匠と一緒に修行をし、暮らしていた場所。私達兄妹にとって、第二の故郷とも言うべき大切な思い出の地。

「良い天気ですね……」

ちゃんとした名称すらも無い大きな山。

周囲は鬱蒼とした木々に覆われ、お世辞にも整地されているとは言い難い。

そんな場所に、私は一人で立っていた。

自分でも律儀とは思うが、常日頃から礼節を重んじていた師匠に習って、今回だけはメイド服を脱ぎ、その代わりに喪服を着て来ている。

喪服で山登りなんて無謀だと思われるかもしれないが、どのような服装であつても山登り程度は軽くこなせなくては『暗殺拳』を習得するなど夢のまた夢。

事実、修業時代はこれ以上に動きにくい服装で水汲みをやらされた記憶もある。

「矢張り、お前も来ておつたのか」

「兄上……と、誰ですか？」

全く気配を隠すことなく、後ろからいつも通りの恰好をした兄上がやって来たが、その隣にはこれまた見覚えの無い人物が。

着物を着てはいるが、兄上顔負けの特徴的なお髭に、これでもかと言わんばかりに鋭い目つき。

まるで、視界に入る物を全て射抜くような、そんな眼。

「む。そうか、貴様は初対面だったか。こやつはな……」

「剛拳。儂を馬鹿にしておるのか？ 自分の名ぐらい自分で名乗れるわ」

「そうか？」

兄上の事を名前と呼ぶ。

それだけで、この人物がタダ者じゃない事が窺える。

「ふむ……貴様が剛拳の妹の豪鬼とやらか。成る程、兄に似ていい目をしておる」

「それはどうも」

「儂の名は『風鳴訃堂』。どうやら、不肖の息子や孫が世話になっておるようだな」

「風鳴……。それに、息子や孫という事は、まさか……？」

「貴様の予想通りよ。弦十郎は我が息子、翼は我が孫よ」

「そうでしたか……」

風鳴訃堂……。

こんな人物、原作にいたような……いなかったような？

うむ……どうも記憶が曖昧だ。

「初めまして。剛拳の妹の豪鬼と申します」

「うむ」

それだけかい。と言いたいところだが、この人物に洒落た言葉は期待するだけ無駄な気がする。

「訃堂さんは兄とはお知り合いなのですか？」

「フツ……知り合いなどと、そんな生温い関係ではない。我等は若き頃より互いに高みを目指し幾度となく拳を交えた仲。今風に言えば『ライバル』というものよ」

「ライバル……ですか」

リュウとケンのような関係……には見えないな。

彼等のように青春と友情に満ち溢れた間柄にはとても見えない。

「貴様等の師である『轟鉄』とは儂も少々、親交があつてな。ほれ、このように……」

訃堂さんの手には、明らかに高級品と思わしき大吟醸が握られていた。

「生前の奴の好物を携えて来てやったのよ」

「それはそれは……師が変わってお礼を申します。ありがとうございます」

「気にせずともよい。にしても、お前の妹は兄とは違って、きちんと礼節を重んじる人間のようだな？」

「五月蠅いわい」

「いいえ。訃堂さんの仰る通りです。そもそも、昔から兄上はどうも大雑把なところが……」

「ええい！ お前の説教なんぞ真っ平じゃ！ それよりも、早く師匠に会いに行くぞ！」

照れ隠しなのか、兄上は師匠の墓がある場所へと走って行ってしまった。

「全く……凶体ばかり大きくなっても、中身はまだまだ子供のままですね」

「ふっ……剛拳。哀れな奴よ」

兄上。ライバルに笑われてますよ。

・
・
・
・
・
・
・

轟鉄。

私と兄の師匠にして、物心つく前に両親を失った私達兄妹を幼い頃から育ててくれた養父のような存在。

そして、私達が今でも最も尊敬し、敬愛している唯一の人間。

本質的には暗殺者であるにも拘らず、私達の事を時には厳しく、時には優しく見守り、導いてくれた。

私が殺意の波動を習得した時も、本気で叱ってくれたのは師匠だけだった。

師匠の墓はとても立派で、どこぞの有名人の墓にも決して負けていない。

これは、訃堂さんと同じように生前から親交のあった数多くの人々からの寄付などで立てられた物で、それだけあの人が色んな人々から愛されていた証拠でもある。

「また来たぞ……師匠」

「懐かしいものよな……」

「……………」

師の墓前にて、私達三人が並び立つ。

山林の奥にある例外的に綺麗に整地された場所に、師の墓は存在す

る。

後で知った事なのだが、ここには定期的にリュウとケンも墓参りに訪れているらしく、ちゃんと墓の周囲が草むしりされているのは彼等のお蔭だろう。

「あ奴等め……粹な事をしよる」

「彼等らしいです」

「剛拳には勿体ない位の男共よ」

ここに来るまでに川で水を汲んできたので、まずは尺を使って墓にそつと水を掛ける。

「今年は暑くなりそうですからね」

「昔から、師匠は暑がりだったからのう」

「轟鉄よ。今年も貴様の好物を持ってきてやったぞ」

静かにそう呟くと、訃堂さんは一升瓶の蓋を開けて、その中身を墓に掛けていった。

「美味いだろう？ お前の為だけに特別に取り寄せた逸品だからな」

先程までの刺々しい空気はどこかに消え、今の訃堂さんは純粹に故人を悼んでいた。

もしかしたら、これこそがこの人の本当の姿なのかもしれない。

「ほれ。お前達も飲め。特別に、この儂が酌をしてやる」

「すまん」

「ありがとうございます」

本来ならば私が酒を注ぐべきだろうが、ここは訃堂さんの御厚意に甘える事にする。

彼が何処からか出した御猪口を手に取り、それに注がれる日本酒を見つめる。

私の後に兄にも注いでくれたが、兄は注ぎ終わった瞬間にすぐに一口で飲み干してしまった。

「美味しいな」

「当然よ。豪鬼、貴様も遠慮せず飲め」

「では……頂きます」

御猪口を両手で持ち、中身をそつと口の中へと入れていく。

僅かな苦みの後に、爽やかな甘みが口の中いっぱい広がる。
確かにこれはとても美味しいお酒だ。

「豪鬼よ」

「はい？」

「今日、僕は日の国の防人としてではなく、風鳴訃堂という一人の人間として来ている。お前も師弟関係やメイドとしてではなく、轟鉄に育てて貰った一人の人間として墓前に立て」

「一人の人間として……」

訃堂さんに促されるがまま、私は二人よりも一歩前に出て、師の墓の正面に立つ。

（私自身は実際に会った事は無い……。一緒に過ごした『思い出』も無い……。貴方の顔も声も知らない……。そんな私でも……。そんな私だからこそ……）

「もう一度だけ……。もう一度だけでいいから……。貴方に会いたかった……。『ありがとう』と言いたかった……」

気が付いた時には、私は涙を流していた。

なんで泣いているのかは自分で分からないけど、この涙は自分では止められそうになかった。

『お義父さん』と……。呼びたかった……」

自分の中にある偽らざる気持ち。

こんな借りものだらけの私でも、記憶の中にいる師匠は御指導してくださいませんか……。知りたかった……。

最後に、私達は三人で揃って手を合わせてから、師匠の冥福をお祈りした。

どうか……。安らかにお眠りください……。轟鉄師匠……。

『殺意の波動』と『無の波動』の担い手として、我等兄妹の手で必ずや、人の世を乱す者達から世界を守ってみせます……。

……

・
・
・

それからも、私は二課に協力しながらノイズと戦っていった。

いつの間にか普通にギースやベガも一緒に戦うようになり、なし崩し的に二課はシャドルーやハワード・コネクションと協力関係になっていた。

特にベガと奏さんがかなり仲良くなっていて、よく一人でワープ能力を駆使して二課の本部に遊びに来るようになった。

確実にサイコパワーの無駄遣いですよね……悪事に使われるよりはずっとマシですけど。

翼さんと奏さんは、私も驚く程に見事に見事にシンフォギア装者とアーテイスト活動を両立させていった。

特に、翼さんはそこに学生である身分も加わるので、『二足の草鞋』ならぬ『三足の草鞋』で頑張っていた。

弱音を吐く事なく邁進し続ける彼女達の頑張りが身を結んだのか、最新シングルが前代未聞の大ヒット。まさかのミリオンヒットを記録した。

そこからはあれよあれよと言う内にツヴァイウイングは世界的な有名人となり、日本にいる全ての歌手の夢である武道館ライブも大成功させた。

その間も、私は地道なメイド活動に勤しんでいた。

ずっと前に私がしたライブ乱入がネット上で凄まじい勢いで拡散され、私の仕事場である『地獄歌』は毎日が満員御礼の状態になった。

売り上げが爆上がりし、店の規模も徐々に拡大。

一時期は店自体が取り潰させる寸前まで追い詰められていたらしいが、私が来たお蔭で見違えるように生まれ変わったと、オーナーもチーフも涙を流しながら喜んでくれた。

私は普通にメイドをしているだけなのだが、それで店が活性化する

のならば、それに越した事は無い。

今はまだ一般市民である響さんと未来さんは、今までと変わらない穏やかな毎日を過ごしているようだ。

ただ、響さんの成績が危ないと私に泣きついてきたことが度々あったけど。

なんでも、響さんは進学先に翼さんも在学している『私立リディアン音楽院』にするつもりらしいが、それを実現させる為にはどうしても成績が足りない。

仕方がないので、暇な時は私が、それ以外の時はバイト仲間（東大卒）に頼んで、彼女の勉強を見て貰っている。

その代償として、私に抱き着くのは止めて欲しいが。

私も私で色々な変化があり、まず、意外過ぎる人物達と会いまくった。

いずれも『豪鬼』という人物と何らかの形で交流した事がある者達ばかりで、僅か数年で私の顔が世界規模で広くなってしまった。

いや……ストーリートファイター関係やカプコン関係、SNK関係ぐらいならまだ分かるんだけど、まさか、あんな人物達とも知り合ってしまうとは……。

私がどんな人々と知り合ったのかは、ここではまだ言えない。

いずれ、嫌でも知るだろうから、その時までどうか待っていて欲しい。

そうして月日が流れ……遂に運命が動き出す。

本当の意味で、この世界の『物語』が始まる。

それは、シンフォギア装者だけでなく、私達『ストーリートファイター』の本当の戦いが始まる事も意味していた。

メイド豪鬼の戦姫絶唱シンフオギア メイド豪鬼 新たな日常を送る

あれから二年が経過した。

私の生活自体は殆ど変化してないが、周りの環境が大きく変化をした。

まず、ツヴァイウイングは未だに大活躍。

最近ではコンサートだけではなく、バラエティ番組などにも出演するようになり、増々彼女達の顔が知れ渡る事に。

歌以外の仕事がいい具合に気分転換になっている様子で、彼女達の顔はいつも晴れ晴れとしている。

因みに、あの時の墓参り以降、訃堂さんや兄上とは出会っていない。風来坊である兄上はともかく、訃堂さんはどこで何をしているのだろうか？

響さんと未来さんは、無事にリディアンに入学する事が出来た。

未来さんは余裕だったらしいが、響さんは相当に御苦労なさった御様子。

後に未来さんから聞いたのだが、『もう二度と、あんな事だけは御免だ』との事。

流石の響さんもこれには相当に堪えたようで、高校に入ってからはこちらと勉強をしよう……と考えてるらしい。これが『考える』だけで終わらない事を心から祈ろう。

シヤドルーやハワード・コネクションは相変わらず。

ギースはいつもの調子だが、ベガの方は完全に奏さんと仲良しになって、今ではプライベートで遊ぶことをよくあるとか。

色々と特殊な身の上の二人だからこそ、友達関係になってくれたことは純粹に嬉しい。

ノイズはあれからも度々出現はしてはいるが、あのコンサートの時のような大量出現は一度も無い。

出て来たとしても、多くて十数体が精々。

それぐらいならあつという間に駆逐は出来る。

装者としての実力もメキメキと上がって行って、私の施すトレーニングの効果かどうかは不明だが、適合係数も上昇して行って、今となっては奏さんはLINKERを投与しなくてもギアを展開できるほどになった。

その事が判明した時、彼女は涙を流して喜んでいたっけ。

そして、私は今日も私の日常を謳歌するのであった。

さあ……まずはどこをお掃除しましょうか？

・
・
・
・
・
・

本日の私は、リディアンに続く並木道を竹箒で掃除している。

思った以上に地面に落ちた桜の花びらがまだまだ沢山あるから、ちやんと綺麗にしておかなくては。

雨が降ったりして地面にくっついていたりしたら、後々面倒な事になる。

「高校……ですか。いいですね、青春です」

私の前を歩く女子高生たちを眺めながら、何かが違っていたら自分も学校に通っていたのかもしれないと思わずにはいらなかった。

別に今の自分の不満があるわけでもないし、若い頃から普通の人生を捨てて格闘家として生きた事に後悔も無い。

「しかし……まだ響さんと未来さんの姿を見てませんね。今日は確かリディアンの入学式。もうそろそろ来ないと遅刻してしまうと思うのですが……」

「響いっ!! いい加減に降りてこないよ、本当に遅刻するよっつ!」

「おや、この声は未来さん？ なにやら向こうから聞こえてきましたか……。」

「あらら」

何をやっているのやら。響さんが木登りなんてしてますよ。

未来さんが木の下で叫んでますが、全く聞いてない様子。

「というか、あんな恰好で木に登ったりしたら、間違いなく見えちゃいますよ？」

「けど、なんで木なんかに登って……あ」

よく見たら、彼女の手の先に黒い子猫が怯えた様子で立っている。

昇ったはいけど、降りられなくなってしまったと。

そして、生来のお人好しである響さんはそれを見捨てられずに助けに行っただって訳ですか。成る程。

「まあ……危なくなったら、すぐに阿修羅閃空で駆けつけなければいけないですね」

あれなら一瞬であそこまで移動が可能だし。

でも、念の為に様子は見ておいて方がよさそうだ。

「うええっ!! ちよ……ちよつと待つ……あびゅっ!!」

やば。何を思ったのか、小猫が響さんの顔面にくっついてしまった。た。

その勢いで彼女の体勢が崩れて、今にも落ちそうになった。

「響っ!!」

これは急がなくては……って、なにやら超見覚えのある人間が全力疾走で向かってくるんですけど？

使い古された白い道着に、真っ赤な鉢巻。鍛え抜かれた肉体。

あれは間違いなく……。

「危ない!!」

響さんが木から落ちた瞬間、『彼』が見事にダイビングキャッチ。

痛がっている様子が無い事から、思ったよりも衝撃は少なくて済んだようだ。

「大丈夫か？」

「は……はい……」

彼が響さんを優しく降ろし、そつとその体についた汚れを払った。

「響！ 怪我は無いつ!?」

「う…うん。私なら大丈夫だよ」

「よかつた…」

かなり心配していたようで、未来さんはその場にへたり込みそうな勢いだった。

一方の心配をさせた響さんは、突然の出来事に呆然としているようだ。

「あ…あの！ ありがとうございます！」

「あ…そうだ。ちゃんとお礼を言わないと。響を助けてくれて、ありがとうございますー！」

「どういたしまして。この程度、なんてことないさ」

いつもながら、なんとも爽やかな男ですね。

見ているだけで清々しいというか、どこまでも真っ直ぐというか…。

「この猫ちゃん…どうしよう?」

「それなら、私が預かりますよ」

「豪鬼さん!」

なんだか見ていられなかったので、仕方なく私が行くことに。

流星に彼は猫は預けられないでしょうし。

「豪鬼…? なんでお前がここに…」

「それはこちらの台詞です。それよりも、お二人共」

私のスマホを見せて、時間を教える。

画面を見た途端、二人の顔が真っ青になった。

「ち…遅刻…!!」

「入学式に遅刻したら、洒落になりませんよ?」

「急げ…!!」

急いで猫を私に渡してから、二人は全速力で走っていった。

けど、元陸上部な未来さんの方が足が速く、明らかに響さんと差がついていた。

「未来う…! 待つてよお…!!」

「そんな余裕ないから！ ああもう！ なんてこんな事にい〜!?」
朝から元気ですなえ〜。

これが若さですか……なんか急に悲しくなってきた。

「貴方も相変わらずですね。リュウ」

ある意味で世界的な超有名人。

現在進行形で世界中を旅する孤高の求道家。

私の兄の二人の弟子の一人。

「噂で聞いていたが、本当に格闘家じゃなくなってたんだな……」

「暗殺拳自体は捨ててませんけどね。殺意の波動は未だに健在です」

「らしいな。お前の体から、穏やかだが力強く黒い力を感じる」

彼もまた体の中に『殺意の波動』を宿す者。

だが、それを克服し、兄と同じ領域に到達するのも時間の問題でしょう。

いずれは、彼の親友と同じように、自分だけの答えを見つけてみせるだろう。

「それにしても、女子高生を助けて『大丈夫か（キラ〜ン）』って。いつから貴方はラノベの主人公になったんですか」

「いや、俺は普通に危なかったから助けただけなんだが……」

これですよ。

普通の男なら、華の女子高生を抱き上げたのなら多少は照れたりするものでしょうに。

それなのに、リュウは全くの無反応。

禁欲生活を続けているのは立派ですが、少しは普通の反応をしてもいいだろうに。

「ほら」

「え？」

「どうせ暇なんでしょう？ でしたら、私の事を手伝ってください」
「掃除か。偶にはいいかもな。修業時代を思い出す」

体力だけは無駄に有り余ってる人間ですからね。

バイトが始まる時間まで、タップリとこき使ってあげますか。

・
・
・
・
・
・

某スタジオ 控室

もうすぐ番組が始まろうとしている中、ツヴァイウィングの二人は珍しく緊張していた。

「な……なあ……翼」

「何……奏……」

「今さ……アタシ等の目の前にいるのって……」

「うん……間違いないよ……」

二人の目の前には、仲睦まじく会話をする二人の少女が。

一人は童顔で素朴な茶髪だが、その内側から溢れ出る迫力と魅力がある。

もう一人は、紫の髪に透き通るような声。トドメに、とても眩しい笑顔。

どちらも、万人が認める美少女だった。

「アタシでもブルっちまう程の伝説的アイドルの『麻宮アテナ』に……」

「世界的ミュージカルスターの『神田桃』……どちらも私等が遠く及ばないスーパースターだ……」

彼女達からしたら、どちらも紛れもない芸能界での大先輩。

番組の本番以上に、二人と共演するという事実が翼と奏にこれまでにないプレッシャーを与えている。

「まさか、あのツヴァイウィングのお二人と一緒に番組に出演出来るなんて、思いもしませんでした」

「私もですよ。もしかしたら、生の歌とかも聞けたりして？」

「楽しみ♡」

(それはこっちの台詞ですから!!)

ガチガチに顔を強張らせながら、二人は心の中で盛大にツッコんだ。

そんな時、完全に雰囲気二分化された部屋に、全く空気を読まない人物が乱入してきた。

「奏〜！ 応援しにきたぞ〜！」

「ベ…ベガっ!? なんでここにっ!?」

「ワープしてきた」

「「そうだった……」」

サイコパワーによって、いつでもどこでも入り放題なベガは、こんな事をこれまでも頻繁に繰り返してきた。

だがしかし、幾ら容姿が幼女でもベガも立派な大人。

ちゃんと仕事の邪魔はしないように、本番直前にはちゃんと帰ってくれる。

「あ〜！ ベガちゃんっ!?」

「アテナ〜！ 久し振りだなく〜！」

「「えっ!?!」」

まさかの交友関係に驚きを隠せないツヴァイウイング。

でも、この二人には実は意外な共通点があったりする。

「あ…あの……麻宮…さん？」

「こいつ……ベガと知り合い…なんですか？」

「知り合いだなんて。私とベガちゃんはお友達ですよ」

「そくだぞ〜。私とアテナは親友同士なんだぞ〜」

「「マジでっ!?!」」

仮にも秘密結社を名乗っている組織の総帥と、超ビッグなアイドルが親友同士。

普通じゃ絶対に考えられない組み合わせだ。

「モモも久し振りだなく〜！」

「お久し振りです、ベガさん」

「神田桃とも知り合いっぽいし……」

「ベガの交友関係ってどんだけ広いんだ……？」

そこにツツコんでいけばキリが無いので、深くは追及しないのが賢明である。

「けど、一体何処で知り合ったんだろう……？」

「それはだなく」

「私とベガちゃんが、同じサイコパワーの使い手だからですよ」

「なんだとおっ!?!」

もう何度驚けば気が済むのか。

まさか、目の前の超有名人が、自分達の知り合いの幼女と同じ超能力を使えるなどと誰が想像するだろうか。

「知ったのは本当に偶然だったけど……」

「それが分かってからは、あつという間に仲良くなったよなく」

「私は、アテナさんから紹介して貰ってお友達になったんです」

「……………」

もう驚きすぎて声も出ない。

今にして思えば、シャドルーの幹部にはムエタイの世界チャンプであるサガットに、アメリカンドリームを実現したボクシングの世界チャンピオンであるマイク・バイソンがいる。

それを考えれば、彼女が世界的な有名人と知り合いでも不思議じゃない……のかもしれない。

場がカオスになりかけた時、帽子を被ったスタッフがノックをした後に控室へと入って来た。

「麻宮さくん。神田さくん。ツヴアイウィングのお二人。もうすぐ本番ですよ……って、なんだこの子?」

「あ。気にしないでください。この子は私達のファンで、私達を追って控室に来てしまったんです」

「そうでしたか」

「ちゃんと後で家に帰させますから」

「分かりました。では、そろそろ準備をしてください」

「はい」

スタッフが去っていったから、ベガの体が僅かにではあるが光り出

す。

ワープをする兆候だ。

「んじゃ、私はもう行くな。四人共、番組頑張れよ〜」

「うん！ ちゃんとテレビの前で見えてね！」

「お〜！」

満面の笑みを浮かべながら、ベガはワープで帰っていった。

「では、私達も行きましょうか」

「そうですね。奏」

「おう。態々ベガが来てくれたんだ。アタシ等も二人に負けまいぐらいに頑張らないとな！」

ベガが来てくれたことで緊張が解れたのか、さっきまでの強張った表情が無くなり、完全にいつもの二人になった。

こうして、麻宮アテナ、神田桃、ツヴァイウィングという夢の競演が実現した番組が始まった。

余談だが、この番組の瞬間最高視聴率は40%を超えたとかなんとか。

メイド豪鬼 先輩になる

辛うじて遅刻を逃れた響と未来は、無事に入学式を終えてから、割り当てられた教室にて二人で話していた。

「もう……猫を助けるのはいいけど、今度からはちゃんときと場合を考えてよ？　今回はなんとか間に合ったけど、また似たような事が起きて同じ様にいくとは限らないんだからね？」

「分かってるよお〜……」

「ホントかなあ……。特に今日のは、下手をすれば大怪我をしていた可能性だつてあつたんだよ？」

「うん……。そうだよね……」

未来が真剣に心配しているのに、肝心な響は先程からずっと上の空。

完全に『暖簾に腕押し』状態である。

「……さつきから何か変だよ？　一体どうしたの？」

「うん……。ちよつとね〜……」

「もしかして、あの時に響を助けてくれた道着の人の事を思い出してたりとか？」

「まあね。危なかつたとはいえ、あんな風に男の人に抱き止められたのって初めてだから、ちよつとドキドキしたっていうか……」

「ドキドキ……」

未来が知る限り、今までの響の人生の中で『恋愛』という二文字は全くと言つていい程に無縁だった。

それどころか、異性とあそこまで物理的に近づいた事さえ皆無だっただろう。

そんな少女が、緊急事態だったとはいえ明らかに自分よりも年上の男に抱き止められた。

本人からすれば、相当に衝撃的な出来事だった事は想像に難くない。

「あのとき、思わずあの人と目があつただけど……」

「けど？」

「……すつごく真っ直ぐで澄んだ目をしてた。あんな人……初めて見た」

「響……」

傍にいた未来からしても、響を助けてくれた男性……リユウは全く悪い人間には見えなかった。

それどころか、どこか響と似た雰囲気すら感じてしまった程。

「そう言えばあの人、豪鬼さんと仲良さそうに話してたよね。知り合いなのかな？」

「男女の知り合い……つまりは恋人？」

「それはちよつと話が飛躍しすぎじゃないかな……」

なんて未来のツツコみを無視して、響はまたもや自分だけの世界に入る。

「そうだよねえ……豪鬼さんは美人で何でも出来て、凄く優しい人だし……」

「響く？ もうすぐHRが始まるよ。響く？ 聞こえますか？」

「はあく……また会えるのかなあ……」

「だめだこりゃ」

結局、響は入学して早々に担任から有難いお言葉を頂いたのであった。

それが切っ掛けとなって高校での新しい友達が出来たのが皮肉である。

・
・
・
・
・
・
・

メイド喫茶『地獄歌』

私が働いているこの店は、今日も今日とて大繁盛している。だがしかし、あれから二年も経過すれば、流石に大なり小なり変化はしていく。

まず、店の規模が明らかに大きくなった。

二年前までは秋葉原とかにも存在しているメイド喫茶と同じ、標準的な大きさの店だったが、あのライブ乱入事件を切っ掛けに客足が爆発的に増加し、当然のように売り上げも爆上げ。

その結果、店の運用にもかなりの余裕が生まれ、店舗の拡大なんて思い切った事も普通に可能になった。

完全に改装した今では、そこら辺にあるスーパーと同じくらいの敷地面積を誇り、それに伴い客の数も必然的に増加した。

店が大きくなれば、当然のように従業員の数も増やしていかななくてはいけないのが道理であって。

少し前までは私が一番の新人だったのが、今ではいつの間にかチーフの座につき新人教育をするようになっていた。

前のチーフは店長に昇格し、前の店長はオーナーになった。

要は、皆が一つずつ上に昇っただけなのだが。

問題は、この『新人メイド』が相当に曲者揃いということだ。

まさか、職場でも『豪鬼が知っている人物達』と出会うなんて誰が想像するだろうか。

「ふう……疲れたあ。あのお客さん、私の事をずっとイヤらしい目で見てくるんですもん。精神的に疲れちゃいましたよ」

「お疲れ様でした、さくらさん。一応、そのようなご主人様には来店を遠慮するように言っているのですが、未だにいるんですね」

「中にはちゃんと、こっちの事も考えてくれる優しいお客さん……じゃなくて、ご主人様もいるんですけどね」

もう名前を出したから隠す必要ありませんね。

この店の新人メイドその1の、リュウの熱狂的な追っかけにして、見よう見真似だけで気のコントロールを身に着けたばかりか、技もほぼ完璧に習得してみせた天才女子高生『春日野さくら』さん。

バイトの理由は『夏休みにリュウさんに会いに行く為の資金稼ぎ』だからと言って、メイド喫茶をチョイスするのはどうかと思いますけどね。

「にしても、このチーフが豪鬼さんで助かりましたよ。やっぱ、一人でも知り合いがいると心強いですね！」

「いや、他にも知り合いはいるでしょうに……」

そう。他にもいるのだ。想像すらしなかった『知り合い』が。

例えばほら、一番端のテーブルにいる四人の美女達にからかわれている茶髪の美少女がそうです。

「プ……プクフフ……♡」

「ギャハハハハハハハ!! 話を聞いた時は本気で耳を疑ったけどよ、まさかマジだったなんてな! こいつはケツサクだぜ!!」

「うわ……元の原型が完全に無くなってるし……」

「普通に美少女になってるアル。高貴なる吸血鬼様も、こうなっては完全に形無しアルな」

「キ……キサマら……! 好き放題言いおつて……! 後で覚えてろよ……!」

あの茶髪の美少女の正体は、かの『デミトリ・マキシモフ』その人だ。

名前の前に『ブリス化した』が付くけど。

因みに、彼女に絡んでいる美女四人は人間界に遊びに来たサキュバスの『モリガン・アーンスランド』と売れっ子ミュージカルスターになったキャットウーマンの『フェリシア』、美少女キョンシーの『レイレイ』に超凄腕の賞金稼ぎの『バレッタ』。

因みに、全員がちゃんといつもとは全く違う私服を着ている。

「まさか、対戦中にくしゃみをして『ミッドナイト・ブリス』を暴発させて自分が女の子になるなんてね。意外と可愛い事をするんじゃない」

「黙れ!! 私とてなりたくてこんな姿になったのではない!!」

もうモリガンが言ってしまったが、要はそういうことだ。

自分の技を自分で受ける羽目になるとは、なんとも哀れとしか言い

ようがない。

しかも、暴発した時の影響なのか、何故かミッドナイト・ブリス『だけ』が使えなくなってしまうらしい。意味が分からない。

「でも、まさかバレッタちゃんかモリガンさん達と一緒にいるなんて思いませんでした」

「彼女曰く『アイツらを相手にするよりは、利用して他の連中を狩った方が遥かに効率がいい事に最近になって気が付いた』らしいです」

「ははは……凄く『ほい』ですね……」

デミトリが完全に弱体化しているのをいい事に、彼女達は言いたい放題になつてる。

でも、実際はそこまで弱くはなつてないんですね。体格が小さくなつただけで。

「そんな言葉遣いでいいのかニヤ々？　ここでは私達は『ご主人様』だよ〜？　『デミデミちゃん』♡」

「クツ……！　なんでこの私がこんな屈辱を……！」

「ジツとしてろよ。写真に撮ってからツイッターにアップするからよ」

「店内は撮影禁止でございます。バレッタお嬢様」
「急にメイド口調になるなよっ!?!」

なんで女体化したデミトリがここで働いているかというところ、あんな状態で魔界には戻れないと言って途方に暮れていた彼女を私が見つけ、嘗ての知り合いのよしみで当面の生活の為の資金稼ぎの場を提供したのです。

そんな彼女は今、この店の近くにあるアパートに一人で住んでいる。

心だけは貴族でいようと努力しているようだが、生活感覚は完全に庶民と同レベルになつている。

「で、そんなデミトリさんと対戦して巻き添えを喰らった人は……」

デミトリとは全く反対の位置にあるテーブルにて接客中。って、あのテーブルにいるのって……まさか？

「……………」

「なんで貴様がここに……京……！　って、なんでさつきから黙ってる？」

「可愛い……」

「は？」

「まさか、八神に心ときめく日が来るなんて思わなかったぜ……。お前って、女の子になるとそこまで可愛くなるんだな……」

「や……やめんか貴様!!　大体、お前には既に女がいるだろうが!!」

デミトリのドジに巻き込まれて同じように女の子とかしたのは、あの超イケメンで人気者の『八神庵』。

物静かそうでいて、実はかなり喧嘩っ早い二人は、なんでか道端で出会って目があった途端に戦闘開始したそう。

途中まではほぼ互角の展開だったそうですが、そこで例のミッドナイト・ブリス暴発事件が発生。二人で仲良く美少女となってしまうとき。

んで、同じようにどうすればいいのか困っていたので、前に私の事を勝手にライバル視して喧嘩を売って来たよしみでバイト先を提供してあげました。

「その……矢吹慎吾とか言ったか！　お前もこいつを止めろ!!　仮にも弟子入りしているんだろうが!!」

「あく……すみませんけど、それは無理ッス」

「なんでだ!？」

「俺も……女の子になった八神さんの可愛さに胸キュンしてるからッス……♡」

「何……♡?！」

「頼むからよ……俺の事を『ご主人様♡』って呼んでくれねえか？

い・お・り・ん♡」

「絶対に断る!!　そんな事をするぐらいなら、貴様をここで焼き殺す!!　あと、オレの事を『いおりん』と呼ぶな!!」

「今のお前になら本気で殺されてもいいな……」

「こつちが悪かった。だから、本気目でオレの事を見るのだけは止めてくれ。お前を殺す前にオレがストレスで死ぬ」

「あの八神さんが普通に謝った!？」

流石の庵さんも、自分と物凄く因縁のある草薙京が相手では相性が悪いようですね。

完全に翻弄されてる……というか、彼の目が普通に恋する男の目になつてませんか？

「庵さん……後で胃薬でも出してあげようかな」

「それがいいかもしれません。彼女、御両親からは泣いて喜ばれた挙句、妹さんからは『萌え』って言われた上で着せ替え人形と化してるそうですよ」

「私から見ても、女の子になつた庵さんって可愛いもんなら」

実は、地味にデミトリさんと庵さんの二人って人気なんですよね。

特に庵さんは現役でバンド活動をしているだけあつて歌声も抜群に上手いですから、時折ここでイベントとして行われる簡易的なライブでは凄い事になってるし。

「何気に真面目だから、ちゃんと休まずに来てくれるのも有難いんですよね」

「実は庵さんって凄く良い人ですよ。私も前に簡単な料理を教えてくださいましたし」

「もう、このまま女でいた方がいいような気もしてきました……おや？」

「またお客さんですね。豪鬼さん、行きましようか」

「そうですね」

他の子達と一緒に店の入り口まで歩いていき、スカートを左右に軽く開きながら一言。

「」「お帰りなさいませ、ご主人様」「」

まだまだ、私の仕事は終わらない。

メイド豪鬼 大事な事を思い出す

リディアンの入学式があった次の日。

私は今日も特に変わる事なくメイドとしての仕事に勤しむのでした。

「ふんふんふん♪」

今日もまた掃除しているのはリディアンに続く並木道。

ここは学生が頻繁に利用するという事もあり、少しでも気を抜けばすぐに汚れてしまう。

だから、こうしてこまめな掃除が欠かせないのだ。

「おや」

向こうからやって来るのは、毎度お馴染みの響さんと未来さんの仲良し二人組。

今日も仲が良さそうでなによりです。

「おはようございます」

「おはようございますー!」

いいお返事。子供は元気が一番ですね。

「この時間に来ているという事は、今日は遅刻してないみたいですね」

「え? あはは……」

「それでもありませんよ、豪鬼さん。響ったら、今日も寝坊して急いで支度をしたんですから」

「うわあくん! 未いゝ来うゝ!」

「あらら」

響さんが未来さんにしがみ付きながら泣き顔に。

どうやら、誰にも知られなくなかったようですね。ま、当たり前ですけれど。

「ちゃんと目覚ましはセットしてるんですか?」

「セットはしてるんですけど……」

「電池が切れてる事をすっかり忘れてたんだよね」

「言わなくな〜い〜で〜!!」

それはまあ……なんというか……本気で哀れだな……。

この子の場合、どこか詰めが甘い所があるんですね。いつの日か、それが取り返しをつかない事にならないといいんですけど。

「そ…そうだ！ 豪鬼さん、今日が何の日か知ってますか？」

「急に話を逸らすし……」

「まあまあ。で、何の日なんですか？」

「ツヴァイウイングのニューシングルの発売日なんです！ この日が来るのをどれだけ待ったか……！」

「響つてば、旗色が悪くなったからって誤魔化して……」

ツヴァイウイングの新曲……。

そういえば、奏さんと翼さんがそんな事を言っていたような気が。

「んん？」

なんだろうか？ 何か物凄く重要な事をド忘れしているような気が……。

「どうしました？」

「いえ。なんでもありません」

それほど大切な事なら、自然と思い出すだろう。

今は特に気にする必要はないと判断する。

「それにしても、響さんは本当にツヴァイウイングが大好きなんですね」

「はい！ あの人達の歌って、聞いてるだけで勇気が湧いてくるっていうか……とにかく凄いです！」

「また道端で興奮して……」

今日もまた未来さんは響さんに振り回されている様子。

偶には彼女にも一人でのんびりと過ごす時間が必要なかもしれない。ない。

「お話はそれまでに。もうそろそろ行かないと、今日も遅刻寸前になりますよ」

「そうだった！ 響、行くよ！ 幾ら寮暮らしになって学校までの距離が近くなったと言っても、遅刻しちや何の意味も無いんだからね！」

「分かってるよく。それじゃ、豪鬼さん」

「行ってきますー!」

「はい。いってらっしゃい」

手を振りながら彼女達を見送って、私は掃除を再開する。

今日はリュウは現れませんでしたね。

彼の事だから、まだこの街にいるかどうかも怪しいですけど。

・
・
・
・
・
・
・

「お疲れ様でした」

「「「お疲れ様でした!!」」」

本日のお仕事も何事も無く終了し、皆で店仕舞い。

その後に着替えてから、各々に解散することに。

私の場合は、店のメイド服から自分のメイド服に着替えるだけだから、大した変化はないんですけど。

「やっと今日も終わった……」

「ん〜! 解放感!」

「早く帰って酒でも飲みたい……」

未だに仕事には慣れてないのか、庵さんとデミトリさんはお疲れの様子。

それとは対照的に、さくらさんはバイトの後でも元気一杯。

これが若さですか……。

「どうして貴様はそれも元気なんだ……」

「いえいえ。私もそれなりに疲れてはいますよ? でも、これぐらい

でへばってちゃリュウさんに追いつけませんから!」

「リュウ……あの白い道着の男か。そういえば、お前は奴に憧れてス

トリートファイターになったんだっただな」

「はい！」

ああ……なんて眩しい笑顔。

こんな素敵な子に想われているのに、それに全く気が付かないなんて……リユウにも困ったものです。

ケンのように所帯を持てば、また違ったものが見えるでしょうに。

彼が結婚する姿なんて全く想像も出来ませんけど。

「さて……帰りに買い物でもして帰りましようかね」

「オレも買い物をして帰らねば。少し野菜が少なくなってきたからな」

「私はとつと帰ってから、ベッドにて惰眠を貪りたい……」

「私は……家までランニングでもして帰ろうかな？」

どこまで元気なんですか……。

技だけじゃなく、変な所までリユウに似てきてませんか？

「ん？」

「あ」

「これの警報は……」

「アレが出たのか」

気を抜いた矢先に、いきなりノイズ出現の警報が街中に鳴り響く。

となれば、必然的に私も出勤しなくてはいけない訳で。

プルルルル……

噂をすればなんとやら。

私のスマホに着信が来た。

「もしもし？」

『もしもし！ 豪鬼くんか！』

「私のスマホですからね。今回はどこに出たんですか？」

『詳しい出現位置は現在こっちで調べている！ だが、少なくとも市街地に出現したのは間違いなさそうだ！』

「市街地……また厄介ですね」

この時間帯は仕事終わりの人々が多い。

だから、このような状況でノイズが出現すれば、被害者が出るのは

時間の問題になる。

『現在、自衛隊が緊急出動して市民の避難誘導をしてはいるが……』
「余り上手くいっていないんでしょう？ 分かりました。まずはここから移動して……」

『司令!! ノイズの出現位置が特定出来ました!!』

『でかした! 急いで装者二人と豪鬼くんに伝えるんだ!』

『了解です!!』

おや。私がアクションを起こす前に場所が判明しちゃいましたか。一体何をどうしているのかは不明ですが、私のスマホに地図が表示され、赤い点でノイズが現れた場所を示している。

「ここですね。今いる場所からだとしり遠いですね……」

『済まんな……仕事が終わったばかりだというのに……』

「気にしないでください。私は私が出来る事を、メイドとしてやっていただけ。ですから、弦十郎さんも弦十郎さんがやるべき事をしてください」

『……君には敵わない』

「メイドですから。では、切ります」

『ああ。気を付けてくれ』

「……ハイ」

通話を切りスマホをポケットに入れると、一連の会話を聞いていたと思われる三人がこっちを向いていた。

「行くのか?」

「はい。それがメイドとしての務めですから」

「そうか……なら、オレも一緒に連れて行け」

「は?」

庵さんが自分から人助けに名乗りを上げた?

明日は台風でも来るのでしょうか……。

「貴様が何を考えているか、なんとなく分かるが……勘違いをするな。オレは有象無象の連中の命なんぞに興味は無い」

「では何故に?」

「なあに……」

言葉とは裏腹に、その手に蒼い炎を出しながら、なんとも眩しい美少女スマイルをする庵さん。

なんか、彼女が言おうとしてる事が分かったかも。

「あの傍迷惑な害虫共でバイトのストレスを発散するだけだ……！」
「んなこったろうと思いましたがよ」

でも、彼女ほどの格闘家を手伝ってくれるのは本気で有難い。

女体化してはいても、その手から放たれる炎の威力は健在だし、身体能力の若干の低下は技術で補っている。

『三種の神器』の一人なのは伊達ではなく、彼女も生粋の天才格闘家なのだ。

「お前が行くのなら、私も同行させて貰おう」

「デミトリ……貴様……」

「私も丁度……ひと暴れしたいと思っていたところだしな……！」

あんたもかい。

まあ……こんななりでも、魔界最強の吸血鬼であるのは違くないですし。

ミッドナイト・ブリス以外の技は普通に使えるみたいですね。

戦力的には問題無いでしょう。

「豪鬼さん、私も一緒に行きます！」

「さくらさん……」

「正直ちよつと怖いけど、でも！ リュウさんなら、困っている人を見て逃げるような真似は絶対にしないと思うんです！ だから！」

「分かりました。貴女も立派な『気』の使い手。本音を言えば一緒に来てほしいと思っていたところです」

「豪鬼さん……」

これでこっちの戦力は揃った。

ここに装者の二人も加われれば、絶対に大丈夫だろう。

「では、今から急いで……」

プルルルル……

こんな時にまた電話？

今度は……未来さんから？

「もしもし」

『ご…豪鬼さん！ 響が……響が!!』

「未来さん？ 一体どうしたんですか？ 落ち着いてください」

『響がいなくなっちゃったんです!!』

「なんですって？」

響さんがいなくなった？ どういうことだ？

「取り敢えず、まずは深呼吸をして落ち着いてください。それから、順番に何が起きたのかを説明してください」

『は…はい。ス…ハ……』

「落ち着きましたか？」

『少しだけ……』

「で、何が起きたのか説明をお願いします」

『分かりました……』

未だに焦燥に駆られている様子の未来さんは、なんとか頑張つて話し出した。

『放課後に響と一緒にCDショップに行っただんですけど、その時にいきなりノイズ出現の警報が鳴つて、それで急いで避難しようとしたら……』

「したら？」

『響がいきなり『女の子がいる!』つて言つて外に向かって走り出して、それで……』

血の気が引いた。比喩でなく。

未来さんの話を聞いて、私はようやく全てを思い出した。

リディアン入学式の次の日、それは響さんが初めてシンフォギアを纏った日でもある。

つまり、今日がその日つて事になる。

原作では響さんは胸にガングニールの破片が突き刺さった事により聖遺物と融合した。

でも、ここでは突き刺さるのではなくて飲み込んだ。

この違いがどんな影響を与えるのか、神ならぬ私には全く予想がつかなかった。

『もしも響に何かあったら……私……私……!』

「……大丈夫です。私が必ずや響さんを助けてみせます」

『豪鬼さん……?』

「大丈夫。未来さんも知っているでしょう? メイドには……」

『不可能は無い……』

「その通り。今は避難用シエルターにいるんですよね?」

『はい……』

「では、そこで静かに待っていてください。響さんとは、必ずまた会えますから」

『豪鬼さん……ありがとうございます……』

「未来さんも響さんも、私にとっては大切な人達ですから。では、そろそろ」

『響の事……よろしくお願いします……』

「任せてください」

少し話が長くなってしまったが、これはこれで必要な情報だった。

これはなんとしても急がなくては……!

「豪鬼さん……」

「皆さん。少々、事情が変わりました。今から急いで現場に向かいますが、いいですか?」

「無論だ」

「フツ……愚問だ」

「ハイ!」

「よろしい。では、まずは……」

駐車場からバイクを運んできて、そこにまずは自分が座る。

「さくらさん。私の後ろに」

「は……はい!」

「俺さんは私の前に乗ってください」

「三人乗りをする気か? 普通に交通違反だぞ」

「今は緊急時なので大丈夫です」

前にも普通に高速道路を異常な速度でぶっ飛ばしましたし。

「デミトリさんは、確か普通に空を飛ばしましたよね?」

メイド豪鬼 運命に遭遇する

「はあ……はあ……はあ……はあ……！」

今にも泣きそうな少女の手を引いて、響は必死の形相で走って行く。

この時、初めて彼女は『命懸け』という言葉の意味を正しく理解した。

「急がなきゃ……急いで逃げなきゃ……！」

「お姉ちゃん……！」

背後からは、触れただけで人間を灰に変えるノイズの群れが。

万が一にでもアレに追いつかれれば、何の力も無い自分達では成す術がない。

息も絶え絶えになりながら、響はどうしてこんな事になったのかを考えていた。

この日、響は親友の未来と一緒にツヴァイウィングの最新曲のCDを購入する為に、放課後に街のCDショップへと足を運んでいた。

店の中をのんびりと見て回り、ようやくして目的の品を見つけた……その時だった。

いきなり街中に警報が鳴り響き、次々と街中の店のシャッターが閉じていく。

それと同時に人々が一斉にどこかへと走っていく光景が見えた。

『ノイズ』が来た。

これまでも何度かノイズの警報を耳にし、その度に避難を繰り返していた彼女達は、直感的にそう思った。

今回も、急いで店から出て避難用のシェルターへと急がなければ。

そう思っていた矢先、響は店の中から、泣きながら一人で母親の事を叫んでいる少女の姿を見つけた。

恐らく、避難の途中で親とはぐれてしまったのだろう。

このままでは少女の命が危険に晒される。

常日頃から人助けを信条としている響に、その子を見捨てるという選択肢は存在していなかった。

結果、彼女は親友の必死の呼び掛けにすら応じず、そのまま混乱渦巻く街中へと飛び出していつてしまった。

そして、今に至るといふ訳だ。

本来ならば自衛隊が避難誘導を行っている筈だが、周りには誰もいない。

恐らく、既に彼女達以外の人々の避難は完了してしまっているのだろう。

つまり、二人は逃げ遅れてしまった事になる。

その事実が付きながらも、必死に理性で否定しながら只管に走る。

(どうしよう……どうしよう……！　これ以上、逃げ続けてたら私も先にこの子の体力が尽きちゃう……！　ああ……こんな事になるんだったら、未来みたいに運動系の部活にでも入っておくべきだったかも……)

後悔先に立たず。今更言っても後の祭りである。

重要なのは、過去を嘆くよりも今をどうするか、なのだから。

「こうなったら……」

何を思ったのか、響は少女の体を抱えてから、そこら辺にある物陰へと隠れる事に。

これでノイズをやり過ごせたら最高だが、実際にはどうなるかは全く分からない。

響自身も恐怖に震えながら、それを誤魔化す為に庇うように少女を抱きしめる。

「怖いよお……お姉ちゃん……」

「大丈夫……大丈夫だよ。私が付いてるから」

きつとノイズは自分達を見失ってどこかに消えてくれる。

そう信じて、必死に息と気配を殺す。

心臓の鼓動音すらもノイズに聞こえてしまふんじゃないか。

そんな疑心暗鬼にすら捕らわれていた響の胸の中に、突如として胸の中に謎の旋律が流れてきた。

本人からすれば意味が分からなかった。場違いだと思った。何を

考えてるんだと思った。

それでも、彼女は無意識の内に『ソレ』を口ずさんでいた。

「Balwisyall Nescell gungnirtro
n」

その瞬間、彼女の体が光に包まれた。

・
・
・
・
・
・
・

二課の本部では、現場へと急いでいる装者二人と豪鬼の様子をモニターしていた。

「相変わらず、物凄い速度で飛ばすなあ……」

「しかも、今度は女の子を二人も乗せて」

「……あの空飛ぶ箒に乗った魔法少女みたいな子に関しても、後で聞くべきかしらね」

「全ては今を乗り切ってからだ」

「そうね」

一般市民の避難自体は無事に完了しつつあった。

今更ながら、自衛隊の手際の良さには舌を巻く。

「こ…これはっ!?!」

「どうしたっ!?!」

「ノイズとは全く異なる高出力エネルギー反応を検知しました!」

「特定急いで! 私も手伝うから!」

「分かりました!」

了子も機器の前に座り、オペレーター二人を手伝う形で解析を急ぐ。

その顔には珍しく焦りが見えていた。

「この波形は……まさか、アウフヴァアッヘン波形っ!？」

「何いつ!？」

「しかも、この波形はまさか……!？」

了子の助力もあってか、すぐに波形の特定はされ、その結果がモニターに表示される。

だが、それはその場にいる誰もが驚愕するような結果だった。

「嘘……でしょ……?？」

「こんな事が……!？」

「 GANG ニールだとおっ!？」

.....

.....

.....

.....

.....

今から向かっている現場にて GANG ニールの反応が出た事は、すぐに装者の二人にも伝えられた。

翼のバイクにて疾走し、その後ろに乗っている奏は大きく目を見開いて驚いた。

「嘘だろ……? なんて GANG ニールの反応が出るんだよっ!？ ちやんと GANG ニールはここにあるぞ!？」

「急ぎましょう奏。私も本気で訳が分からないけど、それは私達が到着すれば分かる事だから」

「そう……だな。まずはノイズ共をぶっ倒す方が先決か」

「その通り。豪鬼さんも今向かっている最中らしいから、私達も急がないと!？」

「ああ! 師匠にばかり苦勞を掛けさせる訳にはいかないもんな!？」

「そういう事! それじゃあ、スピード上げるからしっかりと掴まっ
てて!？」

まるでどこぞの戦闘民族の如きジャンプ力を発揮し、あっという間にその場から離脱。

このまま跳躍を繰り返せば逃げられそうだが、未だに今の状況を正しく認識していない響は、あろうことか真っ直ぐと着地してしまっただ。

しかも、その途端にノイズ達に囲まれてしまう始末。

「う…嘘…!!?」

「お姉ちゃん…!!」

絶体絶命。万事休す。これまでなのか。

いつも前向きな響ですらも、本気で絶望しかけた…その時だった。

「そこの君!! 今すぐに真っ直ぐに上に跳べ!!」

「えええっ!?!」

「いいから早く!!」

「は…はい!!」

謎の言われるがまま、響は再び大ジャンプをする。

その瞬間、仄暗い物陰が眩しく光り出した。

「はああああああああああっ!!」

真 空 波 動 拳

青白い巨大なレーザー砲のような一撃が、響たちを囲んでいたノイズ達を文字通り一網打尽にした。

「す…凄い…!!」

自分の中の常識が壊れてしまうような攻撃に、響は純粹に驚いていた。

着地をしてから攻撃が放たれた場所を振り向くと、物陰から以前に見た白い道着の男、リュウが悠然と歩いてきた。

「あ…あなたはっ!?!」

「ん? 君は確か、あの時の…!!」

リュウの方も響の事を覚えていたようで、顔を見た途端に目を見開いた。

だが、すぐに彼女が抱えている女の子を見て、すぐに事情を察した。

「成る程な。そういうことか」
「え？」

リュウが響に背を向けて構えると、先程やって来た場所からノイズの増援がやって来ていた。

しかも、今度はそれなりに体が大きな個体も交じっている。

「ここは俺達がなんとかする。君はその子を守る事だけを考えるんだ」

「逃げるんじゃないんですか？」

「ここで下手に逃げたりしたら、また別の場所で奴等に襲われる危険性がある。そうなるぐらいなら、ここで迎撃をした方がまだ安全だ」

「な…成る程……。でも、一人じゃ……」

「大丈夫。俺は一人じゃない」

「へ？」

響が目を丸くしてると、今度は後ろから赤い影がいきなり飛び出てきて、炎と共にノイズの群れを粉碎した。

疾風迅雷脚

「うええええええええええええええええつ!」

炎を纏いながら降り立ったのは、リュウとは対照的な真っ赤な道着を着た金髪の男だった。

彼こそ、リュウの幼馴染にして、共に剛拳の元で修行に励んだ兄弟弟子にして、お互いに宿命のライバルと認め合っている男「ケン・マスターズ」である。

「遅かったなケン」

「文句を言うなよ。思ったよりも数が多かったんだよ」

笑い合いながら拳をぶつけ合う二人。

鋼よりも堅牢な男の友情が其処にはあった。

「で、その子達はなんなんだ？」

「どうやら、逃げ遅れてしまったらしい」

「成る程な。……お嬢ちゃんはどうして、そんなコスプレしてるんだ？」

「いや、正直言って私にも何が何だか……」

ケンの素朴な疑問に戸惑う響。

本人も自分の身に何が起きたのか全く理解出来ていないので、この反応は仕方がない事だった。

「つと。んな話をしてる場合じゃなかったな」

「ああ。まだデカい奴が残っている」

「となれば……」

「やる事は一つだな」

大型ノイズに対して構える二人。

蒼き風の拳を持つ男、リュウ。

烈火を纏いし格闘王、ケン。

嘗て、幾度となく世界の危機に立ち向かってきた最強の二人がここに揃った。

「リュウ、久々にアレをやるか!」

「アレか! 分かった!」

リュウとケンが一緒に走り出したと思いきや、ケンがいきなり飛び上がり、そこから炎を纏った竜巻旋風脚を放ちながらノイズの背後に回る。

その際にもちゃっかりとダメージは入っているのが、なんともケンらしい。

「いくぞ、リュウ!」

「おう!!」

一瞬のうちにノイズの懐に潜り込んでいたリュウとケンが放つ怒涛の乱舞攻撃。

唯でさえ気を纏った二人の攻撃はノイズにとって一撃必殺の威力があるのに、それを連続で浴び続けている。

リュウが拳を放てばケンが蹴りを。

逆にケンが拳を放つ時、リュウは蹴りを撃つ。

その動きはまさに阿吽の呼吸。息が合っているなんて次元じゃない。

事前に全く打ち合わせなんてしていないにも関わらず、その動きはコンマ1秒の狂いも無い。

これ程のコンビネーションが出来る者など、果たしてどれだけの
だろうか。

「こいつで!!」

「トドメだ!!」

双龍拳

風と炎の昇龍拳が合わさり、二乗化したその圧倒的な威力により、
二人よりも遥かに巨大な体軀を誇っていたノイズは手も足も出ずに
消滅していった。

「よし!!」

言葉が出なかった。

ノイズの前では人間なんてどこまでも無力だと思っていた。何も
出来ないと思っていた。

けど、目の前の二人は違った。

普通なら怯えて逃げるような相手にも、全く恐れることなく立ち向
かい、見事に勝ってみせた。

これこそが人間の可能性。これこそが人間の強さ。
心臓がとてつもない速さで鼓動する。

今、自分は興奮をしているのだと響は自覚した。

そして、生まれて初めて自分が人間であることを誇りに思った瞬間
でもあった。

「響さん！ 御無事ですかっ!?! ……って、え?」

「リュウさん……!?!」

「ウキユ〜……」

「は…早すぎるぞ……」

そこに遅れて到着した豪鬼たち。

さくらはリュウがいた事に驚き、庵は目を回し、デミトリは疲れ果
てて状況把握どころではなかった。

この日、本当の意味で運命の歯車が回り始めた。

メイド豪鬼 呆れる

「……で？ 誰でもいいので、このカオスな状況を説明してくれませんかね？」

もう本気で訳が分からない。

私がバイクをかつ飛ばして超特急で現場に急行したかと思いきや、いつの間にかノイズは全滅していて、この場には何故かりゅうとケンがいい汗掻いた状態で笑っていて、それを目が点になった状態で見ているシンフォギアを纏っている響さん。

彼女が着ているのは、間違いなく原作でも纏っていたガングニールだ。

やっぱり、こうなってしまったのか……。

「え……え……と……そう言われましても……私にもいきなり過ぎて何が何だかって感じで……」

「でしようね」

未だに困惑しまくりの響さんに状況説明は流石に求めてませんよ。

仮に冷静だったとしても、ちゃんと説明出来るかは甚だ疑問ですけど。

「もしかして、出現したノイズを一掃したのはお二人ですか？」

「ああ」

「まあな。にしても、まさか本当にメイドになってやがるとはな……。しかもそれ、コスプレの衣装とかじゃなくて、本職の奴が着る服だろう？ よく手に入ったな……」

バイクから降りて二人の元まで歩いていくと、ケンからマジマジを体を見られた。

彼の場合はリゅうとは違って俗世間にも詳しいですから、ちゃんと会話が成立するんですね。ちよつとだけチャライ部分があるけど。

「リゅうさん！」

「さくら？ なんでここに？」

「豪鬼さんをお願いして連れて来て貰いました！」

「みたいだな。豪鬼がメイドでバイクって……もう滅茶苦茶じゃねえ

か」

「そこ。うるさいですよ」

私が何に乗ろうがアナタには関係無いでしょうに。

ケンだって普段から高級車に乗ってる癖に。

「……んで、さつきからバイクの上で伸びてる女の子と、箒に跨って宙に浮いてる子は何なんだ？」

「お二人もよく知ってる人物達ですよ」

「あの赤い髪の子に関しては、なんとなく予想がつくけどよ……」

なんとか復活した庵さんが、頭を揺らしながらもヘルメットを外してから降りてきた。

「ううう……まだ頭がクラクラする……」

「無理もあるまい。あの速度は普通じゃない」

流石に心配になったのか、デミトリさんが彼女の背中を擦ってあげていた。

傍から見ると美少女同士の美しい友情に見えますけど、実際の中身は成人男性と吸血鬼ですからね。

読者の皆さんも、決して変な夢は見ないように。

「……む？ その無駄に白い道着と目立つ赤い道着は……」

「リュウとケン・マスターズか」

「俺等の事を知ってるって事は、やっぱり……」

「まさかとは思うが、その赤い髪の子は……八神庵か？」

「そうだ……久し振りだな……う……！」

完全に酔ってしまったようで、早歩きで壁まで行ったかと思うと、そこでしゃがみ込んでしまった。

「んで、その魔法少女っぽいのは……」

「誰が魔法少女だ！ 私は誇り高き高貴なる吸血鬼だ！ 二度と間違えるなよ人間!!」

「その口調に吸血鬼って……誰かを彷彿とさせるよな」

「その予想は当たってますよ」

「へ？」

「彼女はあの『デミトリ・マキシモフ』その人です」

「え？」

「なあにいいいつ!? 冗談だろっ!?」

「冗談であればどれだけよかったことか……ハハハ……」

「笑いながら泣いてるし……」

彼……じゃなくて、彼女からしたら、もう笑うしかないんでしょうね。元の姿は完全になりを潜めて、完璧なまでの美少女となってますから。

取り敢えず、変な誤解が生まれる前に軽く事情説明。

かくかくしかじか。かくかくうまうま。

「つまり、デミトリの技が暴発した結果、庵とデミトリ本人が女の子になっちゃったと」

「そうです。そこから辺については余り深くツツコんであげないでください。本人達が一番気にしてるんで」

「分かった。その辺りは別に気にしないさ」

「ですよね! 二人共すっかり可愛くなって、今じゃ大人気ですから!」

そういうさくらさんも、密かにファンが増えつつあるんですよ?

自覚ありますか?

『あ……豪鬼くん?』

「あ。すっかり忘れてました。なんですか?」

『一応、こちらでもモニターはしてたんだが……なんだか前にも似たような事が無かったか?』

「そうですっけ?」

全く記憶にございません。

メイドである私にとって、荒事は日常茶飯事ですから。

「ところで、翼さんと奏さんは……あ、いいです。たった今、到着したみたいですから」

私達が話している間に、翼さんの運転して奏さんが後ろに乗ったバイクがやって来た。

まだシンフォギアは装着していないようで、ヘルメットを除けば普通の服装だ。

「遅れて申し訳ありません！ ……あれ？」

「なんか……もう終わってね？」

「みたい……ね……」

そうですね。分かります。よく分かりますとも。

この時、私は初めて心の底から二人に対して申し訳ない気持ちで一杯になった。

・
・
・
・
・
・

それから十数分後に二課の本部から他の黒服さんを連れて緒川さんがやって来た。

彼も現場を直接見て、顔を引き攣らせながら冷や汗を掻いてました。

「あの……豪鬼さん？ ご説明は……」

「ちよつと待つてください。実は私も少々困惑してしまって、頭の中を整理している最中なんです」

「そ……そうなんです」

本気で頭が痛くなる……。

本来なら私や翼さん、奏さんの二人と一緒にノイズを撃退し、そのまま原作の流れに沿って話を進めていくつもりだったのに……。

(ここでリュウとケンが登場するなんて誰が予想しますか!!)

完全に私達が噛ませっぱいじゃないですか！ すっごい恥ずかしいんですけど！

庵さんは黒服さんの一人に薬を渡されて飲んでるし、当の二人はツヴァイウイングの二人と話してる。

「あ…アンタ…もしかして、あの全米格闘王の『ケン・マスターズ』
かつ!？」

「もしかしくなくても、俺がそのケン・マスターズだぜ」

「おおおおおおおつ!!! まさか本物と会えるなんて思わなかった
!!」

「え…つと？ 奏？ この人と知り合いなの？」

「つ…翼、まさか知らないのか？ ケン・マスターズと言えば世界的な
有名人だぞ！」

「そうなの？」

「ああ！ 全米中の腕に覚えのある格闘家が集う大会で何度も何度も
優勝をかつさらってる世界トップクラスの超一流の格闘家だ！ 試
合の光景は日本でも中継されていて、すっごい大人気なんだぞ！」

「奏がここまで夢中になるなんて…」

「ハハハ…ケンには熱狂的なファンがいるんだな」

「それ、お前が言うのかよ？」

「なんだか盛り上がってますねえ。」

「ここで一番の重要人物である響さんは、なにやら書類を書かされて
いる。」

「多分、私が初めて二課と接触した時に書かされた物と同じやつだろ
う。」

「因みに、響さんが連れていた少女は、後でやって来た自衛隊の方々
が保護して、無事に母親と再会出来たんだとか。」

「この間会ったリユウはともかく、ケンまで日本に來ているとは意外
でした」

「そうでもないぜ？ 俺にとっては日本は第二の故郷だし、割と頻繁
に家族と来てたりするぞ？」

「そうだったんですか」

「これは素で知らなかった。」

「ケン家族サービスの出来るいいお父さんのようです。」

「あれ？ 豪鬼と仲良さげに話してるって事は、ケン・マスターズと知
り合いなのか？」

「知り合い……ですか。ある意味では、私と彼等とはそれ以上に関係になりませぬ」

「それはどういう……?」

「まず、このケンと似たような格好をしている彼はリュウといいまして、所謂ケンの幼馴染みたいな存在なのです」

「幼馴染か……言い得て妙だが、悪くは無いな」

何も知らない人達に説明する時は、これが一番楽なんですよ。

「リュウだ。よろしく頼む」

「ど……どうも……」

リュウから差し出された手を、恐る恐る握り返す二人。

さつきまでとは違った緊張が走っているようだ。

(この空気……なんだか豪鬼さんと似てる気がする……)

(すっげー爽やかな人だな……)

リュウってば、本当に誰彼構わずに仲良くなるうとしますね。

さくらさんが嫉妬しても知りませんよ?

「さつきの説明の続きですが、リュウとケンは同門……つまり、幼い頃から同じ師匠の元で修行を共にした兄弟弟子なんです」

「その師匠ってのは……まさか……」

「私の実の兄、剛拳です」

「マジですか!!」

マジです。

「だから、私と二人の関係を簡潔に述べると……」

「豪鬼は俺達にとって親戚の姉貴……に近いのかな?」

「俺にとっては目指すべき目標でもあるかな」

「あら。嬉しい事を言ってくれますね」

私が目標……ですか。

なんだか、やつと兄から一本を取ったような気分ですね。

「ははは……豪鬼の交友関係って……」

「大抵の事じゃ驚かない自信が付いたつもりだったけど……」

「おっと。この程度で驚いてちゃ、まだまだだぜ」

「はい?」

「俺やリユウもそうだけど、豪鬼も相当に顔が広いからな。俺等以外にも、とんでもない連中と普通に知り合ってるぞ」

「とんでもないって……あ、うん。とんでもないわ。」

「ケンの言ってる事は全く間違ってるわ。」

「はう……やつと終わったよお……」

「ここにきてやつと響さんのご登場。」

「どうやら、相当に参っている様子。」

「響さん。一先ずは御無事でなによりです」

「豪鬼さん……ありがとうございます。でも、なんでここに？」

「未来さんから電話があつたんですよ。避難中に響さんとはぐれてしまったと」

「未来……」

「響さんと未来さんはリユウとケンにも負けない仲良し同士。」

「その一番の親友を心配させてしまった事に罪悪感を覚えてしまったんでしよう。」

「ここは彼女を慰める為に、そつと頭を撫でながら軽く注意喚起でもしときましょう。」

「帰ったら、ちゃんと未来さんに謝るんですよ？」

「はい……」

「それと、誰かを助けたいと思う気持ちは立派ですが、それは他の誰かを心配させていい理由にはなりません。今後はちゃんと、周りをちゃんと見て行動しましょうね」

「へへ……なんだか、豪鬼さんってお母さんみたい……」

「お母さん……ですか。」

「私もいつか、誰かと結婚でもして子を産むのでしょうか……」。

「全く想像出来ませんけど。」

「それと」

「わっ！」

「彼女の肩を掴んでから振り向かせて、リユウとケンに向き合う形にする。」

「ちゃんと、この二人にもお礼を言いましょね」

「そうだった！ え…えつと…：助けてくれてありがとうございました！」

「気にすんなって。あれぐらい、俺等には当たり前の出来事だしな」

「これも修行の一環だ。それよりも、君に怪我が無いようによかった」

「また…：助けられちゃいましたね」

「覚えていたのか？」

「はい。忘れるなんて出来ませんよ…：あの時の事は…：」

あらら。なんだかちよっぴりいい雰囲気。

これは、さくらさんに強力なライバルが登場ですね。

「えつと…：さ。お前って、あの時の…：ライブに来てた奴…：だよな？」

「あ、はい。お久しぶりです」

響さんの体を見つめながら、奏さんが翼さんと小声で話す。

私には普通に聞こえてますけどね。

「なあ…：やっぱこれって…：あの時、アタシの GANG ニールの欠片を飲み込んだせいだよな…：？」

「だとは思うけど…：専門家じゃない私達で安易に判断しちゃいけないと思う」

「ここは矢張り、了子さんに詳しく検査して貰った方が賢明なんだろうか？」

でも、彼女だしなあ…：…：ちよつと信用性に欠けると言いますか…：。

「ところで、これってどうやって脱ぐんですかね？」

「…：どうやってだっけ？」

「今じゃもう殆ど感覚的にやってるから、言葉じゃ説明しにくいわね…：」

こればかりは私からは何も言えない。

自然と解除をされるのを待つしかない…：…：と思った矢先、響さんの体が急に光ってギアが解除された。

「あ。戻った」

毎度毎度思うけど、この装着のシステムって本当にどうなってるん

でしょうね。

一応の説明は受けましたけど、それでも分からない点は多々あるんですよね。

「お話し中に失礼します」

「緒川さん。どうしました?」

「司令とも相談したのですが、やはり、彼女達に本部に一度来て貰ってから詳しく事情を聴きたいという事になりました」

ふむ……妥当な判断だな。

あそこなら他の組織よりも信頼性は高いし、弦十郎さんの性格的にも手荒な真似だけは絶対にしない。

「ですから、我々と御同行願えますか?」

「わ……私ですか?」

「はい」

「うくん……豪鬼さんも一緒なんですよ?」

「豪鬼さんは私達の仲間ですからね」

「……分かりました。行きます」

「ありがとうございます」

どっちにしろ行く羽目にはなっただろうけど、彼女の的には私のような知り合いが入りだけでも随分と精神的に違うんだろう。

なんだかんだ言っても、彼女はまだ15歳の女子高生。

見知らぬ大人に囲まれては緊張だっただけだろう。

「出来れば、貴方方にもご一緒に来て頂ければ有難いのですが……」

「だってよ。どうする?」

「俺は一緒に行ってもいいと思う。豪鬼が仲間だと信じている人達なんだろう?」

「リュウがそう言うなら、俺もいいぜ」

「感謝します。その……そこにいる彼女達も大丈夫でしょうか?」

「あ……」

さつきからずっと静かだと思ってたら、まくだ庵さんは唸ってたんですね。

そして、デミトリさんが傍で呆れ、さくらさんは心配そうにしてい

る。

もう何個目のエチケツト袋を使っただけでしようかね。

「問題無いと思いますよ？ さくらさんはリュウと一緒に嫌でも来るでしょうし、庵さんとデミトリさんは性格に難はありますが、それでも聞き分けはいい方ですから。素直に話は聞いてくれると思います」

「豪鬼さんがそう仰ってくれるのなら。彼女達も一緒に連れて行きますよ」

はい。これで皆揃って本部に行くことが確定。

さて、どうなることやら。

余談ですが、今回出てこなかったベガとギースは各々にお仕事が多忙しくて来られなかったみたいです。

もしかしたら、どっちは次回辺り登場するかも？

メイド豪鬼 同行する

ノイズの発生現場に取り残されていた響さんを救出……したと言っているのかは微妙ですが、保護した事には違いないので良しとしましょうか。

ともかく、響さんに会う事が出来たのは本当によかった。

万が一、何か原作とは違う事が起きたりでもしたら本当に危なかったかもしれない。

しかし、原作のように体に突き刺さらなくてもギアが発現するなんて……本当にアレには謎が多いですね。

私のような生知識では分からないことだらけです。

なんて、この場で愚痴っけていても始まりません。

私はメイドらしく、目の前に起きている事を一つ一つ解決していくだけです。

色々と事情とかを説明する為に、響さんを初めとする面々には、以前の私のように二課の本部へと丁重にご招待する事に。

流石に手錠はしなかったが、それでも見た事も無い黒光りする車に乗せられた響さんは、なんだか落ち着かない様子だった。

同じように、二課の車両にリュウやケン、さくらさんや庵さん、デミトリさんも一緒に乗せられた。

歳の近い同性ということもあり、さくらさんは響さんと一緒に車に乗せられていた。

勿論、私や翼さんは自前のバイクにて走りましたけど。

その時、翼さんの後ろにまた奏さんが乗ったんですけど、凄く怯えている様子でしたね。

私達が知らない場所で何かあったんでしょうか？

こうして、私達は一路、二課の本部がある私立リディアン音楽院へと向かって行った。

.....

・
・
・
・
・

私達が向かった場所が学校だと知ると、案の定リュウたちは驚いていた。

「ここは……学校じゃないのか？」

「だよな……」

「ココがリディアン音楽院……始めてきたかも」

彼等を伴って中央棟へと歩いていくと、さくらさんが意外な反応を見せる。

やっぱり今時の女子高生、他校の噂なども沢山知っているのだろうか？

「さくらさんはリディアンの事を知っているんですか？」

「別に知ってるって程じゃないんですけど、神月さんが前にココの事を話してた事があって……」

「ああ……あのお嬢さんな」

「はい。『私なら余裕で入学出来ますけど、どうも校風が私好みじゃありませんのよね』って」

「なんじゃそりゃ」

「はっはっはっ。彼女らしいな」

それって完全に負け惜しみじゃありません？

彼女の頭脳なら余裕で入学出来そうですけど。

「あの……春日野さん」

「さくらでいいよ。私もそっちのことは響ちゃんって呼ぶから」

「それじゃあ……さくらちゃんは緊張とかしないの？」

「緊張？…なんで？」

「だって、幾ら豪鬼さん達が一緒とは言え、どこに行くのか全く教えて貰えなかったし……」

「う〜ん……」

天井を見ながら唸るさくらさん。

多分だけど、彼女はその手の悩みとは基本的に無縁だと思う。
それはきつと響さんもだろうけど。

「別に緊張とかはしないかな〜」

「そ…そうなの？」

「うん。寧ろ、ちよつとワクワクしてる」

「す…凄いんだね……」

「そうでもないよ。それぐらいでもないよ、リュウさんの背中なんて
追いかけられないし」

「リュウさんって……」

チラつと横目でリュウの事を見る響さん。

彼女からしたら、これで二回も彼に助けられた事になりますから
ね。

原作では二回助けたのが翼さんだった事を考えると、なんとも皮肉
ですが。

「私の憧れの人で、目標でもある人なんだ。私なんてまだまだなんだ
けどね」

「……………」

私から見ても眩しい笑顔で応えるさくらさんを見て、響さんも色々
と思う所があったみたいですね。

自分と同じ歳の同じ女子高生なのに、彼女は明確な目標を持って。
そこへと向かって只管に邁進している。

実に今更ですが、本当に将来が楽しみな子です。

このまま成長し続ければ、必ずや世界レベルの格闘家になれるで
しょう。

さくらさんには、それだけの才能と素質が確かに存在している。

「なんか凄い話をしてるな……」

「ええ。あの歳で既に自分の向かうべき目標をちゃんと持っている。
なんだか羨ましいな……」

「あのリュウって奴も、世界を渡り歩いている格闘家なんだろ？ ケ

ン・マスターズと同門ってだけで驚きなのに、豪鬼の兄貴の弟子だったなんてな……」

「人の縁とはどこで繋がっているのか分からないものね……」

「全くだな……」

翼さんと奏さんも、どうやらリユウやさくらさんを見て何かを感じた模様。

若者達が切磋琢磨して己が腕を磨き合う。

う〜ん……青春ですなぁ〜。

「あぁ〜……やつと少しだけ楽になった……」

「まだ顔が青いぞ？ 矢張り、あそこで大人しく帰っておけばよかったんじゃないか？」

「ふん！ オレはそんなに軟弱じゃない。それに……」

「それに？」

「……家族にはもう既に『少し遅くなる』とメールを入れてしまった。そんな状況で早く帰ってしまったらオレの立つ瀬がないだろうが……」

「プライドと自分の体調を天秤に掛けるな……」

「お前にだけは言われたくはないわ」

あの二人、なんだか急に仲良くなりすぎじゃありません？

これはまた、地獄歌の名物が増えそうな予感ですね。

・
・
・
・
・
・
・

例の急降下するエレベータに乗って地下まで降りると、またもや長い廊下を歩いていく。

まだキチンと体を鍛えていない響さんは当然のように手摺に掴まっていたが、他の面々は普通に立っていた。

それを見て物凄く驚いていた響さんだったが、彼等彼女等にとってこれぐらいは当たり前ですよ？

リユウやケンはもちろんですが、さくらさんも女子高生としては破格の身体能力を誇ってますし。

吸血鬼であるデミトリは普通に平気だし、庵さんに至っては腕組みまでしていた。

ま、彼女の場合は少し強がっている面もあるかもしれないけど。

「あれ？ 意外と驚かれないのですね？ 学校の地下にこんな施設がある事に」

「いや、表情に出していないだけで驚いてはいるさ。ただな……この手の建物は見慣れてしまってたな」

「そっか。リユウは前にアベンジャーズの基地に行ったことがあったんだっただな。ま、俺もだけど」

アベンジャーズ。

私もよく知っている、アメリカに存在している『地球最強のヒーローチーム』。

以前にケンを訪ねてリユウがアメリカを訪れた際に、彼等と一緒にウルترون軍団と戦った事があるとか。

その際にしれっと彼もアベンジャーズに誘われてるんですよ。

因みに、私は逆にこつちをライバル視しているウルヴァリン経由で

X-MENに割とマジで誘われた事があったりして。

殺意の波動はミュータント的な能力とは違うんですけどね。

「アベンジャーズ……」

「緒川さん、知っているのですか？」

「はい……裏にいる人間で彼等の事を知らない者はモグリと言われる程のチームです。これまでに幾度となく世界規模の危機を未然に防いできたヒーロー達で、実はアメリカに出現しているノイズの殆どは彼等が撃破しているらしいです」

「あんな芸当が出来るのって豪鬼たちだけじゃなかったんだな……」

「世界は広いとよく言うが、まさしくその通りだな……」

翼さんの仰る通り、貴女達が想像している以上に世界は広いので
す。

無数の出会いが人を成長させ、より高みへと導く。

そうして、私もリュウもケンも、そしてさくらさんも強くなつて
いったんです。

「この廊下……まるでネスツの基地を思い出すな」

「窓が全く無いな。吸血鬼としては理想的だ」

後ろの二人も何か言ってますが、私には分からないので無視しま
しょう。

ネスツなんて、知ってはいるけど知りませんから。

「おい。その忍者男」

「に……忍者男って、もしかして僕の事ですか？」

「そうだ。お前の動きの全てがオレの知っている忍によく似ているか
らな。で、どこまで連れて行く気だ？」

「どこまでとは？」

「オレ達は事情聴取の為に連れて来られた筈なのに、それらしい部屋
に連れていかれる訳でもなく、かと言ってどこかに幽閉する様子も見
受けられない。貴様等、一体何が目的だ？」

ふむ……ここまでずっと歩かされては、流石の庵さんも怪しむのは
当然か。

私も最初は同じような事を言いましたからね。

「もう少しで到着しますから、それまでの辛抱ですよ」

「豪鬼……お前は知っているのか？」

「知っているというよりは、なんとなく予想が出来るといった感じで
すね」

「予想だと？」

「ええ。多分ですけど、私がココに来た時と同じ事をするつもりかと」

「お前は何をされたんだ……」

「一言で表現するのは難しいです。百聞は一見に如かずという言葉も
ありますから、まずは行きましょう」

「フン……いいだろう。今だけは貴様の言う事に従ってやる」

「はいはい」

全く素直じゃないんだから。

露悪的な発言が多い彼女だけど、私や京さんは知ってるんですよ。

本当は貴女が優しい人物だって事はね。

女の子になった事で、正真正銘のツンデレヒロインになってしまいましたけど。

「到着しました。ここです」

やっぱり……。

ついたのは司令室。ってことは、今から起きる事は……。

緒川さんが扉を開けると、そこで我々を待ち受けていたものは……。

【熱烈歓迎！ ようこそ二課へ！ 立花響さんと他の皆様！】

沢山のクラッカーと拍手の嵐だった。

あと、他の皆さまって……絶対にくんどくなっただけでしょ。

だって、響さんの名前の横に追加の紙を張った後が丸見えなんですよん。

はあ……ちゃんと後で皆に片付けるように言わないと。

ちゃんと私も手伝いますけどね。

メイド豪鬼　今度は歓迎する

「「「「」」」」」」

まあ……予想はしてたんですけどね。

全員揃って目が点になって呆けてますし。

「はあ……またやるんですか？」

「勿論だとも。こうして皆で大騒ぎをする機会を設けないと、ストレスで参ってしまいそうな職場だからな」

「それは分かりますけど……」

「だとしても、私に一言ぐらい教えてくれてもよかったですんじゃないんですか？」

そうしたら、少しはお手伝いしたのに……。

「本当は豪鬼くんにも手伝って貰おうかとも思ったんだが、普段からノイズ討伐に本部の掃除や洗濯など、頭が上がらない程に頑張っている君に頼りつきりになるのもどうかと思っただけな」

「私は私がしたくてしているだけだから、そんな事を気にして貰う必要はないのですが……」

「それでも、さ。さあつ、君達も遠慮無く入って来てくれ！」

あくまでもフレンドリーにしているけど、さくらさんや響さんの女子高生コンビは未だにどうしたらいいのか分からないでいる様子。

それは違い、コミユカMAXなリユウとケンの二人はすぐに自分を取り戻して入ろうとする。

「最初は驚いたが、歓迎をされて悪い気はしないな」

「だな。今思えば、俺にとってこの手のパーティーって日常茶飯事だったわ」

「そういや、ケンの実家って大金持ちでしたね。」

「このブルジョアめ……！」

「リユ……リユウさんが行くなら私も！」

「ちょ……ちよつと待ってえ〜！」

はい。女子高生組も参加決定。

一番の問題である女体化コンビは……。

「フン……下らん。オレは帰る」

「フツ……貴様のような人間に、このような催しは無理か」

「なんだと……!?!」

「私は魔界でも最も高貴なる吸血鬼だからな。この手のパーティーなどはいつも参加している。時には私から開催する程だ」

「……………」

「普段から肉ばかり食っているから、中身まで野蛮になっていくのだ。全く……普通ならつかなくてもいい場所にまで肉が付きおつてからに……」

「お前はどこを見て言っている!」

間違いなく胸ですね。

現在の庵さんは、どこに出しても恥ずかしくない立派なロリ巨乳になつてますから。

それが彼女の人気に一因にもなってるから皮肉ですよ。

「そんな訳で、私は遠慮無く入らせて貰おう。お？ よく見たら中々に大きな骨付き肉まであるではないか」

「!?!」

次の瞬間、庵さんは風になった。

私達の誰もが彼女の姿を捉える事が出来ず、気が付いた時にはその手に骨付き肉を持って無表情で、でも嬉しそうに肉にかぶりついてた。

「モキユ……モキユ……」

「み……見えなかった……」

「アイツ、肉が好きだったんだな」

「らしいですよ。今みたいになるまでは一人暮らししていたみたいで、料理とか全部出来るって自慢げに言っていました」

「あの性格でその能力って……」

この中で数少ない常識人枠のケンが本気で驚く。

でも、意外とエプロン姿が様になってるから不思議なんですよね。

仕事場の他の子達に料理を教えているところを何回か見た事ありませんし。

そんな訳で、結局は全員参加が決定しましたと。
後で二課の全員に片付けを手伝うように言わないとな……！

・
・
・
・
・
・

お互いに軽く自己紹介をしてから、その後は完全なフリータイム。
皆が皆、好きに動いて色んな物を食べて、色んな人と話している。
なにやら響さんが、いつの間にか回収されていた自分の鞆の中身を
調べられていた事に驚いたり、恐らくはこれから行動を共にする機会
が増えることになるであろう奏さんや翼さんと緊張しながらも話し
ていた。

「ようやくまともな話事が出るな。まずは自己紹介からか。あた
しは……」

「いや、名前なら二年前から知ってますし」

「そりゃそつか。なんせ、アタシ等のライブに来てくれるぐらいだし
な」

「こつちこそ自己紹介しないと。立花響です。よろしくお願いま
す」

「響……な。コツチこそよろしくな」

「よろしく」

ふむ……原作のような険悪な雰囲気ではないようですね。
奏さんが生きている事が最大の原因でしょうけど。

「あの……お二人って豪鬼さんともお知り合いなんですか？」

「知り合いつていうか……」

「武の師匠だな」

「師匠っ!？」

本当に、いつの間には私はお二人の師匠になったんでしょね。

最初はそんなつもりは毛頭なかったんですが、気が付けば自然とそんな風になってたんだよね。

そこまで大したことはしてないんですけど。

「豪鬼ってメイドになる前は世界中を旅する格闘家だったらしいぞ」

「その中で数多くの戦士達と拳を交え、同時に無窮の絆を紡いできた」と聞いた。その絆があるからこそ、今の自分があるとも」

「知らなかった……」

「そうなのか？　なんか、豪鬼とは仲良さそうに見えたけど」

「はい……家が近所な事に加えて、よく朝の通学路でも会ったりするんで……」

「そういや、前にそんな事を言ってたっけ。仕事に行く前の朝の時間は、いつも道の掃除に費やしてるって」

「本当に豪鬼さんには頭が上がりないな……。まさに、誰もが理想とする女性だ」

うぐ……！　翼さん、そんな純粋な目でそんな事を言わないでください……。

彼女はその育ち故に天然気質な所があるけど、こんな場でそれを発揮してほしくなかった……。

「ん？　豪鬼くん、照れているのか？」

「照れてません」

「その割には顔が赤いが……」

「暖房が利きすぎてるだけです」

「そうか……」

なんでか、弦十朗さんだけには自分の照れてる顔を見られたくない……。

「ケ……ケン・マスターズ……世界的な超有名人が目の前につ!？」

「お？　もしかして俺のファンかい？」

「は……はい！　日本で試合が行われた時は欠かさず見に行ってます!！」

「そいつは嬉しいね！ なんなら、サインでもしてやろうか？」
「いいんですかっ!？」

「当たり前さ。俺は自分のファンは大切にする主義なんでね」
「ありがとうございます!!」

あらら。どうやら藤堯さんはケンの熱狂的なファンだったようです。

彼の場合は、色んなメディアにも進出してるみたいだから、こういう事は予想出来てましたけど。

「あく！ アタシにもサインくれよ〜！」

「いいぜ！ 天下のツヴァイウイングの一角が俺のファンだなんて、格闘家冥利に尽きるってもんだ」

あの二人……性格似てますもんね……。

よく見たら、イメーヅカラーも一緒だし。

「リュウさん。いつ日本に戻って来てたんですか？」

「ついこの間さ。ちよつとした気紛れだったんだが、どうやら戻ってきて正解だったようだ。さくらにもまた会えたしな」

「はい！ またいつか、私と戦って貰えますか？」

「勿論だとも。あれからどれだけ腕を上げたのか見せてくれ」

あの二人……こんなにも仲がいいのに微塵も発展しないんですよ……。

いい加減、リュウもマジで落ち着く事を考え始めた方がいいと思うんですけど。

何気に候補は何人かいるんですから。

「お二人は豪鬼さんと同門だと伺いましたが……」

「まあな。俺達の師匠である剛拳先生が豪鬼の兄なんだから、当然と言えば当然なんだけど」

今にして思えば、私達の流派も中々に広まりましたよね。

リュウやケンを通じて、さくらさんやケンの弟子であるショーンさん、それからあの『サイキョー』な男もしれっと同門ですしね。

お師匠様は、草葉の陰にて何を想っているのでしょうか……。

「同門っていつでも、俺達と豪鬼とじゃレベルが違うけどな」

「ああ。一つ一つの技のキレ、足運びや一瞬の判断力など、彼女を見ているとまだまだ自分が未熟であると嫌でも思い知らされる」

「だからと言って悲観はしてないんだけどな」

「な…何故ですか？」

「未熟と言う事は、自分にまだ成長の余地が残されているって事になる。今よりも更に高みへと至れるかもしれないと思うと、それだけで嬉しくなってしまうのが、俺達『格闘家』という人種なのさ」

「成長の余地がある……」

人生の先輩として、リュウとケンが翼さんになにやらアドバイスをしているみたい。

その手の経験だけは異常なまでに豊富ですから、同じように武に生きる翼さんには最高のお手本になるでしょうね。

「なんだか嬉しそうだな」

「そう…ですね。私は嬉しいのでしょう。兄の弟子である二人が、一人の人間として、格闘家として立派に成長してくれたことに」

「俺から見ても、彼ら二人は素晴らしい人格者に見える。なんと見えばいいのか……とても眩しく見える」

「かもですね。事実、彼等に影響を受けた人間は多々いますから。時には悪の道へと行こうとした者を改心させたこともありますし」

「それは……凄いな……」

「はい。本当に……自慢の『弟たち』ですよ……」

どうも、私は彼等にだけは不思議と過保護になってしまいうくらいがあるようだ。

兄妹二人で生きてきた私達にとって、彼等も大切な家族みたいなもの……だからかもしれない。

「いい顔だな。まるで、自分の子供を慈しむ母親のような顔だ」

「なら、父親は弦十郎さんがしてくれますか？」

「なっ!？」

いつもいつも言われてばかりじゃないんですよ。

時にはこうして反撃しないと……って、なんでここで黙るんですか。

逆にこつちが恥ずかしくなってくるんですけど？

「……………」

うぐ…………急に彼の顔を見れなくなっちゃった…………。

「なあ…………あの二人って付き合ってたのか？」

「そう思いますよね？　でも、本人達はそんなつもりはないっぽいんですよ」

「結構、お似合いのカップルだと思うんだけどなく」

そこ、私達が何も言わないからって好き放題言わない。

特に藤堯さん、後で覚えておいてくださいね？

「な…なにいつ?!　この少女が、あの『八神家』の次期当主?!」

「モキユモキユ…………少女って言うな。コツチだって好きでこんな姿をしてる訳じゃない。それに、こんなナリでも、お前よりは年上だ」

「え…………マジ？」

「マジだ。無論、実力も貴様等よりも上だ」

「八神家といえば、代々伝わる古武術があると聞くから、強いのは当然だが…………」

「ふん。まさか、あの『風鳴』の人間が歌手デビューをしているとは思わなかったぞ」

「知っている…………のか？」

「当然だ。『三種の神器』と『防人』は切っても切れない関係らしいからな」

庵さん…………さつきから肉ばかり食ってません？

彼…じゃなくて彼女は京さんとは違って、その辺はちゃんとしてるから大丈夫でしょうけど。

「ほう…………？　中々にいいワインを揃えたな」

「ね…ねえ…………貴女って本当に吸血鬼なの？」

「さつきからそう言うてるだろうが。何度言わせる気だ」

「いや…………だって…………」

「どこからどう見ても、中学生ぐらいの女の子にしか見えなくて…………」

「…………それについては詳しくは聞くな…………恥の上塗りになる…………」

「デミデミちゃんも大変なのね…………」

「デミデミちゃん言うな。それと、そこにある皿を取れ」

「はい、どうぞ」

本人も相当に気にしてるみたいですね。

そりや言えませんよね。くしゃみをしたせいでマッチョボディから美少女になっただなんて。

にしても、彼女が友里さんと仲良さげなものには普通に驚きましたけど。

あ、なんか頭を撫でられてる。嫌そうにそれを振り払ったけど。

あれ？ いつの間にか響さんと了さんがいなくなってる。

そっか。例の検査に行ったんですね。道理で普段から無駄に騒がしい彼女が大人しいと思った。

それから私達のドンチャン騒ぎは続き、響さんが戻ってくるまで賑やかだった。

因みに、リユウたちは有事の際には協力体制になる的な感じで話が纏まった様子。

以外にもデミトリさんが話の纏め役だったのは凄かった。

伊達にお貴族様じゃなかったって事ですか。

・
・
・
・
・
・

二課本部にある了子の研究室。

そこで彼女は一人、響の検査結果を記したパソコンと睨めっこしていた。

「あの少女……口からガングニールの欠片を飲み込んだと聞かされた時は『んなアホな』と思ったけど、今日の検査で納得出来た……」

彼女が少し操作すると、そこには検査を受けている時の響の様子が映し出される。

「彼女の体内からは欠片は全く検出されなかった。でもその代わりに全身から聖遺物の反応が検出された。この結果が示す事は唯一つ」
手元にあるコーヒーマグを一口飲む。

「立花響は既にガングニールと融合している。彼女自身が生きる聖遺物のような存在となってしまうている。それならば、あの時にあの子がギアを纏う事が出来たのも納得できる。なんて事は無い。彼女はただ単に『戦闘モード』になっただけなんだから。それよりも……」
今度は豪鬼のデータをディスプレイに表示させる。

そこには、これまでの検査にて得られた彼女の身体に関する情報が記載されていた。

「今日までの調査でやつとハッキリした。彼女の宿す『殺意の波動』、これはやつぱり……あの時、絶対不死である『あの女』を唯一、完全消滅寸前まで追い詰める事が出来た力……。今にして思えば、あの時に『彼』と一緒に戦っていた『少女』に豪鬼ちゃんはよく似ていた……。もしかして、豪鬼ちゃん達は彼女の子孫……?」

と、そこまで考えてから頭を振った。

「流石にそれは考え過ぎか。単純に他人の空似でしょうね。そんな事よりも……」

画面を下げていくと、そこには豪鬼と剛拳が共闘している写真があった。

「豪鬼ちゃんの『殺意の波動』と、その兄である剛拳の『無の波動』……。間違いなく、この二つこそが最後の希望となる……」

背凭れに体を預けながら、背中を伸ばしつつ天井を見る。

眼鏡を外してから、普段は纏めている髪を解くと、そこには二課の者達も知らない彼女のもう一つの姿があった。

「……私が動く時が来た……って事かしらね……」

そう呟いた彼女の瞳には、燃えるような決意が宿っていた。

メイド豪鬼 励まされる

「はあ……」

響さん他のドタバタ歓迎会が終了し、私は自分の部屋に戻って来ていた。

勿論、二課の皆でちゃんと後片付けはしましたけど。

因みに、今の私の恰好はメイド服じゃなくて部屋着になってます。

と言っても、下着の上に適当なシャツを着ているだけなんですけどね。

この方が体が楽でいいですよ。

「なんとなく想像はしてたけど、やっぱり響さんは二課に協力することになりましたね……」

と言っても、まだ正式に二課のメンバーになった訳ではない。

彼女は翼さんのように最初から関係者だったわけじゃないし、奏さんのように確固たる目的を持っているわけでもない。

響さんは事故のような形で巻き込まれたに過ぎないのだ。

(ある意味では、ちゃんと原作に沿っているとさえ言えないけど……)

原作とは大幅に違っている部分があった。

それは、響さんやリユウ達が帰った後に聞かされたことだった。

・
・
・
・
・
・

「なん……ですって……?」

了子さんから聞かされた時、私は本気で己が耳を疑った。

「あの時、飲み込んだガングニールの欠片が響さんの体を融合して、一体化してしまった……？」

「ええ。彼女の体を少し検査してみたんだけど、本来ならばお腹の辺りから検出される筈のガングニールの反応が、響ちゃんの全身から出てきたの。これが表す事はつまり……」

「響さん自身が『聖遺物』になってしまった……」

「そうなるのかしらね……」

余りに出来事に、私は生まれて初めての眩暈を覚えた。

思わず足がふらついて、その場に倒れそうになる。

「豪鬼くん！」

よろけた私の体を、弦十郎さんが後ろから支えてくれたお蔭で、なんとか倒れずにはすんだ。

同時に、少しだけ彼の優しさが嬉しかった。

「今のあの子は、見た目も中身も完全に人間ではあるけど、そこに新しくシンフォギアの能力が上書きされた状態になってる。完全な生体融合ね。私も長い間、聖遺物の研究をやってきたけど、こんな事例は本当に初めて。これから先、何が起こるか全く予想が出来ないわ」

「そう……ですか……」

「でも大丈夫よ。生きていく上では全く支障はないし、これからも響ちゃんには定期的に検査をして貰うわ。今は何も分からなくても、これから何かが分かるかもしれない。だから、そんなに気を落とさしちゃダメよ、豪鬼ちゃん」

「はい……分かってます……分かってはいますが……」

まさか、彼女に励まされるとは思わなかった。

もしかしたら、これが彼女の本来の姿なのかもしれない。

「やっぱり……思わずにはいられませんね……。もしもあの時、私が介入しなかったら、響さんがそんな事にはならず済んだのかもしれないと……」

「そんな事は無い!!」

「弦十郎……さん……？」

私を振り向かせて、肩を痛い程に掴んできた。

その顔はとても辛そうで、でも、なんとか耐えているようにも見えた。

「君があの時、来てくれたお蔭で大勢の命が救われた！ 下手をしたら、あの場で翼や奏も討ち死にしていたかもしれないし、響くんだった無事じゃなかったかもしれない！」

「それは……」

「確かに君の技の余波でガングニールが砕け、それを飲み込んだのが切っ掛けとなって今のようになっちゃったが、それでもまだ彼女達は生きている！ 君がその手で助け、救った命だ！ その事を後悔するのだけは絶対にはいけない!!」

彼の言葉は、私の心に真っ直ぐに突き刺さった。

例え原作介入をして改変をしても、それで何らかの歪みが生じてしまったとしても、その事で笑顔を取り戻した人達がいる。

私は、原作の事を尊重しすぎるあまり、最も大切な事を忘れていた。
(ここは物語の世界じゃない……ちゃんとした『現実』なんだ……。それなのに私は……)

道筋レールの通りに歩かないと意味が無いと、無意識の内にそう思い込んでいた。

でも、それは大きな間違いだった。

「ありがとうございます……少しだけ気が楽になりました」

「そうか……。だが、少し強く言い過ぎたかもしれないな……」

「そんな事はありません。もしも貴方がいなかったら、私は延々と自分を責め続けていたかもしれないね……」

「君なら必ず立ち上がると思うがな……」

「それでもないですよ。」

幾ら体が強くても、中身はどこにでもいる一般人ですから。

そう簡単にメンタルが鍛えられれば、誰も苦勞なんてしません。

「んもうっ！ 幾ら豪鬼ちゃんが強くても、か弱い女の子なのよ？ ちゃんと誰かが支えてあげないと」

「誰かとは？」

「それは……」

「もう……」

「一人しかいないわよねえ……」

「??」

この時の私達以外の全員が目がなんとも意味深だったのは、何故だかよく覚えている。

・

・

・

・

・

・

まさか、あんな風に抱きしめられるとは思ってなかった……。

男の人の体って、あんなにも大きかったんだ……。

「いつか、弦十郎さんにはちゃんとお礼をしないといけないな……」
「なんだか今日はどつと疲れた気がする。」

一度に色んな事が起き過ぎなんですよ……つたく。

こんな日はとつと寝るに限る……つて？

コンコン

「ん？」

窓の方から何かを叩くような音が聞こえ……つて、
ええええええええええつ!?

いつの間にか、ベランダに兄上がいるしいいいいつ!?

「早く開けんか」

「いや、そんな所にいるって知らなかったし……」

「気配で気が付かんか」

「無茶言わないでください。兄上が本気で気配を消したら、それこそ目の前にいても分からないんですから」

「それは貴様が未熟なだけよ」

「いや……『圏境』を普通に使える人に言われても困るんですけど

……」

自分がどれだけの高みにいるか自覚無いんですか？ この愚兄は。

「それよりも兄上」

「なんだ？」

「足……拭いてください」

「なに？」

「どうせ部屋に上がる気満々なんでしょう？ だったら足を拭いてから上がってください」

「そんな心の狭い事を言うでないわ。多少の汚れぐらい後で掃除すればいいだけだろうが」

「その掃除をするのは私なんですよ。だったら、その手間を少しでも省きたいと思うのは普通でしように」

「そんなみみっちい事を言っておると大成せんぞ？」

「御託はいいから、早く足を拭いてください……！」

「わ……分かった分かった！ だから、殺意の波動を漏らすな！」

「最初からそうすればいいんですよ」

私が渡した布巾でいそいそと自分の足を拭く兄上。

こんな姿をあの二人が見たら、どんな顔をするのかな？

「お前……段々と師匠に似てきとらんか？ あの人も融通が利かぬお人だったからのお……」

「私にとっては最高の褒め言葉ですね」

ブツブツと文句を言いながらも、部屋に入って来た。

いつまでもベランダに居られても困りますからね。

「というか、いつからいたんですか？」

「ついさつきからよ。心配するな。お前の着替えなんぞ見てはおらん」

「誰もそんな事なんて聞いてませんよ」

妹の着替えを除く兄なんて、ラブコメの世界だけで十分ですよ。

こんなジジイに見られてもなんとも思いませんけど。

「で、お前は何をウジウジと悩んでおったのだ？」

「そうですね……」

ドカつと私の目の前に座り、私が出した御茶を一口飲む。
相変わらず、遠慮つてものを知らない人ですね。

(でも、兄上も既に装者の二人とは会ってるし、ある意味で関係者みたいなものか……)

なら、話しても問題無いかな？

んな訳で、話しても問題無い範囲で兄上に説明した。

かくかくしかじか。

「かくかくうまうま。成る程な。そう言う事であつたか……」

自慢の顎髭をなぞりながら目を瞑つて思案に耽つているが、この顔はどう見ても全部把握してる顔だ。

「どうせ、全部知ってたんでしょ」

「そんな事は無いぞ。儂が知っておるのは、精々が街中でリュウとケンがああ、化生共を倒して、お前の知り合いの『響』とかいう小娘を助けた所までよ」

「前半部分の殆どを見てるじゃないですか」

「はっはっはっ！ そう言うな！ 流石に見ているだけでは悪いと思つてな、儂も少しだけ手伝つてやった」

「どれぐらい？」

「ざつと、一区域に出現した連中を根こそぎ倒した程度だわい」

「それつてもう、手伝いじゃなくて普通に戦つてませんか？」

実際、この人だけで一個師団を軽く超えるぐらいの戦力があるから怖いんですよね。

え？ 私もそれぐらいあるんじゃないかですって？

うーん……どうなんでしょうね？

「その響とやら、普通に生活をする分には問題が無いのだろう？」

「そうらしいです。まだ詳しい事は不明ですが」

「ならば、そう難しく考える必要はあるまい。それよりも、なし崩し的にとは言え、あの雑音共と戦う定めになったのであれば、誰かが鍛えてやらねばなるまいよ」

「それは私が担当しようと思つています。奏さんや翼さんと一緒にすれば問題無いでしょうし、さくらさんもいますし」

「お前の弟子となった娘達と、リュウに憧れて格闘家となった娘か」
「はい。あの二人は同じ装者として、さくらさんは同年代の同性として、お互いに支え合ってくれてくれるでしょう」

「そうだな。切磋琢磨し合える存在というのは、それだけが掛け替えのない宝よ。リュウとケンがそうだったようにな」

「そうですね。ところで、兄上から見てさくらさんはどうですか？」

「そうさなあ……」

また顎髭をさすって考える兄上。

この人が何かを考える時はいつもこうだ。

なんて分かりやすい癖でしょう。

「まだまだ未熟な部分が多いが、だからこそ光る部分もある。あれは将来、必ずや大化けするぞ。今から将来が楽しみだ」

「私から見ても、彼女は紛れもない天才児ですよ。普通、見よう見真似で波動拳は習得出来ませんから」

「儂らもアレを会得するにはそれなりの時間を有したが……」

「彼女はそれを、文字通り一朝一夕で身に着けました。きっと、響さんというお友達になってくれると思います」

「時代は移り行くもの……か。儂らも負けてはおられんな」

「では……？」

「もう本格的に隠居は止めるべきだな……。儂も表舞台に出る時が来たのかもしれない」

そう呟く兄上の目は、鬼神のように鋭く力強かった。

この目をした時のこの人は、誰にも止められない。

「では、もうそろそろ行くとするか」

「そうですか」

「豪鬼よ。娘達はお前が支えてやれ。それが、年長者としてお前の今取るべき道よ」

「はい」

「それと、最後に一つ聞いておきたいのだが」

「なんでしょうか？」

「お前……その弦十郎とかいう男と恋仲なのか？」

「兄上!!!」

「はっはっはっ！ お前もそろそろ、女としての幸せを手に入れても悪くないだろう！ では、また会おうぞ！」

言いたい放題言ってから、兄上は入ってきた窓から去っていった。

色々と文句は言いたいけど、まずはこれを言わせてほしい。

「せめて……玄関から出ていってくださいよ……」

メイド豪鬼 トレーナーになる

「と言う訳で、今日はちよつと予定を変更して、皆さん一緒にトレーニングをしようと思ひます」

「どんな訳だよ……」

兄上からの励ましを受け、私も決意が固まった。

こうなつたら、私に出来る範囲で全力のサポートをさせて貰おう。

さあ少女達よ。体力の貯蔵は十分か？

「なんか豪鬼に連れられて来たけどよ……」

「ここはどこなんですか？」

現在、私達が居る場所はいつもの二課本部にあるトレーニングルームではない。

確かにあそこも十分に最新鋭の設備が整つてはいるが、あれはあくまでも『装者が使用する事』が前提となつた場所だ。

別にそれが悪いとは言わないが、それだけだとどうしてもやれる事に限界が来てしまう。

それを懸念した私は、弦十郎さんと了子さんの二人に特別に許可を貰ひ、ある場所へと足を運んだのだ。

「ココはあのシャドルーに所属する人達が体を鍛える為に使用する、社員専用のトレーニングジムみたいな場所です」

「そんな場所まであんのかよ!？」

「流石は世界に名立たるシャドルーだな……施設の規模だけでも規格外だ」

あのベガちゃまは部下達の事を常に第一に考えてますからね。

社員教育もそうですが、このような施設も非常に充実してるんです。

それがシャドルーがこの世界で好かれている理由の要因の一つでもあります。

「まあ、それはいいんだけどさ……」

「どうしました？」

奏さんが視線を向ける先には、始めてくる場所に好奇心全開で、目

をキラキラさせながら周囲を見まわっている響さんと、それを落ち着かせようと悪戦苦闘している未来さん。

それから、ついでにということ、さくらさんにも同行して貰った。「なんでアイツ等も一緒にいるんだ？」

「流れでとはいえ、装者になってしまった以上は響さんも一緒にトレーニングをするべきだと思います。特に彼女は今までコレといった運動をしてきたわけじゃありませんから」

「いや、それは理解出来るのですが……」

「明らかに無関係の奴も一緒に事を言ってるんだよ」

「ああ……そっちですか」

因みに、現在の私達は端の方に集まってヒソヒソ話をしていたりする。

傍から見ると相当に怪しいだろうな。

「響さんの隣にいらっしやるのは、彼女のお友達の『小日向未来』さんといひまして。確かに彼女は無関係ではありますが、なんと云いますか……響さんに関しては何やら、過保護な所があるんです。下手に言い訳をして誤魔化すよりは、こうやって実際に一緒に行動して貰って、これから先『響さんが急にいなくなった時は何をしているのか』の証みたいなものにしてどうかと」

「ふん……」

響さんと未来さんは互いに学校指定のジャージを着ていて、さくらさんもそれは同じ。

しかし、ツヴァイウィングのお二人だけはいつもととは違った。

動きやすさ重視のトレーニングウェアを着ている。

奏さんは黒地に赤の、翼さんは黒地に青のスポーツブラとスパッツを履いている。

完全に体のラインが現れる格好になるので、かなり色っぽい。

女だけだからこそ許される格好ですよ。

「さくらさんは自分から言い出してついてきてくれました。似た立場の響さんの事を放っては置けなかったんでしょう」

「……いい奴だな」

「ええ、全くですね」

実は、さくらさんも地味に女子高生らしからぬスタイルの持ち主だったり。

言葉には出しませんがね。

あ。なんかあの三人だけで盛り上がって自己紹介とかし始めてる。

うんうん。仲良きことは美しきかな。

「私達も行きましょうか」

「おう」

「はい」

なにやら話が盛り上がってきたので、私達も彼女達の元まで行くことに。

こちらが来た途端に急に静かになるのは地味に傷つきますけど。

「もう仲良くなられたようでよかったです」

「「豪鬼さん」」

なんか、いつの間にか私が皆のリーダー格みたいな事になってる気が……。

私はそんな柄じゃないんですけどねえ。

「未来さん。本日は一緒に来てくれてありがとうございます」

「いえいえ！ お礼を言われるような事は無いですって！ 私は単純に響が皆さんにご迷惑をお掛けしないか心配で着いてきたただけですから……」

ほらね？

そんな風な視線を奏さんと翼さんに投げかけると、二人は『ああ』的な顔になって頷いてた。

「にしても、まさか響がツヴァイウィングのお二人と知り合っていたなんて……」

「厳密には、私を通じて知り合っただけです」

「そうなんですね」

「はい。それで、ツヴァイウィングのお二人のトレーニングをするついでに、偶には響さんにも体を動かす機会を設けようと思いついた訳なのです」

「本当に……豪鬼さんには頭が上がりません。実は、私も常日頃から響はもう少し運動をした方がいいと思っていたんですよ」

「そうなのですか。それは丁度良かったですね」

「はい！ 今日響の事をよろしくお願いします！ ほら、響からも！」

「うええええええっ!? 未来がなんか私のお母さんみたいになってるっ!?!」

「実際、おばさんからも頼まれてるんだから、似たようなもんだよ！」「そうなのっ!?! 普通に初耳なんだけどっ!?!」

いつの間にかコントみたいになってるし……。

この二人と入ると、ツヴァイウイングとは別の意味で飽きないなあ。

余談だけど、もう既に互いの自己紹介は済んでいるので、今更になって挨拶をするなんて事は無い。

「でも私、こんな場所に来るの初めてです。凄いですね……」

「私もだよ〜！ 色んな器具が一杯あって、見るだけで興奮するよね！」

「世界中で一流って呼ばれてる格闘家の人達って、皆こんな場所で体を鍛えてたりしてるのかな……」

純粋に興奮している二人とは違い、さくらさんはどこまでも前だけを見据えている。

この心は本当に素晴らしいと思う。誰にも真似出来ることじゃないから。

「けど……」

「ん?」

なんか急に未来さんの視線が私に注目し始めた?

って、翼さんも一緒になって私の事を見てる!?!

「……………」

あ……あの……なんか気まずいですけど。

割とマジで何なんですかね?

私の恰好も動きやすさを重視して、街にあるスポーツ用品店にて購

入したジムウェアを着用している。

真・豪鬼をイメージして、紫のタンクトップを中心に黒のスポブラとスパッツ。

いつもよりもかなり露出が高いが、別にこの程度で狼狽えるような軟な精神はしていません。

「負けた……」

「何がですか？」

いきなり二人揃って座り込んで天井を見出したし。

なんか人生を悟ったような顔になってませんか？

「ど……どうしたんだ翼？」

「未来も。なんか様子が変だよ？」

「なんでも無い……心配しないでくれ……」

「世の中で無常だなんて思っただけだから……」

「「はい？」」

なんとなく、二人が言いたい事が分かった気がする。

でも、まだまだ成長期なんだから、可能性はあると思いますけどね。

「ほらほら。とつと立ち上がってください。使える時間は限られてるんですから」

「は……」

駄々をこねる子供か。

「オホン。本日はいつもとはメニューを変更し、『体幹トレーニング』を行おうと思います」

「体感？」

「響さん。『体感』じゃなくて『体幹』です。要は、頭と足と腕を除いた体の全てを指しているんです。インナーマッスルと言った方が分かりやすいでしょうか？」

「インナーマッスル……それならどこかで聞いた事がある気がする」

「それは重畳」

流星は奏さん。既にご存知でしたか。

「豪鬼さん。質問いいですか？」

「はい、さくらさん。何を聞きたいんですか？」

「その『体幹』って、鍛えるとどうなるんですか？　こう…効果的な意味で」

「ふむ…：効果ですか」

「やっぱり、そこが気になりますよね。」

「急に全員の目つきが変わったし。」

「簡単に言いますと、普段からの姿勢が良くなったり、健康状態が保てるようになったり。それから…：」

「それから？」

「太りにくくなります」

「二二体幹トレーニングやろうぜ!!」二二

「きやつ!？」

いきなりやる気100%!?

矢張り女性としては、太りにくくなる効果というのは大きいのでしょうか…：。

あ。今は私も女性でした。

「おうおう！　なんだか盛り上がってるじゃねえか！」

「元氣があるのはいい事だ」

「あら。貴方達は…：」

奥にある特製トレーニング室から出てきたのは、いつもの恰好に身を包んだシャドルー四天王の『M・バイソン』と『サガット』のお二人。

タオルで汗を拭きながらのご登場ですから、先程まで激しいトレーニングをしていたに違いありません。

「ボ…ボクシングで世界王者にまで上り詰めたM・バイソンに、『ムエタイの帝王』の異名を持つサガット…：！　めっちゃ有名な二人があなたの目の前にいるっ!？」

奏さんが、この間ケンに会った時みたいに興奮してる。

もしかして、彼女ってミーハーな格闘家ファン？

「お疲れ様です。お二人もトレーニングを？」

「まあな。コンディションはバッチリだし、パンチのキレも申し分ねえ！　これなら、今度こそダッドリーの奴と本当の意味で決着がつ

けられるぜ！」

ダッドリー。

イギリス有数の貴族でありながら、超一流のボクシング選手としての一面を持つ男性。

その実力は世界レベルで、今やバイソン以外とはまともな試合が成立しない程。

そんな二人の実力は完全に拮抗していて、どちらかが勝つにしても、常に時間切れの判定勝ちになってしまう。

つまり、二人揃って互いから未だに一度もKOを取った事が無いのだ。

「俺の方も、今度の試合は万全の態勢で望めそうだ」

「確か、今度の対戦相手はあの『ジョー・東』さんでしたね」

「ああ。アイツの目はどこかリユウを思い出させるからな。今から楽しみでならない」

ジョー東と言えば、日本出身のムエタイ選手で過去に何度もKOFにも出場し、常に好成績を残している。

そんな彼が一方的にライバル視しているのがサガットで、これまでに何度も試合をしてはいるが、戦績はサガットが全戦全勝。帝王の名は伊達じゃない。

「サガットさん！ バイソンさん！ お久しぶりです！」

「おう！ なんか見た顔がいると思ったら、さくらの嬢ちゃんじゃねえか！」

「お前も来ていたのか」

「はい！ 今度の試合も頑張ってください！ それから、出来ればまた私とお手合わせをして貰ってもいいですか？」

あら大胆。でも、その積極性は嫌いじゃないですね。

「試合の後ならいつでもいいぜ！」

「俺もだ。どれだけ腕を上げたのか、楽しみにしているぞ」

「はい！」

「それじゃあな！ 存分に体を動かしていけよ！」

「では、失礼する」

いい笑顔をしてから、二人は出て行った。

サガットはともかく、バイソンは元から変わり過ぎでしょう。

完全に立派なスポーツマンになってるじゃないですか。

「き……緊張した……」

「私は別の意味で緊張したな……。二人共、物凄いプレッシャーだった……。あれが超一流の格闘家というものか……」

「??」

未来さん以外は大なり小なり感じた事があつたみたいですね。

響さんも何も言つてはいませんが、先程からずっと手に滲み出た汗を服の袖で拭いてますし。

「では、我々もそろそろ本気で始めますか」

「「はいー」「」」

今日の私はメイド豪鬼ではない……トレーナー豪鬼だ！

この子達はどこまで着いてこられるかな？

ツヴァイウイングの二人やさくらさん、元陸上部の未来さんは大丈夫だとしても、心配なのは響さんだなあ……。。

最初は余り無理はさせない方が賢明かな？

メイド豪鬼の筋肉講座

トレーニングに入る前に色々あったが、ここを使用出来る時間も限られているので、早く始めようと思っっているのだが……うん……。

「豪鬼さん？ さつきからキョロキョロとしてどうしたんですか？」

「いえね。出来ればアシスタント的な人物が一人いてくれたら有難いな〜と思っまして」

「アシスタント？」

「はい。要は、皆さんにお手本を見せてくれる人間なんですが……」

どこかに都合よく、そんな人物が転がってませんかね……っつて、あれ？

少し離れた場所を歩いている、なんか見覚えのある金髪三つ編みの少女は……。

「ちよつと、その金髪の女の子さん。少しよろしいですか？」

「私か？」

「あら」

最初はキャミイさんかと思っただけど、正面を見たら全く違っただ。

顔つきや体格はキャミイさんと瓜二つだが、その性格が真逆の女の子。

「ディカープリちゃん？ まだそんな仮面をしてるんだ……」

「知り合いか？」

「はい。私の友達のキャミイって子がいるんですけど、彼女はその子の妹なんです」

彼女もトレーニングの帰りなのか、ジャージを着てタオルを首に巻いている。

でも、彼女の場合は普段から鍛えてるから、もう少しぐらい動いても大丈夫でしょう。

「フツ……！ 我が名はディカープリ！ 赤き衣を纏いし選ばれし女王に仕える12の戦士が一人なり！（キリッ）」

「「「「……………」」」」」

早速出ましたよ……キャミイさんも普段からほとほと困っている
中二設定。

音は真面目でいい子なのに、どうしてこんな風に育ってしまったん
でしようねえ……。

「ど……どういう意味だ？」

「要約すると、彼女はシャドルーに所属している【ベガちやま親衛隊^{ファンククラブ}】
の一員だって事です」

「今、なんか変なルビが見えたような気が……」

「気にしたら負けですよ」

私は事実を言っただけですし。

「どうかですね」

「え？　ちよ……ま……待ってっ!?　仮面をそんな風に引つ張らない
でっ!?　伸びる！　ゴムが思いっきり伸びちゃうから！　なんか怖
いから!!」

「そろそろ本気でこの仮面は取りなさい。キャミイさんも他の親衛隊
の方々も困ってるでしょう？」

「フツ……!!　この仮面は我に宿りし禁断の力を封印する為に身に着
けている物。安易に外す事は叶わぬ……」

「えい」

バチンッ!

「いったい！　目が——!!!」

大人しく外さないから、こんな目に遭うんですよ。

とつくにそんな歳じゃないんですから、いい加減に大人になりな
さい。

「うわあ……痛そ……」

「お笑い芸人の罰ゲームみたいだな」

「禁断の力だと……!　あの少女にそんなものが宿っているとは……
!　しかも、あの仮面がそれを抑制しているだと……!!」

「いや翼。あの子が言ってるの全部、彼女の妄想だから」

「そうなのっ!？」

「なんで信じるんですか……」

なんでそこでもコントをやってるんですか。

なんかまたグダグダし始めたな……。

「とにかく、この仮面は少しの間だけ私が預かっておきます」

「お…横暴だ〜！」

「返してほしかったら、私達の手伝いをしてください。そうしたら返しましょう」

「ほ…本当だな!? 嘘じゃないだろうな!?」

「嘘じゃないですよ。ところで、キャミイさんはどうしたんですか？

姿が見えないようですが……」

「姉さんなら、今度開催される「ベガ様総帥就任7周年記念パーティー」の準備に追われてるぞ」

「毎年そんなのを開催してたんですね…：知らなかった」

本当に、シャドルー構成員のベガちゃま愛は凄まじいですね。

噂では、誕生日の日にはそれはもう盛大なパーティーをしているとかなんとか。

金だけは無駄に持ちまくってる組織ではありませんからね〜。

「では、いきますよ」

「は〜い」

こうして、いきなりではあるがデイカープリさんが加わった。

余談だが、別に彼女は仮面の下に火傷なんか全くしていない。

素顔は至って普通の少女だ。中二病が痛い事を除けば…：だが。

・

・

・

・

・

「「なんか急にどこからかBGMと一緒にセリフが流れたっ!」」
奏さん、翼さん、未来さん。

ナイスツツコみです。

私達が今いるのは、先程までいたトレーニング施設の中にあるレッスンスン場のような部屋だ。

前方が鏡張りになっていて、見事なプロ仕様になっている。

「ちゃんと全員にマットは行き渡ってますね?」

「「「はい!」」」

「よろしい。今回やるのは、先程も言った『体幹トレーニング』と呼ばれるものです。トレーニングと言っても、別にそこまで難しくはないし、これといった道具も必要ありません。大きく呼吸をしながらストレッチ感覚で行ってみるのがいいと思います」

ちゃんと真剣な眼差しで聞いてますね。感心感心。

「今からやるトレーニングの殆どが、座ったままや寝たままの姿勢でも出来るので、日常生活の中のちよつとした空き時間に気軽に取り入れる事が可能なんです」

「へ〜……そんなトレーニングもあるんだな〜……」

少しずつではあるけれど、体幹トレーニングに興味が出て来た感じですかね?

よし、この調子で最後までいきましょうか。

「まずは、寝ながらも出来るトレーニングをしましょうか。てなわけです、まずはお手本を見せるので、ディカープリさん。マットの上に寝転がってください」

「分かった」

板張りの床に敷いたマットの上にディカープリさんが仰向けに寝転んだ。

それを見下ろす形で見つめる皆。

「まずはこのように仰向けになり、それから両手を左右に真っ直ぐ広げる。そして、膝と股関節が90度になるように足を上げます。まずは右からお願いします」

ディカープリさんが私の説明した通りの体勢になる。

その姿勢は本当に見事で、実に綺麗だった。

「そのままの姿勢で息を吐きながら右へと捻って、吸いながら元に戻す。左も同じ様に行います。この場合、別に足が床までつかなくても問題はありません。重要なのは肩が浮かないようにする事なので」

「見た感じでは、そこまで難しそうには見えないな……」

「そうかもかもしれませんね。これらの事を左右で10〜20回を1〜2セットぐらい行います。デイカープリさん、もういいですよ。ありがとうございました。皆さんも同じ様にやってみてください」

「」「はい」「」

デイカープリさんが立ち上がると同時に、皆が寝転がって今言った事を始めた。

「い…意外とクルもんなんだな……」

「ちゃんと分かってるのに、肩が浮いちゃうよ〜」

「足が想像以上に曲がらない……!」

「うむ……これは……いいな……!」

「お? なんか肩も足もちゃんとつく?」

翼さんと奏さんはなんとか出来てる感じで、響さんは予想通りに悪戦苦闘。

未来さんは元運動部という事もあり、形にはなっている。

さくらさんは完璧過ぎです。どんだけ体が柔らかいんですか。

まずは最初ということで、10回を目安にして貰う事に。

慣れてしまうと簡単なようで、熟練の装者とさくらさんは最終的には淡々とこなしていた。

「そこまで。1分の小休止の後に次のトレーニングを行います」

「一分かよ……」

「それぐらいが丁度いいんですよ。あまり長く休憩すると、折角温まった体が冷えてしまいますからね」

一分後、次のトレーニングに移行する事に。

「今度は立ったままでも行えるトレーニングです。てなわけで立ってください」

各々に座っていた体勢から、今度は揃って立ち上がる。

「まずは自然と立ってから目を閉じます。そのまま片足を上げてから膝を90度にします。その際、上げた脚は体を支えているもう片方の足につかないように心掛けてくださいね」

普通なら簡単かもしれないが、目を瞑るだけで難易度が大幅に上昇する。

もう既に響さんがグラグラし始めてますし。

「その状態でバランスが崩れるまで立ち続けてください。ここで大切なのは、どれだけバランスを崩しても、最後まで足が床につかないように粘る事です。こうする事でバランス感覚が養われて、体の軸を支える筋肉を鍛える事が出来ます」

武芸を嗜んでいるだけあって、翼さんは見事なバランス感覚だな。

普段から歩き方までちゃんと意識して行っている証拠だ。

さくらさんも同じ様に全くぶれないが、彼女の場合は天性の才能が大きいから、これは余り参考にはならない。

なんて言ってる間にも響さんが早くも脱落。

未来さんと奏さんが少しふらつきながらも、なんとか頑張ってますね。

因みに、私の横でお手本をしているディカープリさんはまるで石像のように微動だにしない。これもこれでまた凄い。

「余り時間を掛けすぎても逆効果なので、そこまでいいですよ。翼さんとさくらさんは素晴らしいバランス感覚の持ち主ですね。お見事でした」

「ありがとうございます」

「えへへ……褒められちった♡」

今度もまた一分間の休憩をしてから、次のトレーニングを開始する。

「次のは基礎代謝を向上させるトレーニングです。まずはうつ伏せになつてから肘を床に着けてください。ディカープリさん」

「了解だ」

ディカープリさんが私が言った通りの体勢となつて、次の指示を待つ。

「爪先と肘のみで自分の体を支えてから、そのまま腰を浮かせます。この時、頭と肩と腰と膝と足首までのラインが一直線になるようにしてから10秒間キープをする。呼吸は決して止めず、腰を逸らさないように気を付けましょう」

ピンとした恰好で綺麗に体を伸ばすデイカープリさんは流石としか言いようがない。

この真面目さを普段から見せてくれれば、少しはキャミイさんの気苦労も減るでしょうに。

「そこまででいいです。今回は今までのと比べても少し大変ですが、それでも頑張っていきましょう。では、始めてください」

全員がデイカープリさんと同じ体勢になってトレーニングを始めるが、今回は余裕とかいかなかったようだ。

「クツ……！ これは……腹筋もだけど……床についている肘が痛い……！」

「奏さん。肘だけではなく、腕全体を使うんです」

「頭じゃ分かってるんだけどな……」

「体が自然と肘を使ってしまう……！」

「体がプルプルしてきた……」

「10秒間ってこんなに長かったっけ……」

「……………」

10秒経過し、皆が苦行から解放されたかのようにマットの上に寝そべった。

「いって……」

「少し腕が痺れた……」

「腹筋も痛いよ……」

「たった10秒でここまで疲れるなんて……」

「キツかった……」

「痛い、キツイと感じたという事は、効果が出ている証拠です。では、今のを後2回しましょうか」

「」「マジでッ!?!」「」

「はい。マジです♡」

その後、残り二回をし終えた皆さんは、まさに死屍累々と云った感じに疲弊していた。

実はこれ、慣れてないうちは本当にキツイんですよ。

逆に、慣れてしまえば10秒以上も余裕なんですけど。

因みに作者は1分以上は普通に出来ます。

・
・
・
・
・
・
・

先程の『フロントブリッジ』を終えてからも、『バックブリッジ』や『バックキック』、『ツイストクランチ』とやっていき、ここで少し長めの休憩をする事に。

「正直さ……少し舐めてたわ……。これはマジでキツい……」

「だが、いい具合に体も温まってる気がする。これは本当にいいな……」

「うへへ……もう限界だよ……」

「気持ち分かるけど、もう少ししやんとしなよ。春日野さんなんか凄いやよ？ 全然疲れてる様子ないし」

「いやいや。私も疲れてるからね？」

「フツ……この程度、前世で経験した聖戦に比べれば見戯に等しいわ……」

「なんて言いつつ、脚がプルプルしてるのは誰ですか？」

「こ……これは武者震いだ！」

会話をする事で僅かではあるが元気は戻って来たみたい。

これなら後半もなんとかなるかな？

「美しいお嬢さん方。この私が用意しておいたスポーツドリンクでも

いかがかな?」

「「……誰?」」

「バルログさん?」

なんの脈絡も無く部屋に入ってきた、無駄に金髪ロン毛なイケメン野郎。

この爽やかな笑みに騙されてはいけない。

こいつは四人の中で唯一の残念野郎だから。

いきなり現れて、何をしに来たんですか? バルログ」

「何とは酷い言い草だな。君が来たというから急いで飛んできたのに」

「うっさいですよ。残念仮面男」

「残念仮面男?!」

なんでそこでシヨックを受けてるんですか? 事実じゃないですか。

「えっと……こいつは?」

「彼はバルログ。先程会ったバイソンやサガットと同じ『シャドルー四天王』の一人なのですが、彼だけ特にこれと言った活動をしてないニート野郎です」

「いや、別に私はニートじゃないからねっ!? ちゃんと色々やってるからねっ!」

「え? バルログさんってニートなんですか?」

「そう言えば、バルログが何か仕事をしている姿を見た事が無いな」

「さくらちゃん。それからデイカープリ。そんなピュアな目でお兄さんの心を容赦なく抉らないでくれるかな? ただでさえガラスのハートな私の心が粉々だよ?」

「なくが『お兄さん』ですか。1967年生まれの癖に」

「ナイショー! それだけはナイショー!! 昔は若かったの——
——!!」

派手に涙を流しながら、バルログは早々に去っていった。

無駄に騒がしくてウザい奴がいなくなつて清々しましたけど。

「あの通り、四天王で唯一の奇人変人ですけど、根はいい奴ですから。」

ちゃんと実力もある格闘家ですしね」

「そ…そうなんだ……」

「世の中、色んな人がいるんだな」

「あの人の場合はそれだけで済ませていいのかな……」

「バルログさんって本当に素早いから、まともに攻撃を当てるだけでも一苦労なんだよな。今の所、あのスピードに追従出来てるのってケンさんだけだし。私ももっと頑張らないと！」

律儀にスポドリだけは置いていってますね。

あの軟派な部分さえなければ、普通に尊敬も出来るんですけどね。仕方ないから、後で礼でも言っておきますか。

メイド豪鬼 少しでも口出しする

「ほえ〜……」

傍で響さんが見ている中、私はドラム式洗濯機に沢山のシャツやらズボンやらを突っ込んでいた。

これも私の立派なお仕事の一つ。本部の掃除だけじゃないのだ。

「こんなにも沢山の洗濯物をいつぺんに……」

「それでもしないと時間が掛かってしまいますからね。唯でさえ、ここはかなりの人数が利用してますから」

「これって、弦十郎さんに言われてやってるんですか?」

「まさか。全て、私が自分から言い出した事です」

「そうなんですかつ!？」

「はい。二課はどうにも男女の比率に差がありますからね。どうしても、こういういった事に関してズボラになりがちなんです。だから、こうして私がしているわけなんです」

「凄いなあ〜……」

「そうでしょうか? この程度、頑張れば誰にだって出来るでしょうに」

「未来ならともかく、私にはまず不可能かも……。多分、洗濯物の山を見た時点で心が折れちゃいますよ〜」

ふむ……確かに。普通ならそうかもしれない。

だが、私はメイドを極めんとする者。洗濯物の山程度に怯んではいられないのだ。

「暇な時などは友里さんや奏さん、翼さんといった数少ない女性メンバーも手伝ってくれるのですが」

「あれ? 了子さんは?」

「彼女も確かに女性ではありますが、お世辞にも家事が出来る類の人じゃないですから。前に彼女の自室の掃除をした時は久し振りに戦慄しました……」

よもや、翼さん以外にも片付けられない女がいるとは思わなかった。

いや、彼女の場合は普通に忙しくて片付ける暇が無かったと言った方が正しいのだけれど。

それでもかなり酷かったのは紛れもない事実。

因みに、ツヴァイウィングの二人は今日は不在。

本当に忙しいお二人ですけど、本人達は楽しんでやってるのでいいでしょう。

体調管理だけ気を付けてくれれば、私からは何も文句はありません。

「私が来る前までは、この人達はどんな生活を送ってきたのか……想像するだけで恐ろしい……!」

きつと、見るに堪えないような惨状だったに違いない。

もう少し時間が経てば女性メンバーも増えるだろうから、それに備えてシンフォギア装者達を鍛えるだけでなく、家事能力の向上も図った方がいいのかもしれない。

地下施設なのにテラフォーマーが出るようになったら、それこそ末期だし。

「あはは……」

「? いきなりどうしました?」

「あ……なんでもありません。ただ……」

「ただ?」

「豪鬼さんみたいな人がお母さんだったら、毎日が楽しそうだなあゝって思っ」

「それ、前にも言いませんでした?」

「そうでしたっけ?」

私がお母さん……ね。

まず、自分が結婚する光景が想像出来ない。

男性陣は周りに沢山いるけど……。

「おや?」

「この警報は……!」

ノイズ発生を知らせるもの……!

これは洗濯をしている場合ではなくなりましたね。

ま、この後は洗濯が終わるまで施設内の掃除をするだけだったから、別に構いやしないんですけど。

「響さん。司令室に急ぎましよう」

「はいー！」

響さんと頷き合ってから、私達は司令室へと走っていった。

・
・
・
・
・
・
・

「お待ちせしましたー！」

「来てくれたか」

司令室では、渋い顔をしながら腕組みをしてモニターを睨んでいる弦十郎さんがいた。

オペレーターの二人はせわしなく指を動かしつつ声を出し続けている。

「状況は？」

「現在、自衛隊が緊急出動をして避難誘導を行っている最中だ」

「翼さんと奏さんは？」

「お二人なら、今しがた通信をして現場に直接向かう旨の連絡を受けましたー！」

立场上、あの二人は本部にいる時よりも仕事で外にいる時の方が多い。
だからこそ、私達のような待機メンバーがどうしても必須になってくる。

「出現位置特定……出来ました！ 座標を表示します！」

モニターの右半分ぐらいが地図になり、そこにノイズの出現範囲が

表示される。

急いでそれを確認して、右から左へと目を動かしていく。

「リディアンから距離200……」

「かなり近いな……豪鬼くん」

「了解です。お任せください」

もう彼とも長い付き合いになるから、たったこれだけの会話で何を言いたいかはある程度は理解出来るようになった。

それを言うと、何故か周りの皆から生暖かい視線を送られるんだけど。

「あの……私は……」

「響くんはまだ訓練途中だ。現場には……」

「いえ。私は響くんを連れていくべきだと判断します」

「豪鬼くんっ!？」

「確かに響くんはまだ実戦経験がありません。足手纏いになる可能性も否めないでしょう。ですが、だからこそ彼女には現場の空気を知って貰う必要があると思います」

「しかし……」

「全ての責任は私が取ります」

「……分かった。響くんの出撃を許可する」

「ありがとうございます」

「ただし、責任を取るのは司令である、この俺だ。君には……君にだけは背負わなくてもいい荷物を背負わせるような真似はさせたくない……」

「弦十郎さん……」

この人は、司令と言う立場であるにも拘らず、一人の男として私の身を案じてくれている。

その事に嬉しさを感じてしまう私は、どこかおかしいのだろうか……。

「行くのなら早く行った方がいいわよ」

「了子さん」

「やっとな来たか……」

何かを見計らったかのように了子さんの御到着。

いつも通りの飄々とした感じで、我々の傍までやって来た。

「響ちゃんの事、頼んだわよ……豪鬼ちゃん」

「お任せください。響さん」

「はいー」

私は響さんと伴いながら、司令室を後にして現場に急行すること
に。

その途中で、久し振りにベガとギースの二人が現場に急行中な事が
通信によつて伝えられた。

今思えば、彼女達と会うのも久し振りの気がしますね。

・
・
・
・
・
・

私のバイクに乗って現場へと疾走する。

念の為にバイクに乗る前から響さんにはギアを装着して貰った。

「到着しました」

「これは……」

避難は完了済みで自衛隊の人達も既に退避しているのか、街には私
達以外は誰もいない。

地面を観察してみると、どこにも灰のような物は見当たらない。

どうやら、犠牲者は出ずに済んでいるようだ。

「豪鬼さん!! 響ちゃん!!」

「さくらさん。貴女も駆け付けてくれたんですね」

「はい！ まさか、コンビニに買い物に出かけた途端にノイズの警報
が出ると思わなかったけど」

「連中の出現頻度は完全にランダムですからね」

今の所は……ですけど。

「もうすぐ翼さん達も駆け付けるでしょうから、それまでは私達で食い止めますよ。一匹たりともここから先へと通してはいけません！」
「はいー」

その拳に気を纏わせたさくらさんと一緒にノイズの群れに飛び込もうとする前に、振り返ってから響さんの方を見る。

「響さんはあまり無茶な事をせず、自己防衛に専念してください。少なくとも、ギアを纏っている以上はノイズに触れても大丈夫ですから」

「わ…分かりましたー」

気丈に振る舞ってはいるが、矢張り心のどこかでは緊張と恐怖を感じているようだ。

でも、今はこれでいい。

少なくとも、原作のように無鉄砲に突貫されるよりはよっぽどマシンだ。

「まずは一発！ いきますよー！」

「はああああああああああつ!!」

豪波動拳

波動拳

私達の放った気の固まりがノイズの集まっている場所に命中し、一気に複数を撃破した。

「まずは先制ですね！」

「これで一応のイニシアチブは握りました。この流れを維持しますよ！」

「分かりました！ どりやああああああつ!!」

全力で走り、助走を付けてからのW飛び蹴り。

その一撃にで、背中にブドウのように沢山の球体をくっつけた個体を二体同時に消し飛ばした。

「凄い……！ 豪鬼さんもそうだけど、さくらちゃん……ギアも纏ってないのにノイズを一方的にやっつけてる……」

チラつと後ろを向いて響さんが驚きながらこちらを見ているのを確認した直後、彼女に近づきつつある複数のノイズが一瞬にして蹴散らされた。

蒼の一閃

サイコシヨット

STAR DUST∞FOTON

ダブル烈風拳

「うわあああああつ!?!」

四者四様の必殺技が炸裂し、それに驚いた響さんが思わず尻餅をつく。

そんな彼女の前に降り立ったのは、ギアを纏った翼さんと奏さん、それからベガとギースの四人だった。

「よっしゃあ! なんとか間に合った!」

「もう既に戦いは始まっていたのか! 立花、本部から話は聞いている。兎に角、お前は自分の身を守る事だけに専念しろ。いざとなれば私達がフォローするから」

「あ…ありがとうございます! ところで、その小さな女の子と道着っぽいのを着た女の人は……」

「この二人は頼もしい味方だ。安心していい」

悠然としているギースに、いつも通りに無邪気な笑顔を振りまいているベガちゃま。

実に今更ですけど、ここ数年でベガの髪ってかなり伸びましたよね。

もう完全に見た目は英霊の織田信長じゃないですか。

「ベガさまさんじょ! って、お前誰だ?」

「話を聞いてなかったのか……。あの二人の後輩となる新しい装者だと通信で教えて貰っただろう」

「おお! そういえばそうだった!」

彼女の事だから、割と普通に忘れてた可能性有りますけど。

「ここはツーマンセルで動いた方がいいだろう。私が風鳴翼と組むから、ベガは天羽奏と組め」

「分かった！ 奏く！」

走り方が近所にいる仲のいい年上のお姉ちゃんの家遊びに行く子供なんですけど。

「おっし！ いっちよやるか、ベガ！」

「お〜！」

地味に凄いタッグの完成ですね。

んで、もう片方は……。

「ギース殿のような歴戦の武人と組めようとは……」

「フツ……当然の反応だな。遅れるなよ！ 防人!!」

「承知!!」

うわあ〜……無双ゲームみたいに次々とノイズが消えていく……。

翼さんとギースって、ある意味で一番組ませちゃいけないコンビなんじゃ……。

「豪鬼さん!!」

「お任せを！」

様子を窺っている間にノイズの一体が私に向かって触手を伸ばしてきた。

悪いですが、私には触手プレイをするような趣味は無いんですよ！

ですので、全力でぶっ飛ばさせて頂きます!!

滅殺豪昇龍

阿修羅閃空にて緊急回避をした後に、懐に潜り込んでからのスーパーコンボ。

確実に全てが命中したので、ノイズは空中に吹き飛びながら霧散した。

「相変わらず豪鬼は凄いなあ……!! こっちも負けてられない！」

「お前達、邪魔だ!! ダブルニープレス!!」

普段から仲のいいベガと奏さんの二人は、意外過ぎる程に息が合っていて、二人の相性がいい事を窺わせる。

「疾風拳!!」

「斬り裂く!!」

完全武人なこの二人は、もう只管にノイズをバツタバツタと倒しま

くつてる。

オーバーキル気味な点は否認ませんが、相手は未知の存在ですし、それぐらいが丁度いいかもしれませんね。

「皆さん!! 一気に蹴散らしますよ!!」

「おう!!」

「了解!!」

「やるぞく!!」

「これで決めてくれるわ!!」

「本気の本気でいっくぞー!!」

全員の力が一点に凝縮し、それが一気に解き放たれる。

その瞬間、確かに私達の心は一つとなった。

金剛國裂斬

真空蒼空波動拳

レイジング・ストーム

サイコ・エクスプロージョン

千ノ落涙

LAST∞METEOR

圧倒的かつ超絶的な6つの必殺技が炸裂し、残っていた全てのノイズを跡形も無く薙ぎ倒していった。

凄まじいまでの力の奔流は技を放った私達自身にも伝わってきて、

6人の力を結集させたことがどれだけ凄いかを身を持って知った。

攻撃が終わった後にはノイズは一体も残っておらず、静かな街並みだけがあるだけだった。

メイド豪鬼 歳の差を感じる

全員の斉攻撃にてノイズを蹴散らす事に成功はするが、まだまだ油断は禁物。

どこかに伏兵が潜んでいる可能性は否定出来ませんからね。

「本部。他にノイズの反応は有りますか？」

『いえ。皆さんが撃破したノイズで最後のようです。少なくとも、周囲100メートル圏内にはノイズの反応は一切ありません。戦闘終了です』

「そうですか……」

通信機から聞こえてきた藤堯さんの声を聞いて、ようやく私達は構えを解いた。

「気のせいか、日に日に増してノイズの出現頻度が増してないか？」

「私も同感です。少し前までは、ここまで頻繁に現れることは無かったです。それなのに……」

「ここ数年は、最低でも一週間には一回。多い時は二日や三日連続で……なんてのもあるぐらいだしな」

「ノイズの出現パターンに関しては、シャドルーの方でもちやんとデータ化してるぞ。こっちの分析班も、首を傾げてた」

「なんだか、物騒な世の中になってきちゃいましたね……」

皆さんもそれぞれに意見を出し合っているが、矢張りこれは、原作に突入したが故の影響が大きいのだろうか。

『彼女』が本格的に動き出した証拠か、もしくは……。

「あ……あの……」

「あ。響さん」

しまった。考え事をして、一瞬だけ本気で彼女の事を忘れてしまった。

これはメイドとしていけませんね。今後の反省材料にしなくては。

「大丈夫でしたか？ シンフォギアを纏っているから、怪我などは無いと思いますが……」

「はい。ケガとかはしてません。けど……」

「けど？ どうしました？」

「なんか…すっごく場違い感があつて……」

「あ〜…」

その気持ちはなんとなく理解できる。

というか、これだけのメンバーが揃っていたら、響さんじゃなくても同じような気持ちになってしまうだろう。

「翼さんや奏さんは当然のように凄かったけど、さくらちゃんもあんなにも強かっただなんて……」

「彼女の場合は、気を操ることに関しての天性の才能に加えて、格闘家として抜群のセンスを持ってますからね。あまり同じように考えない方がいいですよ。響さんには響さんの進み方があるのですから」

「そ…そうですよね！」

少しは励ませたかな？

元々が前向きな性格をしているから、並大抵の事じゃ折れたりはない。

その代り、一度でも心が折れた時の落ち込みようは半端じゃないんですけど。

「響さん。初めての戦場に立って、どんな感じでしたか？」

「えっと……」

「変に強がったりしなくてもいいですよ。素直な感想を聞かせてください」

「わ…分かりました」

二課のスタッフ達が駆けつけて、撤収準備を進めている中、私は響さんにどうしても聞かなければいけないことがあったので、こうして問い質していた。

それに気がついた他の皆もこっちに来て、少し離れた場所で話を聞いている。

「……怖かったです」

「怖かった？」

「はい。普通なら触っただけで灰になってしまうノイズに立ち向かう…その事が怖かったです。頭じゃ分ってるんです。今の自分なら少

なくとも、ノイズに触って死ぬようなことは無いって。分ってるんですけど……」

「今までの常識が頭から完全には抜け切れない……ですか？」

「……はい。この肌にチクチクするような雰囲気も、なんだか初めてで……足が竦んじやって……」

……よかった。

どうやら、私が最も危惧していた事態には至っていないようです。

これならば、弦十郎さんも安心するでしょう。

「それでいいんですよ」

「ふえ？」

「いきなり武器を持たされて戦場に立たされれば、怖くて当たり前です。寧ろ、ここで恐怖を覚えるのはいい事です」

「そうなんですか？」

「ええ」

彼女を少しでも安心させるように、頭を撫でていけると、後ろから皆が話に割り込んできた。

「立花の気持ちは、ここにいる全員が理解出来ている。私だって、最初は怖かったさ」

「翼さんも……？」

「当然だ。技術は磨いた。覚悟も決めた。それでも、そう簡単に恐怖や緊張を払拭出来る程、人間の心は便利に出来ていない」

その通り。

それが簡単に出来れば、誰も苦労なんてしません。

「まずは体を鍛えつつ、一步一步でいいから慣れていけばいいんだよ。お前はあたしと同じガングニールの装者なんだ。気休めかもしれないけどさ、きつと大丈夫さ」

「奏さん……」

どうやら、私の言葉よりも先人の言葉の方が、心に響いたようですね。

こんな時、同年代の子がいるのは非常に頼りになりますね。

「私もね、最初のストリートファイトの時はすつごく緊張したんだ。

でも、周りで応援してくれる皆や、追い駆けたい背中がある事を思い出すと、不思議と心が楽になるの」

「さくらちゃん……」

「怖かったり、緊張した時は、私達の事を思い出して。響ちゃんは決して一人じゃないって。どんなに離れてても、心は繋がってるんだって」

「心は繋がってる……うん！ そうだね！」

「どうやら、この場での私達の出番はここまでみたいですね。」

話している間にスタッフさん達もお仕事を終えたみたいですし。

「豪鬼さん。撤収準備が完了しました」

「ありがとうございます。では、帰りましょうか」

「ところで、なんで私が現場監督みたいになってるんですか？」

「私はあくまでも民間協力者の立場なんですけど？」

「という訳ですので、我々は本部に戻りますが、皆さんはどうしますか？」

「私は家に帰ります。いきなり飛び出して来ちゃったから……」

「それがいいでしょうね。ご家族にご心配を掛けてはいけませんから。ギースとベガはどうしますか？」

「私も戻らせてもらおう。というか、もうすぐロックを迎えに行く時間だからな」

「あら。もうそんな時間でしたか」

時計とか全く見てなかったから、すっかり時間の感覚が狂っていた。

「となると、タイムセールまであと一時間になるわけか……。」

「ロックとは誰ですか？」

「私の可愛い息子だ。今年で5歳になり、幼稚園に通っている」

「ええっ!? あんた、子持ちだったのかっ!?!」

「ということは、既婚者……?」

「当然だ。一応、血の繋がらない義理の子供も二人いるがな」

「お……思ったよりも複雑な家庭環境なのですね……私もあまり人の事は言えないけど……」

翼さん。完全に自虐になってますよ。

そうなんですよね。まさか、『あの二人』がギースといい意味で繋がりを持っていた知った時は、私も本気で驚きました。

いずれ、本格的に会う事もあるでしょうから、その時を楽しみに待っていきましょうか。

「私は暇だから一緒についていく……ん？」

突然、ベガのスマホが鳴り出した。

しれっと、自分のステージの曲を設定してるんですね。

「メールだと？ 一体誰が……ウヴェアツ!？」

いきなり声にならない悲鳴をあげないでくださいよ。

割と普通に驚きますから。

「い……い……い……」

「い？」

「今から幹部同士での会議が行われるから……とっとと戻って来いって

……サガツトから……」

「あらら」

それはまた……ご愁傷様。

「ううう……帰る……またな……」

「お……おう。仕事、頑張れよな……」

「うん……」

……今度、ベガちゃまにお菓子でも差し入れてあげましょうか。

「それじゃ、私達も帰りますね」

「また何かあれば、いつでも駆けつけてやる」

手を振りながら、さくらさんとギースも帰路についた。

「私達も戻りましょう。戻ったら、まずは弦十郎さんに報告ですね」

「はい」

「おう」

帰り道は、私はバイクで帰り、響さん達は揃ってスタッフさん達が乗ってきた車にて帰ることに。

このバイク、近い内に整備に出さなくちゃな……。

・
・
・
・
・
・

あれから数日後。

今日も今日とて、装者たちは特訓に明け暮れています。

最近では響さんも積極的に参加するようになっていたのですが、まだまだ体が追いついていない様子。

こればかりは仕方ありませんけどね。

因みに、ここに来る際の未来さんへの言い訳は『豪鬼さんに鍛えて貰ってくる!』だったらしい。

それで通じると思う響さんもそうですが、それで普通に納得してしまふ未来さんも未来さんですね……。

類は友を呼ぶ……なんでしょうか。

「はい。では、少し休憩をしましょうか」

「は……はい……」

「分かりました」

「りょくかい」

既にある程度、体が出来上がっているツヴァイウイングのお二人はともかく、まだまだ発展途上にある響さんは息も絶え絶えになりながら返事をした。

「はあ……はあ……。てつきり……シンフォギアを纏って特訓をすることを……思っていましたけど……そうじゃないんですね……」

「まあな。豪鬼が前に言っていたんだ。シンフォギアに頼りきりになるんじゃないくて、素の身体能力を向上させれば、必然的にギアを纏った時にもっと能力が上がるってさ」

「あれは本当に目から鱗だったわね。今までには全く無い発想だっ

た」

「そつかく…成る程なく…」

私が用意しておいたスポドリを飲みながら話している少女達。

絵にはなりますが、何ともいえない疎外感が……。

「そういうえば、まだ響さんのガングニールにはアームドギアが展開されていませんでしたね」

「アームドギア？」

「簡単に言うと、ギアごとに存在してる固有の武器みたいなもんだ」

「分かりやすい例だと、私が刀剣類、奏がランスだ」

私だけは響さんのアームドギアの形態を知ってるんですけど、ここ
で言ってしまうては意味ないですしね。

こればかりは、響さんが自分で辿り着かなくてはいけない事ですか
ら。

「私の場合は……なんなんだろう？」

「櫻井女史によると、アームドギアの発現には装者の心象、つまりは心
の有り様が重要になってくるらしい」

「心の有り様って言われてもなく……」

「あたしの場合は、単純にガングニールⅡ槍ってイメージが強かった
だけなんだけどな」

「翼さんもそうなんですか？」

「いえ。私の場合は幼い頃から武芸を嗜んでいたから、そのせいじゃ
ないかしら？ 自分にとって、最も扱いやすい武器が剣だったから」

「イメージ……扱いやすさ……」

柄にもなく響さんが考え込んでいる。

こう言ってはなんですけど、彼女一人ではいい答えは出せない気がし
ます。

「別に焦る必要はないさ。こーゆーのは無理矢理に考えるよりも、自
然と頭に思い浮かんだ事がいつの間にか形になってたりするからな」
「かといって、一人で考え込むのもアレだけどね。聞きたい事がある
のなら、いつでも聞いてやるぞ」

「ありがとうございます。でも、最初は自分で色々と考えてみよう」と

「思います」

「そっか」

「立花がそれを望むのなら、私達からは何も言わない。でも、あまり一人で悩みすぎないようにな」

「はい！」

うくん：青春ですね。

前世の学生時代なんて完全に忘れてるし、豪鬼と言う人物に至っては学校なんて場所とは微塵も接点がありませんしね。

見事に話の輪に入れずにいる……。

「あの…豪鬼さん？」

「どうしました？」

「リュウさんって、どんな人なんですか？」

「これまた唐突ですね」

「ずっと前から気になって……」

「そうですか」

リュウがどんな人物か…ねえ…。

複雑そうで、実は単純なんですよね。彼って。

「…修行バカ？」

「え？」

「どこまでも只管に上だけを見続けている求道者。例え、目の前にどんな困難が立ち塞がっていても、絶対に諦める事だけはしない男。そして、その拳を通じて、様々な人々と絆を育んできた人間……ですかね？」

「凄いですね……リュウさんって……」

「そうですね。凄い、凄くないで言えば、間違いなく凄い人物です。ちよつと天然ボケなところもありますけど、基本的には善人ですから。困った人は絶対に放っておけない困った君です。この辺りは響さんとも似てるかもしれませんがね」

「そ…そうですかね……」

おや。もしかして照れてる？

さくらさん。これは、意外なライバルが現れたかもしれませんよ？

「リュウさんにも夢ってあるんですか？」

「夢というよりは、目標ならありますね」

「それは？」

「……『真の格闘家』になる事」

「『真の格闘家？』」

「そうです。それがなんなのか、何を成せば真の格闘家と呼べるような存在に至れるのか、それは彼本人もよく分ってはいません」

「分らないのに、目指してるんですか？」

「分らないからこそ目指すんですよ」

未だ嘗て、誰も至っていない領域。

あの『豪鬼』ですら、自分が至っているとは一度も明言をしたことは無い。

一体何が『真の格闘家』なのか。

それをハッキリと言える人間は、どこにもいない。

「見えないもの、分らないものを目指す…か」

「なんか…すげえな。あたし達とはスケールが違うや。流石は世界中を又に掛ける格闘家だな」

「そんな人の背中を追い駆けてるんですよ…さくらちゃんは……」

なんだか話し込んでしまいましたね。

どうやら、私も場の空気に当てられたようです。

「はいはい。休憩はここまで。トレーニング再開ですよ」

「『はい』」

この時の私は知らなかった。

まさか、響さんが原作とは全く違う理由で、原作と全く同じ場所に辿り着くだなんて。彼女が秘めた、意外な可能性に。

私は……全く至らなかった。

メイド豪鬼 遂に出番がなくなる

「レンタルショップ？」

それは、本当に突然の事だった。

昼食時、学内の食堂にて一緒に食事をしていた響と未来だったが、響のいきなりの言葉に箸が止まってしまった。

「うん。放課後にちよつと行きたいと思っててさ」

「ふくん。何か見たい映画でもあるの？ それともアニメとか？」

「どっちでもないんだけど…なんて言えばいいのかな？」

「もしかして、イヤらしいビデオだったりする？」

「ち…違うよっ!? 全然違うからねっ!？」

一体、何を指して未来は『イヤらしい』と言ったのか。

単なる冗談のつもりだったのだが、まさかここまで動揺するとは思ってなかった。

「冗談だって。でも、自分でもどんなのか分らないの？」

「いや…自分が見たいと思ってる物自体は分ってるんだけど、それをどう言葉で表現すればいいのかわらなくて……」

「そうなんだ。なら、試しに響の言葉で言ってみてよ」

「私の言葉で？」

「そう。まずはなんでもいいから、口で言ってくれないとこっちも判断のしようがないから」

「それもそっか。うんとね…」

腕を組んでうんうんと唸りながら、必死に頭を回転させる。

そうすること十秒くらい経過してから、なんとか言葉を捻り出した。

「色々な格闘家の人達が試合をしている様子を映したやつを見たいって言うか…」

「それって、よく年末とかに特番であるK-1とか？」

「それって確か総合格闘技のことだよな？ それもアリだとは思うけど、私的にはちよつと違うっていうか……」

「それじゃあ…これとかどうかな？」

未来がスマホを操作し、とあるサイトを開いて響に見せた。

「なにこれ？ けーおーえふ？」

「それは略称ね。正式名称は『ザ・キング・オブ・ファイターズ』って
いって、文字通り世界中から色んな格闘家が集結して、凄い試合を繰
り広げる物凄く大きな格闘大会らしいよ」

「こ…これだっ！」

未来のスマホを取ってから立ち上がり、画面を食い入るように見つ
めている。

よほど興奮しているのか、鼻息荒く目をキラキラさせていた。

「これのビデオってあるのかなっ!？」

「昔のなら普通にレンタルとかしてると思うけど……」

「そっか……」

もう完全に猪突猛進モードになっている。

こうなった響はそう簡単には止められないと、今までの経験から学
習している幼馴染だった。

「でも、珍しいね。響が格闘技に興味を示すなんて」

「あ…うん。ちよつとね。ほら、豪鬼さんもメイドになる前は格闘家
として世界中を旅しながら、色んな人たちと試合をしてたって聞いた
から、気になって……」

「そっか。確か、前にトレーニングをした時に翼さん達がそんな事を
言ってた気が……」

「でしょ？ それに、私達と同一歳のさくらちゃんも、もう既にその舞
台に立ってるからさ。無性に興味が出てきちゃって」

「成る程ね。身近な子が格闘技をしてたら、少しは見てみたいって
気持ちになるかも」

「でしょでしょ？」

親友が共感してくれたことがかなり嬉しいのか、今にも跳び上がり
そうな程に喜んでいた。

（豪鬼さんっていうよりは、多分…あの道着の人の影響が強いんだろ
うな……）

幼馴染は鋭かった。

・
・
・
・
・
・
・

「まさか、未来が急に来れなくなっちゃうなんてな〜」

放課後になり、予定通りに響はレンタルビデオショップへと来ていたのだが、下校直前になって未来が部活の先輩に呼び出されて行ってしまい、結局は一人で来る羽目となっていた。

「ここに来るのも久し振りだな〜。前はよく、アニメとかを借りて見てたんだけど、流石に今はね〜」

苦笑いを浮かべつつ、響は店内をゆつくりと散策する。

今日はツヴァイウィングの二人が仕事で不在な上に、豪鬼自身もバイトが忙しくて特訓は中止となっていた。

だから、放課後の時間をフルに活用して、自分の心が求めている『何か』を見つけるのに専念出来る。

「格闘技って、どのコーナーにあるのかな……」

洋画、邦画、アニメにドラマ。

R-18コーナーのカーテンの前を通り過ぎる時は少し顔を赤くしつつ、店内をぐるっと回る。

「ここも違う……。じゃあ後、探してないのは〜……」

まだ見ていないエリアへと向かいながら、念の為に辺りを見渡していく。

すると、いきなり一人の青年の声が前から聞こえてきた。

「おお〜！ 草薙さんが初めて出場したKOFだ〜！ やつと見つけたよ〜！ よし！ 早速、家に帰ってからこれを見て研究だ！ そして、俺も草薙さんみたいに炎を出せるように……」

青い制服に白いバンダナを付けた高校生が、嬉しそうに一枚のレンタルブルーレイを持って響の横を通り過ぎ、そのままレジの方まで向かった。

「なんだったんだろ……?」

特に気にすることも無く、響は先程まで彼がいたコーナーへと足を向けた。

辿り着いた途端、響の目が大きく見開かれた。

「これは……」

そこに広がっていたのは、まさしく響が求めてやまなかったもの。大きく書かれた『KOF』のロゴが目立ち、パッケージには様々な格闘家がいた。

「テ……テリー……さん?　ですよね?　その格好はどうしたんですか?!?」

「バツ……!　大きな声を出すな!　周りに迷惑だろうが!」

「あ……すみません。でも、なんで『そんな事』に……?　はっ!　まさか……八神さんと同じように……?」

「え?　あいつも似たようなことになってんの?　マジで?」
なにやらレジの方で騒いでいるようだが、ここは無視することに。
どれにしようか本気で迷っていると、更なる衝撃が響を襲った。

「え……?　これって……」

思わず手に取って、そのパッケージを凝視する。

そこには『MILLIONAIRE FIGHTING』と書かれてあった。

「ミリオネア……ファイティング……?」

ちやんとカタカナでルビが降ってあったので、なんとか読む事は出来た。

だが、重要なのはそこではない。パッケージに描かれている人物の方だ。

「これって……もしかしなくてもリュウさん……?」

そこには、凛々しく構えたリュウと相對するように、学ランを着た青年が立っていた。

今にも動き出しそうな写真に、響は一発で魅入られる。

「つてことは、リュウさんがこれに……？」

ケースの裏を見ると、今度はケンが赤い帽子を被った金髪の男と
壮絶な戦いをしている光景が映っていた。

ワンシーンだけだが、それだけでも十分に当時の熱さが伝わって
くるようだった。

「これにしよう……！ うん！ えつと、値段は……」

準新作。

中古よりは値段が張るが、それでもちやんと一週間のレンタルが可
能だった。

「私……今日はツイてるかも！」

ルンルン気分でレジまで行くと、そこには店のエプロンをつけた金
髪で美人の店員がいた。なんでか赤い帽子を被ってるけど。

（あれ？ こんな人、この店にいたっけ？ とうか、なんか似たよう
な人を見たことがあるような気が……）

「どうしました？」

「あつ!? なんでもないです。これ、お願いします」

「はい。レンタルですね」

妙に流暢な日本語を喋る外人店員を見ながら、響はある事に気が付
く。

（あの帽子……なんか見覚えがあるような？）

彼女がそんな事を考えている時、美人店員もまたある事を思ってい
た。

（おいおい……この子。よりもよってコレを借りるのかよ……。この
大会は今までで1・2を争うぐらいに楽しい大会だったけど、自分の
姿がこうして映像記録として残っているのは、普通に恥ずかしいよな
……）

羞恥心を我慢しつつ、マニュアルに従って接客をする。

ある意味でバイトの鏡である。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

レンタルしたブルーレイを受け取り、店を出る為に扉へと向かう。
「ありがとうございます。またのお越しを〜」

眩しい笑顔で見送る彼女だが、まさか自分が接客をした相手が、自分の義母と知り合いであるなんて微塵も想像していなかった。

その事が判明するのは、もう少し後の話……。

・
・
・
・
・
・
・

「早く帰って見よ〜っ♡」

スキップしながら帰路を急いでいると、いきなり響きの足が止まった。

彼女の視線の先には一軒の本屋。

その店頭にある商品に目が釘付けとなっていた。

『マスターズ通信格闘講座』って……まさか、ケンさんが出してるの？

ケンがアメリカにて大金持ちで、その上で超一流の格闘家なのは知ってはいたが、まさか通信講座みたいなことまでしているとは思わなかった。

だが、これは響からすれば棚からぼた餅な状況だった。

(ケンさんはリュウさんの宿命のライバルで、同じ師匠の元で一緒に鍛えた仲だっけって言った……。ってことは、これを習えば、少しはあの人に近づけるっ!?)

ここで響の悪い癖が発揮された。

「これくたさ〜い!」

思うが早い、彼女は即座に店の中へと入っていき、通信講座の教

材を買ってしまった。

数秒後に自分の財布を見て絶望したのは言うまでもない。

「お小遣い……前借出来るかなあ……」

それは無謀な提案とだけ言っておこう。

・
・
・
・
・
・
・

財布が寒くなった事実には悲しみながら歩いていると、道端で人が集まっている光景が見えた。

「あれ？ なんだろう……？」

集まっているのは殆どが男性。

かなり盛り上がっていて、離れた場所にいる響にも熱気が伝わってきそうだ。

「早く帰ってコレを見たい……見たいけど……あつちも気になる！」

好奇心には逆らえない。

特に、響のような真っ直ぐな人間は特に。

「よく見えないな……」

周りの人間は明らかに自分よりも背が大きい者ばかり。

後ろからでは見たくても見えない。

だが、こんな時の響の行動力を侮ってはいけない。

「うぐぐ……！」

「うおっ？」

「な……なんだ？ この嬢ちゃんは？」

人込みを掻き分けるように入っていく、どうにかこうにかして奥へと向かった。

「よいしょ…つと…ええ?」

人が囲んでいる拓けた場所にて場所にて響が見たのは……。

「さあ来い!」

「言われなくても、そうさせて貰うぜ!!」

筋肉質な男とを対峙している、リュウの姿だった。

この日、響は初めてストリートファイトを目撃する。

立花響。もう一つの運命との出会い。

メイド豪鬼 教えを請われる

人込みを掻き分けて見つけたのは、ストリートファイトをする直前のリュウの姿。

いつもの響ならば、すぐに話しかけるところなのだが、今の彼からは非常に近寄りたがい雰囲気が出されていて、場は空気が張り裂けそうな程の緊張感に包まれていた。

「そんじや、僭越ながら俺が見届け人をさせて貰うぜ」

「頼む！」

やじ馬達の中から一人の男性が出てきて、自ら立会人を申し出てきた。

彼が二人の間に入るように立ってから手を挙げると、先程以上に相対する二人の顔が真剣なものに変わる。

「……………」

一陣の風が吹き、近くに生えていた木の枝から一枚の葉がゆつくりと地面に落ちていく。

それが地に着いた瞬間、立会人の手が勢いよく下げられた。

「始め!!」

「おおおおおおおおおおつ!!!」

両者の拳がぶつかり合い、大きな衝撃が走る。

だが、全く痛がる様子を見せないどころか、お互いに静かに笑う。

「ふっ……………」

「へっ……………」

瞬間、男の大振りな蹴りが放たれるが、それをリュウは余裕でガード。

一瞬だけ相手が硬直した隙を狙い、リュウは懐に潜り込んでからの肘打ちを試みるが、相手はそれを読んでいたのか、両手を使って後ろに下がりながらガード。

「後方に下がりながら防ぐことで、ダメージを最小限に留めたのか」

「意外と考えてるじゃねえか」

「え? え?」

ギャラリー達が何を言っているのか分らない響は、キョロキョロとしながら頭を傾げる。

ここに集まった者達は普通のやじ馬ではない。

格闘技を嗜む者もいれば、異常なまでのストリートファイトマニアもいる。

少なくとも、この場においてなんの予備知識も無いまま見学をしているのは響しかない。

「やるな……！」

「アンタにそう言われるとは光栄だぜ！ おらあつ!!」

「ふん！」

そこから始まる激しい攻防。

相手のラツシユをもともせず、リュウは時にはガード、時には回避をして、その場に応じた的確な対処をしていた。

「はっ！」

「ぐっ!？」

そして、ほんの一瞬の間も決して見逃さず、確実に相手に対して打撃を与えていく。

決して派手な技ではないが、堅実で実直な戦い方は、まるでリュウという男の本質を表しているかのようでもあった。

いつの間にか、響は声を出す事も完全に忘れて、目の前で繰り広げられるストリートファイトを夢中になって見ていた。

こんなにも響が何かに対して夢中になったのは、これが生まれて初めての事だった。

それ程までに鮮烈な衝撃が、響の小さな体を走っていった。

そんな戦いが大きく動いたのは、リュウがある特殊な技を繰り出してからだった。

「ふんっ！」

「なっ……！」

リュウは相手の拳を防ぐのではなく、細かく腕を動かすことで弾いた。

弾かれた相手は勿論、周囲の者達にも驚きが走る。

「ブロッキングだ！」

「リュウのチャンスだ!!」

「ブ…ブロッキング？」

「またもや聞いたことない単語を耳にし、頭に疑問符を浮かべる。

それを見ていたギャラリーの一人が親切に教えてくれた。

「ブロッキングってのは、格闘技における特殊な防御方法なのさ」

「特殊な防御方法…ですか？」

「そう。相手の攻撃を正面から受けるんじゃないやなくて、受け流すようにして弾く。そうすることで、受けた方は一切のダメージを負うことなく相手の攻撃を防げるだけじゃなくて、すぐに次の行動へと移ることが可能になるのさ」

「幾らガードをしても、少しずつダメージは蓄積していくからな。今みたいな真剣勝負じゃ、その僅かな差が明暗を分けることも多々ある。だから……」

「そういった意味でも、ブロッキングは非常に有効な手段なんだ。そのかわり、あれはかなり高等な技術で、世界中でも出来る人間はかなり少ないって言われてる」

「その大半が、名のある大会に出場するような猛者ばかりなんだけどな」

「ほえ………」

マニアの本領発揮。

一度でも火が付くと、自分が満足するまで説明をしないと満足出来ない。

相手の事なんて全くのお構いなしで。

響が彼らの説明に目を丸くしていると、ここでリュウが一気に攻勢に出た。

「くらえっ!!」

「しまっ……!」

僅かな隙をつき、リュウがしゃがみながら近づき、相手の顔目掛けでの渾身の一撃を放つ。

「二」出た

!!!
「二」

対戦相手の男は大きく吹っ飛んでから、派手に地面に叩きつけられた。

「く……くそっ……！」

今の一撃で大きなダメージを受けたのか、男は倒れたまま起き上がる様子が無い。

まだ意識はあるようだが、それでも残った体力は全て持っていかけたようだ。

「俺の……負けだ……」

「つてことで、この勝負……リュウの勝ち!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

場が一気に歓声で埋め尽くされて盛り上がる中、響も思わず拍手をしていた。

そんな中、リュウは倒れた男に向かって手を差しのべてから、ゆっくりと立ち上がらせていた。

「大丈夫か?」

「ああ……まだ頭がフラフラとするけどよ、それ以上に気分はスッキリとしているぜ。ここまで気持ちよく負けちゃったら、悔しいって気にもならねえよ」

「そうか。本当にいい試合だった。また俺と戦ってくれ!」

「言われなくても、絶対にこっちからリベンジしてやるから、首を洗って待ってろよな!」

「ああ! その時を今から楽しみに待っているよ」

微笑みながら固い握手をする二人の男。

先程まで激闘を繰り広げていたとは思えない程に仲が良くなっていく。

この時、響は前に豪鬼が言っていた言葉を思い出した。

(これが……拳と拳で繋がる絆……)

戦う事とは、決して相手を傷つけるだけではない。

拳を通じて自分の思いをぶつけ、同時に相手の思いを受け止める。

これもまた一つの『絆』の形なのだと、響は思い知るのだった。

「凄い……」

色んな思いが溢れて、この一言しか言えなかった。だが、それが逆に響の今の気持ちを如実に表してもいた。

「……………ゴクリ」

自分の腕の中にあるレンタルをしたブルーレイを見る。

リュウも出場していた格闘大会の記録。

ここの中で、どれだけの人間達が、どれだけの激闘を繰り広げているのだろうか。

早く部屋に帰って見たい。この興奮が冷めないうちに。

そう思った瞬間、響はリュウに話しかける事も無く、一目散に走って部屋まで帰ることにした。

「ん？ 今の後ろ姿は……」

今頃になって気が付くりュウもリュウである。

・
・
・
・
・
・
・

「思ったよりも遅くなっちゃたな」

肉体的にとりよりも、精神的に疲れた未来は、自分の肩を揉みながら自室の部屋の扉を開ける。

「ただいま。響ももう帰ってき……て……る……？」

「あ……未来……おかえり……」

「ひ……響っ!! 一体どうしたのっ!!」

自分の疲れなんて一瞬で吹き飛ばすような衝撃。

大切な親友がテレビの前に座ってから、静かに泣いていた。

「誰かに何かされたっ!! それとも、どこか怪我をしたとか……」

「だ…大丈夫だよっ!? どこも怪我してないし、何もされてないよっ!?!」

「じゃあ、なんで泣いてるの…?」

「うん…ちよつとね…『コレ』見て感動してた…」

「コレって…響が言ってたやつ?」

「そう。こんなに感動したの、生まれて初めてだよ…」

格闘技の映像を見て、何をどう感動したのかイマイチ分らない未来は、本気で目が点になる。

「格闘家って凄いなだね…。色んな人と一緒に一生懸命に切磋琢磨して、お互いを高めていく…。どんなに激しい試合をしても、その後には皆、凄く楽しそうに笑ってた。絆の形って決して一つだけじゃないんだって分かった気がする…」

「響…」

昔から、特定の趣味を持っていなかった響が、こんなにも夢中になって話している。

彼女とはかなり長い付き合いである未来であっても、このような響を見るのは初めての事だった。

「しかもこれね、リュウさんとかも出場してたんだよ! 本当に凄いやね!」

「え? あの人も?」

「うん! それだけじゃなくて…なんと! さくらちゃんも出てたんだよ! 本当にびっくりしたよ〜!」

「春日野さんも出てるのっ!?!」

自分達と同じ年の女子高生。

未来も本人から、彼女が格闘技をしていると聞いてはいたが、まさか大会にまで出場する程の人物だとは思わなかった。

急にさくらが遠い世界の人物のように感じてきた。

「他にも、アメリカの軍人さんや、侍みたいな人もいたな。高校生の男の子もいたし、すごいムキムキなプロレスラーの人もいたっけ。異種格闘技って感じで、興奮したよ〜!」

「そ…そう…よかったね」

「うん！」

今まで誰も分らなかった。本人すらも把握していなかったであろう響の本質。

新しい親友の魅力を発見して、嬉しいような虚しいような、なんとも言えない気持ちになった未来だった。

「そうそう！ 実はこの大会ね、あの豪鬼さんも出てたんだよく！」

「あ…それは、なんとなく予想してた」

それどころか、普通に大会に出場していることに納得してしまった。

「もしかしてだけど…：メイド服着てた？」

「勿論！ なんだか、見てるこっちが恥ずかしくなったよく。だって、今にもスカートが捲れて、中が何度も見えそうになったし…：」

「あの人の場合、そんな事は気にしないと思う。『メイドですから』とか言ってる」

「そんなシーンは映ってなかったけど、控え室とかで普通に言ってる…：」

豪鬼とはそれなりに長い付き合いになっている為、割と普通に予想出来てしまう二人であった。

・
・
・
・
・
・

「くちゅん！」

「豪鬼くん、風邪か？」

「いえ…健康管理には普段から気を付けてますから、そのような事は無い筈なのですが…：」

「それはそれとして、随分と可愛いくしゃみだったわね。豪鬼ちゃん

拳と拳をぶつけ合えば、そこには確かな友情が生まれる。

少なくとも、響はそう信じている。

(そういえば、あの大会……ベガちゃんやギースさんも出場してたなあ……。やっぱり、あの二人も世界レベルの格闘家なのかな？ 特にベガちゃんとか、すつごく可愛いのに……)

因みに、ベガとギースが出場していたのは、単純にシヤドルーとハワード・コネクションが大会のスポンサーだったからである。

「でも、格闘技を始めるって言っても、どうする気なの？ まさか、体を鍛えてからの野良試合とかをするつもり？」

「まさか。身近な所にいるじゃん。世界を又に掛けていた最強レベルの格闘家が」

「ああ……」

・
・
・
・
・
・
・
・

「そんなわけで……豪鬼さん！ 私に格闘技を教えてください！」

「……………はい？」

次の日。二課の本部にて出会い頭に教えを請われた豪鬼は、珍しく本気で驚いた。

(え？ ええ？ なんていきなり私は響さんにこんな事を言われてるの？ 何がどうしてこうなった？)

こうして、立花響の格闘人生が別の形で幕を開けたのだった。

後に、響がこうなった原因が過去の自分達の映像を見たり、実際にリュウのストリートファイトを見たことが切っ掛けだと知った時は、なんとも恥ずかしい気持ちになったとか。

メイド豪鬼 狙われる

響さんから『格闘技を教えて欲しい』と言われてから数日が経過した。

最初に言われた時は本当に驚いたけど、彼女の眼はどこまでも本気だったので、私はその心意気に応える為に、彼女の申し出を了承した。

元々、響さんは原作でも弦十郎さんに格闘技を教わっていた為、筋自体は全く悪くは無かった。

まるで、乾燥したスポンジが水を吸い取っていくように、次々と私が教えたことを会得していく。

勉強の方もこれぐらい頑張ってくれば、未来さんも苦労しないでしょうね……。

で、今は何をしているのかというと……。

「こおくれえ〜でえ〜…20!」

修行中、リュウやケン、私や兄上もよくやっていた、長い棒の両端に水の入ったバケツを掛けてから、中の水が零れないようにしながら部屋の端と端を往復して歩く特訓だ。

これは、腕や体だけでなく、足腰なども同時に酷使するため、一度に全身を鍛えることが出来る。

更にはバランス感覚も同時に鍛えられるから、本当に凄い。

やっている事は非常に地味だが、だからこそ有効な修行でもあるのです。

というか、昔の私達にとってはこれは修行と言うよりは完全に習慣の一部となっている。

実際に行ったことは無いのだが、それでも記憶だけは鮮明に残っている。

私達の場合は、今いる平坦なトレーニングルームじゃなくて、道が険しい山々でやっていたから、物凄く大変だった。

山では基本的に素足で過ごしていたから、足の裏に豆が出来るなんて当たり前だったし。

「すっげ〜…」

「やるな立花……。もしかしたら、タフネスだけで言えば私達以上かもしれない」

少し離れた場所で休憩をしながら響さんを見ているのは、彼女に釣られて同じ修行をしないと言い出したツヴァイウィングのお二人。

翼さんは12回で、奏さんは16回でリタイヤした。

「立花。もうそろそろお前も休んだらどうだ？」

「そうだぞ。あんまし無理しても意味ないぞ」

「お二人の仰る通りです。時には体を休める事も修行の一環ですよ」

「わ…分りました……」

ここでようやく響さんも休憩してくれた。

頑張るのは結構なのだが、それで体を壊しては元も子もない。

ここに未来さんがいてくれれば。いいブレーキ役になってくれるんでしようが。

「はあ…はあ…はあ…」

「大丈夫ですか？」

「はい…なんとか……」

なんて言っただけなのに、響さんの顔は汗でびっしょりだ。

彼女も、さくらさんと同様にこっち方面の才能はあるんだろうが、いかんせんスタートが遅すぎた。

今は基礎トレーニングと並行して、様々な修行を課しているのだが、どうも響さんはそれを必要以上にやっている節がある。

恐らく、生まれて初めて出来た目標に、自分でも無自覚なままに真っ直ぐに向かっているのだろう。

文字通り、一直線に、最短距離で。

だからこそ、私は響さんに最も大切な事を教えなければいけない。時には回り道をする事も大事なのだ。

『回り道』こそが、本当の意味での最短の道なのだ。

「これってさ、豪鬼たちも昔はやってたんだよな？」

「そうですよ。私達の場合は、修行ではなくて生活の一部でしたけど」と言つと？」

「朝起きてから、山の中にある大滝がある場所まで歩いて行って、そこ

で二つのバケツに水を汲んでから、自分達が寝泊まりしている小屋まで持っていく。それを何回も繰り返し返していました」

一応、貯水しておく為の水瓶も有りはするのですが、それでも食事や洗濯などに使っていると、あつという間に無くなってしまふ。

だからこそ、基本的に一日三回、朝と昼と夕に水汲みをやっていた。その事を話すと、三人揃って鳩が豆鉄砲を食らったような顔になっていた。

「マジかよ……」

「流石は豪鬼さん……幼い頃からそのような過酷な修行を行っていたとは……」

「やっぱり、豪鬼さんもリュウさんも凄いな……」

むく……そこまで驚かれるようなことですかね？

私としては、他の修行の方が何倍も辛かった記憶があるのですが。

「お。今は休憩中か」

「弦十郎さん」

ここでまさかの弦十郎さんのご登場。

普段は司令としてお忙しい身ではあるのだが、私が来る前はよくこうして暇を作っては奏さんや翼さんの特訓相手になっていたそう。

メイドとして、司令である弦十郎さんの負担を少しでも軽くするのは当然の義務。

「お仕事はいいのですか？」

「一応な。小休止がてらに少し様子を見に来たんだが……」

息も絶え絶えな響さん達を見て、なんとも爽やかな笑顔を見せる。

……別に胸キュンなんてしてませんから。

「どうやら、豪鬼くんから相当に絞られているようだな」

「全くだぜ……自分から言っておいてなんだけど、これは物凄くハードだぞ……」

「そうなのか？ ふん！」

おや。徐に弦十郎さんが、先程まで響さんが持っていた棒付きバケツを軽々と持ちあげましたよ？

「成る程な……。持ち上げるだけならば楽だが、これを持った状態で

起伏の激しい山道で何往復もすると、とてつもなくキツイな……」

「そうでしょうね。平坦な道でも相当に疲労したのですから、これをもしも豪鬼さん達が過ごしたような山だったならば……」

「きつと、三人揃ってすぐにダウンしちゃいそうですよね……」

弦十郎さんがそつとバケツを床に置く。

一滴も零れていないのは流石だ。

「バケツ運び……か。今度から、俺もこれをトレーニングメニューに加えるかな」

「わお……」

「気に入られた……」

弦十郎さんが始めるなら、私もやってみようかな？

い……いや、私は何を考えているんでしょうか……」

「矢張り、豪鬼くんに三人の事を任せて正解だったようだな」

「お褒め頂き光栄です」

「本当に助かっている。男である俺や慎二ではどうも細かい所まで気が回らなくてな。君のような女性が来てくれた事は本当に助かっている。ありがとう」

「い……いえ……私はメイドとして当然の事をしているだけであって……褒められるような事なんて何も……」

なんででしょうか……他の人から同じことを言われても何ともないのに、弦十郎さんに褒められると、生娘のように嬉しく思ってしまう自分がいる……」

なんなんでしょうか……この気持ちは……」

(恋する乙女の瞳だ)

(豪鬼さんが顔を真っ赤にしている……)

(やっぱり、豪鬼さんと司令って付き合ってるのかな……?)

そこの三人。さつきから私の事を生暖かい目で見てるのは分かっていますからね？

はあ……前に兄上に変な事を言われたせいで、どうも変になってますね……」

メイドたる者、この程度で精神に不調をきたすなど論外だというのに。

これは、私も改めて気を引き締めないといけませんかね。

・
・
・
・
・
・
・

ここ最近はやかな日々を送ってはいたが、それでもやつぱりノイズはやってくる。

こればかりは避けようがない。

なんせ、相手は『災害』なのだから。

どれだけ強大な力を持っていても、人間の力では絶対に台風や地震などは防げない。

私達に出来る事と言ったら、いつ来てもいいように対策を講じる事だけだ。

今回の現場は工場地帯。

既に人々の退避は完了している為、ここにいるのは私達だけだ。

ベガやギースなどは他の現場に出現したノイズの掃討をしてきているから、ここには来ていない。

「豪波動!! 響さん! 今です!!」

「はい! どりゃあああああああああああつ!!!」

私の豪波動拳に合わせて、響さんが目の前のノイズに拳を構えて突撃する。

気の塊を避けようと人型ノイズが移動するが、その先には既に響さんが拳を振り被っている。

「(こおおおおれえええええええええええええええええええええええつ!!!)」

拳がノイズの頭部に直撃し、そのまま拳を突き出す。

その一撃により、ノイズは頭部から粉々に砕け散り、灰となって消えた。

「どうやら、今のが最後のノイズだったようですね」

『はい。もう周囲にノイズの反応は有りません。ご苦労様でした。すぐに撤収準備に入らせます』

「お願いします」

いつも通り、二課の人達が来るまでの僅かな休憩タイム。

「にしても、豪鬼に教わり始めてから、一気に腕が上がったな！」

「そうね。拳を振るうことに躊躇いが無かったし、踏み込みの速度も悪くなかった」

「そんなく。私なんてまだまだですよ」

「なんて言いながら、響さんの顔はにやけてますよ?」

「ええっ!?!」

今はそれでいいと思いますけどね。

自分の成長が実感出来るのは非常にいい事です。

「この調子なら、響のアームドギアが発現するのも時間の問題かもな」

「そうですね。恐らく、響さんのアームドギアは手甲のような物になるでしょうね」

「手甲……」

「成る程。立花のは文字通りの意味での『アームドギア』になるわけか」

翼さん、お上手ですね。座布団一枚です。

にしても……。

(戦闘中からずつと感じていた、この殺気は一体……?)

どこからか私達の事をジツと見ているような、そんな感じがする。

いや、私達じゃなくて、この視線は私だけを見ていた。

このタイミングで登場する人物には覚えがありますが、なんで『彼女』が私の事を見ていたんでしょうか?

それとも、これは私の思い過ごしで、実は別の敵が私の事を狙っている……?!

『もうすぐ撤収部隊が到着しま……これはっ!?!』

『どうしたっ!?!』

『装者及び豪鬼さん達の周囲に突如として大きなアウフヴアツヘン波形が!』

『なんだとおっ!?! 分析を急がせろ!』

『りよ……了解!』

通信越しに急に慌ただしくなる指令室。

弦十郎さんの大声が聞こえ、藤堯さん達オペレーターが慌てているのが分かる。

「アウフヴアツヘン波形が検知された……?」

「まさか……」

「え? ええ?」

どうやら、翼さんはなんとなくの検討がついてるみたいですね。

それとは逆に、殆ど事情を知らない響さんは右往左往してまっすけど。

「皆さん。念の為に警戒態勢に移行しますよ。お互いに背中合わせになるようにして周囲を警戒です。翼さんは北を、奏さんは東を、響さんは西をお願いします。私は南を担当しますので」

「了解!」

四人で円を描くような陣形になって視線を巡らせる。

工場地帯だけあって、物陰だけならば沢山存在している。

隠れようと思えば、何処にでも隠れることは可能だ。

「どこにいやがる……!」

「殺気だけは感じるが……場所の特定は難しいな……」

「……」

どんな小さな変化も見逃してはいけない。

私ならばともかく、まだ戦闘に不慣れである響さんが狙われたら大変だ。

『解析……出ました! そ……そんな……これは!』

解析……? そう言えば、今日はまだ了子さんの姿を見てないな……。

はっ!!? しまった!! すっかり忘れていた!! 彼女の正体を!!

『ネフシユタンの鎧です!!』

その瞬間、私の目の前にある物陰から、深紅の光輪が二つ、高速で飛んできた。

「豪鬼さん!!」

「分っています!! はっ!!」

両腕を使って、光輪を薙ぎ払うようにして打ち砕く!

矢張り、狙いはこの私か! けどどうしてっ!? そっちの狙いは響さんじゃないのですかっ!?

完全に予想の斜め上をいく事態に戸惑っていると、その隙を狙われて同じ物陰から私に向かって白い鋼鉄の鞭のような物が伸びてきて、そのまま私の両腕に巻き付いた。

「豪鬼っ!!」

「豪鬼さん!!」

『豪鬼くん!!』

「くっ……!」

この『鞭』は……間違いない!

間違いなく『彼女』だ……!!

「お前の両腕は封じた。これでお得意の格闘技は使えないだろ」
物陰からゆっくりと歩いてきたのは、白銀の鎧を纏った少女だった。

その両腕から伸びた鞭は、そのまま私の腕に絡みついている。

「お前は……!」

「それが……ネフシユタンの鎧の戦闘形態か……!」

「女……の子……?」

さて……ここからどうしましょうかね……。

メイド豪鬼 依頼をしに行く

出現したノイズを一掃した直後に、いきなり物陰から強襲を仕掛けてきた、ネフシユタンの鎧を纏った状態で現れた謎の少女。

彼女の正体はとづくに知ってるんですけど、ここでは黙っておきましようか。

その少女から放たれた鎧の一部である蛇腹状の鞭によって腕を絡め捕られた私は一転して大ピンチ……なわけないでしょうが。

この程度でどうこうなっていたら、兄上に大きなゲンコツをお見舞いされてしまいます。

「なんで……お前のような者がネフシユタンを……」

「さて……なんでかねえ？」

「まあ……こんな風に襲撃を掛けてきておいて、素直に白状をする訳がないよな……」

「当たり前だ。つーか、んな事を言ってるいいのかよ？」

「なに？」

「お前らのお仲間が一人、身動きが取れなくなってるんだぞ？ ほっといてもいいのかよ？ それとも、仲間の命よりもネフシユタンを取り戻す方が大事ってか？」

「あ……」

あ。奏さんに翼さん、本気で困惑してますね？

響さんに至っては、全く状況が把握出来なくて呆然としてますし。

「あの……さつきから言ってる『ネフシユタン』ってなんですか？」

「あれ？ まだ説明してませんでしたっけ？」

「はい」

「……弦十郎さん？」

『すまん……完全に忘れていた』

「……」

弦十郎さんも人間だった事ですかね。

「簡単に言ってしまうえば、前に二課から盗まれた完全聖遺物です」

「完全聖遺物……」

「ちよー凄い聖遺物って事です」

「成る程！ 分りました！」

「今の説明でいいのっ!?!」

いいんじゃないんですか？ 本人が分かってくれば。

「テメエら!! こつちを無視してコントをしてんじやねえっ!! 状況分ってんのかっ!?! つーか、ちつとは怒るとかしたらどうなんだ！

お前らが血眼になって探しているネフシユタンが目の前にあんだぞっ!!」

「まあ…そうだな。確かにお前の言う通り、豪鬼に会う前のあたし等なら、今みたいな状況に陥ったら怒りに身を任せてお前に突撃してただろうな」

「だが、私達は豪鬼さんと出会い、修行を積み、心身共に鍛え上げてきた。流石に何も思わない訳ではないが、こんな事で動揺したり怒ったりするような無様な真似はもうしないだろう」

「んだと…!?!」

…どうやら、私が思っている以上にお二人は大きく、強く成長していたようですね。

トレーナーとしては非常に嬉しい限りです。

「それとな、お前に一つだけ忠告をしておいてやろう」

「なに？」

「そんなちんけな鞭程度で、豪鬼の動きを本気で押さえ込むことに成功してると思ったら大間違いだぞ」

「はあ？ テメエら何を言っ…なっ!?!」

さて…と。ここからどうしましょうか。

彼女が完全聖遺物を身に纏っている以上、多少の手荒な真似は許されるでしょうし、まずはメイドとして悪い子には『おしおき』をこななくてはなりませんね。

「ビ…ビクともしねえ…だど…!! んなバカなっ!! こつちは完全聖遺物を身に纏っていて、あいつは何にも身に付けてねえんだぞっ!?! それなのに、どうしてこつちがパワー負けしてんだよっ!?!」

「はいそこ。私の事を露出狂みたいに言わないでください。ちゃんと

メイド服を着ているじゃありませんか」

「んな事を言ってるじゃねえんだよ!! クソ：クソ！ なんなんだよ
テメエはっ！」

「私はどこにでもいる普通のメイドです」

「普通のメイドがこんなパワーを持つてる訳ねえだろうが!!」

「持ってますよ。メイドに不可能はないのですから」

（（あ…このフリーズ、久々に聞いたかも））

しかし、これが本当に完全聖遺物であるネフシユタンの鎧の力なん
でしようか？

いや、今の状態ではまだ全ての力を発揮しているとは言い難い筈。
となれば、これは単純な力の差？

「多分、貴女が私の事を動かす事も出来ないのは、シンプルに力の差が
歴然だからでしょう」

「それはつまり…あたしが弱いって事か？」

「その通りです。私は愚か、今の貴女では成長した翼さんや奏さんに
すら勝てるかどうか怪しいですね。響さんは微妙ですけど」

「私、まだまだ初心者だしなく」

「テメエ…：舐めやがって…：…！」

「舐めてません。事実を申し上げているだけです」

しかし、どうして彼女は真っ先に私の事を攻撃してきたのでし
ょうか？

私の記憶が正しければ、彼女の…『彼女達』の目的は響さんの身柄
だった筈。

それなのに、さつきから全く響さんを狙うような事をしていない。

「いい機会ですから、ここで問題を出しましょう。三人共、よく考えて
答えてくださいね？」

「おま…：ふざけてんじゃねえっ!!」

はいはい。外野は黙っててくださいね。

「今のよう両手が使用不能になってしまった場合、皆さんならどう
しますか？」

「「ん…：…」」

「お前らもお前らで真剣に考えてんじやねえっ!!」

はっはっはっ。もう完全にツッコミ役ですね。

「あたしなら、逆に相手の方に突っ込んでいってから蹴りでもぶちかますけどな」

「私ならば、脚から刀剣を出現させて鞭を切断、その後に全速力で怯んでいる相手の懐に潜り込みます」

「相手の体ごと、全力でぶん投げます!!」

三人の性格がモロに出ている回答ですね。

「この問題に正解なんてありません。戦いは常に臨機応変かつ自分に合ったスタイルが一番ですからね。でも、今のように対処法を一つでも出せるようになるのは良い事です」

「豪鬼さんならどうするんですか?」

「私ですか? そうですね……」

腰を低くして、脚を前後に開いて技が出せる体勢になる。

「ぬあっ!? ひ…引っ張られるっ!? 踏ん張れないっ!」

そこから、全身のバネを利用して体を大きく回転させて、鞭を巻き取るようにして相手の体を自分の方に引き寄せて、そこから技をお見舞いする!!

「…このパワーはっ!? うわああああああっ!」

「そこですっ!!」

竜巻斬空脚

「がはあっ!」

蒼い雷撃を宿す蹴りの一撃がクリティカルヒットして、彼女は大きく吹き飛んでから氣にぶつかって止まった。

その勢いで私の腕に巻き付いていた鞭は引き千切れた。

「やったっ!」

「いえ、まだです」

「え?」

彼女は両足を震わせながらも、何とか立ち上がり、こっちをキツと睨んでいた。

「この女あ…なんつー馬鹿力だ……! ネフシユタンが無かったら…」

確実に今ので肋骨とかが折れてたぞ……!」

「これでもかなりの手加減をしたのですけどね」

「冗談…キツすぎだろ……!」

やっぱり、技を掛けたのはやり過ぎましたかね？

ここは背負い投げぐらいにしておくべきでしたでしょうか？

(そーいや……言われてたっけか……。メイド服を着た女だけには要注意しろってよ……。最初は『何言ってるんだ』って思ってたけど、納得したぜ……! 『豪鬼』って呼ばれてたこの女は……明らかに普通じゃねえ……! ノイズを素手で倒すばかりか、完全聖遺物すらも圧倒する力……。こんなバケモノをどうやって捕まえろってんだ……!)

さてと、本来ならばここで彼女を捕縛するべきなのでしょうが、それは余り推奨されませんね。時期尚早です。

「お行きなさい」

「なに……?」

「逃がしてあげると言っているんです。それとも、まだ戦う気ですか？ その状態です？ 全快の状態でも私に手も足も出なかったのに？」

「……………クソツ!!」

万が一に備えて予め用意していたと思われる煙幕を取り出して、こちらに投げつけた。

周囲が煙に包まれて何も見えなくなるが、彼女の遠くなる足音だけが聞こえていた。

「次はこうはいかねえっ!! 覚えてろよっ!! この借りは絶対に返してやるからなっ!!」

「ちよ……待ちやがれ!」

煙が晴れると、そこにはもう誰もいなかった。

「逃げやがったか……」

「敢えて何も口出しをしませんでしたが、本当に奴を取り逃がしてもよかったですか?」

「構いませんよ。彼女には『餌』になって貰わないといけませんから」
「「餌?」」

「そうです。確かに彼女はネフシユタンを身に纏っていました。だからと言って彼女が下手人だとは考えにくい」

「確かに……非常に嚴重に管理されていたネフシユタンをたった一人で盗めるとは到底思えない」

「ほぼ間違いない、彼女の背後には『黒幕』と目される人物が控えている筈です。そして、その人物は私達を狙っている。つまり……」

「確実に次の機会があるって事か」

「その通りです。今回は唐突な遭遇だった為に準備が心構えが出来ていませんでしたが……」

「今度もあるって分かっているならば、それに対する色々な準備が可能となる……ですね」

「はい。ですよね、弦十郎さん？」

「「え？」」

「おや、気が付かなかったのですか？」

「いつもなら、彼女を逃がしたことに真つ先に大声を上げそうな人物がずっと黙っていたことを。」

『流石は豪鬼くんだな。何も言わなくても、こちらの思惑を読んでもくれたか』

「メイドですから」

「これぐらいは朝飯前なのですよ。えっへん。」

（なんて言ってるけどさ……）

（これって完全に……）

（長年連れ添った夫婦の会話だよね……）

「なんででしょうか……また生暖かい目で見られている気がします。」

『詳しい話はこっちに帰ってきてからだな。今から改めて撤収準備を始めさせる。それまで少しの間だけ休んでいてくれ』

「承知しました」

「ふむ……矢張り、通信越しにも了子さんの声が全く聞こえなかった。という事は、彼女は今、二課の本部にはいない？」

「あの……豪鬼さん」

「どうしました、響さん？」

「また今度あの子が来たら、その時は私に戦わせてくれませんか？」

「……理由をお聞きしても？」

「私…思うんです。同じ人間同士、争う理由はあっても、敵対する理由は無いです」

「響さん……」

「この拳を通じて伝えたいんです！ 私の気持ちを！ 本当は敵対する理由なんて無い筈だよって！ そして、あの子の事も知りたい！」

……強くなってるのは、翼さんと奏さんだけじゃないみたいですね。

響さんも、原作以上に心が強くなっている。

戦いを否定せず、戦いを通じて絆を結ぶことを学び始めている。

リュウやさくらさんの影響を強く受けたせいですかね。

「わかりました。次にまた彼女が襲撃をしてきた時は、響さんにお任せします。お二人や弦十郎さんもそれでよろしいですか？」

「あたしは異論はないよ。今の響なら、きつとあたし等よりもいい結果を出しそうな気がするし」

「私も同意見です。これは恐らく、『拳で繋がる』ことを学ぼうとしている立花にしか出来ない事でしょうから」

『現場の人間が満場一致している状況で、こちらから言えることなど何も無いだろう』

「では……」

『ああ。響くん、頼んだぞ！』

「はい!!」

過程は違いますが、原作通りには進み始めた…のでしょうか？

まだハッキリと断言は出来ませんね……。

「そうだ。そちらに今、緒川さんはいらつしやいますか？」

『慎二か？ いるにはいるが…何の用なんだ？』

「実はこの後、少し一緒に着いてきてほしい場所がありました」

『だそうだが、どうだ？』

『僕でよろしければ喜んで。しかし、どこに行くのですか？』

「それは後でお教えします」

念には念を入れて、『彼』に協力を求めましょう。

決して二課の事を信用していない訳ではないのですが、今回の事には『高い戦闘力を秘めた諜報員』が最適だと思うので。

それに、緒川さんとなら話が合うかもしれないですね。

ちやんと、後でこちらから待ち合わせの連絡をしておかないと、ですわね。

・
・
・
・
・
・

「お待ちせしました」

「では、行きましようか」

本部に戻ってからの報告が終了した私は、緒川さんと合流してから目的の場所へと向かうことに。

「徒歩で向かうのですか？」

「はい。そこまで遠い場所でもないので」

暫く二人で歩いていくと、見えてきたのは一軒の喫茶店。

名前は『喫茶あいの』。

「ここ…ですか？」

「そうです。この喫茶店は私の知り合いの子の実家なのですが、その子とある人物が意外と仲がいいんですよ。共通の友人がいる店なので、待ち合わせには最適かと判断したんです」

「成る程……」

そんな訳で、遠慮なく店内へと入る事に。

入るな否や、すぐに元気のいい女の子の声が聞こえてきた。

「いらつしやいませ〜！　って、豪鬼さん？」

「お久し振りです、はあとさん」

この喫茶店の看板娘にして、何よりも『愛』を大切にしている少女。それが彼女『愛乃はあと』さんです。

「ほえ〜……」

ん？　いきなり私と緒川さんの事を交互に見て、どうしたんでしょうか？

「デートですかっ!？」

「違います。彼は仕事場での同僚です」

「あはは……分かっていても、結構グサってきますね……」

何がですか？

「初めまして。緒川慎二と申します」

「愛乃はあとです！　初めまして！」

いつ来ても、彼女は元気一杯ですねぇ〜。

まるで響さんがもう一人いるみたいです。

「それで、『彼』はもう来てますか？」

「はい。一番奥の席で待っていますよ」

「そうですか。分りました」

はあとさんに言われるがまま、私達は店内にある一番奥の席へと向かうことに。

そこには、適当に組み合わせましたって感じの服装の青年が一人で座って、ちびちびとコーヒーを飲んでいた。

赤いパーカーとジーパンを履いていて、フードを深く被っていて顔はよく見えない。

けど、彼から発せられる雰囲気だけは私には丸分りだ。

「お待たせしました」

「気にするな。俺もついさつき来たばかりだ。それに……」

彼がチラッと視線を逸らすと、そこには元気一杯に働いているはあとさんの姿が。

「暇だけはしないでくださいね」

「そのようで。相変わらず、仲が宜しいようで何よりです」

「……………」

「おや、ここでだんまりですか。」

「この手の駆け引きだけは未だに苦手そうですね。」

「お前は……………」

「君は……………」

「あれ？　なんか二人が久しぶりに会った感を出してる？」

「もしかして、知り合いました？」

「確かに『同じ職業』ではあるでしょうけど……………」

「久しぶりだな」

「ええ……………そうですね……………」

「ストライダー……………飛竜くん……………」

メイド豪鬼 SHINOBIに会う

「まずは座れ。話はそれからだ」

「そうですね。では、お邪魔しましょうか」

「は…はい」

飛竜さんに促されるまま、私達は彼と対面するような形でテーブル席に座った。

それを確認したのはあとさんが、ニコニコ笑顔でこちらへと注文を取りに来てくれた。

「ご注文は何にしますか？」

「私は…そうですね。では、アイスココアとモンブランをお願いします」

「僕は彼と同じコーヒーで」

「分かりました。飛竜さんはコーヒーのお替りはどうします？」

「…頼む」

「はい！ かしこまりました！」

飛竜さんの空っぽになったコーヒーカップを持って、注文を伝えに行こうとしたはあとさんに向けて、全力のサムズアップをする。

「はあとさん。こちらが着席するのを確認してからの素早い注文確認。お見事です。成長しましたね」

「豪鬼さんが色々教えてくれたお蔭です！ ありがとうございます！ た！」

「大切なお友達に助力をするのは当然の事ですから」

歳は違えど、友情は育める。

それが同性ならば猶の事です。

「まさかとは思いますが、飛竜さんはここの常連なんですか？」

「そうではない。仕事が無い時に暇を潰す為に来るぐらいだ」

「それを世間では『常連』というのですよ」

「そうなのか……」

見た目は熱血系なのに、中身は超クールキャラなせいかなんともいえないギャップがありますね……。

しかも、意外と一途な部分がある……と。

「……………こうして君と再会するのは、いつ振りでしょうかね……………」

「俺の記憶が正しければ、俺が特A級になった頃だ」

「ついこの間のように思えるのに、随分と時間が経過してしまっているんですね……………」

「そんなものだ」

なんとも淡泊。

でも、まさかこの二人が顔見知りだったのには本気で驚きです。

「お前の兄と弟はどうしてるんだ？」

「兄上はまだ当主をしています。捨くんの方も相変わらずのホスト生活をしていますよ」

「そうか……………変わっているようで、変わらないものもあるのだな」

「飛竜くん……………」

彼がこんな事を言うのも珍しいですね。

懐かしの再開で少しだけ饒舌になっているのですかね？

「……………ストライダーズの事はボクも独自の情報網にて知っています」

「お前に隠し事は出来ないか」

「それはお互い様です」

二人とも『忍』ですからね。

そりゃ、普通に考えても無理でしょ。

「裏切り者『飛燕』によって、戦闘・諜報のプロフェッショナル組織『ストライダーズ』は君を残して完全に壊滅……………。その後、飛竜くんの消息は一切不明となってしまった」

「……………」

「あれから君は何をしていたんですか？　もしも可能であれば、教えてくれませんか？」

なんか普通に聞いてますけど、彼だってプロですから、そう簡単には教えてはくれないと思うんですけど……………。

「……………いいだろう。どうせ、もう終わった任務である上に、表向きは『何もなかった』事にされているからな」

……………ではあとさんが注文の品を持って戻ってきた。

すぐにシリアスな空気になっていることを察した彼女は、すぐに会釈をした後で仕事に戻っていった。

「ストライダーズが壊滅してからも、俺は自分に与えられた任務を継続していた」

「任務とはまさか……」

「冥王グランドマスターの抹殺だ」

「冥王……グランド……マスター……」

冥王グランドマスター。

全世界を支配しようと企む独裁者で、絵に描いたような悪党なのですが、その存在には非常に謎が多い。

悠久の時を超えて世界を影から支配していたとかなんとか。

それは真実かどうかは私には分かりませんが、一つだけハッキリとしていることがある。

それは、冥王グランドマスターの肩書が決して名ばかりじゃないと言う事。

もしも本気の奴と戦おうとするならば、私も決死の覚悟をしなければいけません。

「俺は奴の足取りを追う為に世界各地を転々としていて、少しずつではあるが着実に奴へと近づいていった。だが、奴の本拠地となる場所が判明すると、流星に途方に暮れてしまった」

「それはどこなんですか？」

「……月だ」

「月……とは、あの宇宙にある天体の……」

「そうだ。奴は月にある『古代遺跡』らしき物を独自のテクノロジーで改造し、本拠地としていた。勿論、地球側からでは一切判明しないように特殊なフィールドで覆ってな」

「流星は悪い意味で噂に名高い冥王……！ 月に遺跡なんて物がある事自体が驚きですが、それを改造して基地にするなんて……」

なんとというか……全てのスケールがデカすぎるんですね。

それはそうと、このモンブラン本場に美味しいですね。

「もきゅもきゅ……ごくん。で、飛竜さんはどうやって月まで行った

「貴様…何を笑っている?」

「敗北のショックで頭がおかしくなったのか?」

「愚かなるストライダー……アベンジャーズ……私はお前達の事が哀れで仕方がない」

「なに?」

「この私を葬ったところで何も変わりはない。何も終わりはしない。何も救われはしない!」

「貴様は何を言って……」

「お前には分からぬか? 『自由の番人』よ。私が消滅しようとも、『心無き雑音共』は蔓延り続け、『自ら神を名乗る者』は立ち上がる時を待ち、『大いなる星の意志』は貴様らの事を見続けている」

「雑音…は、恐らくノイズの事だな。他の二つはなんだ……?」

「ここで知らずともいずれ分かる。そして知る。私の死は終わりではない。全ての始まりなのだ」と

「本気で意味が分らん。もっと解り易く説明してくれると助かるんだが?」

「ならば言ってやろう。『天駆ける黄金の騎士』よ。

お前達は選択を間違えた。私はな……『呼び水』なのだよ」

「呼び水……?」

「クハハ……! 残念だが、お前の思う通りにはいかぬぞ……『先史文明の神』よ! 既に賽は投げられたのだ! その身を持って思い知るがいい! この世には神すらも凌駕する『偉大なる意志』が存在することをな! 我が身を『生贄』として、御身が降臨の礎とならんことを!!」

.....

「それだけを言い残して、冥王は跡形も無く消滅した」

「気になる単語ばかり出てきましたね……。戻ったら、了子さんに相談してみた方がいいかもしれません」

神を名乗る者……。星の意志……。そして、先史文明の神……。か。

そのどれもが予想出来るのですが、今はまだ止めておいた方が良さそうですね。

余りにも時期尚早すぎる。

それに、了子さんの反応も気になりますし。

「事実、ノイズ被害は全く減ってはいない。それどころか、最近では増加傾向にある」

「それは僕たちも把握しています」

「少なくとも、ノイズを率いていたのは冥王ではなかったという事になる」

「そうなりますね……」

この世界だと、冥王が何をしてもおかしくは無いですね。

実は彼がノイズの創造主でした……。なんてオチもあったかもしれないませんが、流石にそれは有り得なかったようです。

「冥王討伐後はどうしてるんですか？」

「アベンジャーズを初めとする様々な組織経由で入る任務をこなしている。その際に、そこで呑気にココアを飲んでいる豪鬼とも知り合っ

てな。それからは時折、個人的にこいつの依頼も引き受けている」

「それで豪鬼さんとお知り合いだったんですね……」

彼との出会いは色々と衝撃的でした。最初にあつた時は本気で斬り掛かれると思ってたんですけど、意外と話を通じる相手だったんですよ。

それからはもう、本当に御鼻根にさせて貰ってますよ。

「……話し過ぎだな。それで、依頼はなんだ？」

「そうですね。緒川さん」

「はい」

彼に目配せをすると、懐から一枚の写真を取り出してテーブルに置いた。

「これは？」

「つい先ほど、ノイズ討伐に出撃をした豪鬼さん達を襲撃した謎の少女の写真です」

その写真は、本部で記録した映像をプリントアウトした物で、かなりくつきりと写っている。

「彼女の正体を探っただけなら情報提供出来るかもしれませんが」

「……写真はこれだけか？」

「すみません。いかんせん、本当にさっきの出来事なもので」

「ですが、もう少しだけならば情報を提供出来るかもしれません」

「なんだと？」

さつきからずっと会話に入れませんでした。ここからメイドの本領発揮と参りましょうか。

「まず、身長は150前半ぐらいで、年齢は恐らく10代半ば。髪の色は黒ではなく白みがかっていて、顔立ちはアジア人特有の形をしていて、それでいて日本語が堪能でしたから、もしかしたら日本と欧州、もしくは北欧辺りの血が混ざったハーフかもしれない。見た目に反して、言葉遣いは相当に荒れかけていましたけど」

まずはこれぐらいでしょうか。

余り話し過ぎると、却って怪しまれますしね。

「……たった一回の交戦でそこまで分かってしまったんですか？」

「何度も言っているでしょう？ メイドに不可能はないのです。この程度、メイドとして当然の嗜みです」

「豪鬼さんと一緒にいると、メイドの定義が分らなくなってきましたね……」

「気にするだけ無駄だ」

あらま一蹴。

これまた手厳しい。

「だが、豪鬼が今言った情報があれば、特定はかなりし易いだろう」

「一応、こちらでも調査はしますが、飛竜くんならば二課よりも圧倒的に早く仕事を終えそうですね」

「それが本職だからな」

戦闘能力だけじゃなくて、諜報能力までチートだなんて。

つくづく、彼が『天才』だと思いき知らされますね。

史上最年少の特A級ストライダーの名は伊達じゃないって事ですね。

「そうだ。僕の連絡先を……」

「それならば不要だ。いざとなれば、そちらの本部に直接赴くし、連絡先ならば既に豪鬼のものを持っている」

「ま……まさか、飛竜くんは二課の事も知って……」

「当然だ。かなり名が知れているからな」

「なら、僕の番号は知らないですね……」

「……いや。念の為に教えて貰おう。万が一、豪鬼と連絡が取れない状況に陥る可能性もあるかもしれん」

「分かりました」

デ：デレた!? あの飛竜くんがデレたっ!?

これも、はあとさんの影響なんでしょうか……。

愛の力とは偉大ですね……。

「依頼料はいつもの口座に振り込んでおきます」

「分かった。では、失礼する」

テーブルの上にお金を置いてから、飛竜さんはお店を後にした。

でも、私はちゃんと見てましたからね？

あなたがお店を出る時に、はあとさんの頭を撫でていたことを。

「これで一先ずは大丈夫ですね。さて、これから私達はどうしましょうか？」

「取り敢えず、豪鬼さんのモンブランを見ていたら僕も何か注文したくなったので、追加で頼むことにします」

その後、緒川さんが頼んだガトーショコラがやって来てから、二人で何気ない会話をしながらの羽休めを楽しんだ。

なんでか緒川さんに『司令にだけは絶対に内緒にしてくださいね』

と念を押されたんですけど、どうしてでししょうか？

メイド豪鬼 お説教をする

「……という訳で、ストライダーズの生き残りである飛竜くんが協力してくれるようになりました」

「風の噂で聞いてはいたが、まさか本当に生き残りがいたとはな……」
二課の本部に戻ってきた私と緒川さんは、弦十郎さん達に先程のまでの話を報告した。

思ったよりも驚いている様子が無い事から、それなりにはストライダーズの事を知っていたようですね。

「豪鬼さんは本当に顔が広いんですね」

「これも、世界中で格闘家として戦ってきたが故……なのか？」

「それもありますね。彼との場合は私が嘗て、アベンジャーズに個人的に協力をしていた時に知り合ったんです。それからはずっと腐れ縁が続いてますね」

まだ知り合ってから数年しか経過してないんですけど、なんとも懐かしいですね。

あの超人集団の中にも、全く見劣りしない戦闘力を発揮してるんですから、彼もまた十分に人知を超越してるって事でしょう。

「その飛竜さんって人は、どんな人なんですか？」

「そうですね……口数が少なく、いつもクールに淡々と任務をこなしていく人物なんです。意外と優しい一面や熱い一面を持っていたりするんですよ」

「口には決して出しませんが、飛竜くんは他者との繋がりを大切に
する青年ですから」

もうちよつとでいいから素直になれば、少しははあとさんとの仲も
進展するでしょうに。

私で良かったら、仲人ぐらいはしてあげますよ？

「む？ 慎二もその『飛竜』という青年と知り合いなのか？」

「はい。彼がいた『ストライダーズ』とウチの一族は、昔から色々と繋がりがありましたから。その関係で会うことが多かったです。ストライダーズが壊滅してからは完全に行方不明でしたけど」

「内部からの裏切り者のせいで壊滅したんだっただな……」

「しかも、その『裏切り者』が飛竜くんの同僚であり親友でもあった男だった……」

「!!!」

私がふと呟いた一言に、装者の三人が過剰に反応した。

「ちよつと待てよ……! その飛竜つて奴は、大切な親友に裏切られちまったのかっ!?!」

「はい……。その時の彼の心境は私達では理解出来ないでしょうね……。飛竜さんにとって、ストライダーズは家族であり、同時に帰るべき場所でもあった。それを、唯一の親友の手によって奪われたのですから……」

もしかしたら、その時の出来事が切っ掛けで、彼の顔から表情が消えたのかもしれない。

自分に課せられた『最後の任務』を果たす為に、感情を殺したのだろう。

「…彼はそれからどうしていたのですか?」

「自分に与えられた『最後の任務』を果たす為に、一人で孤独に戦っていました」

「最後の任務つて……」

「世界の支配を企もうとした謎の存在『冥王グランドマスター』の抹殺」

「冥王……」

「グランドマスター……?」

彼女達が知らないのも無理はない。

私は当然の事、世界中の誰もが奴の事を詳しく知っている者はいないだろう。

それ程までに不気味で謎に包まれている男なのだ。

「その過程で、自分達を裏切った親友とも対決し、これを倒したと聞いています」

「復讐…のつもりだったのかな……」

「違うでしょう。彼は言っていました。『任務の障害になったから排

除したに過ぎない』と」

「忍びたる者、いついかなる時も私情に走らず、心を律して任務を果たす…か」

「本当は色々と思うところもあったのでしようが、それを口に出したら自分の中にある何かが悪れると思ったのかもしれない」

一度でも出した言葉は戻せない。

言霊の威力というのは、我々が思っている以上に大きい。

「そんな彼も、最終的には折れて誰かに頼る道を選んだようですが」「それってどういう事ですか?」

響さんの疑問も最もなので、私と緒川さんで喫茶店でのことを軽く話した。

「月に拠点があつたなんて…かなりぶっ飛んでるな」

「流石の天才忍者も、月に行く手段だけはどうにも出来なかつた…か」

「でも、私はそれでよかつたと思いますけどね。飛竜さんがまた、誰かと手を取り合う事を思い出してくれたのですから」

「そうですよね!」

彼が装者の三人と出逢えば、どんな化学反応が起きるのか。

実は地味に楽しみにしてるんですよ。

「しかし、若干19歳で特A級ストライダーになっている天才が実在していたとはな……」

「それってそんなに凄い事なのか? その飛竜って奴はあたしと同年なんだろう?」

あ。そういえばそうでしたね。

飛竜さんと奏さんって地味に同年代でした。

「特A級と言えば、たった一人で国を相手に戦えるレベルの実力者であることが最低条件だった筈だ」

「く…国を相手に戦えるうっ!」

「因みに、裏切り者の青年もまた特A級だったらしいです」

「特A級同士の死闘…とてつもなく壮絶だったに違いないな……」

同時に、一生忘れられない戦いでもあつたでしょうね。彼にとつては。

「けど、どうして飛竜の親友は自分の組織を裏切ったんだ？ 洗脳でもされたのか？」

「洗脳というよりは、魅了されたのだと思います。グランドマスターのカリスマと実力に」

「下手に洗脳されるよりも質が悪いな……。誰かからの精神制御ではなく、自分の意志で敵側に寝返るとは……」

「悲しいですね……」

その悲しみを乗り越えているのが、今の彼なんですよ。

だからこそ飛竜さんは強い。実力も、その心も。

「彼の持つ『光剣サイファー』はあらゆる物を一撃で切り裂く威力を誇っています。恐らく、ノイズも斬れると思います」

「なんだとおっ!？」

弦十郎さん、本当にリアクションが大きいですよね。

「前に亡霊の類を普通にぶった斬っていたので、ノイズにも通用するんじゃないかと」

「……あたし等はどっからツツコめばいいんだ？」

「さあ……」

え？ 何かおかしいなことも言いましたか？

「と…兎に角、例のネフシユタンの少女については、その飛竜という青年に任せておけばいい訳か」

「はい。一応、念の為にこちらでも調査は進めておくべきでしょうが、多分向こうの方が早いでしょう」

「相手は諜報のスペシャリストだからな。自由に動ける分、彼の方が圧倒的に早いのは道理か……」

もしかしたら、かなり早い段階で『彼女』の事が判明するかもしれないですね。

そうなったらそれで、原作よりも早く和解イベントが発生するだけですが。

「そういうえば、了りさんはどうしたのですか？ こんな話をすれば、真っ先に飛びつきそうですが……」

「彼女ならば、今は永田町に出かけている」

「それはまたなんとも……」

　　なんな堅苦しい場所に行っているなんて…普通に同情します。

「政府のお偉方に呼び出されてな。本部の安全性や防衛システムについてを関係閣僚に説明をしに行っているのさ」

「政府に属する組織であるが故の説明義務という奴ですか……」

「その通りだ。もうそろそろ戻ってきてもおかしくは無い時間帯なんだが……」

「どうやら、流石の了子さんもお堅い政治家相手では、そう簡単にいかないようですね」

　　彼女が帰ってきたら、メイドとして労ってあげましょうか。

　　了さんがどのような人物で、どんな思惑を持っているとはいえ、今はお互いに二課の仲間。

　　疲れて帰ってきた同僚を労わるのは、メイドとして同然の事ですから。

.....

.....

.....

.....

.....

「たくだ〜い〜まあ〜……」

　　それから一時間半後に了さんは見るからに疲労困憊といった感じで帰ってきた。

「お帰りなさい、了子さん」

「豪鬼ちゃあ〜ん！ お腹が空いたよお〜……」

「はいはい。分りましたから、まずはどいてくださいいな」

　　戻ってくるなり、いきなり私に抱き着いてこないでください。

　　ほら、其処で見ている藤堯さんが顔を真っ赤にしてこつちを見てま

すから。

「何回かこつちから連絡をしても待ったく通話に出る様子が無かったから、心配していたんだぞ？」

「へ？ 連絡？」

ゴソゴソと白衣のポケットを探ると、そこには電池が完全に切れたスマホが一つ。

「充電…し忘れてたみたい……」

これは素で忘れていましたね？

もう皆揃って溜息を吐いてるじゃないですか。

「え？ これは…司令！」

「どうしたっ!？」

「つい先程……広木防衛大臣が暗殺されたと……」

「「はあっ!」「」」

あれ？ 了子さんも本気で驚いてる？

ってことは、彼女は全くの無関係？

「彼とは、本当についさつきまで話していたのに……どうして……」

「もうニュース速報になってるみたいですよ！ モニターに出しますか？」

「やってくれ！」

「了解！」

カタカタカタとオペレーターの二人が機器を操作すると、司令室の大きなモニターに緊急ニュースが流れた。

こんな事を言える空気じゃないので敢えて心の中で言いますが、こんなにも巨大な画面でニュースを見るってかなり贅沢ですよ。

「車で移動中に狙撃……」

「犯人は不明で、複数の革命グループから犯行声明が出ている……？」

「普段はいがみ合っている連中が、こんな時に意気投合とはな……!」

共通の敵がいるならば、多少の遺恨には目を瞑ってでも協力する……ですか。

なんとも皮肉な物です。

「この世で最も怖いのは、ノイズなどではなくて、このような『人間の

悪意』なのかもしれないね」

「そうかもしれないな……」

一歩間違えば、響さんもその『人間の悪意』の犠牲になっていたかもしれない。

そう思うと、やっぱりあの時の判断は間違いじゃなかったと信じた

い。
「この事件に関しては、こっちでも全力で調査しよう。全く…仕事ばかりが増えていく……」

「まあまあ」

愚痴を言っても始まりませんよ。弦十郎さん。

「政府から受領した機密任務があるんだけど……明日にした方が良さそうね。私も、物凄く眠たいし……」

「そうだな。今日は本当に色んな事があつたからな。装者達は戻って休んでくれ。あんな事件があつた以上、要注意をして帰ってくれ」

「はいー!」

「分かったよ」

装者の皆さんが各々に挨拶をしてから指令室から退出していった。

そう言えば、まだ一日経過してないんですたっけ。

なんか濃密過ぎて地味に忘れかけてました。

「弦十郎さん。私は了子さんを仮眠室まで連れて行きます。このままだと、廊下のだと真ん中で寝ちやいそうですから」

「頼めるか?」

「お任せください。これも立派なメイドの務めですから。では、行きますよ。了子さん」

「豪鬼ちゃんの優しさが身に染みる……」

.....
.....
.....
.....

了子さんと一緒に仮眠室までの道を歩きながら、私はズイッと彼女に顔を近づけた。

「了子さん」

「どうしたの？」

「先程は皆さんの前でしたから、敢えて何も言いませんでしたが、私の目は誤魔化せませんよ」

「な…何のことかしら？」

ほう…？ あくまでしらばっくれる気ですか。

いいでしょう。ならば、ハッキリと言って差し上げようじゃないですか。

「了子さん…貴女…」

「ここ数日、碌に睡眠を取ってませんね？」

「……へ？」

「へ？　じゃありません！　女性にとって、徹夜は美容の天敵である以上に健康の大敵でもあるのです！　どれだけ化粧で誤魔化しても、眼鏡の下の隈は隠せませんよ！」

全く……！　よりにもよって、メイドである私の目の前で不健康な生活を送るとは……これは私に対する挑戦と見ました！

「そもそも、了子さんはこの二課においてなくてはならない『頭脳』とも言うべき存在なのですよ！　分かってますかっ!?!」

「も…勿論よ？」

「ちゃんと目を見てから話してください。研究などを頑張るのはいいですが、それで倒れてしまっっては本末転倒です！」

「う…うん。その通りよね…ごめんなさい」

「分かればいいのです。まずは一刻も早く仮眠室まで行きましょう。話はそれからです」

「ちよ…豪鬼ちゃんっ!?!」

モタモタと歩いている時間も勿体無い！

了子さんを横抱きにしてから、そのまま阿修羅閃空でダツシユ!

「ちよつとおおおおおおおおつ!?!」

叫んでいると舌を噛みますよ。

・
・
・
・
・
・
・

仮眠室に到着してから、まずは了子さんをそつとベッドに寝かせる。

それから、こんな事もあるかと思い、密かに家から持ってきておいた水筒を取り出した。

「豪鬼ちゃん：その水筒、今スカートの中から出さなかった?」

「メイドのスカートは色んな道具が入っているのです」

「初めて聞いたわ……」

初めて言いましたからね。

「仮眠をする前に、まずはこれを飲んでください」

水筒の中身を蓋に入れて了子さんに差し出す。

程よい暖かさとリラックス効果のある香りが鼻孔を刺激する。

「これは?」

「カモミールティーです。カモミールには不安感などによる精神的負荷を軽減させる効果があるらしいのです。それをお茶にしたカモミールティーには高い快眠効果が期待できるらしいのです」

「そうなのね……」

零さないようにしながら、了子さんがそつと一口飲む。

早速効果が出たのか、彼女の顔が一気に柔らかくなった。

「美味しい……」

「それは良かったです」

自分でも紅茶を淹れる腕が上がってきた自覚がありますが、こうして直に言われると自信が出ますね。

「確かに、これは心が落ち着くわ……。これなら、本当に熟睡出来そうな気がする」

「それはなによりです」

カモミールティーを一杯飲み干してから、了子さんはゆつくりとベッドに横になった。

「それでは、ごゆつくりとお休みください。いい夢を」

「ん……」

私がいたんじや熟睡なんて出来ないだろうから、ここは電気を消してから部屋を出ましようか。

まだ洗濯物などが残っていた筈ですから。

「豪鬼ちゃん」

「どうしました？」

「……ありがとう」

「どういたしました」

去り際にお礼を言われた。

例え相手が誰であれ、お礼を言われるのは嬉しいですね。

それだけで、メイドは幾らでも頑張れるのです。

・
・
・
・
・
・
・

本当に……本当にありがとう……豪鬼ちゃん。
こんな私に、ここまで優しくしてくれて。

貴女の優しさが、私の決意を後押ししてくれた。
勇気が湧いてきたわ。

きつと、私は皆から嫌われて、憎まれるだろう。

これから、それだけの事をするのだから。

私は……皆の『敵』になる。

さて…と。

ひと眠りしたら、まずは『あそこ』に行かなくちや…ね。

メイド豪鬼 準備をする

「「デュランダル？」」」

「そう。名前ぐらいいは聞いたことがあるんじゃない？」

次の日の二課本部。

一晩寝てスッキリとした顔色になった了子さんから、昨日言いそびれたことを改めて話して貰っていた。

「どこかで聞いたことがあるような……」

「アタシもだ。どこだったかな……？」

「確か、とても高名な聖剣の名前だったような……」

三人共、少しは歴史の勉強をしましょうね。

翼さんが知らなかったのは意外でしたけど。

「デュランダル。フランク国の国王である『シャルルマーニュ』が天使から授かったとされている聖剣ですね。歴史を更に遡れば、古代トロイア戦争にて活躍した大英雄であり『世界九偉人』の一人に名を連ねている王子『ヘクトール』が所持していた武器と言われています」

「「おお……」」

驚いてる場合ですか。

完全に私が先生役になってるじゃないですか。

「ヘクトールはデュランダルの事をイタリア読みである『テウリンダナ』と呼んでいたそうです。しかも、普段は柄の部分を伸ばして剣ではなくて槍として使用していたと伝えられています」

「剣を槍に……」

「その柄は黄金で出来ていて、中には『聖ペテロの歯』『聖バジールの血』『聖ドウニの毛髪』『聖母マリアの布』といった、キリスト教徒にとって最も尊い四つの聖遺物が収められていました」

「せ…聖遺物を四つもっ!？」

「そうです。何があっても決して壊れない『不滅の剣』であり、岩に叩きつけて破壊しようとした時、逆に叩きつけられた岩の方が真っ二つになってしまったほどらしいです」

「凄いですね……」

まだまだ話したりないですけど、取り敢えずはこれで勘弁してあげましょうか。

余り説明し過ぎると、時間が掛かりすぎる上に、奏さんと響さんが知恵熱で熱暴走してしまいそうですし。

実際、今も耳から煙を出していますし。

「毎回毎回思うけど、豪鬼ちゃんのその知識は何処から出てくるのかしらね……」

「了子さん。いつも言っているでしょう？ メイドに……」

「不可能はない…でしょ？ その一言で片付けられちゃうのも、ある意味で凄いわよね……」

「それがメイドですから」

メイドたる者、知識の方も優れていなければいけませんからね。実技だけでなく、座学もまたメイドとしての嗜みなのです。

「それで、実際にはどのような形になっているんだ？」

「余り急かさないで。今からちゃんと説明をするから」

そう言つて、了さんは私の淹れたコーヒーをゴクリ。

「まず、デュランダル自体は厳重に封印した状態で、政府が用意した移送用のトラックの荷台に入れて移動するわ」

「ならば、我々はそのトラックの護衛を？」

「基本的にはそうなるわね。まず、響ちゃんと豪鬼ちゃんの二人は、私と一緒に車に乗つての護衛よ」

「え？ 了さんも一緒なんですか？」

「そうよ。いつもの任務とは違つて、今回は聖遺物が関係している。いざつて時に備えて専門家がいた方がいいでしょ？」

「確かに……」

何事にも完璧な事なんてない。

万が一の事を想定するのは、非常に有益な事であり、同時に当たり前の事でもある。

この考えは、今回の事だけじゃなくて、色んな事にも通用する。

「そして、翼ちゃんと奏ちゃんの二人は、翼ちゃんのバイクで並走しながらの護衛になるわ」

「それは構いませんが、どうして私達だけバイクに？」

「もしも、任務中に予想外の場所にノイズが出現した時に備えてよ。バイクならば、車とは違って多少の無茶をして現場に急行できる」

「何も起こらなきゃ、それでよし。でも、緊急の事態になった時に自由に動ける『遊撃部隊』があたり達ってワケか」

「その通り。けれど、それだけじゃまだまだ不安が残る。どれだけ装者が強力で、人数的な不利はどうにもできないから」

「それを言われちゃ……」

「反論のしようがないですね……」

「人数だけは、努力だけじゃどうしようもないですしね……」

後々に装者の数の問題は普通に解決できますが、それは本当に先の話。

今は目の前の事だけに集中しましょう。

「そこで、今は無き広木防衛大臣は、とある二つの組織にも協力の依頼を出していたみたいなの。それが……」

『我々……と言う訳なのですヨ』

「二「うわあっ!?!」」

いきなり本部のモニターが別の画面に切り替わった。

そこには、非常に見覚えのあるサングラスを掛けたエセ中国人みたいな細長い体つきの人物が。

「お久し振りですね。ファンさん」

『これはこれは豪鬼さんじゃないですか。そちらに協力しているという噂は本当だったんですね』

「紆余曲折有りまして。それよりも、ちゃんと食事とか睡眠とかしてますか？ この間なんて、仕事のし過ぎと栄養失調でシャドルー直結の病院に搬送されてたじゃないですか」

『御心配には及びません。あれからちゃんと健康には気を付けるようにしていますから。まずは己の体を整えなければ、ベガ様とシャドルーを支えられませんからね』

「そうですね。それならば、私からはもう何も言う必要はないですね」
サングラスを掛けているせいか、以前は了子さんも真っ青なレベル

の隈が出来てましたからね。

「ただ一人で頑張ってるんですかって話です。」

「……豪鬼くん？ この人物は……」

「あら。まだご紹介してませんでしたね」

『私としたことがうっかりしてました。では、改めてご紹介をば』

モニター越しにファンさんが丁寧に会釈をして挨拶をした。

『私の名は『ファン』。シャドルー四天王の一人で、普段は主にデスクワークばかりをしています。こうして表舞台に出る事は少ないのですが、今回の仕事は私がベガ様直々に作戦立案をするようにとの命でしたので、このように出た次第です。はい』

見た目は全く変わってないですが、この彼は原作のように非情で非道な人物ではなく、割と普通のサラリーマンです。

四天王唯一の実務担当で、彼のデスクのゴミ箱には、大量の栄養ドリンクとエナジードリンクのゴミが山のように散乱しているのかなんとか。

勿論、毒手なんて持ってませんし、実験なんて全くしてません。

それどころか、間違いなく四天王の中で一番頑張っている人物と言っても過言じゃありません。

実質的にファンさんがシャドルーを支えているに等しいんですから。

『自称』じゃなくて、冗談抜きで彼こそがシャドルーのナンバー2……ってというか、副社長的なポジションなんじゃないかって思ってます。

因みに、この世界のシャドルーは、ベガは四天王の一員じゃなくて『総帥』としてトップに立っていて、その下に四人の幹部がいるって感じになっています。

ですので、サガットとファンさんは普通に同僚ですし、別に他の四天王とギスギスしてたりもしてません。

それどころか、サガットとバイソンのマネージャー的な事までやっていて、『24時間働けますか』を地で行ってる人物だったりします。『今回の『デュランダル移送任務』には、我々『シャドルー』と『ハワー

ド・コネクション』も特別に協力する手筈になっているのです』

「なんだとおっ!？」

『驚くのも無理はありませんが、我らとしても貴重な遺産である聖遺物が失われる事だけは避けたいのです。それは、ハワード・コネクションのギースさんとも意見が一致しています』

彼女、歴史的な遺物とか本気で大切にしていますからね。

伊達に、自室に大量の仏像とか仁王像とか置いてないって事ですよ。

『当日、現場には私も一緒に同行し、そこで直接指揮を執る予定です。無論、私以外の四天王や、ベガ様の親衛隊も同じように現場に向かいます』

「おおおっ!! あのサガットとバイソンが来てくれるのかっ!?! これは本気で百人力じゃないか!!」

『そこで彼らを高く評価して下さっているのは、あの『ツヴァイ・ウイング』の一角である『天羽奏』さんですネ』

「アタシの事も知ってんのかっ!?!」

『勿論ですとも。ツヴァイ・ウイングは今や、世界的なアーティスト。シャドルーの方でも、いつかお二人と一緒にグッズ販売なんかが出来ればと考えている次第です』

「グッズ販売……悪くないかも」

「あのシャドルーと私達が……か」

奏さんは本当に嬉しそうに、翼さんの方も冷静を装ってはいますが、口の方は完全に笑ってますよ。

こんな時ぐらい、素直に喜びを表現してもバチは当たらないと思いますが？

『特に、奏さんにはベガ様が大変お世話なっているようで。あの方と仲良くして下さって本当にありがとうございます。四天王を代表して、お礼を申し上げます』

「い……いや、そんな風にお礼を言われるとなんか照れるっつか……あたしはただ、好きであいつと遊んでるだけで……」

『それでも、ですよ。総帥なんて立場にいと、それだけで疲れるもの

ですから。どんな形であれ、ストレスを発散できれば、それに越した事は無いのです』

「そう…だよな。うん、分かった。その礼は素直に受け取っておくよ」
『感謝します。おっと？ どうやらベガ様がいらっしやっただようですね。では、続きはベガ様から仰って貰いましょうか』

そう言うのと、ファンさんは画面から姿を消した。

「あの人が四天王最後の一人なんだ……」

「にしても、まさかシャドルーやハワード・コネクションと正式な共同作戦とは、流石に驚いたぞ」

「私も最初に聞かされた時は同じようなリアクションをしたわよ。広江防衛大臣は一体どんな手であるの二つの組織を協力させたのやら」
皆で少し話していると、なんでかベガじゃなくてバルログがマイクを持って現れた。

『ここで魅惑のCMタイム。この私の新曲【バルログ愛のバラード】

『お前はそんな所で何をやってるんだ！』

『ぶべらっ!?!』

あ。バルログがサガットの『タイガーアツパーカット』で派手に吹っ飛んでいった。

『見苦しいものを見せてしまった』

サガットが丁寧な謝罪をしてから、改めてベガが登場した。

『ベガ様さんじょく！ …って、なんでバルログはそんな所で気絶してるんだ？』

『気にするな。それよりも話を』

『そうだったな！ おっほん！』

ワザとらしく咳払い。

増々子供っぽいですよ。

『久し振りだな皆！』

「ベガの方も元気そうで何よりだな！」

『ちゃんと早寝早起きをしてるからな！』

余談ですが、ベガの就寝時間は夜の九時で、起床時間は朝の七時らしいです。

完全に生活リズムが小学生なんですよね。

『さつきファンが言ってたとは思うけど、当日は現場に四天王が行くことになってる』

「らしいですね」

『それとは別に、私も一緒に行くことになってるんだ！』

「ベガちゃんまで来るんだ……」

『おく！ 響く！ 今度また、未来のお菓子を食べに行ってもいいか？』

「うん！ 未来もきつと喜ぶよ！」

『やった〜！』

ちよい待ち。

いつの間にベガと響さん達は知り合ってるんですか。

しかも、普通に部屋に遊びに行くほどの仲になってるだなんて。

本気で全く知らなかった……。

「ベガ総帥。ハワード・コネクションの方からは誰が来ることになっているんだ？」

『向こうからは、ギースの奴と一緒にビリーも一緒に来る予定になっているぞ』

「ビリー・カーン。棒術の達人である彼ならば、何の問題も無いですね」

『それから、ギースの奴が念の為に自分の義理の子供達も連れて来るって言ってた』

「『義理の子供？』」

あく…彼等ですね。

なんというか……冗談抜きで盤石の構えになってませんか？

『後な、可能な限り広範囲に防衛網を展開したいから、バイトも雇うことにしたんだ』

「バイト？」

『それに関しては、当日になれば嫌でも分かるぞ。余り驚かないとは思うけど』

なんとなく想像出来ちゃいました。

「敢えてここでは追求しませんけど。」

「任務決行日はいつのなるのですか？」

『至急とのことなので、最終準備などの事も考えて明後日にする予定です』

「ここでまたファンさんの再登場。」

細男と幼女なので、全く画面が狭く感じませんね。

『これまででもずっと極秘裏に準備はしていたのですが、今回はこれまでに例を見ない程に大きな規模の任務になりますからね。念には念を入れて、最終準備をすることも考慮しました。櫻井博士。そちらの方はよろしく願います』

「任せておいて頂戴」

これは色んな意味で先が読めなくなってきましたね。

果たして、原作通りに『彼女』は襲撃をしてくるのか。

「私達は何をしていたらいいんだろう……」

『装者の方々は、当日に備えて身体を整えておいてください。実質的な防衛部隊である皆さんが、一番の要になっているのですから』

「はいー！」

それから、少しだけ当日についての話を詰めてから通信は切れた。

取り敢えはこれでお開きですが、果たしてこれからどうなる事やら。

そんな私ですけど、一つだけ考えていることがある。

（原作の時のように、響さんがデュランダルを握ってプチ暴走状態にさせる訳にはいかない。私やリュウの二の前だけは踏ませたくない。いざとなれば私が……！）

メイド豪鬼 突っ走る

一日の準備期間を経て、遂に始まった完全聖遺物『デュランダル』の移送任務。

時間は明朝五時。

まだ空がほんのりと暗い時間帯に、二課とシャドルー、ハワード・コネクションが共同して臨む壮大な仕事が始まる。

そして、短いようで長い任務の始まりでもあった。

まず、私と響さん、それから了子さんとファンさんが一緒に車に乗り、その荷台に厳重に封印処理をしたデュランダルを乗せた。

その後ろにはギース達に乗るリムジンと、ベガが乗っている車が追走していて、周りには大型の輸送トラックが7台走っている。

更に、私達の隣には翼さんが運転しているバイクに奏さんが一緒に乗って並走していた。

「まさか、豪鬼さんが車の運転まで出来るなんて思わなかったなあ」
「豪鬼ちゃんって、本当に芸達者よね」

「この程度、と言う事はありませんよ。メイドとしての嗜みです」
「一度、豪鬼さんの中のメイドがどんなものなのか、じっくりと聞いてみたいですねえ」

今の話で分かったと思うが、車を運転しているのは私で、助手席に了子さんが座り、後部座席にファンさんと響さんが乗っている。

え？ 運転免許？ 当然、持ってますが何か？

シャドルー経営の自動車学校で取得しました。

「私：リムジンなんて始めて見たかも……」

「普通は、そう滅多にお目に掛かれるものじゃないですよ」

「流石は天下のハワード・コネクションよね。あんなの、日本じゃ絶対に見れないわよ」

「一応、シャドルーの店でも似たような車種の車は扱っていますよ？」

「お値段は？」

「ご想像にお任せします」

それ、絶対に超高級って事じゃないですか。ヤダー。

「あ。ギースさんとベガちゃんが手を振ってる。なんかベガちゃん、すつごく眠たそうしてる」

「本当なら、まだ寝てる時間帯ですからね。眠たいのも仕方がないかと」

「頑張ってるんだな」

見た目幼女でも、立派なシャドルー総帥ですからね。

(ここからじゃよく見えないけど、ギース達が乗っているリムジンの後部座席に見覚えのあるような人影があるような……)

一体誰だろう？ 因みに、リムジンを運転してるのはビリーさんです。

流石に今は煙草は吸って無いようですね。感心感心。

そうそう。先程は言い忘れていましたが、今回の任務には珍しく弦十郎さんも指揮官として参加していて、彼は上空にいるへりに乗って全体を見渡している。

「けれど、どうしてこんなにも沢山のトラックがあるのに、肝心なデュランダルはこの車に乗せてるんですか？」

「あれらの車は、全てダミーですから」

「ダミー？」

「そうよ。まず、この移送任務において邪魔になるであろう存在は、まず間違いなくノイズになる。そして、まだ研究段階だから確証的な言えないんだけど、ノイズたちはまず間違いなく、デュランダル目掛けて襲ってくると思える」

「恐らくではありますが、ノイズたちはデュランダルの持つ強大な力に引かれて群がってくるでしょう」

「はあ……」

あ。また響さんの顔が『FXで有り金全部溶かす人の顔』になっている。

「響さんにも解り易く説明すれば、デュランダルが角砂糖。ノイズを蟻で考えてください」

「ああ……成る程？ なんとなく分かったような……」

「……まあ……いいでしょう」

響さんは、格闘技以外にもまだまだ沢山の事を学ばないといけないようです。

一度、了さんに頼んで、ノイズに関する講座でも開いて貰った方がいいかもしれません。

「普通ならば、ノイズに対してダミーなんて通用しない。けれど、万が一、私達の把握していない第3の勢力がデュランダルを奪う為に現れる可能性がある。この間の防衛大臣の事件の時のように」

「そんな連中に対する策として、あのようには明らかに大事な物に乗せてそうなトラックを何台も用意したわけです」

本当はそれだけじゃないですけどね。

『彼女』が『杖』を使ってノイズを制御している以上、これは『彼女』に対する牽制でもある。

これは、密かに私からベガやギースにも話している事だ。

「そういえば、幾ら朝早いからと言って、どうしてこんなにも道が空いてるんですか？」

「二課とシャドルーとハワード・コネクションとで、ちよつとした情報操作をしたのですよ、はい」

「情報操作？」

「例の防衛大臣を暗殺した犯人を検挙する為と言う名目で広い範囲で検問を敷いて、その隙に一気に駆け抜けるのよ」

「そして、その駆け抜けるルートは、私と了さんの二人で考えました」

二人で地図と睨めっこしながらルートを考えるのは苦労しましたが、同時に少しだけ楽しくもありましたね。

なんだか、普段は見られない了さんの一面を垣間見た感じがします。

「豪鬼ちゃんって本当に凄いのよ？ この周辺の地理を全て頭の中に叩き込んでたんだから。冗談抜きでナビいらすの女の子よ」

「それもまた、メイドとしての嗜みなので」

「なんか、私の中でのメイド像が徐々に変わっていつてる……」

何を仰るのですか。

これこそがメイドとしての本来あるべき姿なのですよ？

その辺にのさばっている『なんちやってメイド』と一緒にしないでください。

「弦十郎さん。そちらからは何か見えますか？」

『いや。まだこれといった動きは見られない。順調そのものだ』

「分かりました。引き続き、お願いします」

『了解だ。……気を付けてくれ…豪鬼くん……』

「御心配なく。必ず貴方の元に帰ってみせますよ」

『……！ そ…そうか！ そうだな！ 待っているぞ！』

「はい……」

通信終了……って、あれ？ なんですか、この甘ったるい空気は……。

(なんであの二人って結婚しようとしなのかしら……)

(うわあ〜…ラブラブだあ〜…)

(ふむ……是非とも、式場はシャドルー傘下の場所にしてほしいものですね)

お三方。何を考えているのか丸分りですよ。

まったく…私と弦十郎さんは、そのような関係じゃないと何度説明をすれば……。

「むっ!？」

何気ない話をしていると、突如として前方の橋が倒壊し、全ての車両が緊急停止をした。

幸いなことに、倒壊に巻き込まれた車両がないのが救いだった。

「弦十郎さん!!」

『こちらでも確認した！ まだ原因は分からないが、ノイズの可能性が非常に高い！ 警戒を怠らないでくれ!』

「分かりました!」

前方の道が塞がれてしまった以上、私達が取るべき行動は……。

「こちらです! ……そこから橋の下の道路に降りられます! ……ここからは市街地に出られる筈です! ファンさん! 全車両に通信を!」
「承知しました!!」

ファンさんが自前の通信機で連絡をしている間に、私は窓を開けてから隣で停車している翼さんと奏さんにも同じことを伝えた。

「…というわけなので、引き続きお願いします」

「承知しました。しかし、早くもこちらの道を防いでくるとは……」

「単純だけど、効果的だよな」

安易に高速道路を使って一気に…というのが拙かったのかもしれない。

ここは多少の遅延は覚悟の上で、安全策を取るべきでしたね。

「ベガ様たちやギース総帥たちにもお伝えしましたよ！」

「ありがとうございます。では…行きますよ！」

アクセルを吹かしてから、道を曲がって高速道路を降りて誰もいない市街地を疾走していく私達。

だが、そこで突如としてマンホールの蓋が吹き飛んで、空高く舞い上がり落下した蓋がトラックの一台に直撃。

大きく凹みはしたが、あれ程までに大きな車ならば、走行には全く支障はないだろう。

しかし、またもや全車両が緊急停止をしてしまった。

「マンホールがいきなり……？ まさかっ!？」

「そのまさかみたいだね……！ ノイズは下水道を通って来てるんだわ……！」

「ええっ!？」

これは拙いかもしれない……！

よもや、下水から襲ってくるだなんて……。

「豪鬼さん。心配は無用ですよ。そうですね？ ベガ様」

「その通りだ！ こんな時の為に『バイト』を雇ってるんだからな！」

「はい？」

通信越しにベガが自慢げに語ってますが、一体誰をバイトとして呼んだっていうんですか？

『お前達！ 出番だぞ！ 存分に暴れてこい!!』

『おう！ ここは任せてくれ!』

『ちよつと狭くて暗くて臭いけど…頑張ります!』

『とつとと終わらせて、熱いシャワーでも浴びたいぜ!』

「この声…リユウとさくらさんとケンっ!？」

まさか、ベガが雇ったバイトって、あの三人の事ですかっ!？」

「ええええええええっ!？」 なんてあの三人がいるのっ!？」

「彼等こそが今回のバイトです。我々がデュランダルの輸送をする際に襲ってくるであろうノイズの露払いをお願いしました」

「……時給は？」

「危険手当込みで1350円です」

「すごっ!？」

シャドルーだからこそ出来ることかもしれませんね……。

でも、この状況では非常に頼りになる助っ人です。

「マンホールの蓋が飛ばなくなった……っと思ったら、また飛んだあっ!？」

「しかも、今度は蒼い炎と一緒に……。あれってどこかで見たような気が……」

『フツ……バイトを雇ったのは、何もシャドルーだけではないと言う事だ!』

「それって……」

もうなんとなく予想出来ちゃいました。

『泣け! 叫べ! そして死ねえっ!! ハッハッハッハッハッ!!』

『いや…ノイズは泣きもしなければ叫びもしないと思うのだが…まあいい。こちらもやらねばな。デモンクレイドル!!』

「やっぱり……」

「この声って…庵さんとデミトリちゃんっ!？」

「あの二人もいたのね……」

庵さん。お願いですから、余りやり過ぎないでくださいね？

場所によつては自爆しますから。

「ま…まあ…これで取り敢えず、下水道からの奇襲は防げましたね。おやっ?」

再発進をしようとする、今度は真正面からノイズの大群が迫ってきました。

道を物理的に塞いで、進行を妨害しようとしているのだろう。

「一難去つてまた一難……ですか。ですが……」

「なんだか、搦め手が通用しなかったから、自棄になって正面から来た感じに見えますね」

「案外、その通りかもしれないですよ?」

「え?」

今の『彼女』の性格ならば十分に有り得そうな気がする。

響さんの観察眼も侮れませんね。

「仕方がありませんね……了子さん」

「何かしら?」

「ここから運転をお願いできますか?」

「それはいいけど……何をやる気?」

「いえね。ここからは私が一番槍を務めようと思ひまして」

停車している大型トラックの荷台を開けて中に入ると、そこには念の為にと用意しておいた、私の愛用のバイクが固定してあった。

「うんしょ……つと」

バイクの固定を外してから、ゆっくりとバックさせて荷台から降りしていく。

「それって……豪鬼ちゃんのバイクっ!?!」

「持って来てたんですかつ!?!」

「一応。何事にも万全を期するのがメイドですので」

そのまま翼さん達の隣まで行きバイクに跨った。

案の定、二人も驚いた顔をしていたけど。

「はは……流石は豪鬼さん。用意周到ですね」

「それ程でも。ならば翼さん。私が言いたいことも分りますよね?」

「はい! 我々が先行して前方を塞ぐノイズを蹴散らすのですね!」

「正解です。では……」

「共に行きましょう!!」

エンジンを吹かし、マフラーから煙が出る。

視線を合わせてから頷き、最初から一気に加速する!

「豪鬼ちゃん…… 私達も行くわよ!」

「は…はいー」

了子さんも、ちゃんとこちらの意図を理解してくれたようでありです。

気のせいか、ハンドルを握った瞬間に生き生きし始めたような気が…。

バイクを走らせながら、翼さんの後ろでは奏さんがシンフォギアを纏い、いつでも攻撃出来るようにランスを構えていた。

「奏さん！ 私に合わせてください!!」

「合点だ!!」

奏さんがバイクの上に立ち、私もまた絶妙にバランスを取りながらバイクの上に立って構える。

「はあああああああああああああああああつ!!」

滅 殺 豪 破 動

LAST∞METEOR

私達の一撃が合わさり、相乗効果を生んで眼前のノイズの大群を全て木端微塵に消し飛ばした。

「これで道が出来ました!」

「このまま突っ切る!!」

「けど、この先には何があるんだっ!」

「私の記憶が正しければ、巨大な製薬工場があつた筈です!」

製薬工場…か。

私の予想が正しければ、そこで『彼女』とデュランダルが…。

(響さんにデュランダルを握らせるわけにはいかない。原作ならばいざ知らず、今の彼女にどんな影響があるか分からない。最悪の事態だけは絶対に避けなければ…!)

いざとなれば、この身を挺してでも…!!

メイド豪鬼 戦闘を開始する

バイクに乗って先行した私と翼さん、奏さんの三人は、二人の同時攻撃によって開いた道を通り直ぐに進んでいく。

すると、前方に沢山のコンクリート製の建物が立っている場所が徐々に見えてきた。

「豪鬼さん！ あれが先ほど言っていた製薬工場ですかっ!?」

「その筈です！」

よく見ると、工場の前には私達を待ち受けているかのように大量のノイズが配置されていた。

それを見て、私は思わず溜息をついてしまった。

「どうしたんだ？」

「いえね。恐らくですが、私達はこの工場地帯に誘い込まれてしまったと思います」

「なんだって？」

「考えてもみてください。既に作業員の方々の避難が完了して、工場の施設も稼働していないとはいえ、あそこにはまだ大量の薬品があるんですよ？」

私の軽い説明を聞いて、翼さんがハツとした顔になった。

「そうか…！ 工場地帯に私達を誘い込んだのは、私達に広範囲の攻撃をさせない為！」

「変に派手な技を使って薬品を外に漏らしたりしたらとんでもないことになる…こっちがそんな事を許さないと見越して、敢えてこの場を選んだって訳かよ！」

「そうなります。そうすると、今回の要は接近戦を主とする翼さんや響さんになります」

「え？ あたしは？」

「技さえ使用しなければ奏さんも十分に主戦力かと。その代り、かなり出来る事は限られますが。向こうはその事も考慮したんでしょうね。それだけ、相手は奏さんの広範囲攻撃を警戒している証拠です」

「喜んでいいのか、ムカついていいのか…なんとも複雑な気分だな」

「その気持ちはノイズ相手にぶつけてください。そろそろ工場地帯に入りますよ！ 注意してください！」

「了解！」

二人に言った事と同じ棟の事を後方の車両にも伝えた。

門番のように立ち塞がっていたノイズの群れを私と奏さんで一掃し、そこでバイクを停止させた。

「ここから先に行くためには、このノイズの群れを蹴散らす事が必須になるでしょうね」

「こりやまた豪勢な事で」

「だが、しなければいけない」

三人で並んでいると、車から降りてきた響さんも合流してきた。

来る途中でギアを纏ったのか、既に戦闘態勢に移行していた。

「お待ちせしました！」

「おう。見てみるよ、あれ」

「うわあ……」

どこを見てもノイズ、ノイズ、ノイズ。

私達の目の前で、文字通りノイズ達が大渋滞している。

「にゃっはっはっはっ！ こんな時の為に『あいつ等』を連れてきているんだ！ 安心しろ！」

「ベガっ!? いつの間に……」

なんかしれっと私達の所にベガが来てたんですけど。

ま、彼女は普通にワープとか空中浮遊とか出来るんで、何にも不思議じゃないんですけど。

「というわけでお前達……かかれ〜！」

ベガが号令を出すと、いきなりダミーの輸送トラックの助手席からそれぞれ人影が飛び出して、突如としてノイズ達を蹴散らした。

一人は凄まじいまでのパンチで木端微塵に。

一人は音にも止まらぬ速さで斬り刻み。

一人は怒涛の連続攻撃で次々と破壊し。

一人は蒼い炎を纏った蹴りで貫いた。

「ふん！ この程度…準備運動にもならないぜ！」

「なんと醜い……ノイズ達よ。貴様等は存在そのものが罪だ」
「容易いな」

「余り舐めないで貰おうか」

「そうだった……この人達がいたんだった！」

並の連中なんか歯牙にもかけない程の実力者達！

ベガの下で戦い続ける最強クラスの格闘家！

「バイソンさんっ!?!」

「あの仮面を被っているのは……まさかバルログ殿かっ!?!」

「すっげ〜……！ 流石は『ムエタイの帝王』サガット！ めっちゃ強い
!!」

「相変わらずの蹴りの鋭さ。実力を上げましたね、キャミイさん」

「これで戦力差はなんとかなる。」

贅沢を言えば、もっと欲しい所ですが……って、そういや、まだいた
じゃないですか。十分すぎるほどの戦力が。

「お……大きいのが来てますー!」

「なにっ!?!」

響さんの警告通り、小型のノイズの後ろから確実に数メートルはあ
ると思われるサイズのノイズが三体ほどやって来ていた。

「どうやら、あれが向こうの主力のようですね。ならば……!」

「おっと！ そいつらはオレ達に任せな！ いくぜアンデイ!」

「分かったよ！ 兄さ……じゃなくて、姉さん!」

「俺も続くぞ!!」

今度はハワード・コネクションのリムジンから二つの影が飛び出
し、それに合わせるようにしてサガットも動いた。

「!」
「!」
「!」
「!」
「!」
「!」

パワー・ゲイザー

超裂破弾

タイガー・ジェノサイド

三人の超必殺技が炸裂し、三体いた大型ノイズは一瞬で灰となっ

た。

「OK!」

「よし!」

「当然だな」

……あれ? 気のせいですかね?

あの金髪オールバックのイケメンは間違いなくアンディ・ボガードさんですが、その隣にいる見たことあるような恰好をした金髪美女は一体…?

パワー・ゲイザーを放っていたという事は、もしかして……。

「あ…あの…まさかとは思いますが、その金髪の女性はまさか……」

「お! 豪鬼! いや…:本当に久し振りだな! 元気してたか?」

「……もしかして、テリーさんですか?」

「おっと。そういや、この姿で会うのは初めてだったな」

「やっぱり……」

なんで庵さんやデミトリさんだけに飽き足らず、貴女まで女の子になってるんですか?!

しかも、妙に違和感が無いし! もう少し恥じらいを持ちなさい!

「あ! あの帽子を被った女の人、あの時のレジの店員さんだ!」

「つて、なんか見覚えのある顔があると思ったら、前にバイト先でのDVDを借りてったお嬢ちゃんか……」

なんか、私の知らない所でテリーさんと響さんが知り合ってるし……。

「な…なんか、凄かったな……」

「あれ程の気を放てるとは…彼女は一体……!?!」

奏さんは呆れ、翼さんは真面目に感嘆。

これもまた毎度の流れですね。

「色々話を聞きたいところですが、今はノイズを殲滅する方が先決。そ当然了よね?」

「その通りだ」

最後にのんびりとやって来たのは、我らがギースさま。

女性なのに、この全身から溢れ出る威容はなんなんですかね？

「どうだ？ 私の自慢の子供達は」

「アンタの義理の子供ってあの人達の事なのかよッ!？」

「ああ見えて、この私と互角の実力を持つ猛者だぞ」

知ってますよ。

伊達に『伝説の狼』なんて異名を持ってないんですから。

「皆さん。お互いの自己紹介は後ほどに。先程も言った通り、今はノイズを倒しましょう」

「おう！」

気合を入れ直したところで、改めてノイズ殲滅戦を開始。

けれど、ここで決して油断をしてはいけない。

この場面、必ず『彼女』が介入してくるでしょうから。

「ちっ…！ なんなんだよ…お前らはよおっ!!」

「来ましたか」

思ったよりもお早い登場。

まだ名前は明かせないので、ここでは敢えて『ネフシユタンの少女』と呼称しましょうか。

「あの子はっ!？」

「知ってるのか？ 響の嬢ちゃんよ」

「はい！」

「既に聞いているとは思いますが、彼女が例のネフシユタンの少女です」

「あれが…完全聖遺物を纏ってお前達に襲い掛かって来たという……」

「ここで『返り討ちに遭った』と言わないのがサガットの優しさですね。」

「あの子は私に任せてください！ 皆さんはノイズを！」

「立花……」

「頼んだぞー！」

「ここで響さんが率先して前に出ようとする。」

だが、それをギースが彼女の肩を掴んで静止させた。

「待て」

「え？」

「任せてもいいのだな？」

「はいー」

皆がノイズとの戦闘を開始した後ろで、ギースが響さんの目をじつと見つめる。

まるで、何かを見定めているように。

「……いいだろう。そこまで言うのなら、やってみせろ。お前なりのやり方でな」

「ありがとうございますー！」

響さんは真っ直ぐに少女の元まで走っていき、彼女と対峙した。

「随分とお優しい事で」

「あんな目をされてはな……ダメとは言えまして」

「あんな目？」

「どこまでも真っ直ぐに前だけを見ている目。あれは『格闘家の目』だ」

格闘家の目……か。

どうやら、精神の方が肉体よりも先に一人前になっていたようです
ね。

「今の彼女ならば問題あるまい。だからこそ、お前も黙って行かせたのだろう」

「御見通しでしたか」

「母親を舐めるな」

いつの世も、母と言う生物にだけは敵わないってことですか。

「では、そろそろ私達も参りませうか」

「うむ。むうん!!」

「はああああつ!!!」

近くまで来ていた二体のノイズを、私は豪昇龍拳で吹き飛ばし、ギースは当て身投げで遠くに飛ばした。

響さん……頑張ってくださいね。

・
・
・
・
・
・
・

格闘家集団VSノイズ軍団の戦闘が繰り広げられている中、響はネフシユタンの少女と向き合っていた。

「お前は…あの時のオレンジ女か」

「正直、あなたに聞きたいことがある。名前は何なのか。どうしてこんな事をするのか。なんで皆が追っているネフシユタンの鎧を纏っているのか。けど、素直には話してくれないんだよね？」

「当たり前だ！ 敵に向かってペラペラと自分の情報を喋るバカがどこにいるっ！」

「敵…か。そうだよ。今の私とあなたは敵同士…なんだよね。だってら……」

力強く拳を握りしめ、構えを取った。

それは、リユウやケン、豪鬼と同じような構えだった。

三人の戦いを何度も間近で見ること、自然と構えが身につけてしまったようだ。

「ここからはもう何も聞かない！ 私はお世辞にも会話上手な方じゃないから、何かを聞こうとしても支離滅裂になって意味不明な事を言い出しそうな気がするから！」

「お前……いきなり何を言ってる……」

「だから！ この『拳』で聞くことにする!! 私の拳であなたの心を聞く！ 確かめる!!」

「訳分らない事を抜かしやがって！ しゃらくせえんだよ!!」

その時、戦う事に夢中で殆どの者達が気が付いていなかったが唯一、豪鬼とギースだけは響の方を見て驚いた顔をしていた。

何故なら、ほんの僅かではあるが、響の体から確かに『氣』の奔流が感じられたから。

そして、それに応えるようにして、突如としてガングニールの両腕が光を放つ。

「あの光は……まさか……！」

「フツ……ようやく『入口』に立ったか……！」

思わず自分の腕を見つめる響。

そこに現れたのは、今までには存在しなかったガントレット。

今までは手甲部を守護する目的の装甲が装着されていたが、それが大幅に変化を遂げ、まるで肘から下を完全に覆い尽くすような形で顕現した。

腕にフィットするように細くしなやかではあるが、それ故に響の動きを決して阻害することなく、シンプルなデザインでどこまでも『拳で戦う事』を意識した意匠になっていた。

「まさか……それがお前の『アームドギア』かつ!？」

「うん……そうみたい。私は……戦う事で繋がる絆を、拳を交える事で紡げる絆を信じたい! 格闘家の……『ストリートファイター』の皆のように!!」

「いい加減に黙りやがれ!! このご都合主義野郎が!!」

激昂した少女が鋼鉄の鞭を放つが、響はそれを突撃しながら両腕で弾き、そのまま一気に彼女の懐に潜り込むことに成功した。

そこから響はしやがんで、渾身のジャンピングアッパーを繰り出した!!

「は……速いつ!？」

「そおおこおおだあああああつ!!」

我流 昇龍拳

その一撃は、お世辞にも綺麗なフォームとは言えなかった。

咄嗟の事で体勢は崩れているし、着地の事も全く考えられていない。

けれど、響の放った一撃は、確かに少女の顎を直撃し、相手を派手

に吹き飛ばした。

「ぐはあぁっ!？」

完全に予想外の攻撃に防御が間に合わず、少女はそのまま背中から地面に落下。

口の端からは血が流れ、そのバイザーには罅が入っていた。

「やりやがったな……テメエツ!!」

怒りのままに立ち上がった少女は、口から流れる血を腕で拭い、それを唾と一緒に地面に吐き出した。

そして、二本の鞭を振り回してから、その先端にピンク色の光輪を作り出す。

「これでも……くらいやがれええええええっ!!」

巨大なエネルギーの塊となった光輪が放たれ、それは凄まじい速度で響に迫っていく。

だが、彼女は微塵も臆することなく構えていた。

(昔の私なら、絶対に怖くて目を瞑っていたに違いない。けど、なんでだろう……今は不思議と全然怖くない! それどころか、胸の奥から勇気が湧いてくる! もう……こんなのは全く怖くなんかない!!)

我 流 竜 卷 旋 風 脚

「なぁっ!？」

響の放つ回転蹴りに碎かれる光輪。

自分の攻撃が悉く破られる。

しかも、相手は少し前まで自分が格下だと思って見下していた少女。

それがいつの間にか、自分を追い詰めるほどに強く成長していた。

「認めねえ……!」

「え?」

「認めて溜まるかぁぁっ!! こんな奴が!! 何も失った事のないこいつなんか、このアタシが負けるなんざ認めねえええええええっ!!!」

「私だって負けない!! この拳で、あなたの事を知りたいから!!」

戦いは激化し、乱戦へと発展していく。

だが、この時、了子ですらも気が付いていない事態が起きていた。

響と少女のフォニックゲインに感応してか、密かにデユランダルの封印が解け、その刀身が怪しく光っていたのだ。

そして、その事が後に豪鬼にとって本人すらも全く予想していない大きな分岐点となるのだった。

メイド豪鬼 フラグを立てる

場が完全に乱戦になりつつあった時、それは突然起こった。

「え？ ちょ……何ッ!？」

突如として、了子が乗っていた車から眩い光が放たれ、ソレが姿を現した。

黄金に光り輝く聖なる剣が。

「あ……あれが……そうなのかつ!？」

「この感じ……なに……？」

余りにも突然の事に、この場に集った戦士たちは一瞬だけその動きを止めた。

それは戦士たちだけではなく、何故かノイズ達も動くのを止めていた。

まるで、その剣の登場を待ち侘びていたかのように。

「そんなん?!? アレには私が十重二十重に封印を施して、こつちから封印を解かない限りは絶対に外部に出る事は無い筈なのにッ!？」

普段は飄々としている了子でさえも、この事態に本気で驚愕し、顔から冷や汗を掻いていた。

(一体どうして……!? まさか、一気に増大した響ちゃんのフォオニツクゲインに呼応して……? いや、それも原因の一つかもしれないけど、他にも理由はある筈。この場に集った格闘家たちの『気』と、ベガちゃんのサイコパワー、それから豪鬼ちゃんの持つ『殺意の波動』も一因になっていると見ていいでしょうね。そこに完全聖遺物である『ネフシユタンの鎧』がトドメになって……! もう! こんな事になるなら、あの子を使ったりしなかったのに!)

どれだけ悔やんでも、時すでに遅し。

今は、この状況をどうにかする方が先決だ。

「おい! 櫻井了子! アレがそうなのかつ!？」

「そうよ、ギース総帥! あれこそが今回輸送している完全聖遺物『デュランダル』よ!？」

まさか、輸送していた代物が勝手に飛び出してくるなんて思いもし

なかったたので、このような状況に対する作戦を全く考えていなかった。

「とうか、誰が想像するだろうか。剣がひとりでに飛び出すなど。」

「そうか…あれこそがデュランダル！ あれさえ…あれさえ手に入れれば!!」

目的のブツを見つけ、すぐに取りに行こうとするネフシユタンの少女だったが、それを目の前にいる響が体を張って防いだ。

「お前…そこをどきやがれ!!」

「絶対にイヤだ！ 貴女をデュランダルの元には行かせない！ 貴女の相手はこの私だよ!!」

「テムエエエエエエエエエエエエエエエエツ!!」

響の啖呵に激高した少女は、怒りに任せて鞭を振るうが、その悉くが彼女の拳や蹴りによって迎撃される。

「立花響…言うではないか」

「いいぞ〜！ 響〜！」

強気に出た響は企業のトップ二人には好意的に映ったようで、ギースは不敵な笑みを浮かべながら褒めて、ベガは思い切り手を振っていた。

「あのお嬢ちゃん…やるじゃないか！」

「こっちも負けてられないね、兄さ…姉さん」

「頼むから言い直さないでくれるか?! 本気で泣きたくなるから！」

ボガード姉弟も更にやる気になったようだが、弟の何気ない一言に精神的なダメージを負う嘗ては兄だったお姉ちゃん。

「響の奴…いつの間にあんな…」

「全く立花は…本当に私達の心に火を着けるのが上手だな!!」

先輩装者二人も、響の言葉に促されたのか、その攻撃が今まで以上に鋭くなる。

奏と翼の眼前にいるノイズ達は、その全てが倒され、灰となっていく。

「誰でもいいから！一刻も早くデュランダルを回収して！あのまま放置しておけば、何が起きるか想像もつかないわ!!」

「なんだとっ!？」

「ちっ！マジで洒落になってねえな…!」

「となれば……」

「この場での選択は一つだけ!」

了子の必死の声に、四天王&キャミィが反応し、全員が豪昇龍拳でノイズを蹴散らした豪鬼を見つめる。

「豪鬼！行け!!」

「ノイズ達は私達が抑える!!」

「今、最も自由に動けるのはお前しかしない!」

「とつとと、あの剣を取ってきやがれ!!」

「皆さん……」

四天王たちの言葉を受け、豪鬼は攻撃の手を止めてデュランダルを真っ直ぐに見据える。

「んなことやらせるかよ！テメエは何処をどきやがれ!!」

「そっちこそ！大人しく諦めてよ!! 豪鬼さん！この子は私に任せて、そちらはデュランダルを!!」

「心得ました!!」

周囲の戦闘には目もくれず、豪鬼は空中で光りながら静止しているデュランダルへ向けて全力で走り出す。

その速度はそこらの車なんて目じゃない程で、あっという間にデュランダルを目で捉えた。

「どきなさ、い!!」

途中、進行方向にいたノイズを踏み台にして、それを倒しながらデュランダルへ向けてスーパージャンプ。

空中で手を伸ばし、徐々にデュランダルが近づいてくる。

そして、その手でしっかりと黄金の柄を握りしめた瞬間……。

「……これはっ!？」

豪鬼の体に凄まじい力の奔流が襲い掛かり、彼女の全身を赤黒いオーラで覆い尽くしてしまった。

「ぐ……がああああああああああああつ!!!」

倒れるように地面に落ちた豪鬼だったが、それでもデュランダルを放す事だけはせずに、しっかりと手の中に納めている。

だが、その『力』は徐々に豪鬼の意識を侵食していつて、やがて……彼女は声も挙げずに意識を失った。

・
・
・
・
・
・
・
・

それは、『黄金の柄』を持つ『不滅の刃』。

イタリア・フランス史における最強の英雄騎士が持っていた聖なる剣。

その剣の黄金の柄の中には……『聖バジルの血』『聖ペテロの歯』『聖ドウニの遺髪』『聖母マリアの衣服』の四つの聖遺物が収められている……『聖なる剣』。

D u r a n d a l

デュランダルを握った私の意識は漆黒に染まり、闇深くに堕ちた。

ここは全てが暗闇に満ちていて、他には何も無い。

私はどうしてしまったんだろう？

(どうやら『殺意の波動』のお蔭で、最悪の事態だけは避けられているようですね……)

それは、同じ『闇』に属する者同士だからなのか。

専門家じゃない私には判断しかねるが、それでも何とかなっている事だけは事実なので、今はそれで良しとする。

問題は、これからどうするかだ。

「あ……」

こんな意識の底でも、私はしつかりとデユランダルを握りしめていた。

なんとというか……これまた不可思議な感覚ですね。

けど、これに触って理解出来た。

確かに、このデユランダルという剣は普通じゃない。

原作で響さんが暴走しそうになったのも領ける危険さだ。

この聖剣の本来の担い手の一人である『ローラン』。

彼はフランク国王、シャルルマーニュの血脈であり大英雄。

そして、最強にして真の聖騎士パラディンでもある。

私には分かる。殺意の波動を身に宿す私には。

この剣には血と歴史が刻まれている。

これこそまさに『神話』の力そのもの。

そう言えば思い出した。

ローランには他にも逸話が存在している事を。

フランク王国の国王であるシャルルマーニュの甥にして、十二勇士

達の筆頭とされている聖騎士『ローラン』。

あらゆる武勇に優れ、真の勇気を併せ持ち、最も信頼に足ると呼ばれていた彼だが、それ以上に恐るべき伝説を世に残している。

その力は無手で人間を粉々に破壊する程の剛腕であり、その全身はまるで金剛石ダイヤモンドのように強固。

人々から畏怖の対象とされている魔物達ですら、単純な腕力だけで殺戮していった彼の叙事詩……その名は……。

Orlando Furioso
『狂えるオルランド』

納得だ。納得せざる負えない。

こんな代物を扱う人間が普通な訳がない。

これはまさしく『神に選ばれし者』にしか扱えない。

デユランダルは間違いなく『神々に祝福された剣』だ。

(さて…考察はここまでにして、問題はどうかやってここから脱出…もとい、意識を回復するかですね)

試しに自分の頬を抓ってみる。

うん。普通に痛いだけで変化なし。

「こうなったら…」

よくよく考えたら、私に小細工なんて似合わない。

こんな時に私が出来る事と言ったら一つしかないじゃないか。

「メイドたる者、この程度で狼狽えるなんて論外。己に出来るベストを果たすのみ」

デュランダルを両手で握りしめ、大きく息を吸って、吐く。

刀身からは相も変わらず力の奔流が来るが、もう私には通用しない。

こんな時は受け止めるんじゃないくて、受け流せばいい。

無理に全てを真正面から受ける必要はない。

それでも相当にキツイ事だが。

目を瞑り、丹田に気を溜める。

そして、裂帛の気合と共に体内から一気に『自分の力』を放出する！

「滅殺
!!!!」

・
・
・
・
・
・
・

一方その頃。

現実世界では、豪鬼がいきなり謎の赤黒い力に飲み込まれて、少なからず混乱が走っていた。

「ご…豪鬼さん!？」

「なんだよあれ…冗談じゃないぞ!!」

「あれが…デュランダルのかだというのか…!」

装者達は完全聖遺物の力に驚きを隠せず、響と対峙していた少女は体を震わせながら後ずさりをしていた。

「あ…あの力はなんだよ…! なんなんだよ! 同じ完全聖遺物でもネフシユタンとは違い過ぎるじゃねえか!!」

少女も、まさかデュランダルがあそこまで危険な代物だったとは思

いもよらなかつたようで、さっきまでの怒りが完全に消え去り、完全に錯乱状態にあつた。

『どうしたっ！ 現場で何があっているッ!?!』

『その声は風鳴弦十郎か!』

『ギース総帥か!? そちらはどうなっているんだ!? 原因は不明だが、映像が乱れてよく分らない!』

「……豪鬼がいきなり覚醒し始めたデユランダルを回収しようとして握りしめた途端、謎の力に覆われてしまった……」

『な……なんだとおっ!?!』

今までで一番の驚き。

まさか、これまで一度も何事も無かつた豪鬼が、まさかそのような事になっているとは思わなかつたから。

彼女に対して全幅の信頼と安心をしていただけあつて、その驚きは人一倍だつた。

『それで！ 豪鬼くんは無事なのかッ!?!』

「それはこつちが聞きたい！ おい櫻井了子！ あれはどういう事だっ!?!」

「お……恐らく……デユランダルのフォニックゲインと豪鬼ちゃんの殺意の波動が共鳴し合っているのかも……」

「殺意の波動とデユランダルが……」

『共鳴しているだと……!?!』

ノイズを蹴散らしながら豪鬼の様子を見ると、彼女の動きに変化があつた。

ゆつくりとはあるが、豪鬼がデユランダルを両手で握りしめたのだ。

そして、大きく口を開けて……。

「滅殺!!!」

瞬間、豪鬼の体を覆い尽くしていた力が一気に拡散し、その凄まじい衝撃で周囲にいた大量のノイズだけを一掃した。

「きやあああああつ!?」

「こ…これはっ!?」

「うわあああああつ!?」

咄嗟に全員が顔を腕で隠し、衝撃波から自分の身を守る。
少女だけは一人、防御が間に合わずに吹き飛ばされたが。

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

「豪鬼さん!」

「豪鬼! しっかりしろ!!」

三人の装者の中で一番近くにいた奏が豪鬼の体を支え、そつと起き上がらせる。

彼女の顔はかなり衰弱していて、平気そうにしてはいるが、誰が見ても疲弊しているのは明らかだった。

「奏ちゃん! 豪鬼ちゃんをこっちに!」

「分かった!!」

奏は咄嗟に豪鬼の事をお姫様抱っこしてから、走って了子の元まで向かった。

了子の傍には車から出てきたファンもいて、心配そうに狼狽えていた。

「申し訳…ありません……」

「何言ってるんだよ! 謝る事なんて何もねえよ!」

「そうよ。豪鬼ちゃんはよくやったわ。ありがとう」

「それよりも、今は体を休めてください」

「そう…ですね……」

ふらつく体を必死に抑えて、豪鬼は手に持ったデュランダルを了子に渡した。

デュランダルは完全に停止していて、先程までの力の奔流は全く感じられない。

「これを……」

「ええ。もう一回、私が責任を持って封印をするわ」

「お願い…しま……」

そこまで言うてから、豪鬼は目を瞑った。

「どうやら、今度こそ本当に気を失ったようだ。」

「豪鬼ちゃん……」

彼女の奮闘を見て、了子の心に揺らぎが生じる。

自分の決意が鈍っていく。

思わず豪鬼から目を逸らしてしまっただが、だからこそ気が付けた。

「嘘……でしょ……!」

神話の通り、本来ならば絶対無敵、完全不滅である筈のデュランダルの刀身が、ごく僅かではあるが砕けていた。

その砕けた破片は地面に落ちていて、了子は急いでそれを拾ってからポケットに仕舞った。

(豪鬼ちゃん……やっぱり貴女こそが……)

目の前で眠っている少女の顔を見て、了子はある事を考える。

それは、史実には無かった事。本来ならば有り得ない事。

「ノイズは根こそぎ倒されて……デュランダルも奪えなくて……!」

このままじゃ……このままじゃアタシはあいつに……!」

俯いてから悔しそうに歯を食い縛っていた少女は、いきなり顔を上げてから、徐に何処からか黄金に輝く一本の杖を取り出した。

「ムカつく!・ムカつく!・ムカつく!・どいつもこいつもムカつくんだよ!! クソツタレがあああああああああ!!」

少女が杖を掲げた瞬間、上空に巨大なノイズが出現した。

それは平面上になっていて、雲のようにこの場に大きな影を作った。

「デ……デカイノイズツ!」

「しかも空中を飛んでいるだとツ!」

「ん? あの大きさ……形状……まさかツ!」

テリーとサガツトが驚いている中、一人だけ冷静なファンは自分の推理が当たっている事を直感した。

「皆さん! 気を付けてください!! あのノイズは普通のノイズじゃありません! あれは……あれは……!」

空中にいる巨大ノイズから、小さな物体が落ちてくるのが見えた。

「『輸送艦』です!!」

まさかの、空中からの襲来。

全員が再び戦闘態勢を取る……が、それはいきなり無駄に終わった。

「……………え？」

凄まじい速度で空中を駆け抜ける赤い閃光。

それから放たれるミサイルや白い光線。

地面に降り立つ前に、ノイズ達は空中にて無残に散っていった。

「おい…ベガ。あれはまさか……」

「絶対にそうでしょ……」

二人は知っていた。赤い閃光の正体を。

増援として出現したノイズを全て撃破したソレは、静かに皆がいる場所へと着地した。

「おいおい。これは一体どういう事なんだ？ ビルの窓からノイズの大群が見えたから、急いで念の為に持ってきておいたスーツで駆けつけてみれば、いるのは錚々たる面子じゃないか」

「やっぱりお前だったのか……」

全身を覆っている真紅の装甲の顔面部分が展開し、その素顔が明らかになる。

二十代後半半ぐらいのナイスミドルな、お髭が素敵なアメリカ人。

「天駆ける黄金の騎士……トニー・スターク……」

今ここに、新たなる英雄が参戦した。

メイド豪鬼 心配される

予想外のトラブルなどがありはしたが、なんとか無事にデュランダルの輸送任務を終えた面々は、撤収準備を終えてから、そのまま二課の本部までやって来ていた。

ベガやギース、バイトとして雇っていたリユウ達、そして：最後の最後に意外な増援として登場したアイアンマンことトニー・スタークも一緒に。

「ほう……これはまた見事なもんだ。驚いたな」

アイアンマンスーツをアタッシュケース状に戻し、物珍しげに辺りを見渡すトニーに苦笑しながらも、弦十郎は無事に戻ってきた彼らを労った。

「お前達。よく戻ってきてくれた。一時はどうなる事かと思ったが、どうにかなったな」

「ありがとうございます。叔父様。ですが、それよりも聞きたいことがあるのではないのですか？」

「う……」

姪からの一言で苦い顔になり、司令官としてではなく、一人の男として尋ねた。

「豪鬼くんは……大丈夫なのか？」

「あの子なら心配ないわ。デュランダルの力に触れて極度の疲労をしているだけで、それ以外には外傷の類は全く無し。今は医務室で静かに休んでるから安心していいわよ」

「そうか……よかった……」

ここから安心したような顔を見せ、胸を撫で下ろす弦十郎を見て、オペレーターの二人が顔を見合わせてから微笑を浮かべる。

「さつきまで、ずっと豪鬼さんの事が気が気でなかったって顔だったもんな」

「ほんと、二人揃って素直じゃないんだから」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

司令官は地獄耳。

迂闊な事は言えない。

「にしても、まさか俺達が下水道でノイズ対峙をしている間に、そんな事が起きてたとはな」

「あの豪鬼が気を失ってしまいう程の物なのか、完全聖遺物というのは……」

「いまだに信じられませんよね。あの豪鬼さんが気絶するだなんて……」

普段から、いかなる時も強く、気高く、美しくがモットーになっている（と皆は思い込んでいる）豪鬼が倒れる。

逆説的に、それ程に激しい戦いだっただという事になる。

「サガット。お前から見てどうだった？」

「見た目自体は単なる古めかしい剣だったが、あれからは得体のしれない『力』を感じた。気の力とも違う、殺意の波動やサイコパワーとも違う何かをな」

「未知なる力を発する聖なる剣……か」

今までにも武器を持った戦士と戦った事は何度もあるが、それでも今回の事態は異常だった。

リュウやケンには、なんだか豪鬼の身に起きたことが他人事じゃないように感じられた。

「そうだ！ ギースさん達に聞いたけど、響ちゃんが昇龍拳を放ったって本当っ!？」

「う……うん。我流な上に凄く不格好だったけどね……ははは……」

「それでも凄いよ！ いつか、響ちゃんともファイトしたいな〜！」「ええっ!?! そ…そんな、私なんてまだまだだよっ!?!」

興奮した様子で響と話し込むさくら。

傍から見ていると女子高生同士の華やかな光景に見えるが、実際に話している事はかなり物騒である。

「貴方があの『アイアンマン』…トニー・スタークか。お会い出来て光栄だ」

「初めまして。ミスター・カザナリ。二課の事はこっちでもそれなり

に知ってはいたけど、まさか君のような男が司令官をしていたとはね。君は後ろで命令を出しているよりも、前線に出てから暴れる方が性に合っているんじゃないのか?」

「そうかもしれない。だが、ここにいるからこそ出来る事もある」

「御尤も。成る程、あのミス豪鬼がここに来たのも頷ける。どうやら、君とはいい関係になれそうだ」

「アメリカの誇るスーパーヒーローの筆頭にそこまで言われるとは…嬉しい限りだ」

男同士、熱い握手を交わす。

二人揃って体格がいいので、それだけで不思議な迫力があつた。

「あのトニーとかいう御仁は何者なんだ? 妙に堂々としているが……」

「翼、もしかして知らないのかツ!? あの人、物凄い有名人だぞっ!」

「そ…そうなの?」

「ああ!」

ケンを初めとした格闘家の事を知っていたり、トニーの事も知っていたりと、実は奏はかなりのミーハーなかもしれない。

「トニー・スターク。アメリカに拠点を置く巨大な軍事企業である『スターク・インダストリー社』の若き社長であり、同時に超天才的な頭脳を併せ持つ天才科学者。そして、あの『アベンジャーズ』の参謀の様な役割もしている…のよね?」

「まさか、あのミス・サクライから直々に紹介って貰えるとは」

翼の疑問に答えるように、了子が割り込んできてトニーの事を軽く説明した。

同じ天才同士、どこか通じ合うところがあるのかもしれない。

「軍事企業…という事は、まさか兵器の売り買いなどをして……」

「昔はね。今は違う」

「スターク・インダストリー社は彼がアイアンマンとして活躍し始めると同時に軍需産業から完全撤退することを大々的に発表しているのよ。確か、今は優れた家電とかを開発して売り出しているのよね?」
「その通り。よかったら、お近づきの印に御一ついかがかな? 我が

社特製の目覚まし時計。どんな寝坊助も絶対に一発で起きれる優れた物だ」

「まさかの目覚まし時計……」

「私、それ欲しいです！ これでもう学校に遅刻せずに済むかも！」

「それはいい。勉強、友情だけならず、学校で学べる事は多岐に渡っているからね。その時間を少しでも多くすることが出来るのならば、これは喜んで君に差し上げよう」

「ありがとうございますー！」

慣れた感じで自社製品である目覚ましを響に手渡すトニー。

本人は歓喜しているが、それを上手く活用できるかどうかは本人次第である。

「そういや、どうしてトニーは日本に来てたんだ？」

「さつきも言っただろう？ 単なる出張だよ。まさか、出張先でスーツを着て戦う羽目になるとは思わなかったが」

やれやれと言った感じで肩を竦ませるトニーであったが、その顔は笑っている。

仲間達のピンチに間に合っただけかと思っただけのさ。

「なんだか仲良さげに話していますが、リュウさん達とトニー氏とは何か親交が？」

「彼等とは、今までに何度も一緒に戦った仲間なのさ」

「マグニートー……ウルترون……オンスロート。アポカリプスにサノス。どれもこれもが強敵揃いだっただ」

「全てが想像外の超人ばかりだったが、俺達の力を合わせれば……ってな」

「本当に大きかったですよね……」

「そういえば、あの時はさくらも一緒だったな！」

当時の事を思い出して、リュウは拳を握って思いに耽つて、ケンはずいぶん遠い眼になり、さくらは青い顔になって、ベガは楽しそうにしていた。

激しい戦いであっても、思う事は個々人によって違うようだ。

「キャプテンがリュウに会いたがっていたよ。機会があればまた来てくれ」

「勿論だとも！ 再び彼と腕試しが出来ると思うと、今から修行がしたくなる！」

「ほんと……リユウは変わらないよな」

「だからこそ尊敬できると思うけどね」

アベンジャーズと同様に、これまでに幾度となく共闘してきたテリーと、その弟であるアンディが隣で呟く。

生粋の格闘家気質であるアンディは、どこかリユウに共感できるものがあるのだろう。

「随分と大所帯になりましたね。普段はとても広い司令室も、こうしているとな狭く感じます」

「豪鬼くんっ!?!」

話が盛り上がって来た所で、いつもと変わりのない姿で豪鬼が司令室に入ってきた。

それに最も早く反応したのは弦十郎で、すぐに彼女の近くまで走っていった。

「もう大丈夫なのかっ!?!」

「はい。御心配お掛けしました。ですが、この通り」

腕を曲げて自分が元気である事をアピールするが、それでもまだ心配なのか、弦十郎は彼女の肩に手を当てて、その目を真っ直ぐに見つめた。

「おいおい……あの豪鬼にも遂に春が訪れたのか？ これは一大事だ。早速、ウチの会社製のベビーベッドやらベビーカーやらを用意しなくては。後は、他のメンバーにも報告しないと。特に、ステイブやバナー博士は喜んで式に参加してくれそうだ」

「いや、気が早過ぎだろ」

珍しく奏だけのツツコミ。

お笑い番組でも見て学んだのだろうか。

「頼む、本当の事を言ってくれ。大丈夫なんだな？」

「……………弦十郎さんには嘘はつけませんね」

観念したように息を吐き、申し訳なきそうに豪鬼は苦笑いを浮かべた。

「実は、まだ少しだけ眩暈がするんです。日常生活には支障はないでしょうが……」

「矢張りか……」

自覚はあった。

自分達は豪鬼に無理をさせ過ぎているのではないかと。

なまじ、本当に頼りになる上に、本人が全く弱音の類を吐かないから、日常的に彼女を頼りにしてしまう悪癖が生まれてしまっていた。

「無理もないわ。寧ろ、あれ程までの力の奔流に巻き込まれて、五体満足でいられた方が奇跡に近いわよ」

「そうなのですか？」

「つくづく、豪鬼ちゃん……いや、格闘家って人種は規格外よねえ……」

科学者たちの根本を真つ向から否定していく存在。

だからこそ、非常に頼りになっているのだが。

「豪鬼君。体調が良くなるまで自宅療養をするんだ。バイトも暫く休んだ方が良い」

「ですが、そうになると……」

「向こうには我々から言っておいてやる」

「だから、貴様は遠慮なく休んでいろ」

「任せてください！ 私達なら大丈夫ですから！」

「庵さん……デミトリさん……さくらさん……」

頼もしいバイト仲間達からの言葉に、流石の豪鬼も折れざる負えなかったようで、大人しく従う事にした。

「分かりました。自身の体調管理もまた、メイドとして重要な仕事の一つ。万全の体勢になるまでは、ゆっくりと休ませて貰います」

「それがいい。君という人物が失われるのは今の世界にとっても大きな痛手だし、君が作ってくれる絶品のドーナツが食べられなくなるのは御免だ」

「ドア越しに聞き覚えのある声がすると思っていたら……やっぱり貴方だったんですね。トニーさん」

「お久し振りだね豪鬼。相変わらず……ではないようだな。前に見た時よりは物腰が少しだけ柔らかくなっている。とてもいい傾向だ」

「ありがとうございます」

トニーと話している豪鬼に複雑な感情を抱きながらも、顔を振ってすぐにそれを振り払う。

弦十郎も人間だったという事なのだろう。

「そういえば、例の彼女はあれからどうなったのですか?」

「あの少女なら、トニーがやって来てくれた時にはもう……」

「恐らく、場の混乱に乗じて逃亡したのだろうな」

「なに、また次の機会があるだろうよ。落ち込む必要はねえよ」

「そうですね、ここでよくよしても始まりませんから」

四天王から報告を受けて、内心ではホッとした豪鬼。

知識として『未来』を知っている以上、無意識の内に安心してしま
うのだろう。

「ですが、私が休むとなると、暫くはトレーニングは出来そうにないで
すかね……」

「それなら心配すんなよ」

「ケン?」

笑顔を浮かべながら豪鬼に向かってサムズアップをするケン。

何か考えでもあるのだろうか。

「お前さんが休んである間は、俺とリュウが嬢ちゃん達の面倒を見て
やるよ」

「ええっ!? あのケン・マスターズから直々に特訓して貰えるのかッ
!?!」

「おう! マスターズ式トレーニングをたつぷりと伝授してやるよ!

お前もそれでいいよな?」

「事後承諾なのか……。まあ、俺としても異論はない。これもまた修
行の一環。真の格闘家への道だ」

流れでコーチをする羽目になっても、ストイックに道を極めようと
するリュウに、響とさくらとはとても強い憧れを抱き、翼は尊敬する眼
差しを見せていた。

「ならば、私も暫く日本に滞在するのでしょうか」

「貴様も?」

「日本のノイズ被害については知ってはいたが、実際に見て、体験して、情報以上だという事が判明したからな。最悪の場合、他のメンバーも招集しなくてはいけなくなるかもしれない」

普段は飄々としているトニーではあるが、誰よりも平和と仲間達の事を思いやれる心優しい人物なので、日本で頑張っている同志達の事を見捨ててはおけないのだろう。

それ以上に、未成年である装者達が最前線で戦っている現状に思うところがあるのかもしれないが。

「櫻井博士。ここに来る途中で話を聞いたデュランダルはどうなっているんだ？」

「あれなら、今まで以上に嚴重な封印を施して、別の研究所に引き渡してあるわ。少なくとも、外部からの力の干渉で暴走する：なんて事は避けされる筈よ」

「それはいい。聖遺物に関しては流石の私も専門外だからね。神の祝福を受けた剣にアイアンマンスーツがどこまで通用するのか、全く検証が出来ていない以上、不確定要素は少しでも少ない方がよい」

これまでも『神』と呼ばれる存在や、それに近い存在と幾度となく壮絶な死闘を繰り広げてきたが、『神話そのもの』と対峙をしたことは一度も無い。

故に、これからの戦いに備えて『対聖遺物用』に向けたスーツの改良が必要であると考えているのだ。

「それはそうと、そろそろ豪鬼ちゃんは帰った方がよいんじゃない？」

ここにいるメンバーの中で一番疲れているのは間違いなく貴女なんだから」

「そうですね…では、お言葉に甘えて……」

軽く挨拶をしてから豪鬼が司令室を去ろうとすると、いきなりトニーが弦十郎の肩を叩いて軽いアドバイスを。

「弦十郎。君も紳士ならば、弱った女性を一人で帰すような真似はするべきではないのではないかな？」

「む…それもそうだ。豪鬼くん！」

「はい？」

実のところ、早く帰りたかった豪鬼は何事かと思つて振り向くと、そこにはいつにも増して真剣な顔の弦十郎が。

「君が良かったら…なのだが、俺が家まで送っていいこう」

「え？ でも、弦十郎さんはまだお仕事が……」

「こつちなら私達で何とかするから、遠慮なく行つてきていいわよ」

「ここで了子からの援護攻撃。」

これで断れなくなつてしまった。

「でも、送り狼にだけはなっちゃダメよ？」

「分かつている！ 豪鬼くん！」

「今度はなに……きゃあつ!？」

何を思ったのか突然、弦十郎が豪鬼の事をお姫様抱っこ。

メイドの美女を抱える筋骨隆々の男性という、何とも言えない構図が完成した。

「それでは行つてくる」

「ごゆつくり〜♡」

何が『ごゆつくり』なのか。

奏と翼はその意味を正しく理解して顔を赤くしていたが、響とさくらはキョトンとした顔で小首を傾げていた。

「自分から焚き付けておいてアレだが、こりや、本格的に式場の手配とか考えていた方が良いのかな？ ま、仲人ぐらいはしてやるか」

この時、トニーが呟いた余計なお世話が本当に実を結ぶのかは不明である。

メイド豪鬼 リア充と化す

ど…どうも。豪鬼です。

現在、私は弦十郎さんの運転する二課所有の車の助手席に乗っています。

トニーさんと了子さんの余計な一言により、私は彼に送って貰う事になりました。

それは全然いいのですが、どうして私はあの時、お姫様抱っこされたのでしょうか…。

駐車場まで向かう際に廊下で他の二課の職員さん達と遭遇するのですが、皆揃って私達の事をほんわかとした視線で見つめてくるんですよね。

物凄く恥ずかしくなって顔が熱くなりました。

顔から火が出そうって、あの事を言うんですね…。

お蔭で、抱えられている間、ずっと弦十郎さんの顔が見れませんでした。

というか、今もまだ見れてないんですけど…。

(…こんなにもドキドキしたのは、本気で生まれて初めてかも…)
まだ胸の動悸が収まりそうにない。

ううう…メイドともあろう者が…私は一体どうしてしまったんですでしょうか…。

「豪鬼くん？ まだ具合が悪いのか？」

「い…いえ。なんでもありません。大丈夫です」

「そうか…少しでも気分が悪くなったらすぐに言ってくれ」
「分かりました」

や…ヤバいです…。

どうして…今日の弦十郎さんがいつも以上にカツコよく見えてしまうのでしょうか…。

気を紛らわせる為に窓の外を眺めると、そこには仲睦まじく歩くカップルの姿が見えた。

私もいつか…彼と一緒にあんな事が出来るのかな…。

(はっ!? わ…私は一体何を考えていたんですかッ!?)

こ…これは非常に深刻な問題かもしれないかもしれません……。

なんとか自分の心を冷静に保とうと頑張っていると、見覚えのある光景が目に入ってきた。

もうすぐ私の住んでるアパートが近づいてくる……。

到着したら、まずは心配してくれた事と車で送ってくれた事に対してのお礼を言つて、それから……なんて考えている内にアパートが目と鼻の先まできてるんですけどっ!?

ちよ…ちよつと待つてくださいい！ まだ心の準備が！ ポーズ！
ポーズボタンをく!!

・
・
・
・
・
・

結局、無難な事しか思いつかないままの状況でアパートに到着すること。

こんな事なら、出発した直後からちやんと考えてるんだった……。

「車は何処に停めればいいんだ?」

「右隣にある専用駐車場で大丈夫ですよ」

「いいのか? こういう場所は普通、契約した車しか駐車できないのでは……」

「問題ありません。こここの大家さんはとても寛容な方で、契約車でなくても、住人の関係者であるならば問題無く停めることが出来るようになってるんです」

「そうか……それはいいな。では、遠慮なく……」

弦十郎さんは慣れた感じで車をバックさせて、見事な駐車を見せて

くれた。

もしかして、この人は大抵の乗り物は乗りこなせたりするのでは？

「これでよし…っと。到着だ」

「ありがとうございます」

ちゃんとお礼は言えた。

問題はここからだ。

「しかし……」

「どうしました？」

「いや。ここが豪鬼くんが住んでいるんだなと思つてな」

「私の家の場所はそちらにも教えた筈では？」

「住所だけはな。こうして実際に見たのは初めてだ」

「そうだったんですね」

てつきり、監視衛星かドローンの的なので把握しているとばかり思つていました。

「もしも、よろしかったら…少し上がっていきませんか？ 送つていただいたお礼もしたので」

………はっ!? わ…私は一体何を言いだしてるんですかッ!?

「いや、その気持ちは嬉しいが、すぐに戻って仕事を……」

ここで弦十郎さんのスマホが鳴った。

私からもディスプレイが見えたのですが、どうやら了子さんからのようです。

着信音から察するに、メールのようですが……。

「こっちは私達だけでも大丈夫だから、弦十郎くんは豪鬼ちゃんと一緒にいてあげなさいな」

あの人はまた……しかも、この言い方から察するに、了子さんだけの独断じゃなさそうですね。

少なくとも、あのオペレーターたちもグルと見ました。

「……急に大丈夫になってしまった」

「あの…どうします？」

「………お邪魔します」

・
・
・
・
・
・
・

「ここが豪鬼くんの部屋か……」

というわけで、弦十郎さんをお部屋に上げることに。

ここで急に冷静になったのですが、家族……つまり兄上以外の男性を部屋に入れたのって、これが初めてなのではッ!?

「余り女性の部屋には入った事が無いからな……少し緊張してしまうな」

「翼さんのお部屋には行ったりなさらないのですか？」

「行った事はあるが……アイツの場合は……な」

「ああ……」

そうでしたね……。

一年前までは、彼女の部屋は大凡、人間が住めるような場所じゃありませんでしたものね。

因みに、あれから私や奏さんが定期的に彼女の部屋を訪れてから掃除をするように心掛けている。

じゃないと、あつという間に元の部屋に逆戻りしてしまいますからね。

最初はこれまでの防人としての人生がそうさせているのかと思いますでしたが、それは大きな間違いでした。

翼さんは生粋の『片付けられない女』だったのです。

一種の病気とも言えるかもしれません。

「お……お茶を淹れますので、適当な場所に座って待っててください」

「それは嬉しい限りだが、体はいいのか？」

「これぐらいならば問題ありません。こう見えても鍛えていますから」

「そうだったな……」

伊達に『殺意の波動』を極めてませんからね。

これぐらいなら、一晩ぐっすり寝れば回復します。

さて…と。弦十郎さんならばコーヒーの方が良いでしょうね。

・
・
・
・
・
・
・

豪鬼がキッチンに向かってから、部屋には弦十郎一人になる。

彼女とはもう長い関係になるが、こうして部屋のお邪魔したのはこれが初めてだった。

だからなのだろう。彼は柄にもなく緊張していた。

(流石は豪鬼くんと言ったところか……。部屋の内装も落ち着きがあつていいし、家具の方も色んな物が揃つていて……って、女性の部屋をまじまじと見て何を考えているんだ俺はっ!?)

弦十郎。人生で初めての自己嫌悪に陥る。

(……あの時、豪鬼くんが倒れたと教えられた時……俺は初めて怖くなった。同時に、自分自身に対して激しい怒りも感じた。どうして彼女の傍にいてあげられないのか……。どうして、あの体を支えてあげられないのか……と)

己の拳を握りしめ、弦十郎はデュランダル輸送作戦が終わった直後の時を思い出していた。

直接的な犠牲は誰も出なかったが、それと引き換えるように豪鬼がデュランダルを守って倒れてしまった。

本当ならば、何事も無く任務を達成出来たことに対して喜ぶべき所なのに、自分は諸手で喜べなかった。

それどころか、真っ先に豪鬼の事が心配になってしまった。

これでは指揮官失格だと分かっているのに、なのに……。

「豪鬼くんが無事だと分かった途端……心から安心した……」

あの時の気持ちは一体何なのか。

初心な学生ではないのだから、それが何なのかは自分でも分かっている。

「俺は……」

司令官としての自分と、男としての自分。

まさか、自分が立場と気持ちの間で板挟みになる日が来ようとは。

「……いや、ダメだ。少なくとも今はダメだ。だが、全ての戦いが終わった時は、その時は……」

・
・
・
・
・
・
・

「お待たせしました」

なにやら私の名を呼ぶような声が聞こえた気がしたけど、きつと気のせいだろう。

私は、ちゃんとドリップを使って淹れたコーヒーを持って部屋まで戻っていった。

「ありがとう。うむ……相変わらずいい香りだな」

漫画などでは、このような状況ではヒロインが失敗するのがお約束ですが、私はそうじゃありません。

メイドたる者、自分の緊張も解せないようでは話になりませんか。

……ちよつとだけ危なかったけど。

「美味しい！ 豪鬼くんの淹れてくれたコーヒーはいつ飲んでも最高だな！」

「お……お褒め頂き光栄です……」

いつもの事だが、ここまで派手にリアクションをされると、こっちの方が照れてしまう。

それと同じぐらいに嬉しいんですけどね……。

「……豪鬼くん」

「はい？」

急に真剣な顔になって、こっちを見つめてきた弦十郎さん。

思わず、私はその瞳を吸い込まれるように見つめていた。

「今日は本当に助かった。君がいなかったら、デュランダルは無事では済まなかっただろう」

「私だけじゃありませんよ。響さんや翼さん、奏さん達。それと、あの場にいた皆が自分に出来る事を全力でやった結果です」

「確かにそうだが、君がいたからこそデュランダルの暴走を抑え込むことが出来た。もしも、あのまま暴走したエネルギーが爆発していたら……」

「被害は甚大な事になっていたでしょうね……」

あの時、私達がいた場所は薬品会社の工場地帯……『もしも』の事なんて考えたくはないけど、本当にデュランダルが原作のように暴走していたら最悪の事態になっていた可能性もある。

それを考えると、今回は本当に被害を最小限に押さえ込めたと言えるだろう。

「それに、また強い味方が増えた事ですしね」

「アイアンマン……トニー・スタークか。まさか、あのアベンジャーズの一員と共に戦える日が来るとは思わなかったな」

「彼らは、必要と判断すれば世界中のどこにでも向かって、色んな人々と共闘しますからね。リュウやケン、私や飛竜さんを初めとした非常に多くの戦士たちが彼らと共に幾つもの強大な敵と戦ってきました」

この世界に蔓延っている脅威は、なにもノイズ達だけではない。

それ以外にも、世界の裏に隠れている連中が山ほどいるのだ。

「それだけ、この世界は人々の知らない所で常に危機に瀕しているという事なんだな……」

「その危機から人々を守る為に、私達がいるのでしょうか？」
「その通りだ」

少し落ち込んでいるように見えたが、すぐにいつもの弦十郎さんの目に戻った。

うん。やっぱり、この人はこうでなくちゃ。

「もしも宜しければ、夕飯も食べていかれますか？」

「いや、流石にそこまで世話になるわけには……」

「私を心配してくれただけでなく、こうして送り届けてくれた…そのお礼がしたいのです」

「う…む……」

ここで再び了子さんからのメールが届く。

【もしも食事に誘われたら、ちゃんと受けるのよ？ んでもって、そ

のままの勢いでいく所まで行っちゃえ〜！】

い…いく所までって……え？ えええっ!?

「……………」

メールの文を見て私達は固まってしまった。

気が付けば至近距離にいた私達は、思わず顔を見合わせてしまった。

「え…つと…どうしましょうか？」

「……是非とも御馳走になります」

「は…はい！ この豪鬼！ 全力で頑張ります！」

了子さん……今だけありがとうございますと言っています。

にしても、どこまで予見しているのでしょうか……。

って、それよりも今は夕飯の準備をしなくては！

今日は腕によりをかけて作りますよ！

メイド豪鬼 胸キュンする

弦十郎さんに家に送って貰い、その後到了子さんの余計なお世話によつて凶らずも夕飯を一緒にする事になった私達。

この家で自分以外の誰かに食事を作るなんて初めてだったので、情けなくも少しだけ緊張してしまつたが、そこは頑張つて平常心を保つて料理をした。

で、今は食事を終えて一緒に食後のお茶を飲んでいた。

「本当に美味しかった。こんなにも上手い食事は初めてだったよ」

「そ…そうですか?」

「ああ。翼や奏、響くんが絶賛するのも納得だ」

私はよく二課の食堂を借りて装者の皆やスタッフの人達に食事を作っている。

別にそこまで凝つたものを作つてはいないのだが、それでも皆にはよく喜ばれているで、今では完全に私が食事係のようになっていた。

全く負担にはなつていないので、全然構いはしないんですけどね。

「そう言えば、豪鬼くんの食事を食べるのはこれが初めてだったな…」
「そうでしたね。弦十郎さんはお忙しいから、余り食堂にも顔を出されませんし」

「可能な限りは行きたいと思つているんだが、どうしてもタイミングがな…」

矢張り、あれだけ大きな組織の司令ともなれば、私達が想像している以上に忙しいに違いない。

そんな彼の負担を少しでも軽減出来ればいいのだけれど…。

「弦十郎さんは独り暮らしでしたよね? 自炊などはされているんですか?」

「一応はな。だが、俺が出来る料理なんてたかが知れている。米を炊いたり、味噌汁を作ったりは出来るが、おかずなどはよくスープの惣菜に頼っているよ」

「よろしければ、二課の食堂で弦十郎さんの分のお食事でも作りましようか?」

……はっ!? わ…私はいきなり何を言っつてッ!?

「いいのか? そうしてくれると、こっちとしては本当に助かるが……」

「勿論です。メイドとして、司令である弦十郎さんの健康管理も立派な仕事ですから」

「それではなんだか、メイドというよりは妻みたいだな」

「っ…妻ッ!?!」

「あっ!? す…すまん! 別にそんなつもりで言ったのではなくてだな……」

変な声を上げてしまった…き…気まずい……。

「え…えっと…もうそろそろ帰らないとな! これ以上、豪鬼くんの邪魔をする訳にもいかんしな!」

(別に邪魔なんかじゃなんだけどな……)

寧ろ、もっというてほしいって言うか…って、何言っつてんですか私ー!!

弦十郎さんがお帰りになるんなら、ちゃんとお見送りしないと…きやっ!?!

「おっつ!?!」

急いで立ち上がろうとした瞬間、目の前が真っ暗になって足元がフラつとなつてしまい、弦十郎さんに抱き着くような形になってしまった。

か…顔が熱くてドキドキします……。

「だ…大丈夫かっ!? 矢張り、まだ本調子じゃないのでは……」

「みたいです…。ちよつと立ち眩みがしました……」

「今日はゆっくりと休んだ方が良い。君の分は俺達が全力でカバーをする」

「あ…ありがとうございます……」

彼の胸に顔を埋めているような状態だからか、凄く心臓がドキドキしている。

それは弦十郎さんも同じみたく、彼の心臓が激しく鼓動しているのが聞こえてくる。

「あ……あの……」

「どうした？」

「お帰りになる前に……その……」

「その？」

「……少しの間だけでいいので……このままでもいいので……」

「……分かった」

僅かではあるが抱きしめる力が強くなり、彼の温もりを全身で感じていた。

男の人に抱きしめられるのって……こんなにも安心するんだ……。

そう思ったら、いきなり瞼が重たくなって、それに抗う事無く私は目を閉じた。

・
・
・
・
・
・
・

「クソッ！ クソッ！ クソオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

部屋の中は荒れに荒れている。

そこらじゅうに色んな物が散乱し、家具などは罅が入ったり、壊れたりして滅茶苦茶だ。

私服を着ている『少女』は、その怒りをまき散らしながら暴れ回っていた。

「なんでだよ!! なんでアタシは勝てない!! あんな連中に!! どうして!!」

急にピタツと止まり、今度はフラフラとしながら床に座り込み、そ

のままベットに体を預けた。

「このままじゃ『アイツ』に捨てられる……また……一人になっちゃう……それだけはイヤだ……イヤだよお……」

悔しそうに歯を食いしばりながら、少女は涙を流す。

もう二度と孤独になりたくないから。

寂しさに濡れた毎日を送りたくないから。

「邪魔すんなよ……アタシはただ……この世界から戦争を無くしたいだけなのに……」

嗚咽が漏れる。

もう大声を出す気力も、暴れる体力も残されていない。

部屋には一人きり。他には誰もいない。

本当ならいる筈の『もう一人』も。

「パパ……ママ……助けてよ……」

少女の嘆きは静寂に包まれ、消えていった。

・
・
・
・
・
・
・

全てが眠る丑三つ時。

町外れにある廃ビルの一角にて、二人の男が向かい合っていた。

「まさか、お前が助力してくれるとは思わなかったぞ。武神流のガイ」

「それはこちらの台詞。よもや、あの飛竜殿がかの少女について調べておったとは」

飛竜と話している青年の名は『ガイ』。

武神流忍術と呼ばれる格闘技の第39代目の正当継承者であり、嘗

てはアメリカに存在していた犯罪組織『マッドギア』を仲間達と一緒に壊滅させたことがある。

その後も数々の犯罪組織を壊滅させてきており、更には修行の一環としてストリートファイターもしている。

そんな彼もまた豪鬼とは深い知り合いであり、一人の格闘家として多大な尊敬と信用を得ている。

因みに、飛竜や慎二とは忍繋がりでも知り合っている。

「俺の場合は豪鬼から依頼を受けただけに過ぎん」

「豪鬼殿から？」

「あいつが現在、あの『二課』と協力関係にあるのは知っているな？」

「うむ。知った時は驚いたが、あの豪鬼殿ならば得心がいく。それに、噂ではリュウ殿やケン殿、他にも数多くの戦士たちが協力しているとか」

「まず間違いなく、豪鬼に影響されて来たんだろうな……」

呆れているようににも見えるが、そんな飛竜もまた豪鬼に影響を受けた人間の一人なので余り強くは言えなかった。

「この少女に豪鬼は襲撃を受けたらしい」

「なんとっ!？」

「しかも、その時に彼女は行方不明となっている筈の『ネフシユタンの鎧』を身に纏っていたらしい」

「ネフシユタンの鎧…例の『完全聖遺物』とやらでござるな…。なんで、彼女がそのような物を……」

「それは分かららん。だが、鎧自体は例のコンサートの時に何者かによつて奪われている」

「いや…彼女がまだ下手人であるという証拠は……」

「俺もこいつが犯人だとは思っていない。戦闘能力があるからと言って、盗みの技術まであるとは限らない」

「ならば……」

「まず間違いなく、この少女の裏には黒幕が潜んでいる。そいつがネフシユタンを盗んだ張本人だろう」

「そやつが何らかの形で彼女を拾い、盗んだネフシユタンを与

え、いいように利用している……」

「豪鬼も、そう睨んでいるようだ」

「…どうやら、我等の想像以上に闇が深そうでござるな」

悔しげに拳を握りしめ、己の行動の遅さを恨むガイ。

もつと早くに動いていれば或いは…そう考えずにはいられない。

「しかし、依頼された俺はともかく、どうしてお前が彼女の事を調べている？」

「拙者も頼まれたのでござるよ」

「誰に？」

「ハガー殿でござる」

「マイク・ハガー…メトロシティの市長か。確か今度、アメリカ大統領選に出馬すると聞いたが……」

「そうでござる。故にハガー殿は非常に多忙で、それ故に拙者に白羽の矢が立ったのでござる」

あの筋肉ダルマが大統領。

飛竜にはその光景が全く想像出来なかった。

彼の事だから、もしも当選すれば素晴らしい大統領にはなるだろうが。

「なんでも、ハガー殿は昔、彼女のご両親に助けられたことがあるとか。だが、ご夫婦はとある戦地にて……」

「知っている。それで行方知れずになった娘が心配になり、お前に捜索を頼んだ…か」

「その通りでござる。だが、飛竜殿も同じ目的と分かれば心強い。万の味方を得たも同然でござるな」

「言い過ぎだ」

徐に口を覆っていたマフラーを取り、手にした書類を月明かりに照らした。

「雪音クリス……か」

……

・
・
・
・
・

同時刻 風鳴邸

屋敷全体が静寂に支配されている中、屋敷の主である訃堂は自室にて静かに瞑想をしていた。

そこに、予想してない訪問者がやってきた。

「……こんな時間に失礼致します」

「櫻井了子……否、『フイーネ』と呼ぶべきか？」

訃堂の背後に立っていたのは、普段ならば絶対に見せない無表情の了子だった。

『フイーネ』と呼ばれた彼女は眼鏡を取り、纏めている髪を解いた。「よくもまあ、このような刻限の屋敷に誰にも発見されずに入れたものよ」

「この程度、私に掛かれば児戯にも同じです」

「そうだったな。全く……剛拳といい、貴様といい、どうして儂の周りには常識を弁えん輩が多いのやら」

「貴方様がそれを仰いますか」

「違うない」

「ここでようやく訃堂は後ろを向き、了子と対面する。

彼女の表情は一切崩れることなく、真つ直ぐに訃堂を見つめていた。

「して、本当に何用だ。まさか、世間話をする為にここまで来た訳ではあるまい？」

「はい……」

了子はその場に音も無く正座をし、訃堂を視線を同じにした。

「風鳴訃堂……貴方を真の防人と見込んで、お話しすることがあります」

「申してみろ」

「この星の未来を守る為に：『星の意志』の復活を阻止する為に：力を貸してください」

「…それは誰の言葉だ？ 科学者『櫻井了子』としてか？ それとも……」

「先史文明の巫女として、お願いしています」

「……話してみよ。全てはそれからだ」

「承知しました」

これは運命の分岐点。時代の分かれ目。

とあるメイドが知っている歴史とは違う道へと進み始めた世界の始まり。

全ては、この星の明日の為に。

メイド豪鬼 療養する

「ええっ!? あの豪鬼さんが倒れたっ!?」

それは、自室にていつものように二人一緒に朝食を食べている時だった。

ふとしたことで豪鬼の話題になり、響が今の彼女の状態を話してしまったのだ。

二課やシンフォギアの事は話していないので、ギリギリ大丈夫だった。

「うん。お医者さんの話じゃ、過労なんじゃないかって」

「過労…かあ…。そうだよね。豪鬼さんって普段から人の数倍は頑張ってるもん。本人も知らず知らずの間に疲れが溜まってても不思議じゃないかも」

響とは別のベクトルで未来も豪鬼の事を深く尊敬していた。

その姿勢、家事全般を完璧にこなし、気遣いも素晴らしい。

年上の女性として、一人の女として憧れを抱くのは当然の事だった。

「お仕事も少しの間だけ休んで貰う事にしてるみたい。バイトの方はさくらちゃんや庵さん、デミトリさんがフォローするって言ってくれてたし」

「そっか…：…なんだか大変だねえ…：…」

モグモグと箸を動かしながら未来は考える。

普段から豪鬼にはとても世話になってるから、恩返しという訳ではないが、自分も何か出来ないものかと。

「そういうえば、響って豪鬼さんに特訓を受けてたよね？ それも暫くは中止するの？」

「最初は私もそうなるかな…って思ってたんだけど…：…」

「違うの？」

「うん！ 豪鬼さんが休んでいる間、リュウさんやケンさんが特訓に付き合ってくれることになったの！」

「あの人か？ それにケンさんって誰？」

「ケン・マスターズって人で、リュウさんの幼馴染でライバルなんだった。小さい頃からずっと仲良しだったらしいよ？　まるで私と未来みたいだよね」

「ケン・マスターズっ!?!」

本日二度目の大声。

今日の未来は良く叫ぶ。

「あれ？　未来も知ってるの?」

「知ってるも何も！　ケン・マスターズさんって言えば、格闘技の事を全く知らない私でも知ってるほどの有名人だよッ!?!」

「そ…そうなの?」

「うん！ 『マスターズ財団』って所の社長さんで、総合格闘技の全米王者でもあるんだよ！　日本でも何回もニュースが流れてて、私も前に何回か見たことがあるもん。確か、結婚してて子供もいるとかって言ってたっけ……」

「凄い人だとは思ってたけど、そんなにも凄かったんだ……」

響は全く自覚していないが、格闘技に精通している人間達が見れば卒倒するような有名人が彼女の周りに揃っている。

そんな人々に指導をして貰っている彼女は、ある意味で物凄く幸運と言えた。

「昔から響って、あんましニュースとか見てなかったもんね」

「あはは……」

付け加えれば、新聞もあんまり見ない。

もっと付け加えれば、教科書なんてもっと見ない。

「けど、豪鬼さんとその二人って、どんな関係なんだろう？　知り合い…なんだよね?」

「知り合いつて言うか…親戚に近いらしいよ？　私もリュウさん達に聞いただけなんだけど、豪鬼さんには歳の離れたお兄さんがいて、そのお兄さんの弟子がリュウさんとケンさんなんだって」

「それはまたなんとも…凄い繋がりだね……」

「世の中って、思っている以上に狭いよね……」

その歳で何をしみじみとしているのか。

ずず…と味噌汁を飲みながら、未来と響は揃って遠い目をしていった。

「つてことは、特訓自体はこれからも続けるんだ？」

「勿論！折角、リユウさん達が稽古をつけてくれるんだから、これをやらない手は無いよ！」

「まあ…響なら、そう言うと思ったけど」

幼馴染にはなんでも御見通しだった。

「でも、そっか……」

響は響なりに自分に出来る事を頑張っている。

ならば、今の自分に出来る事は何だろうか？

（放課後に、豪鬼さんのお見舞いにでも行ってみようかな……家の場所なら知ってるし）

早速、放課後の予定が決定した未来だった。

.....

.....

.....

.....

.....

……暇ですね。

弦十郎さんや二課の皆、他にも色々な方々から休むように言われて、こうして自宅療養をしている訳ですが……。

（こうして、部屋でジツとしているのは、どうも性に合いませんね）
なんとというか…体がうずうずします。

今すぐにも外に出て道路に落ちているゴミや落ち葉などを掃除したい。

けれど、皆さんのご厚意を無下にするような真似はしたくないし

……。

因みに、今の私はメイド服ではなくて普通に部屋着を着ています。どんな格好かはご想像にお任せしますが。

「…我ながら難儀な性格をしていますね」

私って、こんなにも暇を潰すのが下手だったっけ。

この部屋には娯楽道具なんでものは殆ど無いし、やる事と言えば部屋を軽く掃除したり、自分の分の食事を作ったり、後は特に興味も無いテレビを見たり、スマホを弄ったりで……。

「……ダメだこりゃ」

いつもならば、仕事している間に時間なんて過ぎてしまっているのに、今日に限っては一分一秒が物凄く長く感じる……。

休みを…楽しめない……！

「何か…何か本とか有りませんかでしたっけ…？」

転生してからの新生活をする際に、色々と必要な物は買い揃えたり、仕事を見つけてからも様々な物を買って揃えてきた。

私自身が覚えていないだけで、何か買っていたかも……。

そんな淡い希望を信じ、部屋の中を探索してみる。

すると、とある一冊の本を見つけた。

【サルでもわかる！ メイドとしての心得講座！ 上級者編】

…… 一体いつの間に、こんな本を購入していたんだろうか。

全く持って記憶にない。というか……。

「どっくの昔に、んなものは全部習得済みですよーだ」

これでは暇潰しにならない……。

後、何か読む物と言えば新聞ぐらいしか……。

ピンポン

「おや？」

まだまだ明るい時間帯だというのに、一体誰でしょうか？

二課の人達…ではないでしょうし、かといって翼さんや奏さんでもないだろう。

あの二人は仕事の真つ最中の筈だから。

かといって響さんも有り得ない。学校に行っているから。

では、トニー…なわけないか。

じゃあ、シヤドルーの誰か？　それが一番濃厚な線か。

もしくはギースさんか、その関係者の誰か。

後は、格闘家繋がり誰か。

兄上だけは絶対に有り得ませんね。

「こうして考えると、私の家に訪れる可能性のある人って沢山いるんですね…」

無意識の内に、私も随分と顔が広くなったものだ。

「つと、余り待たせては申し訳ありませんね。メイドたる者、すぐに出なくては」

急いで立ち上がったから玄関に向かい、入り口のドアを開く。

すると、開いたドアの向こうには意外過ぎる人物達の姿があった。

「ヤッホ〜♪　倒れたって聞いてたから心配してたけど、思ってたよりは元気そうじゃない」

「はあ……」

「ま…舞さん？　それに春麗チュンリさんも？　どうしてお二人がここに……」

不知火舞さんに春麗さん。

今更、詳しい説明は不要なほどに有名な二人。

こうして会うのは久し振りだが、どうやってここが分かったのだろうか？

私の家の場所はまだ教えていない筈だけど……。

それと、流石に二人とも、いつものような恰好はしておらず、完全な私服に着替えている。

アレで街中はうろつけないですしねえ……。

「テリーやアンディから聞いたわよ？　相当に無茶をして倒れたんですって？」

「成る程…情報の出所は、あのお二人でしたか……」

それならば納得だ。

あの兄弟…じゃなくて、今は姉弟か。

兎に角、あの二人と舞さんは非常に密接な関係ですからね。色んな

意味で。

「春麗さんは一体どうして日本に？」

「私は単純に仕事よ。出張で偶々、日本に来る用事があったの。んで、休みを貰えたから気分をリフレッシュする為に散歩をしてたら……」

「舞さんに捕まって今に至る……と」

「そゆこと。けど、今となってはこれで良かったって思ってるわ。大切な女性格闘家仲間が倒れたと聞かされれば、お見舞いに行くのは当然なもの」

この人も相変わらずですね。休みの日でも真面目成分が抜けない。

え？ 私も人の事は言えない？ そうでしょうか？

「ところで、どうやってここを知ったんですか？ 舞さんにはまだお教えしてないですよ？」

「ギースママに教えて貰ったの。将来的に、あの人は私の義母になる人だしね。今の内から仲良くしておかないと」

「ああ……」

そういや、そうでしたね……。

まあ、お二人が結婚の暁には、私も出席ぐらいはしてあげましようかね。

「いつまでも玄関先ではアレですので、どうぞお入りください」

「その言葉を待ってました！ んじゃ、お邪魔します」

「お邪魔します」

そんな訳で、舞さんと春麗さんの中に入れてから、真っ直ぐにキツチンへと向かってから茶と茶菓子を出した。

「お見舞いに来たのに、逆に気を使わせてごめんなさいね」

「気にしないでください。寧ろ、こうしていた方が落ち着くので」

「貴女も相変わらず、メイド一直線なのね」

「それ程でも」

私にとっては最高の褒め言葉ですよ、舞さん。

「にしても、まさか豪鬼ほどの人間が倒れるなんてね。正直、舞から聞かされた時は耳を疑ったわ。これまでに、とんでもない連中と死闘を繰り広げても大丈夫だったのに」

「一体何があつたの？ アンディ達から軽くは聞かされてるんだけど……」

本来ならば機密事項なのだが、舞さんもKOFで世界の裏側に潜む『真の闇』を知っているので問題無しと判断をしたのだろう。

それは春麗さんも同様だし、ここで言つてしまつても大丈夫だろう。

場合によっては、この二人にも協力して貰うかもしれないし。

「そうですね。貴女方になれば話してもいいでしょう」

.....

「完全聖遺物デユランダルの移送に……」

「ネフシユタンの鎧を纏つた謎の女の子の襲撃……ね」

全てを話していつたら長くなつてしまうので、要点だけを押さえながら説明をした。

彼女達ならば、これだけでも十分に理解してくれる筈だ。

「シンフォギアや二課の存在については、私も密かに知つてはいたけど……」

「まさか、こつちが知らない間にシャドルーやハワード・コンツェルンも関わっていたなんてね。連絡さえしてくれば、いつでも協力しに行つたのに」

「あの時は凄くバタバタとしていましたからね。そんな暇は無かつたんですよ」

逆に言えば、余裕さえあればもっと増援を要請していましたよ。

それこそ、自分の知り合いに片っ端から。

「しかも、あのトニーまで協力してくれることになるなんて」

「彼の場合も春麗さんと同じで、仕事で来ていたところを偶然にも我々の戦闘を目撃し、救援に来てくれたといった感じらしいです」

「アイアンマン…トニー・スタークね。豪鬼や春麗がアベンジャーズと関わりがあったのは知ってたけど……」

そういえば、前に一度だけ春麗もアベンジャーズにスカウトされたことがありましたっけ。

自分には本職があるから無理だと言って断ってましたけど。

「もしかして、相当にヤバい事になってる？」

「なってますね。少し前に飛竜さんに仕事を依頼もしましたし」

「彼も動いてるんだ……」

舞さんは忍者仲間として、春麗さんは以前に一緒に行動していた事があつたから共通の知り合いとなっている。

何気に彼も顔が広いですよね……。

「そういや、ちよつと小耳に挟んだんだけど……」

「なんですか？」

「豪鬼って…彼氏出来たの？」

「なっ…!？」

か…彼氏ッ!? この私にッ!? なんてっ!?

「だ…誰から聞いたんですか？」

「テリーから。なんか、すつごく良い雰囲気だったって聞いてるけど」

「そ…それは……」

つい、あの時の事を思い出す。

帰り際、弦十郎さんに抱きしめられた時の事を。

(顔がめっちゃ赤くなってる)

(こりやマジだわ)

(つていうか……)

(何この可愛い生き物)

こ…このままではダメだ! なんとかして話題を逸らさない!

えつと…何かいい話は……。

「そっかく…あの豪鬼にも遂に春が訪れたかく…。後でユリちゃんや

キングにも知らせておかないと」

「や…止めてください！ 確かに、弦十郎さんとはその…人並み以上に仲がいいのは認めますが、彼氏彼女の関係かと言われれば…その…
ぐによぐによ…」

「恋する乙女の顔で言われても、説得力皆無よ」

「うぐ…」

完全に雰囲気が女子会になっている…！

なんで、どうしてこうなった…？

「ま…舞さんはテリーさんが女性になってしまった事を知ってたんですか？」

「そりゃ知ってるわよ。なんたって、あいつに女性用の下着を買いに行かせたのは私だもの」

「彼…相当に困ってたでしょうねえ…。俺やデミトリも同じ目に遭ったって言うし…」

「しかも、三人揃って可愛いのよね。普段は筋骨隆々な感じなのに、絶対におかしいでしょ」

よ…よし！ なんとかして話題を逸らす事に成功した！

これで、私に苦手な雰囲気から脱却できた…。

ピンポーン

「ん？」

またもや、お客さんですか？

なんて見せかけて、実は単なる宅配便だったりして…。

取り敢えず、まずはドアを開けてみますか。

「どなたですか…って？」

「こんにちは、豪鬼さん。響から倒れたって聞いて、お見舞いに来ました」

「未来さん…」

今度は未来さんですか。

今日は本当に意外な客が来る日ですね。

時計を見てみたら、とつくに放課後の時間帯に。

これならば、彼女が来れるのも納得ですね。

「あれ？ 見慣れない靴が…お客さんですか？」

「気にしなくても大丈夫ですよ。さあ、入ってください」

「じゃ…じゃあ…お邪魔します」

こうして未来さんを部屋に入れるのは久しぶりですね。

最近は何々と忙しくて、会う機会すら少なくなってきましたから。

「あら？ その子は？」

「小日向未来さんといって、私の…そうですね。友達です」

「わ…私が豪鬼さんの友達…友達…うふふ…♪」

おや？ 妥当な言い方をしただけなのですが、未来さんは嬉しそうにしていますね。

何かあったのでしょうか？

「は…初めまして。小日向未来です」

「初めまして。不知火舞よ。豪鬼とは…私達も友達になるのかしら？」

「そうじゃない？ 私は春麗よ。よろしくね」

「よ…よろしくお願ひします」

二人とも、コミュ力は高い方ですから、すぐに未来さんとも仲良くなれるでしょう。

しかし、こうしてみると意外な取り合わせですね。

(さ…流石は豪鬼さんのお友達…！ 二人とも、すっごい美人だよ…。類は友を呼ぶって本当だったんだ…)

今度は未来さんが遠い目をしてるし。

前にも似たような事がありましたっけ？

「まずは座ってください。今、お茶を出しますから」

「て…手伝います！」

「大丈夫ですよ。未来さんはお客様なんですから、お二人と一緒に座ってくださいな」

「その方が本人も落ち着くらしいわよ？ それよりも、さっきの話の続きをしましょうよ」

「豪鬼に彼氏が出来たって話？」

「ぐ…豪鬼さんに彼氏ツ!?!」

「まだ終わってなかったんですかっ!?!」

流石は舞さん….:そう簡単には終わらせないつもりですね…!

結局、その後も女子会のような感じになり、気付けば未来さんは二人とすっかり打ち解けて仲良くなっていましたとさ。

…お見舞いってなんでしたっけ?